

夏目漱石の世界  
草枕とこころ  
(最上版)

はじめに

さて、今回は、夏目漱石の代表作である『草枕』と『こころ』というこの「二つの作品」の考察であるが、まず、『草枕』では、山途を登りながら考えた様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくままに語るといふ内容であり、その部分が「冒頭から全般」へと及び、そして、もう一つは、旅先の那古井の温泉宿で偶然に出逢った「那美さん」(その元「お嬢さん」)との様々な「出来事」や、また、「能」や「お茶」或いは「裸婦像」その他などに関する様々な考察である。——一方、『こころ』という作品は、「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、われわれ日本人にいちばん多く読まれている作品の一つでありながら、なかなか作者のその真の「意図」がどこにあるのか判然としないところがあり、それゆえ、今回は、徹底的に第一部の「先生と私」、第二部の「両親と私」、第三部の「先生と遺書」の本文に出来るだけ寄り添いながら、深く考察したものであり、先生をはじめ、奥さんやお嬢さんあるいはKの「心の動き」の考察とともに、その最大の「謎」である、「K」や「先生」の「自殺」の、その真の「動機」(真相)は一体どういうものであったのか? それらの「解明」(謎解き)になっ  
ていまして、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

草枕（新バージョン）

一、山途やまみちを登りながら

二、峠とうげの茶店

三、那古井なこいの温泉宿

四、見送り

こころ（新バージョン）

はじめに

一、先生と私（上）

二、両親と私（中）

三、先生と遺書（下）

※ 参考文献

夏目漱石の世界  
草枕（新バージョン）

はじめに

さて、今回は、夏目漱石の非常に有名な『草枕』という作品であるが、その『草枕』では、まず、主人公の画工が、山途やまみちを登りながら考えた様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくまままに語るといふ内容であり、その部分が「冒頭から全般」へと及び、そして、もう一つは、旅先の那古井なごいの温泉宿で偶然に出逢った「那美さん」(その元「お嬢さん」)との様々な「出来事」や、また、「能」や「お茶」或いは「裸婦像」その他などに関する様々な考察である。ただ、「本文」は、漢詩や漢文調の難解な(今日使用しない様な)漢字なども多用していて、それゆえ、その漢文調表現の文章の「内容の理解」が多くの人たちにとって難しくなっているかと思いますが、それを噛み砕くように出来るだけ易しく解説していただきますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

草枕

- 一、 冒頭の文章
- 二、 本文の検証 一
- 三、 自然の見方
- 四、 本文の検証 二
- 五、 非人情
- 六、 同化
- 七、 慰藉いしげの小説
- 八、 東洋の詩歌
- 九、 能の見立てで観る
- 十、 雨の描写
- 十一、 能
- 十二、 茶道
- 十三、 峠なこの茶店
- 十四、 那古井なこいの温泉宿 一
- 十五、 那古井なこいの温泉宿 二
- 十六、 床屋
- 十七、 夕暮の物想い
- 十八、 風呂場
- 十九、 茶の招き
- 二十、 茶の招きあとの後
- 二一、 鏡が池
- 二二、 お寺と屁の勘定
- 二三、 別れた夫の出現
- 二四、 見送り

※ 参考文献

草枕  
(新バージョン)

例えば、夏目漱石には、非常に有名な『草枕』という作品があるが、それは、次のような余りにも有名な「冒頭の文章」から始まるものであり、それを少し長めに引用してみると、それは、次のようなものである。

## 一、冒頭の文章

山途やまみちに登りながら、こう考えた。智ちに働けば角かどが立つ。情じやうに棹さおせば流される。意地いぢを通せば窮屈きゆうくつだ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高こうじると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟さとった時、詩が生まれて、画えができる。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りやうりょうりにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容くわんじやうで、束の間つかの間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑のどかにし、人の心を豊かにするが故ゆえに尊たつとい。住みにくき世から、住みにくき煩わづらいを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である。画えである。あるいは音楽と彫刻である。こまかに言えば写さないでもよい。(心の中で思い描くだけでもよい)。煩惱を解脱するの点において、清浄しやうじやう界かいに出入し得るの点において、あらゆる俗界の寵児ちやうじよりも幸福である……と。(本文)

さて、「草枕」とは、まさに「旅」に掛かる「枕詞」であり、われわれ人間というのは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在であるが、そのような「人間界」の煩わづらわしさなどからしばし逃れて、飄然ひょうぜんと画帖かてつを懐ふところにして家を出た(つまり「旅に出た」)主人公の画工は、その山途やまみちを歩む途みちすがら、その画工(敢えて「夏目漱石」の「頭の中」(或いは「心の中」)に想い浮かんで来る様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくまに語るといふ内容であり、その部分が「冒頭から全般」へと及び、そして、もう一つは、旅先で偶然に出逢う「那美さん」(その元「お嬢さん」)との様々な出来事が、いわば「主要な物語部分」といふ内容になっているかと思う。

さて、本文に戻ると、「……世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟った。三十の今日はこう思っている。——喜びの深きとき憂うれいよいよ深く、楽たのみの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖ふえれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食えば飽あき足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ」(本文)とある。

まず、「……喜びの深きとき憂うれいよいよ深く、楽たのみの大いなるほど苦しみも大きい」

とある。その「例」として、「……金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう」とある。これは、お金が殖えることはうれしいことであるが、一方、その大事なお金が減りやしないか、また、盗まれやしないかと、今度は、(盗難対策や税金対策或いは資産運用などと)、あれこれ余計な心配が増えるということであり、また、「……恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかろ」とあるが、これは、恋はうれしいが、その恋ゆえに、ああでもないこうでもないといろいろな余計な心配ごとや悩みごとが増えたり、また、相手の様々な「言動」などにもいちいち敏感に反応して「一喜一憂」しなければならぬ。そのようにあれこれとどうしても相手にふりまわされてしまう。かえって、相手がいなかった時のほうが、誰に遠慮することもなく、自由気ままに自分らしく楽しく生きていられたということである。また、「……閣僚の肩は数百万人の足(安全や生活)を支えている。(が)、背中には重い天下がおぶさっている」とあるが、これは、まさにその通りであり、「閣僚」に選ばれることは実にうれしいことであるが、一方、背中には重い天下を背負うことになるのである。また、オリンピック競技大会などの「代表に選ばれる」ことなども、実にうれしいことであるが、一方、その背中には日本代表としての「重い責任」がおぶさることにもなるのである。そして、「……うまい物も食わねば惜しい。少し食べれば飽き足らぬ。存分食べばあとが不愉快だ」とあるが、これは、誰でも「うまいもの」があれば食べてみたいと思うし、それを少し食べただけでは物足りなく感じて、腹いっぱい食べたいと思うが、一方、食った食ったと腹いっぱい食べれば、今度は、食べ過ぎて腹やからだの調子がおかしくなったり、また、若い女性であれば、何か「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などに襲われて、だめなわたしなどと思ひ苦しむことにもなりかねない。また、酒なども、何かの宴会やパーティーその他などで楽しく飲んで騒いでいる時はいいが、酒も飲み過ぎれば、翌朝の「二日酔い」その他で「辛くなる」ということである。

\*

\*

さて、登って来た山を見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。路は岩や石ですこぶる難義だ。(中略)、たちまち足の下で雲雀の声がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いている。方幾里の空気が一面に蚤に刺されていたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まんと思える。その上どこまでも登って行く、いつまでも登って行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入っで、漂うているうちに形は消えてなくなつて、ただ声だけが空の裡に残るのかも知れない。(この雲雀の「……一心不乱に鳴き尽くす姿にとくに興味を示しているのだろう。)

やがて、巖角を鋭どく廻って、按摩なら真逆様に落つるところを、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び上がって来るのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつづけるだろうと思つた。(ちなみに、春の繁殖期に雄の雲雀が嘯りながら空高く飛び上がって行くのは、「揚げ雲雀」と呼ばれ、雌へのアピールと、「縄張り」の主張をしていて、雲雀は、地面を垂直に飛び上がり、上空でホバリングをし、垂直に飛

び降りることもでき、しかも、「上昇」の時と「上空」の時と「下降」の時の「鳴き声」もそれぞれ「鳴き分けている」のだそうである。……)

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたものうちで、あれほど元気のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、こう愉快になるのが詩である。——たちまちシェレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちに覚えたところだけ暗誦して見たが、覚えているところは二三句しかなかった。その二三句のなかにこんながある。(英文省略)「……前をみては、後えを見ては、物欲しと、あこがるるかなわれ。腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」とある。

\*

\*

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁などという字がある。詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあるが、無量の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考え物だ。

しばらくは路が平らで、右は雑木山、左は菜の花の見つづけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のような葉が遠慮なく四方へのして真中に黄色な珠を擁護している。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座している。呑気なものだ。また考えをつづける。

詩人に憂いはつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も——桜はいつか見えなくなつた。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥て、旨いものが食べられぬくらいの事だらう。

しかし苦しみのないのはなぜだらう。ただこの景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩である以上は地面を貫つて、開拓する氣にもならねば、鉄道をかけて一儲けする見も起らぬ。ただこの景色が——腹の足にもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだらう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して酔乎として酔なる詩境に入らしむるのは自然である。(本文)

## 二、本文の検証 其の一

それでは、まず、「画工」(敢えて「夏目漱石」の「頭の中」(或いは「心の中」)に想い浮かんで来た様々な「文学論」や「芸術観」などの内容を見てみたいと思うが、それは、次のようなものである。最初は、「詩人」についてであり、それは、「……腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しみの、極みの想、籠るとぞ知れ。」——なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切つて、一心

不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁（測り知れない悲しみ）などという字がある。してみると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が敏感なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多かるう。そんならば詩人になるのも考えものだ」とある。

\* 例えば、われわれ人間というのは、とかく健康の時には、健康であることをそれほど「有り難い」とも思わないものだが、一方、重い病いを患い、その「重い病い」が癒えて、初めて、われわれ人間は、健康のほんとうの「有り難さ」を実感するのである。また、深い「悲しみや苦しみ」などがあり、その深い「悲しみや苦しみ」などを乗り越えて、初めて、本当の「幸せ」を実感するのである。そして、「詩人」というのは、多くの場合、この世の実に様々な「悲しみや苦しみ」などを背負い込んでしまい、いわば「……断崖絶壁の所に踏み止まり、もしここで踏み止まれば、最後は身を投げて死ぬしかないというような精神状態」にも近く、そこからの「魂の底からの叫び」こそは、まさに真の「詩人の魂」であり、それ以外の「作品」というのは、多くは「中途半端な作品」であると言ってもよいのだろう。——つまり、「心からの言葉」（或いは「魂の底からの言葉」）こそは、まさに「詩の生命」なのである。

### 三、自然の見方

例えば、「……山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬくらい的事だろう。では、苦しみのないのはなぜだろう。それは、ただこの景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩である以上に地面を貫つて、開拓する気にもならねば、鉄道をかけて一儲けする了見も起らぬ。ただこの景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境（つまり『純粹なる詩境』）に入らしむるのは自然である」と。

\* 例えば、非常に「面白い文章」であり、作者の言いたいことは、もし貪欲な「利害損得」などに振りまわされている「目」で「自然」を見た場合、例えば、仕事に追われている人たちは、まわりの「自然の風景」などをしみじみ見ることもなければ、ましてや道端の「タンポポの花」などには目もくれないだろう。そんなものは、腹の足しにもならなければ、一円にもならないからである。そんなものよりも、遙かに仕事のほうが大事だからである。もちろん、それは、それで大事なことはあるが、しかし、それでは、「自然」というもの（敢えて「美」というもの）は、永遠に見えてはこないものである。

\* それでは、「自然」（或いは「対象」）が「美しく見える」とは、一体、どういうことなのかと問えば、それは、われわれ人間の「心」を惹きつける「要素」をより多く持っているということであり、それだけより「魅力的に見えて来る」ということである。そして、その「要素」としては、いわゆる「感覚美」と「内容美」とがあり、そして、「感覚美」

というのは、まさに「形、色、音、匂い、味、感触」の、この「六つの要素」から成るものであり、また、「内容美」というのは、まさに「素材、技術、内実、個性」の、この「四つの要素」から成るものである。それゆえ、いわゆる「感覚美」と「内容美」とのそれぞれの「要素」を、より多く、より魅力的に含んでいるものであればあるほど、それだけ「より魅力的で、より美しく」見えて来るということである。あとは、その「見方」（とらえ方）であるが、それは、次のようなものである。

つまり、大事なことは、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」などに振りまわされている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で「対象」を見ることによつてこそ、初めて、あるがままの「自然の風景」（その「美しさ」）がはつきりと見えて来ることになるが、しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに大事なことは、次のようなことである。——つまり、われわれ人間は、この世に生まれて今日まで生きてきた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが生み出されることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガネ」であり、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、100%純粹な「眼」で「対象」そのものが見えて来るということであり、その結果、実に様々な「対象」の「色そのもの」「形そのもの」「音そのもの」「匂いそのもの」「味そのもの」「感触そのもの」、その他を、初めて、真に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ得るようになるということである。

\*

\*

余談であるが、山登りにおいて、「……足が草臥れたり、途中では旨いものが食べられない」というようなことは、われわれ人間の「心」をより強く「動かす」（つまり「感動」）させるためには、むしろ極めて「大事な要素」であり、そのような「肉体の疲労や空腹感」などによつてこそ、いわゆる頂上からの「自然の景色」や「様々な食事」などもより「素晴らしいもの」に感じられるということである。——つまり、何の努力をせずに来てしまふもの、また、すぐに手に入ってしまうもの、或いは、すぐに思いが叶ってしまうようなもの。そういうものでは、なかなか「歓喜」（真の「喜び」）とはなりにくい。真の「歓喜」（つまり真の「喜び」）となるためには、多くの場合、長い時間と忍耐とたゆまぬ努力と持続的エネルギーとが必要不可欠であり、その結果、何かをついにやり遂げたと思えるような時にこそ、自分の「頭の中」（或いは「心の中」）で「ついに、やった！」というような感じにもなるものであり、それこそは、まさに真の「歓喜」（つまり真の「喜び」）と呼べるものである。逆に言えば、「努力」を必要としないところでは、いわゆる真の「歓喜」（つまり真の「喜び」）というものは、永遠に生じようがないのである。

#### 四、本文の検証 其の二

さて、本文に戻ると、「……恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろう。しかし自身がその局に当れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んでしまう。したがってどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者

の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げている。見たり読んだりする間だけは詩人である。——それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬという点に存するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少かるう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌の純粹なるものもこの境を解脱する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勤工場にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になっても地面の上を馳けてあるいて、銭の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。一方、うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。(本文)

## 五、非人情

さて、本文の中に、「……恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろう。しかし自身がその局(当事者)になれば、利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構なことにも、目は眩んでしまう。(つまり自分自身が当事者となればどうしても様々な利害損得などに振りまわされてしまうものである)。従って、どこに詩(美)があるか自身には解しかねる(分からなくなってしまう)。これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて見る。見たり読んだりする間だけは詩人である。——それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬという点に存するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。——西洋の詩歌は、人事が根本になるからそれは難しいが、東洋の詩歌では、そこを解脱したのがある。……」

\*

\*

まず、「……第三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い、小説も見て面白い」とある。これは、例えば、プロ野球を観る場合、どちらか一方を熱心に応援すれば、どうしても実に様々な「喜怒哀楽」の感情に自分自身振りまわされてしまうだろう。それゆえ、第三者の地位に立ってこそ、初めて、そういう実に様々な「喜怒哀楽」の感情などに自分自身振

りまわされずに、その野球の「内容」を極めて客観的に「観察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。また、芝居を観る時も、小説を読む時も、登場人物の誰かに「自分を同化させる」のではなく、むしろ「第三者の地位」（それは「一步身を引いて、全体をながめるような立場」）に立ってこそ、芝居も小説も、その「内容」を極めて客観的に「観察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。そして、野球も芝居も小説も、その他、何であれ、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」の感情などが絡んで来れば来るほど気楽に楽しめなくなるものである。これは、当たり前のことであり、例えば、芝居に関わっている人たちは、お客は来てくれるだろうか、うまく演技ができるだろうか、評判はどうだろうか、収益（或いは利益）は出るだろうか、その他、実に様々なことで悩むことになるだろう。それもこれもすべて「利害損得」が絡んでいるからである。一方、芝居を観ている人たちは、そういう「利害損得」からは完全に開放されて、まさに気楽に芝居を楽しむことができるとともに、登場人物の誰かに「自分を同化させる」のではなく、むしろ「第三者の地位」（それは「一步身を引いて、全体をながめるような立場」）に立ってこそ、その「内容」を極めて客観的に「観察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。

さらに加えて、「戦争映画」を観ているとする。その場合、自分は、もちろん、戦場にいるわけではない。それゆえ、身の安全は保証されている。つまり、戦場でどれほど多くの人たちが傷つき、死のうとも、自分には、直接、何の関係もない。つまり、自分や自分の家族などに直接火の粉が降りかかって来ない限りは、すべては「他人事」であり、それが、まさに「第三者の地位（見方）」でもある。これが、一番気楽な「立場（見方）」でもあり、だからこそ、「戦争映画」も楽しめるのである。もちろん、芝居も小説も何でも楽しめるのである。しかも、その「内容」を極めて客観的に「観察（分析）」することも冷静にでき得る。——一方、例えば、若しも自分や自分の家族などに何か直接火の粉が降りかかって来たら、それこそ、楽しむどころか大変なことになるだろう。また、動物園や遊園地などは、楽しいが、しかし、動物の飼育や遊園地の管理などは、むしろ大変なことになるだろう。また、いちご狩りやぶどう狩りなども楽しいが、しかし、いちご栽培やぶどう栽培などは、むしろ大変なことになるだろう。つまり、多くの場合、「第三者」というのは、いわば「楽しい」（或いは「気楽である」）が、一方、「当事者」は、むしろ「大変」（或いは「真剣である」）ということである。

## 六、同化

次は、「……見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする」ようになるということである。これが最も一般的な「見方」（とらえ方）かと思うが、例えば、登場人物の誰かに「自分を同化させる」ということであり、普通であれば、男性は、「主人公」に自分を同化させ、また、女性は、「女主人公」に自分を同化させながら、見聞き読んでいることが多いのだろう。例えば、「難病の映画」を観ているとする。その場合、自分や自分の家族などに「同じ難病」の人がいなければ、それは、いわば「他人事」として観ていられるかも知れないが、しかし、自分や自分の家族に「同じ難病」の人がいれば、それは、決して「他人事」ではなく、まさに「自分のこと」のよう

に感じられるということである。つまり、このような「立場（見方）」に立てば、決して「他人事」ではなく、わが身に感じて、その登場人物たちの微妙な「心の動きや痛み」までも感じることができ得るようになるのである。——さらに、これをもう一步進めて、その「同化」を極限まで深めて、つまり、その人になりきってその「内的世界」を徹底的に生きてみると、例えば、身近では「歌まね」のように、何から何まですべてその歌手になりきって、その「内的世界」を徹底的に生きてみると、ただ単に「外から見ていた」時には全く分からなかった、実に様々なことが、我が身に感じて、実感として「感じられるようになる」ということである。例えば、『論語』を何年も何十年もかけて深く読んで、終には「自分の心」は「孔子の心」、「孔子の心」は「自分の心」というところまで行くことであるが、それが、まさに人間理解の「極致」でもあるということである。

## 七、慰藉いしやの小説

さて、主人公の「画工」（敢えて「夏目漱石」は、「……余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞こぶするようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界じんかいを離れた心持ちになれる詩である。そして、それは、西洋の詩歌ではなかなか難しく、一方、東洋の詩歌では、そこを解脱したものがある」ということである。——つまり、夏目漱石は、この『草枕』については、自ら次のように語っている。それは、「……私の『草枕』は、この世間普通という小説とはまったく反対の意味で書いたのである。ただ一種の感じ——美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロット（筋）も無ければ、事件の発展もない」。……普通にいう小説、すなわち人生の真相を味わせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れて、慰藉いしやする（慰める）という意味の小説も存在してもいいと思う。私の『草枕』は、むしろ後者に属すべきものである。「……僕は一面において俳諧的文学に出入りすると同時に一面において死ぬか生きるか、命のやりとりをするような維新いしんの志士ししのごとき烈しい精神で文学をやってみたい。そうでないと（省略）腰拔こしぬけ文学者のような気がしてならん」とある。——つまり、夏目漱石という作家には、一方では、例えば、『吾輩は猫である』とか『坊っちゃん』それにこの『草枕』のように、比較的軽いタッチの「作品」（人生の苦を忘れて、慰藉いしやするという意味の小説）を書くような一面と、もう一方では、死ぬか生きるか、命のやりとりをするような維新いしんの志士ししのごとき烈しい精神で作品を書く（或いは「書いてみたい」という一面も当然あったということである）。

## 八、東洋の詩歌

さて、（本文に戻りたいと思うが）、うれしい事に東洋の詩歌しうかは、そこ（俗界）を解脱げだつしたのがある。（例えば）、「採菊さいく東籬とうり下、悠然ゆうぜん見南山をみる」。——ただそれぎりの裏うちに暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣かきの向うに隣りの娘が覗のぞいてる訳でもなければ、南山みなさんに親友が奉職ほうしやくしている次第でもない。超然しゆぜんと出世しゆっせ間的に（世間のわずらわしさから超然として）利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。また、「……独坐ひとりゆわ幽篁裏ゆうわうら、弹琴さん復をだんじてまた長嘯ちやうしやうす、深林人不知、明月来相照」。——ただ二十字のうちに優ゆうに別乾坤べつけんこん（別

天地)を建立こんりゆうしている。この乾坤けんこんの功德くどくは「不如ほととぎす帰かへり」や「金色こんじき夜叉やしゃ」の功德くどく(人情にんじやうをテーマにしたような作品から得られる御利益ごりやく)ではない。(例えば)、汽船きせん、汽車きしや、権利けんり、義務ぎむ、道徳だうとく、礼義れいぎで疲れ果てた後に、すべてを忘却してぐっすり寝込むような功德くどく(それは、非人情ひにんじやう的な自然しぜんをテーマにした詩からこそ得られる御利益ごりやく)である。(これらが、まさに「……余あなが欲ほする詩うたであり、それは、世間的せかいたんの人情にんじやうを鼓舞こぶするようなものではなく、俗念じゆんねんを放棄ほうきして、しばらくでも塵界じんがいを離れた心持ちになれる詩のことである。……)

二十世紀にじゅうしきに睡眠すいみんが必要ひつやくならば、二十世紀にじゅうしきにこの出世間しゆつせけん(世間せけんのわずらわしさから超然じやうぜんとした)詩味しゐは大切たいせつである。惜おぼしい事に今の詩うたを作る人も、詩うたを読む人もみんな、西洋人せいやうじんにかぶれているから、わざわざ呑気のんきな扁舟へんしゆうを泛うかべてこの桃源とうげんに溯さかのぼるものはないようだ。余あなは固もとより詩人しじんを職業しごくにしておらんから、王維おうゐや淵明えんめいの境界きやうがいを今の世よに布教ふきやうして広げようという心掛こゝろがけも何なにもない。ただ自分おのれにはこういう感興かんきやうが演芸会えんげんかいよりも舞踏会まいたかいよりも葉になるように思おもわれる。ファウストよりも、ハムレットよりもありがたく考えられる。こうやって、ただ一人ひとり絵具箱えぐいばこと三脚さんきゃく几きを担かついで春はるの山路やまじをのそのそ歩くのも全くこれがためである。淵明えんめい、王維おうゐの詩境しきやうを直接じきじやくに自然しぜんから吸収きゆうしゆして、すこしの間までも非人情ひにんじやうの天地てんちに逍遙しやうようしたいからの願ねがひ。一つの酔興すゐきやうだ。(この「酔興すゐきやう」というのは、普通ふつうは人のしないようなことを、好このんですることであり、つまり、「物好きものずき」である。)

もちろん人間にんげんの一分子いっぶんしだから、いくら好きでも、非人情ひにんじやうはそう長く続く訳わけには行かぬ。淵明えんめいだつて年ねんが年中ねんぢゆう南山なんざんを見詰みぢめていたのでもあるまいし、王維おうゐも好このんで竹藪たけやぶの中に蚊帳かかやを釣つらずに寝た男おとこでもなかるう。やはり余あなった菊きくは花屋はなやへ売りこかして(売り払うつて)、生なまえた筍たけのこは八百屋やおやへ払い下げたものと思う。こういう余あなもその通り。いくら雲雀ひばりと菜なの花はなが氣きに入いったつて、山のなかへ野宿のしゆくするほど非人情ひにんじやうが募つつてはおらん。こんな所ところでも人間にんげんに逢あう。じんじん端折はしよの頬冠ほのかむりや、赤あかい腰巻こしまきの姉あねさんや、時には人間にんげんより顔かほの長い馬うまにまで逢あう。百万本ひゃくまんぼんの檜ひのきに取り囲とりこまれて、海面かいめんを抜ぬく何百尺なにひゃくしゃくかの空そらを呑のんだり吐ついたりしても、人の臭においはなかなか取とれない。それどころか、山やまを越こえて落ちつく先の、今宵こんよいの宿しゆくは那古井なこいの温泉場おんせんばである。(つまり、「頭あたまの中なか」では「非人情ひにんじやう」などと最もらしいことを考かんがえたり言いつたりしていても、実際の自分じつじやくの自分のこれから山やまを越こえて落ちつく先さきは、何なにと「最さいも人間にんげんくさい温泉場おんせんば」になるのである。)

### 九、能の見立てで観る

ただ、物ものは見様みようでどうでもなる。レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子でしに告こげた言ことばに、あの鐘かねの音ねを聞きけ、鐘かねは一つだが、音ねはどうとも聞きかれるとある。一人ひとりの男おとこ、一人ひとりの女おんなも見様次第みようしだいでいかようとも見立みだてがつく。どうせ非人情ひにんじやうをしに出掛いけた旅たびだから、そのつもりで人間にんげんを見たら、浮世小路うきよこうぢの何軒目なにけんめに狭苦せまがらしく暮くした時ときとは違ちがうだろう。よし全く人情にんじやうを離はなれる事ことが出来できなくても、せめて御能おのう能見のうけんの時ときくらいは淡あい心持こゝろがけにはなれそうなものだ。能能にも人情にんじやうはある。『七騎落しちきおち』でも『墨田川すみだがわ』でも泣なかぬとは保証ほしょうが出来できる。しかしあれは情なさけ三分芸七分ぶぶんげいしちぶんで見せるわざだ。われらが能能から享うけるありがた味あじは下界げがいの人情にんじやうをよくそのままに写うつす手際てぎわから出てくるのではない。そのままの上うへへ芸術げいじゆつという着物きものを何枚なんまいも着きせて、世よの中なかにあるまじき悠ゆう長ちやうな振舞ふるまひをするからである。

しばらくこの旅りよちゆう中に起おこる出来事できごとと、旅中たびちゆうに出逢であう人間にんげんを能能の仕組しくみと能役者のうやくの所作しよさに見

立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕ぎ付けたいものだ。南山や幽篁（奥深い竹藪）とは性の違ったものに相違ないし、また雲雀や菜の花といっしょにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視てみたい。芭蕉という男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなしで見よう。もともと画中の人物と違つて、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐつて、心理作用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと思えば差し支ない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こつちと衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなるほど美的に見ている訳に行かなくなる。これから逢う人間には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気がむやみに双方で起らないようにする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立つて、画中の人物が画面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間三尺も隔てていれば落ちついて見られる。あぶな気なしに見られる。言を換えて言えば、利害に気を奪われないから、全力を挙げて彼らの動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑒識する事が出来る。——ここまで決心をした時、空があやしくなつて来た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸つていたと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方はただ雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。（本文）

\*

\*

さて、主人公の「画工」（敢えて「夏目漱石」は、「……しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に出逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕ぎつきたいものだ。（中略）余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなしで見よう。もともと画中の人物と違つて、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐつて、心理作用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと思えば差し支ない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こつちと衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなるほど（これは「利害損得」その他の感情などが絡めば絡むほど）美的に見ている訳に行かなくなる」のである。

さて、主人公の画工は、「能（非人情）の見立て」で、この旅で起る出来事やこの旅で出逢う人間たちを見るといふのは、すなわち、様々な「利害損得」（或いは「喜怒哀楽」）などの感情その他などに振りまわされない、いわゆる「第三者の地位」（それは「一身身を引いて、全体をながめるような立場」）に立つてこそ、人間も自然もこの世の出来事も、その「対象」（内容）を極めて客観的に「観察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。逆に、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」（或いは「喜怒哀楽」）

などの感情その他などが絡んで来れば来るほど気楽に楽しめなくなるものである。これは、余りに当たり前のことであり、例えば、舞台に關わっている人たちは、お客は来てくれるだろうか、うまく演技ができるだろうか、評判はどうだろうか、収益（或いは利益）は出るだろうか、その他、実に様々なことで悩むことになるが、それもこれもすべて「利害損得」その他が絡んでいるからである。——一方、舞台を觀ている人たちは、そういう「利害損得」その他からは完全に開放されて、まさに気楽に舞台を楽しむことができ得るとともに、登場人物の誰かに「自分を同化させる」のではなく、むしろ「第三者の地位」（それは「一步身を引いて、全体をながめるような立場」）に立ってこそ、その「内容」を極めて客観的に「觀察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。

そして、「……これから逢う人間には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気がむやみに双方で起らないようにする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立って、画中の人物が画面の中をあらちちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間三尺（約九十センチ）も隔てていれば落ちついて見られる。あぶな気なしに見られる。言を換えて言えば、利害に氣を奪われぬから、全力を挙げて彼らの動作を芸術の方面から觀察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑒識する事が出来る」とあるが、これは、「距離を置いて見る」ということであり、それは、まさに「第三者の地位」（それは「一步身を引いて、全体をながめるような立場」）に立ってこそ、人間も自然もこの世の出来事も、その「対象」（内容）を極めて客観的に「觀察（分析）」することが冷静にでき得るようになるのである。

さて、「……ここまで決心をした時、空があやしくなってきた。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸っていたと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方はただ雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。」……

## 十、雨の描写

路は存外広くなって、かつ平だから、歩くには骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたりぼたりと落つる頃、五、六間（約九〇十センチ）先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。そこで、「……ここに休む所はないかね」と訊ねると、「……もう十五丁（二丁は約一〇九センチ）行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡れたね」と言うのであった。まだ十五丁（約一六三・五センチ）（もあるの）かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画のように雨につつまれて、またふうと消えた。

糠のように見えた粒は次第に太く長くなって、今は一筋ごとに風に捲かれる様までが目に入る。羽織はとくに濡れ尽して肌着に浸み込んだ水が、身体の温度で生暖く感ぜられる。氣持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀筋（銀色の矢）が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも咏まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ（つまり「自分も自然の景物の一つ『点景』になる」）。ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間（それは「自我や自意識などが働き出した瞬間」）に、われはすでに詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。依然として市井の

一豎子（一人の俗人）に過ぎぬ。雲煙飛動（雲や霞が素速く空を飛んで行く）の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として（雨や風が物寂しく感じられて）ひとり春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ。初めは帽を傾けて歩いた。後にはただ足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩いた。雨は満目の樹梢を揺かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎたようだ。（本文）

\*

\*

さて、この場面の「雨の描写」は、例えば、浮世絵の「雨の描写」にも似て、「……茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀箭（銀色の矢）が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ（つまり「自分も自然の景物の一つになる」）のである。——例えば、歌川広重の名所江戸百景『大はしあたけの夕立』という有名な「雨の浮世絵」があるが、それは、長い大橋の上で突然「夕立」（雨）に降られて、その橋の上にいた人達（和傘を差す二人の女性と旅人らしき一人の男、一方、一つの傘に入る二人の男性と一人のむしろを被った男）が左右に慌てて歩いて行く様（様子）が巧みに動的に描かれているが、その様子を、例えば、「第三者の立場」から見れば、いかにも「風情のある様子に見えて、絵にも、詩にも、句にもなり得る」だろうが、しかし、一方、雨に降られている「人たち」（当事者たち）にして見れば、それどころではないのであり、また、同じ歌川広重の東海道五十三次の『庄野・白雨』という有名な「雨の浮世絵」もあるが、これも、突然、山道で夕立の雨に降られ、その降りかかる夕立（雨）の中を、先を急ぐ籠屋と行き交う人たちの様（様子）が巧みに動的に描かれているが、これも、「第三者の立場」から見れば、いかにも「風情のある様子に見える」が、しかし、一方、雨に降られている「人たち」（当事者たち）にして見れば、それどころではないのであり、本文でも、「……羽織はとくに濡れ尽して肌着に浸み込んだ水が、身体の温度で生暖く感ぜられる。気持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩いた」とあり、また、「……降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間（それは「自我や自意識などが働きた瞬間」）に、われはすでに詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子（一人の俗人）に過ぎぬ。雲煙飛動（雲や霞が素速く空を飛んで行く）の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として（雨や風が物寂しく感じられて）ひとり春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ。初めは帽を傾けて歩いた。後にはただ足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩いた。雨は満目の樹梢を揺かして四方より孤客（一人旅の旅人）に逼る。非人情がちと強過ぎたようだ。（つまり、非人情を気取っていても、一たび、例えば、雨などに降られれば、それでも「形なし」であり、まわりの風景や人の様子などはどうでもよくなってしまい、慌てふためいて早足でとにかく先を急ぐという「心的状態」になってしまうのである。）

\*

\*

十一、能とお茶

さて、「能」についての「本文」は、次のようなものである。それは、「……能にも人情はある。『七騎落』でも『隅田川』でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分で見せるわざだ。我らが能から享けるありがた味は下界の人情をよくそのままに写す手際から出てくるのではない。そのままの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである」と。

\*

\*

さて、その「能」の歴史であるが、それをごく簡単に説明すると、奈良時代、大陸の方から「散楽」という芸能が入って来て、それは、滑稽な芸や物まね、曲芸、奇術などバラエティーに富んだものであったが、その後、その「散楽」は、様々な変遷を経て、能と狂言の要素を持つ「猿楽」となって行くのである。——一方、「田楽」というのは、もともと田植など農事に関連した芸能から発達して、演劇を上演するようになるのである。

そして、能は、やがて「猿楽」と「田楽」の二種類に大きく分かれるようになり、一方の「猿楽能」は、いかにその役柄に似せるかという物まねを中心した芸であり、一方の「田楽能」は、舞いを中心として、真似るといふよりは象徴的に演じるものであった。そして、その「猿楽」、「田楽」とともに、当時は、「猿楽の座」、「田楽の座」という座組みがあり、なかでも「猿楽」では、お互いに「立合能」という「芸能競技」に参加をして、その「技」を真剣に競い合っていたのである。特に、猿楽が盛んであった大和の国では、大和四座といわれる「結崎座、坂戸座、外山座、円満井座」が力を持ち、この四座は、結崎座が観世流に、坂戸座が金剛流に、外山座が宝生流に、そして、円満井座が金春流にと、それぞれの「能の流派」として、現在にまで永々と受け継がれているものである。

さて、南北朝には、大和四座の一つ結崎座の創立者でもあった「観阿弥」が登場して、当時の将軍足利義満の後援を得て、物まね主体の芸風に、田楽や近江猿楽などの歌舞的要素も取り入れたとともに、当時、流行していたリズムカルな「曲舞」の節を旋律的な「小歌節」と融合させるなどをして、大いに発展を促した。この観阿弥（父）を受け継いで、今日の「能」へと完成させたのが、余りにも有名な「世阿弥」という人になるのである。

そして、「能」を大きく二つに大別すれば、一つは、「現在能」、一つは、「夢幻能」であり、そして、「現在能」というのは、生きている人間が「主人公」（シテ）であり、一方、「夢幻能」は、まさに霊的な存在が「主人公」（シテ）になるといふものである。

\*

\*

例えば、『隅田川』という演目は、まさに「現在能」であり、その「内容」は、次のようなものである。「……春の夕暮れ時、隅田川の渡し場で、船頭は、最終の舟を出そうとしている」。そこに旅人が現れ、「……都より女物狂の下り候ふが、是非もなく面白う狂ひ候ふを見候ふよ（見ようよ）」といふと、船頭（ワキ）は、「……さやうに候はゞ、暫く舟を留めて。彼の物狂を待たうずるにて候」となる。つまり、やがて物狂いの女がやって来るだろうからと、その女を待つことになる。狂女（シテ）は、子を失ったことを嘆きながら現れ、カケリを舞う。——もとは都の北白河に住んでいたが、わが子を人買いに連れ去られ、心は狂乱し、わが子を捜して、この地まではるばる来たと言う。そして、「我をも舟に乗せて賜はり候へ」と頼むと、舟頭は、「……面白う狂うて見せ候へ。狂はずは

此舟には乗せまいぞとよ」といふ。

女は、『伊勢物語』の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしや」の歌を引いて、自分の「わが子を思う気持ち」（我が思ひ子は東路に、有りやなしや）と在原業平の「都の人を思う気持ち」（わが思ふ人はありやなしや）とは同じ心であると巧みに引き比べて、船頭を感心させ、「……かかる優しき狂女こそ候はね、急いで乗られ候へ」となり、舟に乗ることができ、船頭は、舟を出す。そして、舟中の（或る）旅人が、「……あの向の柳の本に、人のおほく集まりで候ふは何事にて候ふぞ」と訊くと、船頭は、あれは大念仏であり、一年前の今日（三月十五日）、慣れぬ旅で病気になり一步も歩けぬ子供を、人買いは、薄情にも対岸の川岸に捨ててしまい、その捨てられた子供は、死ぬ間際に身の上話と「……郡の人の足手影（姿）もなつかしう候へば、此道の辺に築き籠めて、しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し、念仏四五返称へつひに事終つて候」。つまり、死んでしまう。里人は余りに可哀相に思い、塚を作り、柳を植ゑ、一年目の今日、一周忌の念仏を唱えることにしたと物語る。すると、舟が対岸に着いても、女だけ降りずに泣いている。

そして、その狂女（シテ）は、「なう舟人。今の物語はいつの事にて候ふぞ」、「去年三月今日の事にて候」、「さて其児の年は」、「十二歳」、「主の名は」、「梅若丸」、「父の名字は」、「吉田の何某」、「さて其後は親とても尋ねず」、「親類とても尋ね来ず」、「まして母とても尋ねぬよな」、「思もよらぬこと」、「なう親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にては候へとよ。……」といふ。つまり、先ほどの話の子供は、わが子だと言う。そこで、舟頭は、その子供の墓所へと案内し、そして、念仏（南無阿弥陀仏）を唱えていると、塚の中からも子供の念仏（南無阿弥陀仏）が聞えて来る。女だけ念仏を唱えると、子供の亡霊が一瞬現れ、「あれは我が子か」、「母にてましますかと」、「互に手に手を取りかはせば又消え〜となり行けば、いよ〜思はます鏡。面影も幻も、見えつ隠れつする程に東雲の空も、ほのぼのと明け行けば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫茫々として唯、しるしばかりの浅茅が原と、なるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ」と幕になる。つまり、夜明けとともに、母親の前にあつたのは、ただ塚の上のぼうぼうと茂る草だけであつた。（ちなみに、これは世阿弥の子「観世元雅」の作である。）

一方、「世阿弥」の有名な「複式夢幻能」というのは、次のようなものである。それは、つまり、「……まず前段では、旅の僧などに扮したワキが里人と出会い、土地のいわれやゆかりの人の消息を問う。里人は、問われるままにいろいろと応えるが、これに脇が興味を覚えたところで、実は自分がその話題の主の幽霊なのだといつて消える。――後段では、例えば、ワキが読経したり、また、まどろんだりしているところに、当の亡霊（シテ）が現われて、生前の苦しみや思い出などを語りつつ舞い、最後には成仏するというようなものである。もちろん、これは、すでに「完成された姿」であり、それゆえ、まだ姿も形も何ひとつもなかった、そもその「最初の発想」そのものというのは、いったいどのようなものだったかと敢えて問えば、それは、次のようなものではなかったかと思う。

\*

\*

まず、われわれ人間というのは、この世に生きていればこそ、自分の「想いや考え」などをあれこれ語ることができ得る。一方、死んでしまった人たちというのは、当然のことながら、自分の「想いや考え」などをあれこれ語ることが、もうでき得ない。あたり前のことである。しかし、死んで行った人たちの中にも、例えば、この世への様々な「想いや未練」などを残したまま、死んで行った人たちも多いだろう。だとすれば、そういう人たちのなかには、できるなら、あの世からこの世へと戻って来ては、自分の切なる「想いや未練」などをあれこれ語りたいと想う人たちもいるだろう。……

そして、その死んだ人間の「亡霊」(それは「亡霊」だけではなく、「生き霊」の場合もあれば、「神や鬼」、あるいは動植物の「物の化」や「精霊」の場合もある)が、しかし、それらは、すべて「霊的な存在」であり、その「霊的な存在」には、当然のことながら、本来、「姿・形」というようなものはない。その「姿・形」のない「霊的な存在」を、一体、どのように表現したらよいのかと考えた時に、まず、「能」という面を被せることによって、この世のものではない「霊的な存在」という「姿・形」というものを表わすとともに、もう一つ、何よりも大事なことは、死んだ人間の「亡霊」とは、まさに「霊的な存在」であり、それゆえ、いかにも生きている「人間たち」のように「活発に動く」ようなことはでき得ないし、また、動いてはいけない存在である。従って、その「動き」は、できるだけ最小限度に止めて、ただ、その「想いや未練」などを語るだけの存在にする必要があったということである。これが、恐らく、「世阿弥」という人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に浮かんで来た最も最初の「想いや考え」ではなかったかと思う。

その場合、どうしたら、そのような人たちを「あの世からこの世」へと戻す(到来させる)ことができ得るだろうか? そのための「舞台装置」として何が最も最適なものだろうかと考えた時に、いわゆる「橋」(つまり「橋掛り」というものが自ずと想い浮かび、その「橋」(つまり「橋掛り」)を「あの世からこの世への、また、この世からあの世への橋渡し」とする設定が、その後、自然とでき上がったのではないかと思う。

## 十二、茶道

さて、最後は「お茶」であるが、それについて、主人公は、「……茶と聞いて少し辟易へきえきした。世間に茶人ほど勿体振もつたいぶった風流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈きゆうくつに繩張りなわばりをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要もないのに鞠躬きよくう如じよ(身をかがめて恐れ慎む)として、あぶくを飲んで結構がるものはいわゆる茶人である。あんな煩瑣はんさな規則のうちに雅味がみがあるなら、麻布あさぶの聯隊れんたいのなかは雅味がみで鼻がつかえるだろう。回れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休りきゅう以後の規則を鵜呑うのみにして、これでおおかた風流なんだろう、とかえって真の風流人を馬鹿にするための芸である」と。

\*

\*

むろん、これは、これで「二つの見方」(見解)ではあるが、まず、「お茶」の歴史を見てみると、日本にはもともと「お茶」はなく、お茶がもたらされたのは、遣唐使として

唐に留学していた僧侶たちが持ち帰ったのが最初とされている。ただ、当時はお茶を飲む習慣（つまり「喫茶」）は一般には普及せずほんの一部の僧侶や貴族などに限られていたという。一方、鎌倉時代に「栄西」（「臨済宗の開祖」）という人は、二回、遣唐使として中国の「宋」に渡って、そこで「禅宗」を学ぶとともに、禅院ではお茶を飲むことが盛んに行なわれているのを知るのである。そこで、栄西という人は、帰国の際に、そのお茶の「種子」などを持ち帰り、また、日本で初めてのお茶の専門書「喫茶養生記」という本を著し、そのお茶の「滋養効果」を説くと共に、深酒癖のあった將軍「源実朝」に、お茶をまさに「良薬」として、本書とともに献上したと『吾妻鏡』には記されている。

\* さて、「栄西」が持ち帰ったお茶の「種子」は、華嚴宗の僧侶であった「明恵上人」に送られると、「明恵上人」は、自分の京都梅尾の「高山寺」にそのお茶の「種」を蒔くことになるが、それが、まさに日本「最古の茶園」となるとともに、その京都宇治の梅尾のお茶を「本茶」と呼び、そして、他の地方（例えば「大和、伊勢、伊賀、駿河、武蔵、その他」）などで栽培されるお茶を「非茶」と呼んで、はっきりと区別したのである。そして、鎌倉時代には、禅宗の寺院ではお茶を飲むことが広がるとともに、武士階級にも社交の場としてお茶を飲むことが広まって行くのである。さらに、鎌倉末期から南北朝時代になると、今度は、一定の場所に集まって、お茶を飲み比べて、本茶（梅尾茶）とそれ以外の茶（非茶）の味を当てるという「闘茶」という競技が行なわれることになるが、それは、今日の「賭博」に近く、高価な「景品」（金品）などを賭けて盛んに行なわれたのである。

\* さて、室町時代になると、武家の建築物である「書院造り」という様式の住居が普及するようになり、今まで「会所」で催されていた「茶会」が、やがて「書院の広間」で行なわれるようになり、その「内容」は、書院造りの座敷（畳敷き）に坐して静かに茶を飲みながら優れた「唐絵や唐物」などの「芸術作品」を鑑賞するというものであり、また、書院の広間でお茶を点てるのではなく、書院の広間の隣りに別に設置された部屋で茶を点て、それを書院の広間へと運ぶという、点茶と喫茶が分離したものであったが、足利義教や足利義政の同朋衆であった「能阿弥」という人は、まさにその「書院茶の湯」の形式を完成させた人になるのである。その「能阿弥」から「書院茶の湯」を学んだ「村田珠光」という人は、当時、庶民の間で行なわれていた地味で簡素な「地下茶の湯」の様式を取り入れ、それに大徳寺の「一休宗純」から禅の精神も学んで、いわゆる「茶禅一味」（それは「茶道と禅道とは根本的に同じもの」という境地を開いて、禅の考えを大きく「茶道」に取り入れることになるが、それが、まさに「詫び茶」の始まりとされるものである。

\* そして、その「詫び茶」の特徴というのは、豪華ではなく、むしろ質素であることを宗として、それゆえ、茶室は四畳半と狭く、礼儀作法や様々な道具類、その他、すべてに至るまで「詫び」を追求したものである。そして、道具や美術品その他などに多くのお金を費やした「書院茶の湯」とは違って、むしろ「不足の美」（つまり「不完全だからこそ美しい」という、いわば「不完全」を「茶の湯の美」としたのである。そして、その「村田珠光」の死後は、今度は、「武野紹鷗」という人が、今までの「唐物の茶器」の代わりに「日常雑器」を茶の湯に取り入れて、「わび茶」を発展させることになるのである。

ある。それは、今までの単なる「遊興や作法や儀式」などでしかなかった「茶の湯」を、わびという精神を持った「茶の道」へと発展させたものである。

次に、「千利休」という人は、堺の「商人の子」として生まれたが、十六歳で茶の道に入り、十八歳の時、前述の「武野紹鷗」に師事している。それから、二十三歳で最初の茶会を開いたとある。そして、一五六八年（四十七歳）の時に、有名な織田信長に見出されて「茶頭」として召し抱えられるが、一五八二年の「本能寺の変」による「織田信長の死後」は、豊臣秀吉に仕えて、千利休の、いわゆる「わび茶」は、一世を風靡して、安土桃山時代に大成することになる。——ところで、千利休という人は、六十歳までは「先人の茶」を踏襲していたらしく、六十一歳から（それは「本能寺の変」の年から）、ようやく独自の「茶の湯」を始めたのだという。つまり、死ぬまでの十年間が「わび茶の完成期」にあたるが、それでは、千利休が独自に始めたものとは、一体、何かと敢えて問えば、その一つは、（書院ではなく）、「草庵茶室」の創出であり、一つは、（ろくろを使わない）楽茶碗（手でこねて創る茶碗）の製作であり、一つは、竹の花入れの使用であり、その他、まさに「わび茶の完成」（それは「一切のむだと虚飾を排すること」へと向かっていくのである。そして、秀吉の聚楽城内に屋敷を構えて、禄も「三千石」を賜わるなど、茶人として「名声と権威」を誇っていたが、最晩年には、天下人の秀吉との「確執」などから、まさに「自害」することになるのである。（それは、一五九一年《天正十九年》二月のことであり、享年七十歳であった。）

\* さて、「佗び茶」というのは、「村田珠光」から始まり、「武野紹鷗」がそれを発展させ、そして、「千利休」で大成することになるが、その「千利休」死後は、千利休の孫にあたる三代目の「元伯宗旦」の三男の「江岑宗左」、四男の「仙叟宗室」、次男の「一翁宗守」が、それぞれ「不審庵 今日庵、官休庵」として千利休以来の道統を継ぐとともに、それらがそのまま今日の「表千家、裏千家、そして、武者小路千家」という、まさに「三千家」になるということである。そして、江戸初期の頃は、大名や豪商などが中心であったが、やがて、武家や商人、町人、その他と幅広く盛んになり、そして、明治時代以降になると、今度は、女性たちが、本来のわび茶とは別の「女子の教養」（或いは「花嫁修行」）の一つとして、まさに「茶の湯」に関わるようになるのである。

\* \* ところで、そもそも千利休という人は、いわゆる「お茶」（その「核心部分」）をどのように考えていたかが最大の問題であり、ここでは、今日、一般的に言われているような「様々な事柄」は省略して、それらにもう一つ書き加えるというような「意味合い」で、個人的には、次のようなものではないかと思う。——まず、茶室の空間であるが、それは、まさに世俗的な「身分や地位或いは虚飾」その他などをすべて脱ぎ捨てた、いわば「一人の素の人間と一人の素の人間とが向き合う場所」であり、それは、いわば「座禅をする空間」にも似たようなものであり、主人は、まさに「一期一会」の心を以て心から客人をもてなすことになるが、その場合、われわれ人間というのは、毎日、俗世間にまみれて生きているために、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされて、われわれ人間の「心」というのは、実に様々な「変形（変色）」して、まさに「自分を見失っている」状態であるが、主人は主人として、また、客人は客人として、その「茶の道」の

それぞれの「所作」を順に行なっていくうちに、そのように実に様々に「変形（変色）」して、まさに「自分を見失っている」状態から、次第に、本来の「自分」（或いは「本来の心」）を取り戻していくための「行為」（所作）にもなっているということである。

\* \* \* \* \*  
例えば、有名な「ラジオ体操」というものがある。それは、第一、第二とあり、最初から最後まで「決められた動作（所作）」を一つ一つ順に行なっていくものである。その場合、「……昨日、この動作（所作）を行なった時には何でもなかったのに、今日、同じ動作（所作）を行なったら、なぜか肩が重い、腰が痛い、その他、なぜなんだろう。ああ、そうだ。昨日の夕方、片付けなどでかなり重い物を持ったからかも知れない。だからだ」と、そのように、一つ一つの動作（所作）を順に行なっていくうちに、今の「自分の身体」のそれぞれの「状態」を実に事細かに一つ一つチェックすることができ得るのである。

それと同じように、「茶の道」のそれぞれの「所作」を一つ一つ順に行なっていくうちに、今の自分の「心の状態」（或いは「身体の状態」）なども、一つ一つ事細かにチェックすることができ得るのである。——つまり、われわれ人間というのは、毎日、俗世間にまみれて生きているために、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、われわれ人間の「心」というのは、実に様々に「変形（変色）」して、まさに「自分を見失っている」状態であるが、「茶の道」のそれぞれの「所作」を順に行なっていくうちに、そのように実に様々に「変形（変色）」して、まさに「自分を見失っている」状態から、次第に本来の「自分」（或いは「本来の心」）を取り戻していくための「行為」（所作）にもなっているということである。

\* \* \* \* \*  
つまり、「お茶」も「座禅」も基本的にはよく似たところがあり、われわれ人間の「心」、そのものというのは、本来は、まさに「大空のような無色透明なもの」であるが、毎日、俗世間にまみれて生きているために、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされて、われわれ人間の「心」というのは、実に様々に「変形（変色）」して、まさに「自分を見失っている」状態であるが、そのような「心の状態」から、一方は、「お茶」によって、また、一方は、「座禅」によって、本来の「自分自身」（無色透明な「心」）を取り戻そうとしている「行為」（所作）でもあるわけである。それゆえ、例えば、天下人である「豊臣秀吉」が創らせたという、いわゆる「黄金の茶室」の話聞いた時には、恐らく、「わび茶」を宗とする千利休にとっては、さすがに、「……この人は、何も分かっていない」と、驚き、また、諦めたということにもなるのだろう。もちろん、「黄金の茶室」のような豪華な「茶の湯」（つまり「書院茶の湯」）があっても、それはそれでよいのである。

\* \* \* \* \*  
ところで、千利休は、多くの武士たちに「お茶」を点てて、そのあと、その武士たちの何人かは戦場でなくなっている。——つまり、千利休の「お茶」とは、文字通り、まさに「一期一会」の「お茶」でもあったのである。また、豊臣秀吉との「あつれき」の結果、「自害」する結果になるが、その「原因」については幾つかの説があり、一般的には、例えば、大徳寺の門の改修時に千利休の雪草履姿の木造を楼門の上に設置し、その下を豊臣秀吉に通らせたという説が有力であるが、また、安価の茶道具類を高額で売り私腹を肥

やっていたという説。また、秀吉と利休は茶道に対する考え方で対立していたという説。また、利休の娘を妾にと望んだが、利休に拒否されてそれを恨んだという説。また、朝鮮出兵を批判したというような説。また、交易を独占しようとした秀吉に対し、堺の権益を守ろうとしたという説。その他、いろいろとあるが、それらのことを含めて、最も「根本にある」ものは、千利休という人は、余りに「大きな存在」（それは茶人としての名声や影響力或いは権威などを持った存在）になり過ぎてしまった「からであり、そのために、結局、（疎まれて）排除されたということである。——一方、千利休としては、確かに、謝るか何か（命乞い）でもすれば、或いは、生命だけは助かったのかも知れないが、しかし、それが、若しも自分の「信念」をも捨てて謝るのであれば、たとえ生命は生き長らえたとしても、千利休の「お茶」そのものは、死んでしまうわけであり、ここは実に悩ましいところであるが、結果として、千利休は、自分の「信念」（或いは「お茶」）に殉じたということになるのだろう。

\*

\*

十三、峠の茶屋

### 十三、峠の茶屋

さて、峠の茶店で、画工は、「おい」と声を掛けたが返事がない。軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五、六足の草鞋が淋しそうに庇から吊されて、屈托氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘銭と文久銭が散らばっている。(これは「この峠の茶屋で草鞋を新たに買い換える人も当然いる」ということである。)

「おい」とまた声をかける。土間の隅に片寄せてある白の上に、ふくれていた鶏が、驚ろいて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に土竈(土の竈)が、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変わつてる上に、真黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。さいわい下は焚きつけてある。

返事がないから、無断でずつと這入つて、床几(長目の腰掛け)の上へ腰を卸した。鶏は羽搏きをして白から飛び下りる。今度は畳の上へあがつた。障子がしめてなければ奥まで馳けぬける気かも知れない。雄が太い声でコケッコッコと言うと、雌が細い声でケケッコッコと言う。まるで余を狐か狗のように(敵と)考えているらしい。床几の上には一升枘ほどの煙草盆が閑静に控えて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、すこぶる悠長に燻っている。雨はしだいに収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がざらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。——どうせ誰か出るだろうとは思っていた。竈に火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は呑気に燻っている。どうせ出るにはきまつている。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。その上出て来た婆さんの顔が気に入った。

二、三年前宝生の舞台で『高砂』を見た事がある。その時これはうつくしい活人画だと思つた。箒を担いだ爺さんが橋懸りを五、六歩来て、そろりと後向になつて、婆さんと向い合う。その向い合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆んど真むきに見えたから、ああうつくしいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔は、この写真に血を通わしたほど似ている。

「……御婆さん、ここをちよつと借りたよ」、「……はい、これは、いつこう存じませんで」、「……だいぶ降つたね」、「……あいにくな御天気で、さぞ御困りで御座んしよ。おとおおだいぶお濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ」、「……そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」、「……へえ、ただいま焚いて上げます。まあ御茶を一つ」と立ち上がりながら、しつしつと二声で鶏を追ひ下げる。ココココと馳け出した夫婦は、焦茶色の畳から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往来へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

### 一、茶店のお婆さんとの会話

婆さんは、「……まあ一つ」といつの間にか剝り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げている底に、一筆がきの梅の花が三輪無雑作に焼き付けられている。「……」

御菓子を」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねじと微塵棒を持ってくる。糞はどこぞに着いておらぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り残されていた。

婆さんは袖なしの上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懐から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話しをしかける。「……閑静でいいね」、「……へえ、御覧の通りの山里で」、「……鶯は鳴くかね」、「……ええ毎日のように鳴きます。此辺は夏も鳴きます」、「……聞きたいな。ちつとも聞えないとお聞きたい」、「……あいにく今日は——先刻の雨でどこぞへ逃げました」と言うのであった。

折りから、竈のうちがばちと鳴って、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹き出す。「……さあ、御あたり。さぞ御寒かる」と言う。軒端を見ると青い煙りが、突き当って崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでいる。「……ああ、好い心持ちだ、御蔭で生き返った」、「……いい具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」と言う。逡巡（ぐずぐず）として曇り勝ちな春の空を、もどかしくばかりに吹き払う山嵐の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ尽して、老嫗の指さす方に瀟灑（とたん）と（山々の険しくそそり立ち）、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩だそうだ。

余はまず天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の媪と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪の図を見たとき、理想の婆さんは物凄（ものすごい）いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考えた。宝生の別会能を観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚ろいた。あの面は定めて名人の刻んだものだろう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏やかに、あたたかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらって差し支えない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指さしている、袖なし姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

## 二、馬の鈴が聞えて来る

さて、手持無沙汰に写生帖を、火にあてて乾かしながら、「……御婆さん、丈夫そうだね」と訊ねた。「……はい。ありがたい事に達者で——針も持ちます、苧（糸）もうみます、御団子の粉も磨きます」と言う。この御婆さんに石臼を挽かして見たくなった。しかしそんな注文も出来ぬから、「……ここから那古井までは一里足たらずだったね」と別な事を聞いて見る。「……はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」、「……込み合わなければ、少し逗留しようかと思うが、まあ気が向けばさ」、「……いえ、戦争（日露戦争）が始まりましたから、頓と参るものは御座いません。まるで締め切り同様に御座います」、「……妙な事だね。それじゃ泊めてくれないかも知れんね」、「……いえ、御頼みになればいつでも宿めます」、「……宿屋はたった一軒だったね」、「……へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」、「……じゃ御客がなくても平気な訳だ」、「……旦那は始めてで」、「……いや、久しい以前ちよつと行つた事がある」と言うのであった。

会話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鶏を静かに写生していると、落ちつい

た耳の底へじゃらんじゃらんという馬の鈴が聴え出した。この声がおのずと、拍子をとって頭の中に一種の調子が出来る。眠りながら、夢に隣りの臼の音に誘われるような心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登ってから、馬には五、六匹逢った。逢った五、六匹は皆腹掛を掛けて、鈴を鳴らしている。今の世の馬とは思われない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。隣れの底に気楽な響がこもつて、どう考えても画にかいた声だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と、今度は斜に書きつけたが、書いて見て、これは自分の句でない気がついた。「……また誰ぞ来ました」と婆さんが半ば独り言のように言う。

ただ一条の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。(みな顔馴染みになっている)。最前逢うた五、六匹のじゃらんじゃらんも皆近づくことごとくこの婆さんの腹の中でまた誰ぞ来たと思われては山を下り、思われては山を登ったのだから。路寂寞と古今の春を貰いて、花を厭えば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からじゃらん、じゃらんを数え尽くして、今日の白頭に至ったのだろう。

馬子唄や白髪も染めで暮るる春

と次のページへ認めたが、これでは自分の感じを言い終せない、もう少し工夫のありそうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考えた。何でも白髪という字を入れて、幾代の節という句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、「……はい、今日は」と実物の馬子が店先に留って大きな声をかけるのであった。

三、峠の茶屋に源さんが通る

お婆さんは、「……おや源さんか。また城下へ行くかい」と聞くと、「……何か買物があるなら頼まれて上げよ」と言う。「……そうさ、鍛冶を通ったら、娘に靈巖寺の御札を一枚もらってきておくれなさい」と頼む。「……はい、貰ってきますよ。一枚か。——御秋さんは善い所へ片づいて仕合せだ。な、御叔母さん」と言うのと、「……ありがたい事に今日(生活)には困りません。まあ仕合せというのだから」と言う。「……仕合せとも、御前。あの那古井の嬢さまと比べて御覧」と言うので、「……本当に御気の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合がいいかい」と聞くと、「……なあに、相変らずさ」と答える。「……困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。「……困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。(これは「今の嬢さんは少し精神を病んでいると思われる」のである。)

枝繁き山桜の葉も花も、深い空から落ちたままなる雨の塊を、しつぽりと宿していたが、この時わたる風に足をすくわれて、いたたまれずに、仮りの住居を、さらさらと転げ落ちる。(これは強めに吹いた風で枝繁き山桜の葉や花に溜まっていた雨の雫がどつと下に落ちたのである)。馬は驚ろいて、長い鬣を上下に振る。「……コーラッ」と叱りつける源さんの声が、じゃらん、じゃらんと共に余の冥想を破る。

お婆さんが言う。「……源さん、わたしや、お嫁入りの時の姿が、まだ眼前に散らつ

ている。裾模様すそもようの振袖ふりそでに、高島田たかしまだで、馬うまに乗のりて……」と言いうと、「……そうさ、船ふねではなかつた。馬うまであつた。やはりここで休やすんで行いつたな、御叔母おおばさん」と言いう。「……あゝ、その桜さくらの下したで嬢様ぢやうさまの馬うまがとまつた時とき、桜さくらの花はながほろほると落ちて、せつかくの島田しまだに斑ふが出来できました」と言いうのであつた。

余あまはまた写生帖しやうしやうていをあける。この景色けしきは画えにもなる、詩うたにもなる。心のうちこころのうちに花嫁すがたの姿すがたを浮うかべて、当時たうじの様さまを想像さうぞうして見てしたり顔あつちやうに、

花はなの頃ころを越こえてかしこし馬うまに嫁よめ

と書きつける。不思議ふしぎな事ことには衣装いしやうも髪かみも馬うまも桜さくらもはつきりと目に映うつじたが、花嫁よめの顔かほだけは、どうしても思おもいつけなかつた。しばらくあの顔かほか、この顔かほか、と思案しよあんしているうちに、ミレーミレーの描かいた、オフエリヤの面影おもかげが忽然こつぜんと出て来て、高島田たかしまだの下したへすぼりとはまつた。これは駄目だめだと、せつかくの凶面おみけを早速さつそく取り崩くずす。衣装いしやうも髪かみも馬うまも桜さくらも一瞬間ひとしげに心の道具もうちう立たち奇麗きれいに立ち退ひいたが、オフエリヤの合掌あひさつして水みづの上うへを流ながれて行いく姿すがただけは、朦朧もうろうと胸むねの底そこに残のこつて、棕櫚しゆろ箒ほうきで煙けむりを払はうように、さつぱりしなかつた。空そらに尾びを曳ひく彗星すいせいの何なにとなく妙な気きになる。「……それじゃ、まあ御免ごめん」と源げんさんが挨拶あいさつする。御婆おばあさんは、「……帰かへりにまた御寄ごより。あいにくの降ふりりで七曲ななまがりは難義なんぎだろ」と言いうと、「……はい、少し骨ほねが折おれよ」と源げんさんは歩行あるき出です。じゃらんじゃらんと、源げんさんの馬うまも歩行あるき出ですのであつた。

#### 四、那古井なこいの嬢様ぢやうさまのお話わ

主人公しゆじんこうの画工がこうは、「……あれは那古井なこいの男おとこかい」、「……はい、那古井なこいの源兵衛げんべえで御座おんざんす」、「……あの男おとこがどこぞの嫁よめさんを馬うまへ乗のりせて、峠たけを越こしたのかい」、「……志保田しほだの嬢様ぢやうさまが城下じやうげへ御輿入おこしれいれのときに、嬢様ぢやうさまを青馬あおに乗のりせて、源兵衛げんべえが羈絆はづな(馬うまを引ひく手綱てなづな)を牽ひいて通とりました。——月日げつじつの立たつのは早いもので、もう今年ことしで五年ごねんになります」と言いう。

鏡かがみに對むかう時ときのみ、わが頭かぶの白しろきを啣かつ(嘆なげ)ものは幸さいわいの部に属ぞくする人ひとである。指さしを折おつて始めて、五年ごねんの流光りゆうかう(歳月さいげつ)に、転輪てんりんの疾とき趣そを解とし得えたる婆おばあさんは、人間にんげんとしてはむしろ仙せん(仙人せんじん)に近ちかづける方かただろう。余あまはこう答こたえた。「……さぞ、美うつくしかったろう。見みにくればよかつた」と言いうと、「……ハハハ今いまでもご覧らんになれます。湯治場とうじばへお越しなされば、きつと出て御挨拶ごあいさつをなされましよう」と言いうので、「……はあ、今いまでは里さとにいるのかい。やはり裾模様すそもようの振袖ふりそでを着きて、高島田たかしまだに結むすつていれればいいが」と言いうと、「……頼たの

余あまはまさかと思おもつたが、婆おばあさんの様子ようすは存外まじめ真面目まじめである。非人情ひにんじやうの旅たびにはこんなのが出でなくて面白おもしろくない。婆おばあさんが言いう。「……嬢様ぢやうさまと長良ながらの乙女おとめとはよく似にております」、

「……顔かほがかい」と聞きくと、「……いいえ。身みの成なりり行いきがで御座おんざんす」と言いう。「……へえ、その長良ながらの乙女おとめというのは何者なにものかい」と聞きくと、「……昔むかしこの村むらに長良ながらの乙女おとめといふ、美うつくしい長者ちやうじやの娘むすめが御座おんざりましたそうな、「へえ」、「……とこがその娘むすめに二人ふたりの男おとこが一度いちどに懸想けしやう(思おもいをかけ)て、あなた、「……なるほど」、「……ささだ男おとこに靡なびこうか、ささべ男おとこに靡なびこうかと、娘むすめは明け暮あけぐれ思おもい煩わづらつた」が、どちらへも靡なびきかねて、とうとう「……秋あきづけば、尾花おはなが上うへに置おく露つゆの、消けぬべくも吾わは、思おもほゆるかも」(秋あきになると尾花おはなの上うへに置おく露つゆのように消けえてしまひそうなほど私は切きなく思おもいます)という歌うたを

咏んで、淵川へ身を投げて果てました、と言うのであった。

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉で、こんな古雅な話をきこうとは思いがけなかった。「……これから五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。ついでに長良の乙女の墓を見て御行きなされ」と言うので、余は心のうちには是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語り続けるのであった。

それは、「……那古井の嬢様にも二人の男が祟りました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出での頃御逢いなさったので、一人はこの城下で随一の物持ちで御座んす」、「……はあ、御嬢さんはどっちへ靡いたかい」、「……御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由もありましたろが、親ご様が無理にこちらへ取りきめて……」、「……目出度、淵川へ身を投げんでも済んだ訳だね」、「……ところが——先方でも器量望みで御貫いなさったのだから、随分大事にはなさつたかも知れませぬが、もともと強いられて御出なさつたのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御心配の様子で御座んした。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内気の優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなって、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」と言う。

これからさきを聞くと、せつかくの趣向が壊れる。漸く仙人になりかけたところを、誰か来て羽衣を帰せ帰せと催促するような気がする。七曲りの険を冒して、やつとの思いで、ここまで来たものを、そうむやみに俗界に引きずり下されては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭いが毛孔から染込んで、垢で身体が重くなる。「……御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十銭銀貨を一枚床几の上へかかりと投げ出して立ち上がる。「……長良の五輪塔から右へ御下りなされると、六丁ほどの近道になります。路はわるいが、御若い方にはその方がよろしかる。——これは多分に御茶代を——気をつけて御越しなされ」と言うのであった。

## 五、峠の茶屋のまとめ

まず、主人公である「画工」の、山を越えて下りていく先の今宵の宿は、那古井の温泉場であった。その温泉場へと向かう道の「途中」（峠）で、雨に降られて茶店へと駆け込むことになるが、そこで、茶店の「お婆さん」と出逢う。そして、そのお婆さんとの辺の様子や地元の話などをしていると、馬を引いた源さんという人がたまたま通りかかる。

お婆さんは、「……おや源さんや、また城下へ行くかい」と、源さんとあれこれ話をし、やがて、「……源さん、わたしや、嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。裾模様振袖に、高島田で、馬に乗って、——月日のたつのは早いもので、もう今年で五年になる」と言うので、余はこう答えた。「……さぞ、美しかったろう。見にくればよかった」と言うので、「……ハハハ今でもご覧になれます。湯治場へお越しなされば、きつと出て御挨拶をなされましょう」、「……たのんでごらんなされ。着て見せましょ」と言うのであった。余はまさかと思つたが、お婆さんの様子は存外真面目であり、これは、後日、意外な形で実現することになる。——そのようにして、茶店の「お婆さん」との「会話」のなかに、いわゆる「お嬢さんの話」が自然と出て来るといふ展開になる。

それでは、なぜ、「お婆さん」なのか？ それは、この「お婆さん」は、かつてお嬢さんの実家である「温泉宿」に奉公していた女性であり、それゆえ、その「会話」の中に自然とお嬢さんの話が出て来るとともに、お嬢さんのことをよく知っている存在でもあるわけである。しかも、主人公は、お嬢さんの情報を、このお婆さんから最初の「情報」を得、次は、温泉宿の小女こおんなから新たな「情報」を得、また、本人からも得、そして、翌日、床屋の主人からも、さらなる「新たな情報」を得るといふように、だんだんと「お嬢さんの実体」がはつきりとして来るといふ手法を採っているかと思う。そして、その「お婆さん」からは、お嬢さんは、器量よしで、二人の男性から言い寄られ、彼女自身は、ぜひとも京都の方へと望んでいたが、親が取り極めた城下随一の物持ちと、五年前に結婚をすることになる。しかし、その強いられる結婚ということで、二人の折り合いもよくなく、しかも、戦争（それは「日露戦争」）で、夫の勤めていた銀行もつぶれたので、お嬢さんは、その夫と離縁をして、今は、「実家（温泉宿）」へと戻っているという話であった。

\*

\*

十四、那古井なごいの温泉宿 一

#### 十四、那古井の温泉宿

昨夕は妙な気持ちをした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合、庭の作り方は無論、東西の区別さえ分からなかつた。何だか廻廊のような所をしきりに引き廻されて、しまいに六畳ほどの小さな座敷へ入れられた。昔し来た時とはまるで見当が違ふ。晚餐を済まして、湯に入つて、室へ帰つて茶を飲んでみると、小女が来て床を延べよかと言つた。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の取次も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒も、悉くこの小女一人で弁じて（応じて）いる。それで口は滅多にきかぬ。というて、田舎染みてもおらぬ。赤い帯を色気なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下のような、梯子段のような所をぐるぐる廻わらされた時、（また）、同じ帯の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、既に自分ながら、キャンパス（キャンパス・構内？）の中を往来しているような気がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つてゐる部屋で我慢してくれと言つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい、言葉を述べて、出て行つたが、その足音が、例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠ざかつた時に、あとがひっそりとして、人の気がしないのが氣になつた。

生れてから、こんな経験はただ一度しかない。昔し房州を館山から向うへ突き抜けて、上総から銚子まで浜伝いに歩いた事がある。（この房州の旅は、『こころ』という作品の中にも出て来るが、実際、明治二十二年に漱石は学友と房州を旅した体験があるのである）。その時、ある晩、ある所へ宿た。ある所というより外に言いようがない。今では土地の名も宿の名も、まるで忘れてしまつた。第一宿屋へ泊まつたのが問題である。棟の高い大きな家に女がたつた二人いた。余が泊めるかと聞いたとき、年を取つた方はいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入ろうとすると、板庇の下に傾きかけていた一叢の修竹（長くのびた竹）が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、すでにひやりとした。椽板はすでに朽ちかかつてゐる。来年は筍が椽を突き抜いて座敷のなかは竹だらけにならうと言つたら、若い女が何にも言わずににやにやと笑つて、出て行つた。

その晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寝られない。障子をあげたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明かなるに、眼を走らせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に続いている。草山の向うはすぐ大海原でどどんどんと大きな濤が人の世を威嚇しに来る。余はとうとう夜の明けるまで一睡もせず、怪し気な蚊帳のうちに辛防しながら、まるで草双紙にでもありそうな事だと考えた。——その後旅もいろいろしたが、こんな氣持になつた事は、今夜この那古井へ宿るまではかつてなかつた。

仰向に寝ながら、偶然目を開けて見ると欄間に、朱塗りの縁をとつた額がかかつてゐる。文字は寝ながらも竹影松階塵不動と明らかに読まれる。大徹という落款も慥かに見える。余は書においては皆無鑒識のない男だが、平生から、黄檗の高泉和尚の筆致を愛している。隠元も即非も木庵もそれぞれに面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁（古風で力強く）しかも雅馴（言葉遣いや筆づかいが正しく練れている）のである。今この七字を見

ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉（こうせん）としか思われぬ。しかし現に大徹（だいてつ）とあるからには別人だろう。ことによると黄檗（おうはく）（宗）に大徹（だいてつ）という坊主がいたかも知れぬ。それにしても紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかかっている若冲（わくしゅう）の鶴の図が目につく。これは商売柄だけに、部屋に這入った時、すでに逸品（いつひん）と認めた。若冲（わくしゅう）の図は大抵精緻（せいせい）な彩色（さいしき）ものが多いが、この鶴は世間に気兼ね（きがね）なしの一筆（ひとひ）がきで、一本足ですらりと立った上に、卵形（たまごがた）の胴（た）がふわっと乗かっている様子は、はなはだ吾意（わがい）を得て、飄逸（ひょういつ）の趣（おもむ）きは、長い嘴（はし）のさきまで籠（こも）っている。床の隣りは違い棚（たな）を略して、普通の戸棚（とだな）につづく。戸棚（とだな）の中には何があるか分らない。

すやすやと寝入る。夢の中へと……（本文）

\* \* \*

ところで、日本の「禅宗（ぜんしゅう）」は、いわば「三宗」に分かれる。一つは、栄西の「臨濟宗（りんざい）」であり、その教えは、「……座禅を悟りに達する手段と考えていて、その修行の途上では、様々な『禅問答』や『自問自答』などを無限に積み重ねて、『大疑無くんば、大悟無し』の立場から、自己に対する疑問の積み重ねで『自心』を深め、悟りを求めて行くもの」であり、一つは、道元の「曹洞宗（そうどう）」であり、栄西に師事し、その教えは、「……余計なことは考えずに、ひたすら坐禅をすることで、その姿がそのまま『仏』の姿であり、坐禅と日常生活は一つである」というものである。そして、もう一つは、隠元（いんげん）の「黄檗宗（おうはく）」であり、それは、江戸初期に來日した隠元隆琦（いんげんりゅうき）を開祖とするものであり、本山は、隠元（いんげん）の開いた京都宇治市の黄檗山（おうはくさん）の萬福寺（まんぷくじ）であり、その教えは、「……中国臨濟宗（りんざい）の一派であり、師から弟子への悟りの伝達を重んじた」とある。

ところで、高泉（こうせん）という人は、中国福建省（ふっけん）生まれの明（みん）の禅僧（ぜんそう）であり、黄檗宗（おうはく）の隠元（いんげん）に招かれて遙々（はるばる）日本へと渡来（わくらい）しているのである。……

### 一、深夜、庭から女の歌う声が聞える

さて、すやすやと寝入る。その夢の「内容」は、「……長良（ながら）の乙女（おとめ）が振袖（ふりそで）を着て、青馬（あおま）に乗って、峠（たけ）を越すと、いきなり、ささだ男（おとこ）と、ささべ男（おとこ）が飛び出して両方（りょうほう）から引つ張る。女（おんな）が急にオフェリヤになって、柳（やなぎ）の枝（えだ）へ上（のぼ）って、河（か）の中（なか）を流れながら、うつくしい声（こゑ）で歌（うた）を歌（うた）う。救（すく）ってやろうと思（おも）って、長い竿（さお）を持って、向島（むこうじま）を追懸（おっか）けて行く。女（おんな）は苦（くる）しい様子（ようす）もなく、笑いながら、歌（うた）いながら、行末（ゆくえ）も知らず流れを下（くだ）る。余（あま）は竿（さお）をかついで、おおいおおいと呼ぶ」と言うものである。

そこで眼（まなこ）が醒（さ）めた。腋（わき）の下（した）から汗（あせ）が出ている。妙（たぎ）に雅俗混濁（ざくこんじやく）な夢（ゆめ）を見たものだと思った。昔（むかし）宋（そう）の大慧（だいゑ）禅師（ぜんじ）という人（ひと）は、悟道（ごどう）の後（のち）、何事（なにごと）も意（い）のごとくに出来（でき）ん事（こと）はないが、ただ夢（ゆめ）の中では俗念（ぞくねん）が出て困（こま）ると、長い間（ま）これを苦（くる）にされたそうだが、なるほどもつともだ。文（ぶん）芸（げい）を性命（せいめい）にするものは今（いま）少（すく）しうつくしい夢（ゆめ）を見（み）なければ幅（はば）が利（き）かない。こんな夢（ゆめ）では大部（たibu）分（ぶん）画（え）にも詩（うた）にもならんと思（おも）いながら、寝返（ねかえ）りを打（う）つと、いつの間（ま）にか障子（しょうじ）に月（つき）がさして、木の枝（えだ）が二（ふた）本（ぼん）斜（かた）めに影（かげ）をひたしている。冴（さ）えるほどの春（はる）の夜（よ）だ。

気のせい（げん）か、誰（たれ）か小（こ）声（こゑ）で歌（うた）をうたっているような気が（き）する。夢（ゆめ）のなかの歌（うた）が、この世（よ）へ抜け出（で）したのか、あるいはこの世（よ）の声（こゑ）が遠（とほ）き夢（ゆめ）の国（くに）へ、うつつながらに紛（まぎ）れ込んだのかと耳（みみ）を峙（そば）でる。慥（たし）かに誰（たれ）かうたっている。細（こま）くかつ低（ひ）い声（こゑ）には相違（さか）ないが、眠（ね）らんとする春（はる）

の夜に一縷（一本の細糸）の脈をかすかに搏たせつつある。不思議な事に、その調子はとにかく、文句を聞くと——枕元でやっているのでないから、文句のわかりようはない。——その聞えぬはずのものが、よく聞える。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも、と長良の乙女の歌を、繰り返し繰り返すように思われる。

初めのうちは椽（側）に近く聞えた声が、次第次第に細く遠退いて行く。突然とやむものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふつぷりと思いつたる声をきく人の心には、やはりふつぷりと思いつたる感じが起る。これという句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われもまた秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫のごとく、消えんとしては、消えんとする灯火のごとく、今やむか、やむかとのみ心を乱すこの歌の奥には、天下の春の恨みを悉く萃めたる調べがある。（これは「相手の調子に自分も自然と惹き込まれてしまう感じになつていると共に、天下の春の恨みを萃めたる調べ（春を恨む）ような調べにもなつている。」）

今までは床の中に我慢して聞いていたが、聞く声の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるると知りつつも、その声を追いかけたくなる。細くなればなるほど、耳だけになつても、あとを慕って飛んで行きたい気がする。もうどう焦慮しても鼓膜に応えはあるまいと思ふ一刹那の前、余はたまらなくなつて、われ知らず布団をすり抜けると共にさらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜めに月の光りを浴びる。寝巻の上にも木の影が揺れながら落ちた。

障子をあけた時にはそんな事には気が付かなかつた。あの声はと、耳の走る見当を見破ると——向うにいた。花ならば海棠かと思はれる幹背に、よそよそしくも月の光りを忍んで朦朧たる影法師がいた。あれかと思ふ意識さえ、確とは心にうつらぬ間に、黒いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わがいる部屋つづきの棟の角が、すらりと動く、背の高い女姿を、すぐに遮つてしまふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつた（つかまつた）まま、しばらく茫然としていたが、やがて我に帰ると、山里の春はなかなか寒いものと悟つた。ともかくもと抜け出でた布団の穴に、再び帰参して考え出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考え出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるいは此家の御嬢さんかも知れない。しかし出帰りの御嬢さんとしては夜なかに山つづきの庭へ出るのがちと不穩当だ。何にしてもなかなか寝られない。枕の下にある時計までがちくちく口をきく。今まで懐中時計の音の気になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考えろ、さあ考えろと催促する如く、寝るな寝るなど忠告する如く口をきく。怪しからん。

怖いものもただ怖いものそのままの姿と見れば詩になる。凄い事も、己れを離れて、ただ単独に凄いのだと思えば画になる。失恋が芸術の題目となるのも全くその通りである。失恋の苦しみを忘れて、そのやさしい所やら、同情の宿るところやら、憂のこもる所やら、一歩進めて言えば失恋の苦しみそのものの溢るる所やらを、単に客観的に眼前に思い浮べるから文学美術の材料になる。世には有りもせぬ失恋を製造して、自から強いて煩悶して、愉快を貪るものがある。常人はこれを評して愚だと言う、氣違だと言う。しかし自から不幸の輪廓を描いて好んでその中に起臥（寝起き）するのは、自から烏有の（全くない）山水を刻画して（つまり「実在せぬ景色を描くこと」）をして「壺中の天地に飲

喜する」(自分だけの別世界によるこび住むこと)と、その芸術的の立脚地を得たる点において全く等しいと言わねばならぬ。この点において世上幾多の芸術家は(日常の人としてはいざ知らず)芸術家として常人よりも愚である、気遣である。(これは「常人は現実の世界」に生きている、芸術家は「自分の世界」に生きているからである)。われわれは草鞋旅行をする間、朝から晩まで苦しい、苦しいと不平を鳴らしつづけているが、人に向って曾遊を説く時分には、不平らしい様子は少しも見せぬ。面白かった事、愉快であった事は無論、昔の不平をさえ得意に喋々として、したり顔である。これは敢て自から欺くの、人を偽わるのという了見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときはすでに詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起る。して見ると四角な世界から常識と名のつく、一角を磨滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう。(本文)

\*

\*

例えば、「……われわれは草鞋旅行をする間、朝から晩まで苦しい、苦しいと不平を鳴らし続けているが、(これは「草鞋旅行をしている間は、朝から晩まで苦しい、苦しいと不平を言っていた」くせに、人に向って曾遊(その旅の様子)を説く(話す)時分には、不平らしい様子は少しも見せず、面白かった事、愉快であった事は無論、昔の不平をさえ得意に喋々(喋りまくつ)て、したり顔である。これは敢て自から欺くの、人を偽わるのという了見ではない。(つまり「自分を敢えて欺いたり、人を敢えて偽わろうという了見ではない」のである)。旅行をする間は「常人の心持ち」(それは「その時々を生じて来る実に様々な生々しい、『喜怒哀楽』や『利害損得』などに振り廻されている『自我』の心の状態」)であるが、一方、曾遊(その旅の様子)を他人に語る時は、すでに「詩人の態度」(それは「その時々を生じて来た実に様々な生々しい、『喜怒哀楽』や『利害損得』などに振り廻されていた『自我』の心の状態はすでに薄れて、今は、その人の『頭の中』《或いは『心の中』》ではそれ膨大の現実の内容は自ずと自然淘汰された『記憶や思い出』として再構成された心の状態)になっているから、こんな矛盾が起るのである。して見ると四角な世界から常識と名の付く「一角を磨滅して」とあるが、この「一角を磨滅して」とは、「常識に縛られた世界」から離れて、それは、まさに現実世界で「その時々を生じて来る実に様々な生々しい、『喜怒哀楽』や『利害損得』などに振り廻されている『自我』の心の状態」から離れて、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)から生じる実に多種多様な「空想や想像の世界」を描いて、自分だけの別世界によるこび住んでいる人たちを、まさに「芸術家」と呼んでもよいのだろう。——それをもっと具体的に言えば、例えば、詩をはじめ、小説、戯曲、絵画、音楽、彫刻、工芸、映画、漫画、アニメ、その他、それらは、基本はすべて「フィクション」(つくりもの)であり、それゆえ、多くは「現実の世界」そのものであるはずもなく、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)から生じる実に多種多様な「空想や想像の世界」を描いているものであるが、その「フィクション」(つくりもの)のなかには、この世の実に様々な事物や出来事(例えば人間や動植物や自然や社会やその他の有様など)の「本質、真実、真理、源泉、特徴、その他」などを巧みにとらえて表現しているのが、まさに「文学や芸術」などであるということである。

## 二、深夜、俳句を作ってみる

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の（多くの俗人の）辟易（うんざり）して近づきがたしとなすところにおいて、芸術家は無数の琳琅（美しい玉）を見、無上の宝璐（美しい玉）を知る。俗にこれを名づけて美化と言う。（芸術家によつて美しく変えられる）。その実は美化（美しく変えられるの）でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として（光り輝く様は）昔（元）から現象世界に実在している。ただ一翳（曇った）眼に在つて空花乱墜するが故に（心に妄念があるがために、心が乱れて正しい認識が出来ないの）であり、俗累の羈絆牢として絶ちがたきが故に（俗世の煩わしい束縛などをどうしても絶ち切れないがために）、榮辱得喪（名誉と恥辱・利益と損失などの世俗的な関心事）のわれに逼る事、念々（瞬間瞬間）切なる（切実である）が故に、（つまり「そういうことばかりに囚われてゐるために」、ターナーが汽車を写すまでは汽車の美を解せず、応挙が幽霊を描くまでは幽霊の美を知らずに打ち過ぎるのである。（本文）

つまり、大事なことは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに振りまわされている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で「対象」そのものを見るようにすることによつてこそ、初めて、あるがままの「対象」そのものの（その「美しさ」）がはつきりと見えて来るといふことである。

余が今見た影法師も、ただそれきりの現象とすれば、誰が見ても、誰に聞かしても饒に詩趣を帯びている。——孤村の温泉、——春宵の花影、——月前の低誦、——臘夜の姿——どれもこれも芸術家の好題目である。この好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮義立てをして、余計な探りを投げ込んでゐる。せつかくの雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、気味の悪さが踏みつけにしてしまった。こんな事なら、非人情も標榜する価値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも画家とも人に向つて吹聴する資格はつかぬ。昔し以太利亜の画家サルヴァトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危険を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と画帖を懐にして家を出でたからには、余にもそのくらいの覚悟がなくては恥ずかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に帰れるかと言えば、おのれの感じ、そのものを、おのが前に据えつけて、その感じから一步退いて有体（あるがまま）に落ちついて、他人らしくこれを検査する余地さえ作ればいいのである。（それは「第三者の地位」一歩身を引いて、全体を客観的かつ冷静に眺めること）。詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する義務を有している。（自分を客観視する事）。その方便（方法）は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第「十七字」にまとめて見るのが一番いい。「十七字」は詩形としてもつとも軽便（手軽）であるから、顔を洗う時にも、廁に上つた時にも、電車に乗つた時にも、容易に出来る。「十七字」が容易に出来るという意味は安直に詩人になれるという意味であつて、詩人になるというのは一種の悟りであるから軽便だと言つて侮蔑する必要はない。軽便であればあるほど功德になるからかえつて尊重すべきものと思う。まあちよつと腹が立つと仮定する。腹が立つたところをすぐ「十七字」にする。「十七字」にするときは自分の腹立ちがすでに他人に変わっている。腹を立つたり、俳句を作つたり、そう一人が同時に働けるものではない。ちよつと涙をこぼす。この涙を「十七字」にする。するや否やうれしくなる。涙を「十七字」に纏めた時には、

苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出来る男だという嬉しさだけの自分になる。

これが平生から余の主張である。今夜も一つこの主張を実行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々句に仕立てる。出来たら書きつけないと散漫になつていかぬと、念入りの修業だから、例の写生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と真先に書き付けて読んで見ると、別に面白くもないが、さりとして気味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやつたが、これは季が重なっている。しかし何でも構わない、気が落ちついて呑気になればいい。それから「正一位、女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分ながら可笑しくなつた。この調子なら大丈夫と乗気になつて出るだけの句をみな書き付ける。

春の星を落して夜半のかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪

春や今宵歌つかまつる御姿

海棠の精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春ををちこちす

思ひ切つて更けゆく春の独りかな

などと、試みているうち、いつしか、うとうと眠くなる。

恍惚というのが、こんな場合に用いるべき形容詞かと思う。熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覚の際には誰あつて外界を忘るるものはなかるう。ただ両域の間に縷(細糸)の如き(絶えそうな)幻境(夢幻の境地)が横わる。醒めたりというには余り朧にて、眠ると評せんには少しく生気を刺す。起臥(寝起き)の二界を同瓶裏(同じ瓶中)に盛りて、詩歌の彩管(絵筆)を以て、ひたすらに攪き雑ぜたるが如き状態を言うのである。自然の色を夢の手前までぼかして、ありのままの宇宙を一段、霞の国へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、ありとある実相の角度を滑かにすると共に、かく和らげられたる乾坤(天地)に、われからと微かに鈍き脈を通わせる。地を這う煙の飛ばんとして飛び得ざるごとく、わが魂の、わが殻を離れんとして離るるに忍びざる態である。抜け出でんとして逡巡い、逡巡いは抜け出でんとし、果ては魂という個体を、没義道(無法)に保ちかねて、氤氳たる(盛んになった)暝氛(薄暗い気配)が散るともなしに四肢五体(からだ全体)に纏綿して(まつわり付いて)、依々たり恋々たる心持ち(名残惜しく恋い慕つて離れがたい気持ち)である。(この部分は「うとうととした眠りの恍惚状態」というものを、何とか言葉で表現しようとして敢えて言葉で説明しているところである。)

### 三、部屋に女の影が入つて来る

余が寤寐(眠りと目覚め)の境にかく逍遙していると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしの如く女の影がふうと現われた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。ただ心地よく眺めている。眺めるといふでは些と言葉が強過ぎる。余が閉じている瞼の裏に幻影の女が断りなく滑り込んで来たのである。まぼろしはそろりそろりと部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、畳の上には人らしいお供立たぬ。閉ずる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪濃い、襟足の長い女である。近頃は

やる、ぼかした写真を灯影にすかすような気がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべって暗闇のなかにほのめいた。戸棚がまたしまる。畳の波がおのずから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりで閉たる（閉まる）。余が眠りは次第に濃やかになる。人に死して（人が死んで）、まだ牛にも馬にも生れ変らない途中はこんなであろう。

いつまで人と馬の相中に寝ていたかわれは知らぬ。耳元にききつと女の笑い声があったと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はと（つ）くに切り落されて、天下は隅から隅まで明るい。うらかな春日が丸窓の竹格子を黒く染め抜いた様子を見ると、世の中に不思議というものの潜む余地はなさそうだ。神秘は十萬億土へ帰って、三途の川の向側へ渡つたのだろう。（この部分は「ほかの座敷は掃除がしてないので、お嬢さんの部屋だった所を、主人公に開けて宿としたので、お嬢さんは、ただ自分の座敷に何かの用があつて出入りしていた」ということである。）

#### 四、朝、風呂場へ下りる

浴衣のまま、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然（漫然）と湯壺のなかで顔を浮かしていった。洗う気にも、出る気にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになつたのだろう。昼と夜を界にこう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身体を拭くさえ退儀だから、いい加減にして、濡れたまま上つて、風呂場の戸を内から開けると、また驚かされた。「……御早う。昨夕はよく寝られましたか」、戸を開けると、この言葉とは殆んど同時にきた。人のいるさえ予期しておらぬ出合頭の挨拶だから、さそく（即座）の返事も出る違さえないうちに、「……さ、御召しなさい」と後ろへ廻つて、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけた。漸くの事、「……これは有難う……」だけ出して、向き直る、途端に女は二、三步退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描写することに相場が極つてゐる。古今東西の言葉で、佳人の品評に使用せられたるものを列挙したならば、大藏教とその量を争うかも知れぬ。この辟易すべき多量の形容詞中から、余と三步の隔りに立つ、体を斜めに振つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めている女を、もつとも適当に叙すべき用語を拾い來つたなら、どれほどの数になるか知れない。しかし生れて三十余年の今日に至るまで未だかつて、かかる表情を見た事がない。

美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰するそうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思う。動けばどう変化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬところに余韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に伝うるのである。世上幾多の尊厳と威儀とはこの湛然たる可能性の裏面に伏在している。動けばあらわれる。あらわれるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なかるうが、すでに一となり、二となり、三となつた暁には、拖泥帶水の陋を遺憾なく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。この故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全くこの動の一字で失敗している。動か静か。これがわれら画工の運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵この二大範疇のいずれにか打ち込む事が出来べきはずだ。（本文）

\* \*

先ず、「……美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰するそうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿とす。動けばどう変化するか、風雲か雷霆（神鳴）か、見わけのつかぬところに余韻が縹緲（遙かに広く）と存するから含蓄の趣を百世の後に伝うるのである。世上幾多の尊嚴と威儀とはこの湛然たる（つまり「水を満々と湛えたように静かで動かない様」の）可能力の裏面に伏在（潜在）している」とある。

これは、実に興味深い「考え方」であり、「……希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰する。そして、その『端肅』とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿とす」とある。——例えば、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』という名画があるが、それは、イエスが、突然、「……あなたがたのうちの一人が、わたしを敵に売ろうとしている」と預言する。それを聞いた「十二人の使徒」たちのその瞬間の「驚きの顔や手や身体（からだ）の動き」などを巧みに描いているものであり、それを「写真」で言えば、まさに「決定的瞬間」を見事にとらえて表現したものであるが、それは、最初の一瞬の「驚きの動き」だけを示して、その後の動き、使徒十二人それぞれがどのような動きになって行くかは、観る人たちの想像力にすべて委ねられているのである。それを本文で見ると、最初の動きだけを示して、その後どうなっていくのか、その「……余韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に伝うるのである」となるのである。

それは、有名な『モナ・リザ』（永遠の微笑）などは、まさに「端肅」の極み、そのものかも知れない。そして、動けば動くほど「卑しい様」になってしまふとある。それは、本文では、「……動けばあらわれる。あらわれるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、すでに一となり、二となり、三となった暁には、拖泥帶水の陋（卑しく醜い様）を遺憾なく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。この故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全くこの動の一字で失敗している。動か静か。これがわれら画工の運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵この二大範疇のいずれにか打ち込む事が出来べきはずだ」とある。

例えば、プラトンは、「動」（動いている）ものは、絶えず変化している「途中の状態」であり、一方、「静」は、その動きが止まった状態であり、そこがまさに「最終地点」と見ているのである。そして、一般的に言えることは、「静」は、「客観性や永遠性」などを表現し易く、一方、「動」は、その「活力と方向性」などを表現し易いものである。また、「……運慶の仁王も、北斎の漫画も全くこの動の一字で失敗している」とあるが、むしろ、一つの「物差し」だけですべてを評価するのは間違いであり、「静」と「動」どちらであれ、その作者が何を描こうとしているのか、その「内容」（目的）などによって自ずと決められていくものであり、どちらが良いというような問題ではなく、むしろ「動き過ぎることこそよくない」（卑しくも醜くもなる）と言うべきところである。

## 五、那美さんの顔の表情

ところがこの女の表情を見ると、余はいずれとも判断に迷った。口は一文字を結んで静である。眼は五分のすきさえ見出すべく動いている。顔は下膨の瓜実形で、豊かに落ち

つきを見せているに引き易えて、額は狭苦しくも、こせついで、いわゆる富士額の俗臭を帯びている。のみならず眉は両方から逼って、中間に数滴の薄荷を点じたる如く、びくびく焦慮している。鼻ばかりは軽薄に鋭どくもない、遅鈍に丸くもない。画にしたら美しかろう。かように別れ別れの道具が皆一癖あつて、乱調にどやどやと余の双眼に飛び込んだのだから迷うのも無理はない。

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起つて、全体が思わず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどろうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけどから無理でも動いて見せると言わぬばかりの有様が——そんな有様があるとするれば丁度この女を形容する事が出来る。

それだから軽侮の裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいている。才に任せ、気を負えば百人の男子を物の数とも思わぬ勢いの下から温和しい情けがわれ知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居している体だ。この女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、この女の世界に統一がなかったのだらう。不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ。不仕合な女に違ない。「……有難う」と繰り返しながら、ちよつと会釈した。「……ほほほ御部屋は掃除がしてあります。往つて御覧なさい。いずれ後ほど」というや否や、ひらりと、腰をひねつて、廊下を軽氣に馳けて行つた。頭は銀杏返に結っている。白い襟がたぼの下から見える。(たぼは「日本髪の後部に張り出した部分」、帯の黒縹子(黒い色の縹子織り)は片側だけだらう。(本文))

\*

\*

さて、画工は、那美さんの「顔の表情」については、「……元来は静であるべき大地の一角に陥欠(欠陥)が起つて、全体が思わず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどろうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけどから無理でも動いて見せると言わぬばかりの有様が——そんな有様があるとするれば丁度この女を形容する事が出来る」とあり、また、「……どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居している体だ。この女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、この女の世界(過去)に統一がなかったのだらう。不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ。不仕合な女に違ない」と見ているのである。

## 六、那古井の温泉宿一のみとめ

それでは、旅先の那古井の温泉宿で偶然に出逢つた「那美さん」(その元「お嬢さん」)との様々な「出来事」について、少し順を追つて考えてみたいと思う。

まず、主人公の画工は、那古井の温泉宿へは夜の八時頃に着くが、今は、戦争中なので、一人の客もなく、実実上、休業の状態であつたが、回廊を巡つて、奥の六畳ほどの座敷に案内される。晚餐を済まして、湯に入つて、小女が床を引いてくれて、やがて眠りにつくが、夜中、夢から醒めると、静寂のなか、人の歌う声がかすかに外から聞こえて来る。しばらく床の中で聞いていると、やがて消えていく気配に、床から出て障子を開けると、春

の夜の月光の下、庭に女の人影がおぼろに見えたかと思うと、消えてしまう。再び、寢床へと戻り、浮かぶ俳句などを幾つか写生帖に書き付けていると、うとうと眠くなるが、今度は入口の唐紙が静かに開いて部屋の中へと女の影がすうっと入って来て、戸棚の前で止まり、開けては締めて外へとすうっと出て行く。主人公は、うとうとした意識のなかで、夢なのか現実なのかというおぼろの状態のなかで、朝、目が醒める。それは、実は、ほかの座敷は掃除がしないということで、お嬢さんの部屋だった所を、主人公に開けて宿としたので、お嬢さんは、ただ自分の座敷に何かの用で出入りしていたということであった。

さて、朝となり、浴衣のまま風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顔を浮かしていた。洗う気にも、出る気にもならない。やがて、身体を拭くのも退儀で、いい加減にして、濡れたまま上って、風呂場の戸を内から開けると、突然、驚いた事に、「……お早う、昨夕はよく寝られましたか」という言葉が殆んど同時に聞こえて来て、「……さ、御召しなさい」と後ろへ廻って、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけてくれる。これが、温泉宿の「那美さん」(その元「お嬢さん」)であり、「……これは難有う」と軽く会釈すると、「……ほほほお部屋は掃除がしてあります。往って御覧なさい。いずれ後ほど」というや否や、ひらりと、身を翻して、廊下を軽気に馳けて行ったのであった。

\*

\*

十五、那古井なごいの温泉宿 二

十五、那古井の温泉宿 二

七、部屋に戻る

ぼかんと部屋へ帰ると、なるほど奇麗に掃除がしてある。ちよつと気がかりだから、念のため戸棚をあけて見る。下には小さな用箋筒が見える。上から友禅の扱帯が半分垂れかかって、いるのは、誰か衣類でも取り出して急いで、出て行ったものと解釈が出来る。扱帯の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隠和尚の『遠良天釜』と、『伊勢物語』の一卷が並んでる。昨夕のうつつは事実かも知れないと思つた。(この時、例の花嫁衣装を持ち出したのかも知れない。)

何気なく座布団の上へ坐ると、唐木の机の上に例の写生帖が、鉛筆を挟んだまま、大事そうにあげてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だろうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝鳥」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる、男にしては柔か過ぎる。おやとまた吃驚する。次を見ると「花の影、女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」の下には「御曹子女に化けて朧月」とある。真似をしたつもりか、添削した気か、風流の交わりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思わず首を傾けた。(俳句は正岡子規との親交からなるのだろう。)

後ほどと言つたから、今に飯の時にでも出て来るかも知れない。出て来たら様子が少しは解るだろう。ときに何時だなど時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寝たものだ。これでは午飯だけで間に合せる方が胃のためによからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名残はどの辺かなと眺める。海棠と鑑定したのははたして、海棠であるが、思つたよりも庭は狭い。五、六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよさそうだ。左は山つづきの崖に赤松が斜めに岩の間から庭の上へさし出している。海棠の後ろにはちよつとした茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠りを春の日に曝している。右手は屋の棟で遮ぎられて、見えぬけれども、地勢から察すると、だらだら下りに風呂場の方へ落ちてゐるに相違ない。

山が尽きて、岡となり、岡が尽きて、幅三丁ほどの平地となり、その平地が尽きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ行つてまた隆然と起き上つて、周囲六里の摩耶島となる。これが那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来るだけ崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ囲い込んだ一構であるから、前面は二階でも、後ろは平屋になる。椽(側)から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は榊子段をむやみに上つたり、下つたり、異な仕掛の家と思つたはずだ。

今度は左り側の窓をあける。自然と凹む二畳ばかりの岩のなかに春の水がいつともなく、たまつて静かに山桜の影を醸している。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向うに枸杞とも見える生垣があつて、外は浜から、岡へ上る岨道か時々人声が聞える。往來の向うはだらだらと南下がりに蜜柑を植えて、谷の窮まる所にまた大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとはこの時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石燈が五、六段手にとるように見える。大方お寺だろう。

入口の襖をあけて椽(側)へ出ると、欄干が四角に曲つて、方角から言えば海の見ゆ

べきはずの所に、中庭を隔てて、表二階の間がある。わが住む部屋も、欄干に倚ればやはり同じ高さの二階なものには興が催おされる。湯壺は地の下にあるのだから、入湯という点から言えば、余は三層楼上に起臥する訳になる。「この「……中庭を隔てて、表二階の間がある」。やがて、ここに那美さん（その「元お嬢さん」）が姿を現わすことになるが、というよりも、主人公（画工）に自分の部屋を譲ったので、彼女は、この「表二階の間」でまさに「寝起きをしている」ことになるのだろう。」

家は随分広いが、向う二階の間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室台所は知らず、客間と名がつきそうなのは大抵立て切つてある。客は、余をのぞくのほか殆んど皆無なのだろう。めた部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。これでは表の戸締りさえ、するかしらないか解らん。非人情の旅にはもって来いという屈強な場所だ。（本文）

#### 八、主人公と小女郎との会話

時計は十二時近くなつたが飯を食わせる景色はさらさない。ようやく空腹を覚えて来たが、空山不見人という詩中にあると思うと、一と片食（一食）位儉約しても遺憾はない。画をかくのも面倒だ、俳句は作らんでもすでに俳三昧に入っているから、作るだけ野暮だ。読もうと思つて三脚几に括りつけて来た二、三冊の書籍もほどく気にならない。こうやって、煦々たる（暖かい）春日に背中をあぶつて、椽側に花の影と共に寝ころんでいるのが、天下の至楽である。考えれば外道に墮ちる。動くと危ない。出来るならば鼻から呼吸もしたくない。畳から根の生えた植物のようにじつとして二週間ばかり暮して見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上ってくる。近づくのを聞いていると、二人らしい。それが部屋の前でとまったなと思つたら、一人は何にも言わず、元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、やはり昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。「……遅くなりました」と膳を据える。朝食の言訳も何にも言わぬ。焼肴に青いものをあしらつて、碗の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め抜かれた、海老を沈ませてある。ああ好い色だと思つて、碗の中を眺めていた。「……御嫌いか」と下女が聞く。「……いいや、今に食う」と言つたが実際食うのは惜しい気がした。ターナーが或る晚餐の席で、皿に盛るサラダを見詰めながら、涼しい色だ、これがわしの用いる色だと傍の人に話したという逸事がある書物で読んだ事があるが、この海老と蕨の色をちよつとターナーに見せてやりたい。いったい西洋の食物で色のいいものは一つもない。あればサラダと赤大根ぐらいなものだ。滋養の点から言つたらどうか知らんが、画家から見るとすこぶる発達せん料理である。そこへ行くと日本の献立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物奇麗に出来る。会席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めたまま帰つても、目の保養から言えば、お茶屋へ上がった甲斐は充分ある。

主人公の画工は、「……うちに若い女の人がいるだろう」と碗を置きながら、質問をかけた。「へえ」と言うので、「……ありや何だい」と聞くと、「若い奥様で御座んす」と言う。「……あの外にまだ年寄の奥様が居るのかい」と訊くと、「去年御亡くなりました」、「……旦那さんは」、「おります。旦那さんの娘さんで御座んす」、「……あの若い人がかい」、「へえ」、「……御客はいるかい」、「おりません」、「……わたし一人かい」、「へえ」

と応える。「……若い奥さんは毎日何をしているかい」と聞くと、「針仕事を」、「……それから」、「三味を弾きます」と言うのであった。

これは意外であった。面白いからまた、「……それから」と聞いて見た。「御寺へ行きませう」と小女郎が言う。これもまた意外である。御寺と三味線は妙だ。「……御寺詣りをするのかい」、「いいえ、和尚様の所へ行きます」、「……和尚さんが三味線でも習うのかい」、「いいえ」、「……じゃ何をしに行くのだい」、「大徹様の所へ行きます」、なあるほど、大徹というのはこの額を書いた男に相違ない。この句から察すると何でも禪坊主らしい。戸棚に『遠良天釜』があつたのは、全くあの女の所持品だろう。

さらに、「……この部屋は普段誰か這入っている所かね」、「普段は奥様がおります」、「……それじゃ、昨夕、わたしが来る時までここにいたのだね」、「へえ」、「……それは御気の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのだい」、「知りません」、「……それから」、「何でござんす」、「……それから、まだほかに何かするのだろうか」、「……いろいろな……」と言うので、「……いろいろつて、どんな事を」と聞くと、「知りません」と言うのであった。(この場面は、宿の小女郎から「那美さん」(その元「お嬢さん」)に関する新たな「興味深い情報」を色々知ることになるのである。)

#### 九、向う二階の欄干に那美さんが……

会話はこれで切れる。飯はようやく了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開たら、中庭の裁込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳観音のように下を見詰めていた。今朝に引き替えて、はなはだ静かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通わないから、相好(表情)にかほどな(これほどの)変化を来したものであるうか。昔の人は人に存するもの眸子(瞳)より良きはなしと言つたそうだが、なるほど人焉んぞ度さんや、人間のうちに活きている道具はない。寂然と倚る亜字欄(欄干)の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞い上がる。途端にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然(突然)と蝶から眼を余の方に転じた。視線は毒矢の如く空を貫いて、会釈もなく余が眉間に落ちる。はつと思う間に、小女郎が、またはたと襖を立て切つた。(これは「小女郎が襖を開け閉めしたその極めて短い間に、欄干にいた那美さんの眼と部屋にいた画工の眼が一瞬全く意図せず偶然にも触れ合った時は、つとした思ひから、次のような想いが浮かんできたということである。)

あとは至極呑気な春となる。余はまたごろりと寝ころんだ。たちまち心に浮んだのは、(英語訳「毒蛇と戦つて死んで行く直前の旅人(婚約者)には、夜明け前に月の光が消えてしまうより、貴女の美しい顔がもう二度と見られなく方がもつと悲しい」という句であった。もし余がああ銀杏返しに懸想(思いをかけて)いて、身を碎いても逢わんと思う矢先に、今のようない瞥の別れを、魂消るまでに、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだろう。その上に(英語訳「もし死んでも貴女を見るこゝとが出来たら、私は至福を以て死のう」という二句さえ、付け加えたかも知れぬ。)

幸い、普通ありふれた、恋とか愛とかいう境界はすでに通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。しかし今の刹那に起つた出来事の詩趣はゆたかにこの五、六行にあらわれている。余と銀杏返しの間柄にこんな「切ない思ひ」はないとしても、二人

の今の関係、この詩の中に適用して見るのは面白い。あるいはこの詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釈しても愉快だ。二人の間には、ある因果の細い糸で、この詩にあらわれた境遇の一部分が、事実となつて、括りつけられている。因果もこのくらい糸が細いと苦にはならぬ。その上、ただの糸ではない。空を横切る虹の糸、野辺に柵引く霞の糸、露にかがやく蜘蛛の糸。切ろうとすれば、すぐ切れて、見ているうちは勝れてうつくしい。万一この糸が見る間に太くなつて井戸繩のようにかたくなつたら？ そんな危険はない。余は画工である。先はただの女とは違う。(本文)

#### 十、ここまでのまとめ

さて、ぼかんと部屋へ帰ると、なるほど綺麗に掃除がしてあり、昨夜のことを確かめるように、戸棚の中を開けて見たり、机の上の写生帖(その中に彼女の書き込みの句もある)を見たり、また、庭の様子や外の風景などを眺めたあと、時計を見ると、もう朝の十一時過ぎであり、やがて、誰かが食事を持つて来るだろうと、密かに期待をしながら待っているが、誰もやつて来ず、十二時近く、廊下に人の歩く足音が聞こえてきて、最初は二人であつたが、一人は部屋の前で戻り、やがて、昨夕の少女郎が、「遅くなりました」と言いながら、お膳を持つて部屋に入つて来る。主人公の画工は、食事をしながら、「……うちに若い子がいるだろう」と質問すると、「へえ」と応え、「……若い奥様でござんす」、母親は、去年亡くなり、父親がいると言う。「……若い奥さんは毎日なにをしているかい」と聞くと、「針仕事を」、「それに三味を弾きます」と答える。それからと聞くと、「……お寺に行きます」、その他、そのような話の展開のなかで、食事を終えて、小女が膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開たら、中庭の栽込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳観音のように下を見詰めていた。その那美さんその人が、やがて主人公の画工の部屋へと入つて来るのである。

#### 十一、那美さんとの会話

それは、突然襖があき、寝返りを打つて入口を見ると、因縁の相手のその銀杏返しが敷居の上に立つて青磁の鉢を盆に乗せたまま佇んでいた。「……また寝ていらつしやるか、昨夕は御迷惑で御さんしたろう。何返も御邪魔をして、ほほほ」と笑う。臆した景色も、隠す景色も——恥ずる景色は無論ない。ただこちらが先を越されたのみである。「……今朝は有難う」とまた礼を言った。考えると、丹前の礼をこれで三返言つた。しかも、三返ながら、ただ「難有う」という三字である。

女は余が起き返ろうとする枕元へ、早くも坐つて、「……まあ寝ていらつしやい。寝ていても話は出来ましよう」と、さも気作に言う。余は全くだと考えたから、ひとまず腹這になつて、両手で顎を支え、しばし畳の上へ肘壺の柱を立てる。「……御退屈だろうと思つて、お茶を入れに来ました」、「……有難う」また有難うが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでいる。余はすべての菓子のうちでもっとも羊羹が好きだ。別段食いたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げ方は、玉と蠟石の雑種のようにで、

はなはだ見て心持ちがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れたようにつやつやして、思わず手を出して撫でて見たくなる。西洋の菓子で、これほど快感を与えるものは一つもない。クリームの色はちよつと柔らかだが、少し重苦しい。ジェリは、一目宝石のように見えるが、ぶるぶる顫えて、羊羹ほどの重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至っては、言語道断の沙汰である。

「……うん、なかなか美事だ」と言うと、「……今しがた、源兵衛が買って帰りました。これならあなたに召し上がられるでしょう」と言う。源兵衛は昨夕城下へ留まったと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見ていた。どこで誰れが買って来ても構う事はない。ただ美しくければ、美しくいと思うだけで充分満足である。「……この青磁の形は大変いい。色も美事だ。ほとんど羊羹に対して遜色がない」と言う。（これらが本当であるとすれば、夏目漱石という人は、陶器よりも磁器を余程好んだ人ということになるのだろう。）

\*

\*

女はふふんと笑った。口元に侮りの波が微かに揺れた。余の言葉を洒落と解したのでろ。なるほど洒落とすれば、軽蔑される価値はたしかにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を言うものだ。「……これは支那ですか」、「……なんですか」と相手はまるで青磁を眼中に置いていない。（これは骨頭には興味がないのである。）「……どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。「……そんなものが、お好きなら、見せましょうか」と言うので、「……ええ、見せて下さい」と答えると、「……父が骨董が大好きですから、だいぶいろいろいるものがあります。父にそう言って、いつか御茶でも上げましょう」と言うのであった。（後日、そのお茶に誘われることになる。）

さて、茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人ほど勿体振った風流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈に縄張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要もないのに鞠躬如（身をかがめて恐れ慎む）として、あぶくを飲んで結構がるものはいわゆる茶人である。あんな煩瑣な（煩わしい）規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかには雅味で鼻がつかえるだろう。回れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、これでおかた風流なんだろう、とかえって真の風流人を馬鹿にするための芸である。

画工は、「……御茶つて、あの流儀のある茶ですか」と聞くと、「……いいえ、流儀も何もありません。お厭なら飲まなくてもいいお茶です」と言うので、「……そんなら、ついでに飲んでもいいですよ」と応える。「……ほほほほ。父は道具を人に見ていただけのが大好きなんですから」と言うので、「……褒めなくつちやあ、いけませんか」と聞くと、「……年寄りだから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」と言う。「……へえ、少しなら褒めて置きましょう」と言うと、「……負けて、たくさんお褒めなさい」と言うのであった。「……はははは、時にあなたの言葉は田舎じゃやない」と聞くと、「……人間は田舎なんですか」（これは人間は田舎者に見えるのですか）と聞き返すので、「……人間は田舎の方がいいのです」と答える。「……それじゃ幅が利きます」と言うので、「……しかし東京にいた事がありますよ」と聞くと、「……ええ、いました、京都にもいました。渡りものですから、方々にいました」と答える。

そこで、画工は、「……ここと都と、どっちがいいですか」と聞くと、「……同じ事で

すわ」と答える。「……こういう静かな所が、かえって気楽でしょう」と聞くので、「……気楽も、気楽でないも、世の中は気の持ちよう一つでどうでもなります。蚤の国が厭になつたつて、蚊の国へ引越しちゃ、何にもなりません」、「……蚤も蚊もない国へ行つたら、いいでしょう」と言うと、「……そんな国があるなら、ここへ出して御覧なさい。さあ出して頂戴」と女は詰め寄せる。「……御望みなら、出して上げましょう」と例の写生帖をとつて、女が馬へ乗つて、山桜を見ている心持ち——無論とっさの筆使いだから、画にはならない。ただ心持ちだけをさらさらと書いて、「……さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊もいません」と鼻の前へ突きつけた。驚くか、恥ずかしがるか、この様子では、よもや苦しがる事はなからうと思つて、ちよつと景色を伺うと、「……まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりじゃありませんか。そんな所が御好きなの、まるで蟹ね」と言つて退けた。余は、「……わはははは」と笑う。軒端に近く、啼きかけた鶯が、途中で声を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと対話をやめて、しばらく耳を峙てたが、いったん鳴き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「……昨日は山で源兵衛に御逢いでしたろう」と聞くので、「ええ」と言うと、「……長良の乙女の五輪塔を見ていらしたか」と聞くのであった。「ええ」と応えると、「……あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつげずに歌だけ述べた。何のためか知らぬ。「……その歌はね、茶店で聞きましたよ」と言うと、「……婆さんが教えましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と言いかけて、これはと余の顔を見たから、余は知らぬ風をしていた。「……私がまだ若い時分でしたが、あれが来るたびに長良の話をして聞かせてやりました。うただけはなかなか覚えなかつたのですが、何遍も聴くうちに、とうとう何もかも誦誦してしまいました」、「……どうれで、むずかしい事を知つてると思つた。——しかしあの歌は憐れな歌ですね」、「……憐れでしょうか。私ならあんな歌は咏みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないじゃありませんか」、「……なるほどつまらないですね。あなたならどうしますか」、「……どうするつて、訳ないじゃありませんか。ささだ男もささべ男も、男妾にするばかりですわ」、「……両方ともですか」、「ええ」、「……えらいな」、「……えらかあない、当り前ですわ」、「……なるほどそれじゃ蚊の国へも、蚤の国へも、飛び込まずに済む訳だ」と言うと、「……蟹のような思いをしなくつても、生きていられるでしょう」と言うのであった。

ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯が、いつ勢いを盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逆まにして、ふくらむ咽喉の底を震わして、小さき口の張り裂くるばかりに、ほーう、ほけきよーう。ほーう、ほけつーきよーうと、つづけ様に囀る。「……あれが本当の歌です」と女が余に教えた。

\*

\*

十六、床屋

## 十六、床屋

さて、今度は床屋の主人との「会話」の場面となり、二人とも「東京育ち」で、特に床屋の主人の「江戸っ子弁」は、それなりに「味のある生きた会話」になっている。

最初、「……失礼ですが旦那は、やっぱり東京ですか」、「……東京に見えるかい」、「……見えるかいつて、一目見りゃあ、——第一言葉でわかりませぬ」、「……東京はどこだか知れるかい」、「……そうさね、東京はばかに広いからね。——なんでも下町じゃねえようだ。山の手だね。山の手は麴町かね。え？ それじゃ、小石川？ でなければ牛込か四谷でしょう」、「……まあそんな見当だろう。よく知ってるな」、「……こう見えて、私も江戸っ子だからね」、「……道理で生粋だと思つたよ」、「……えへへへ。からつきし、どうも、人間もこうなつちや、みじめですぜ」と言う。……

「……何でまたこんな田舎へ流れ込んで来たのだい」、「……ちげえねえ、旦那のおつしやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食い詰めつちまつて」、「……もつから髪結床の親方かね」、「……親方じゃねえ、職人さ。え？ 所かね。所は神田松永町でさあ。なあに猫の額見たような小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえはずさ。あすこに竜閑橋てえ橋がありましよう。え？ そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代な橋だがね」、「……おい、もう少し、石鹸を塗ってくれないか、痛くつて、いけない」、「……痛うがすかい。私や癩性でね、どうも、こうやつて、逆剃をかけて、一本一本髭の穴を掘らなくつちや、気が済まねえんだから、——なあに今時の職人なあ、剃るんじやねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」、「……我慢は先から、もうだいぶしたよ。お願いだから、もう少し湯か石鹸をつけとくれ」、「我慢しきれねえかね。そんなに痛かあねえはずだが。全体、髭があんまり延び過ぎてるんだ」と言う。そして、やけに頬の肉をつまみ上げた手を、残念そうに放した親方は、棚の上から、薄っ片な赤い石鹸を取り卸ろして、水のなかにちよつと浸したと思つたら、それなり余の顔をまんべんなく一応撫で廻わした。裸石鹸を顔へ塗り付けられた事はあまりない。しかもそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きかと考えると、あまりぞつとしない。

すでに髪結床である以上は、お客の権利として、余は鏡に向わなければならぬ。しかし余はさつきからこの権利を放棄したく考えている。鏡という道具は平らに出来て、なだらかに人の顔を写さなくては義理が立たぬ。もしこの性質が具わらない鏡を懸けて、これに向えと強いるならば、強いるものは下手な写真師と同じく、向うものの器量を故意に損害したと言わなければならぬ。虚栄心を挫くのは修養上一種の方便かも知れぬが、何も己れの真価以下の顔を見せて、これがあなたですよと、こちらを侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合うべく余儀なくされている鏡はたしかに最前から余を侮辱している。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元まで裂ける。仰向くと蟄蛙を前から見たように真平に押し潰され、少しこむと福祿寿の祈誓児のように頭がせり出してくる。いやしくもこの鏡に対する間は一人でいろいろな化物を兼勤(兼ね勤め)なくてはならぬ。写るわが顔の美術的ならぬはまず我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剥げ落ちて、光線が通る抜ける模様などを総合して考えると、この道具その物から醜体を極めてい。小人から罵詈される時、罵詈それ自身は別に痛痒を感ぜぬが、その小人の面前に起臥(起き寝)しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だろう。

\* \*  
この場面は、恐らく、夏目漱石は、所謂「鏡や写真」などは余り好きではなかったのだらう。その理由は、一般に、「鏡や写真」というのは、対象を無遠慮に容赦もなく露骨なまでにその姿をあらわに写し出して、人間の「眼」のような「相手」を思いやる、「やさしい眼差し」などは一かけらもないのであり、しかも、その「鏡や写真」の出来が悪ければ、より劣悪な「自分」を写し出しては、「……これがあなたですよ」と、こちらを侮辱することにもなるからである。

\* \*  
その上、この親方がただの親方ではない。そこから覗いたときは、胡坐をかいて、長煙管で、おもちやの日英同盟国旗の上へ、しきりに煙草を吹きつけて、さも退屈気に見えたが、這入って、わが首の所置を托する段になって驚ろいた。髭を剃る間は首の所有権は全く親方の手にあるのか、はた幾分か余の上にも存するのか、一人で疑がい出したくらい、容赦なく取り扱われる。余の首が肩の上に釘付にされているにしてもこれでは永く持たない。彼は髮剃を揮うに当って、毫も（少しも）文明の法則を解しておらん。頬にあたる時はがりと音がした。揉み上げの所ではぞきりと動脈が鳴った。頤のあたりに利刃がひらめく時分にはごりごり、ごりごりと霜柱を踏みつけるような怪しい声が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方をもって自任している。

最後に彼は酔っ払っている。旦那えと言うたんびに妙な臭いがする。時々異なる瓦斯が鼻柱へ吹き掛ける。これではいつ何時、髮剃がどう間違つて、どこへ飛んで行くか解らない。使う当人にさえ判然たる計画がない以上は、顔を貸した余に推察のできようはずがない。得心づくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は言わないつもりだが、急に気が変つて咽喉笛でも掻き切られては事だ。「……石鹸なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と言いながら親方は裸石鹸を、裸のまま棚の上へ放り出すと、石鹸は親方の命令に背いて地面の上へ転がり落ちた。（本文）

\* \*  
さて、この「床屋」の場面は、夏目漱石の第一作目の『我輩は猫である』から始まり、やがて、有名な『坊っちゃん』へと続き、そして、今回の『草枕』という作品にも、いわば軽いタッチの「ユーモア小説」的な雰囲気はしつかりと受け継がれてはいるが、しかし、前者の「二作」とは、つきりと違うところは、夏目漱石は、この『草枕』のなかで、主人公の画工に託して、彼自身の実に様々な「文学論」や「芸術観」などを多彩に語っているであり、それは、やはり単なる「ユーモア作家」のように思われることには抵抗があったに違いなく、そこで、彼の豊かな「教養」（例えば、英語をはじめ、漢詩、漢文、俳句、詩、絵画、書、彫刻、磁器、骨董、能、茶、その他）などを思うがままに語っている作品になるのである。

#### 一、床屋が語る那美さんのこと

さて、本文に戻ると、「……旦那あ、あんまり見受けねえようだが、なんですすかい、近ごろ来なすったのかい」、「……二、三日まえ来たばかりさ」、「……へえ、どこいるんですい」、「……志保田に逗ってるよ」、「……うん、あすこのお客さんですか。大方そんな事

だろうと思っていた。実あ、私もあの隠居さんを頼て来たんですよ。——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わつしが近所にいて、——それで知ってるのさ。いい人でさあ、ものの解つたね。去年御新造が死んじまつて、今じゃ道具ばかり捨くってるんだが——なんでも素晴らしいものが、あるてえますよ。売ったらよっぽどな金目だろって話さ」、「……綺麗なお嬢さんがいるじゃないか」、「……あぶねいね」、「……何が?」、「……何が?、……何が?、……それが、あれで出戻りですぜ」、「そうかい」、「……そうかいどころの騒じゃねんだね。全体なら出てこなくともいいところをさ。——銀行が潰れて贅沢がでかねえって、出ちまつたんだから、義理が悪いやね。隠居さんがああしているうちはいいが、もしもの事があつた日にや、法返しがつかねえわけになりまさあ」(この「法返し」とは「ほどこすべき手段もない状態になる」。「そうかな」、「……当前でさあ、本家の兄たあ、仲がわるしさ」、「……本家があるのかい」、「……本家は岡の上にありますさあ。遊びに行つてごらんさい。景色のいい所ですよ」と言うのであつた。

「……おい、もう一遍石鹸をつけてくれないか。また痛くなつて来た」、「……よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭じゃ、三日に一度は是非剃を当てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃で痛けりや、どこへ行つたつて、我慢出来つこねえ」、「……これから、そうしよう。何なら毎日来てもいい」、「……そんなに長く逗留する気なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事つた。碌でもねえものに引つかかつて、どんな目に逢うか解りませんぜ」、「どうして」、「……旦那あの娘は面はいいようだが、本当はき印しですぜ」、「なぜ」、「……なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて言ってるんでさあ」、「……そりや何かの間違だらう」、「……だつて、現に証拠があるんだから、御よしなせえ。けんゆう(危険)だ」、「……おれは大丈夫だが、どんな証拠があるんだい」、「……おかしな話しさね。まあゆつくり、煙草でも呑んで御出なせえ話すから。——頭あ洗いましようか」、「……頭はよそう」、「……頭垢だけ落して置かかね」と、親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、断わりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。この爪が、黒髪の根を一本ごとに押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通るごとくに往来する。余が頭に何十万本の髪の毛が生えているか知らんが、ありとある毛が悉く根こぎにされて、残る地面がべた一面に蚯蚓腫にふくれ上つた上、余勢が地盤を通して、骨から脳味噌まで震盪を感じたくらい烈しく、親方は余の頭を掻き廻わした。「……どうです、好い心持でしょう」、「……非常な辣腕だ」、「……え? こうやると誰でもさっぱりするからね」、「……首が抜けそうだよ」、「……そんなに倦怠うがすかい。全く陽気の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身体がなまけやがつて——まあ一ぶく御上がんなさい。一人で志保田にいちや、退屈でしょう。ちと話して御出なせえ。どうも江戸っ子は江戸っ子同志でなくつちや、話しが合かねえものだから。何ですかい、やつぱりあのお嬢さんが、お愛想に出てきますかい。どうもさっぱりし、見境のねえ女だから困つちまわあ」、「……お嬢さんが、どうか、したところで頭垢が飛んで、首が抜けそうになつたつけ」、「……違ねえ、がんがらんだから、からつきし、話に締りがねえつたらねえ。——そこでその坊主が逆せちまつて……」、「……その坊主たあ、どの坊主だい」、「……観海寺の納所坊主がさ……」、「……納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て来ないんだ」、「……そうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出来そうな坊主だつたが、そいつがお前さん、レユに参つちまつて、とうとう文をつけたん

だ。——おや待てよ。口説たんだっけかな。いんにや文だ。文に違えねえ。すると——こ  
うつと——何だか、行きさつが少し変だぜ。うん、そうか、やっぱりそうか。するてえと奴  
さん、驚いちまつてからに……」、「……誰が驚いたんだい」、「女がさ」、「……女が文を  
受け取つて驚いたんだね」、「……ところが驚くような女なら、殊勝らしいんだが、驚く  
どころじゃねえ」、「……じゃ誰が驚いたんだい」、「口説た方がさ」、「……口説ないのじ  
やないか」、「……ええ、じれつてえ。間違つてらあ。文をもらつてさ」、「……それじゃ  
やっぱり女だろう」、「……なあに男がさ」、「……男なら、その坊主だろう」、「……ええ、  
その坊主がさ」、「……坊主がどうして驚いたのかい、「……どうしてつて、本堂で和尚  
と御経を上げてると、突然いきなりあの女が飛び込んで来て——ウフフフ。どうしても  
狂印だね」、「……どうかしたのかい」、「……そんなに可愛いなら、仏様の前で、いっし  
よに寝ようつて、出し抜けに、泰安さんの頸つ玉へかじりついたんでさあ」、「へええ」、  
「……面喰つたなあ、泰安さ。氣狂に文をつけて、飛んだ恥を搔かせられて、とうとう、  
その晩こつそり姿を隠して死んじまつて……」、「死んだ?」、「……死んだろうと思うの  
さ。生きちゃいられめえ」、「……何とも言えない」、「……そうさ、相手が氣狂じや、死  
んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」、「……なかなか面白い  
話だ」、「……面白いの、面白くないのつて、村中大笑いでさあ。ところが本人だけは、根  
が氣が違つてるんだから、酒唾酒唾して平氣なもんで——なあに旦那のようにしつかりし  
ていりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大変な目  
に逢いますよ」、「……ちつと氣をつけるかね。ははははは」と言うのであつた。(さて、  
夏目漱石は、「……若い頃から落語が好きで寄席などにもよく通つていたそうである」が、  
まさに熊さん八つあんの「落語」を聞いているような感じにもなつているかと思う。)

## 二、床屋の主人についての評価

さて、生温い磯から、塩氣のある春風がふわりふわりと来て、親方の暖簾を眠たそうに煽  
る。身を斜にしてその下をくぐり抜ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向  
うの家では六十ばかりの爺さんが、軒下に蹲踞まりながら、だまつて貝をむいている。か  
ちやりと、小刀があたる度に、赤い味が笹のなかに隠れる。殻はきらりと光りを放つて、  
二尺あまりの陽炎を向へ横切る。丘のごとくに堆かく、積み上げられた、貝殻は牡蠣か、  
馬鹿か、馬刀貝か。崩れた、幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗らい国へ葬られ  
る。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考うる暇  
さえなく、ただ空しき殻を陽炎の上へ放り出す。彼れの笹には支うべき底なくして、彼れ  
の春の日は無尽蔵に長閑かと見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそそぐ。春の水が春の海と出  
合うあたりには、参差(長短ふぞろい)として幾尋(大人が両手を広げた長さ約一・八尺)  
の干綱が、綱の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微温を与えつつあるかと怪しまれる。  
その間から、鈍刀を溶かして、氣長にのたくらせたように見えるのが海の色だ。

この景色とこの親方とは到底調和しない。もしこの親方の人格が強烈で四辺の風光と拮  
抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立つてすこぶる円柄方鑿(両  
者がかみ合わない)の感に打たれたらう。幸して親方はさほど偉大な豪傑ではなかつ

た。いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切っても、この渾然として駘蕩たる（大きくのびのびしている）天地の大気象には叶わぬ。満腹の饒舌を弄して、あくまでこの調子を破ろうとする親方は、早く一微塵（粉々）となつて、恰々たる（よろこびたのしんでいる様）春光の裏に浮遊している。矛盾とは、力において、量において、もしくは意気体躯において氷炭（氷と燃える炭）相容る能わずして（性質が全く違っていて調和、一致しない）、しかも同程度に位する物もしくは人の間にあって始めて、見出し得べき現象である。（つまり「矛盾」という言葉自体がそうであり、ある商人が、この「矛」は何でも突き通すと褒め、一方、この「盾」はどんなものも通さないと褒める。それを聞いていた人が、その「矛」でその「盾」を突いたらどうなるのかと聞くと、商人は、それに答えられなかったという故事成語である）。両者の間隔（隔たり）が甚だしく懸絶する（差がある）時は、この矛盾は漸く漸尽（次第にすり減つて消滅）して、かえつて大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。（両雄並び立たずではなく）、（一方の）大人の手足となつて才子が活動し、（その）才子の股肱（部下）となつて昧者（愚者）が活動し、昧者（愚者）の心腹となつて牛馬が活動し得るのはこれがためである。

今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じている。長閑な春の感じを壊すべきはずの彼は、かえつて長閑な春の感じを刻意に添えつつある。余は思わず弥生（三月）半ばに呑気な弥次と近づきになったような気持ちになった。この極めて安価なる気餓家（大いに気炎を上げる人）は、太平の象を具したる春の日にもつとも調和せる一彩色である。「これは、……もしこの親方の人格が強烈で四辺の風光と拮抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立つてすこぶる円柄方鑿（両者がかみ合わない）の感に打たれただろう。幸して親方はさほど偉大な豪傑ではなく、いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切つても、この渾然として駘蕩たる（大きくのびのびしている）天地の大気象には叶わぬ」とし、主人公の画工は、「……余は思わず弥生《三月》半ばに呑気な弥次と近づきになったような気持ちになった」と評しているのである。」

\*

\*

こう考えると、この親方もなかなか画にも、詩にもなる男だから、とうに帰るべきところを、わざと尻を据えて四方八方の話をしていた。ところへ暖簾を滑つて小さな坊主頭が、「……御免、一つ剃つて貰おうか」と這入つて来る。白木綿の着物に同じ丸縮の帯をしめて、上から蚊帳のように粗い法衣を羽織つて、すこぶる気楽に見える小坊主であった。

「……了念さん。どうだい、こないだあ道草あ、食つて、和尚さんに叱られたらう、」「……いんにゃ、褒められた、」「……使に出て、途中で魚なんか、とつていて、了念は感心だつて、褒められたのかい、」「……若いに似ず了念は、よく遊んで来て感心じやうて、老師が褒められたのよ、」「……道理で頭に瘤が出来てらあ。そんな不作法な頭あ、刺るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘弁するから、この次から、捏ね直して来ねえ、」「……捏ね直すくらいなら、ま（もう）少し上手な床屋へ行きます、」「……はははは頭は凹凸だが、口だけは達者なもんだ、」「……腕は鈍いが、酒だけ強いのは御前だろ、」「……篋棒め、腕が鈍いつて……、」「……わしが言うたのじやない。老師が言われたのじや。そう怒るまい。年甲斐もない、」「……へん、面白くもねえ。——ねえ、旦那、「ええ?」、」「……全体坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがって、屈托がねえから、自然に口が達者になる訳ですかね。こんな小坊主までなかなか口幅つてえ事を言いますぜ——」

おっと、もう少し頭を寝かして——寝かすんだてえのに、——言う事を聴かなけりや、切るよ、いいか、血が出るぜ」、「……痛いかな。そう無茶をしては」、「……この位な辛抱が出来なくって坊主になれるもんか」、「……坊主にはもうなつとるがな」、「……まだ一人前じゃねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだっけな、御小僧さん」、「……泰安さんは死にはせんがな」、「……死なねえ？ はてな。死んだはずだが」、「……泰安さんは、その後発憤して、陸前の大梅寺へ行って、修業三昧じゃ。今に智識(高僧)になられよう。結構な事よ」と言うのであった。

すると、「……何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃をして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく気をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印はやつぱり和尚さんの所へ行くかい」、「……狂印という女は聞いた事がない」、「……通じねえ、味噌播だ。行くのか、行かねえのか」、「……狂印は来んが、志保田の娘さんなら来る」、「……いくら、和尚さんの御祈祷でもあればかりや、癒るめえ。全く先の旦那が崇つてるんだ」、「……あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めておられる」、「……石段をあがると、何でも逆様だから叶わねえ。和尚さんが、何て言つたつて、気狂は気狂だろう。——さあ剃れたよ。早く行って和尚さんに叱られて来めえ」、「……いやもう少し遊んで行って賞められよう」、「……勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」、「……咄この乾屎嘔(ちえ、この不浄者)」、「……何だと?」、青い頭はすでに暖簾をくぐつて、春風に吹かれている。(本文)

### 三、床屋のまとめ

さて、今度は床屋の主人との「会話」の場面となり、二人とも「東京育ち」で、特に床屋の主人の「江戸っ子弁」は、それなりに「味のある生きた会話」になっている。

それは、最初、「……失礼ですが旦那は、やつぱり東京ですか」、「……東京に見えるかい」、「……見えるかいつて、一目見りやあ、——第一言葉でわかりまさあ」、「……東京はどこだか知れるかい」、「……そうさね、東京はばかに広いからね。——なんでも下町じゃねえようだ。山の手だね。山の手は麴町かね。え? それじゃ、小石川? でなければ牛込か四谷でしょう」、「……まあそんな見当だろう。よく知ってるな」、「……こう見えて、私も江戸っ子だからね」、「……道理で生粋だと思つたよ」、「……えへへへ。からつきし、どうも、人間もこうなつちや、みじめですぜ」と言う。……

「……何でまたこんな田舎へ流れ込んで来たのだい」、「……ちげえねえ、旦那のおつしやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食い詰めつちまつて」、「……もつから髪結床の親方かね」、「……親方じゃねえ、職人さ。え? 所かね。所は神田松永町でさあ。なあに猫の額見たような小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえはずさ。あすこに竜閑橋てえ橋がありますよ。え? そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代な橋だがね」、「……おい、もう少し、石鹸を塗ってくれないか、痛くつて、いけない」、「……痛うがすかい。私や癩性でね、どうも、こうやって、逆剃をかけて、一本一本髭の穴を掘らなくつちや、気が済まねえんだから、——なあに今時の職人なあ、剃るんじやねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」、「……我慢は先から、もうだいぶしたよ。お願いだから、もう少し湯か石鹸をつけとくれ」、「我慢しきれねえかね。そんなに

痛かあねえはずだが。全体、髭があんまり延び過ぎてるんだ」と続くのである。

そして、「……旦那あ、あんまり見受けねえようだが、何ですかい、近頃来なすったのかい」、「……二、三日まえ来たばかりさ」、「……へえ、どこいるんですい」、「……志保田に逗留てるよ」、「……うん、あすこのお客さんですか。大方そんな事だろうと思つていた。実あ、私もあの隠居さんを頼て来たんですよ。——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わつしが近所について、——それで知ってるのさ。いい人でさあ、ものの解つたね。去年御新造が死んじまって、今じゃ道具ばかり捨くってるんだが——何でも素晴らしいものが、あるてえますよ。売ったらよっぽどな金目だろつて話さ」、「……綺麗なお嬢さんがいるじゃないか」、「……あぶねいね」、「……何が?」、「……何がって、旦那の前だが、あれで戻りですぜ」、「そうかい」、「……そうかいどころの騒じゃねんだね。全体なら出てこなくつてもいいところをさ。——銀行が潰れて贅沢がでかねえつて、出ちまつたんだから、義理が悪いやね。隠居さんがああしているうちはいいが、もしもの事があつた日にや、法返しがつかねえわけになりまさあ」(この「法返し」とは「ほどこすべき手段もない状態になる」。「そうかな」、「……当り前でさあ、本家の兄たあ、仲がわるしさ」、「……本家があるのかい」、「……本家は岡の上にあります。遊びに言つてごらん下さい。景色のいい所ですよ」と続くのである。

そして、「……そんなに長く逗留する気なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事つた。碌でもねえものに引つかかつて、どんな目に逢うか解りませんぜ」、「どうして」、「……旦那あの娘は面はいいようだが、本当はき印しですぜ」、「なぜ」、「……なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて言ってるんでさあ」、「……そりや何かの間違だろう」、「……だつて、現に証拠があるんだから、およしなせえ。けん、う、(危険)だ」、「……おれは大丈夫だが、どんな証拠があるんだい」、「……おかしな話しさね。まあゆつくり、煙草でも呑んでおいでなせえ話すから。——頭あ洗いましようか」と聞くので、「頭はよそう」と言うのと、「……頭垢だけ落して置かか」と言つて、その「頭垢落し」の作業をしながら、「……何ですかい、やっぱりあのお嬢さんが、お愛想に出てきますかい。どうもさつぱし、見境のねえ女だから困つちまわあ」と、次のような話をするのである。

ある時、若いお坊さんが、お嬢さんに惚れて、恋文を出したことがあつたが、その時、「……本堂で和尚さんとお経を上げてると、突然いきなりあの女が飛び込んで来て——ウフフフ。どうしても狂印だね」、「……どうかしたのかい」、「……そんなに可愛いなら、仏様の前で、いっしよに寝ようつて、だしぬけに、泰安さんの頸っ玉へかじりついたんでさあ」、「へええ」、「……面食つたなあ、泰安さ。氣狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とうとう、その晩こつそり姿を隠して死んじまつて……」、「死んだ?」、「……死んだらうと思うのさ。生きちやいられめえ」、「何とも言えない」、「……そうさ、相手が氣狂じゃ、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」、「……なかなか面白い話だ」、「……面白いの、面白くないのつて、村中大笑いでさあ。ところが当人だけは、根が気が違つてるんだから、酒唾酒唾して平気なもんで——なあに旦那のようにしつかりしていりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かしたら、大変な目に逢いますよ」という内容である。——その後、了念という小坊主が店に来て、頭を剃ることになるが、床屋の主人は、「……時にあの泰安さんは、どうして死んだつて

な、お小僧さん」と聞くと、「……泰安さんは、その後発奮して、陸前の大梅寺へ行って、修行三昧じゃ。今に智識（高僧）になられよう。結構な事よ」という展開になるのである。

\*

\*

十七、夕暮の物想い

## 十七、夕暮の物想い

夕暮の机に向う。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に広い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞う境を、幾曲の廊下に隔てたれば、物の音さえ思索の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。立ち退いたとすればただの所へ立ち退きはせぬ。霞の国か、雲の国かであろう。あるいは雲と水が自然に近付いて、舵をとるさえ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思われる。それでなければ卒然（突然）と春のなかに消え失せて、これまでの四大（万物を構成する地・水・火・空の四元素・転じて人体）が、今頃は目に見えぬ靈氣（靈気）となつて、広い天地の間に、顕微鏡の力を藉るとも、些の（少しの）名残を留めぬようになったのである。あるいは雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き尽したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、葦に凝る甘き露を吸い損ねて、落椿の下に、伏せられながら、世を香ばしく眠っているかも知れぬ。とにかく静かなものだ。空しき家を、空しく抜ける春風の、抜けて行くは迎える人への義理でもない。拒むものへの面当でもない。自から来たりて、自から去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支えたる余の心も、わが住む部屋のごとく空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き抜けるであろう。

### 一、芸術的境地（芸術境）

踏むは地と思えばこそ、裂けはせぬかとの氣遣も起る。戴くは天と知る故に、稲妻の米嚙に震う怖も出来る。人と争わねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免かれぬ。東西のある乾坤（天地）に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事実の恋は齷である。目に見る富は土である。握る名と奪える誉とは、小賢かしき蜂が甘く醸すと見せて、針を棄て去る蜜の如きものである。いわゆる樂は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。ただ詩人と画客なるものあつて、飽までこの待対世界の精華を嚼で、徹骨徹髓の清きを知る。霞を餐し、露を嚙み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼らの樂は物に着するのではない。同化してその物になるのである。その物になり済ました時に、われを樹立すべき余地は茫々たる大地を極めても見出し得ぬ。自在に泥団を放下して（俗悪にまみれた泥の塊のような肉体を思いのままに捨て去つて）、破笠裏に無限の青嵐を盛る。（粗末な破れ傘の中に限りなくさわやかな夏の風を入れるように、俗を離れて、自然に遊ぶ境地になる）。いたずらにこの境遇を拈出す（ひねり出す）のは、敢て市井の胴臭兒（金錢の悪臭をまとつた俗人）を鬼嚇して（鬼の面をかぶつておどし）、好んで高く標置する（自らを高く持する）がためではない。ただ這裏の福音（この境地《芸術境》のよるこぼしい知らせ）を述べて、縁ある衆生を靡く（手まねく）のみである。有体に言えは詩境と言ひ、画界と言ふも皆人々具足の道（人それぞれにそなわつた道）である。春秋に指を折り尽して（歳月を重ね尽くして）、白頭に呻吟

する(うめく)の徒といえども、一生を回顧して、閱歴(経歴)の波動を順次に点検し来るとき、かつては微光の臭骸に洩れて、われを忘れし、拍手の興を喚び起す事が出来よう。(これは「俗悪にまみれた生活の中にも、かつて芸術的感興などが体験された記憶があるだろう。)(そういう体験を喚び起すことが)出来ぬと言わば生甲斐のない男である。されど一事に即し、一物に化すのみが詩人の感興とは言わぬ。ある時は一弁の花に化し、あるときは一双の蝶に化し、あるはウオーヅウオースのごとく、一団の水仙に化して、心を沢風の裏に撩乱せしむる事もあるが、何とも知れぬ四辺の風光にわが心を奪われて、わが心を奪えるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣(光りかがやく大気)に触ると言うだろう。ある人は無絃の琴(自然のかなでる微妙な調べ)を霊台(天文台)に聴くと言うだろう。またある人は知りがたく、解しがたき故に無限の域に儻個して(足が進まずにたたずんで)、縹緲の(広く果てしない)ちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何というも皆その人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぼかんとした心裡の状態は正にこれである。(これは、ひとりぼんやりと物想いに耽っているうちに、やがてまわりの環境(春の空気)の中に深く溶け入っては「没我的状態」になっている「心の状態」であり、それを敢えて言えば、いわば『竹林の七賢』のような「境地」(心の状態)になっているということである。)

余は明かに何事をも考えておらぬ。または慥かに何物をも見ておらぬ。わが意識の舞台に著るしき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも言えぬ。されどもわれは動いている。世の中に動いてもおらぬ、世の外にも動いておらぬ。ただ何となく動いている。花に動くにもおらぬ、鳥に動くにもおらぬ、人間に対して動くにもおらぬ、ただ恍惚と動いている。(これは、ひとりぼんやりと物想いに耽っているうちに、やがてまわりの環境(春の空気)の中にどこまでも深く溶け入っては、ほとんど一体化し、まさに恍惚の「心の状態」になっているということである。)

強いて説明せよと言わるるならば、余が心はただ春と共に動いていると言いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打って、固めて、仙丹(食べると不老不死となり、仙人になれる薬)に練り上げて、それを蓬莱の靈液に溶いて、桃源の日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されてしまったと言いたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であろう。余の同化には、何と同化したか不明であるから、毫も(少しも)刺激がない。刺激がないから、窈然(奥深くかすかで、よく見えない様)として名状しがたい楽がある。風に揉まれて上の空なる波を起す、軽薄で騒々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いている漢洋たる「蒼海の有様」と形容する事が出来る。ただそれほどに活力がないばかりだ。しかしそこにかえて幸福がある。偉大なる活力の発現は、この活力がいつか尽き果てるだろうとの懸念が籠る。常の姿にはそういう心配は伴わぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。淡しとは単に捕え難しという意味で、弱きに過ぎる虞れを含んではおらぬ。冲融(気分などが和らぐ様)とか澹蕩(ゆつたりとしてのどかな様)とかいう詩人の語はもっともこの境を切実に言いつたものだろう。

この境界を画にして見たらどうだろうと考えた。しかし普通の画にはならないに極まっている。われらが俗に画と称するものは、ただ眼前の人事風光をありのままなる姿として、

もしくはこれをわが審美眼に漉過して、絵絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、画の能事は終ったものと考えられている。もしこの上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたままの趣を添えて、画布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕えたる森羅の裡に寓するのがこの種の技術家の主意であるから、彼らの見たる物象観が明瞭に筆端に迸しつておらねば、画を製作したとは言わぬ。己ははしかじかの事を、しかじかに観、しかじかに感じたり、その観方も感じ方も、前人の籬下に立ちて（先人のやり方をそのまま模倣して）、古来の伝説に支配せられたるにあらざ、しかも尤も正しくして、尤も美しくしきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と言うをあえてせぬ。

この二種の製作家に主客深淺の区別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方とも共同一である。されど今、わが描かんとする題目は、さほどに分明なものではない。あらん限りの感興を鼓舞して、これを心外に物色したところで、方円の形、紅緑の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から来たのではない、たとい来たとしても、わが視界に横わる、一定の景物でないから、これが原因だと指を挙げて明らかに人に示す訳に行かぬ。あるものはただ心持ちである。この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう——否この心持ちを如何なる具体を藉りて、人の合点するように髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の画は感じはなくても物さえあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すれば出来る。第三に至つては存するものはただ心持ちだけであるから、画にするには是非ともこの心持ちに恰好なる対象を扱ばなければならぬ。しかるにこの対象は容易に出て来ない。出て来ても容易に纏らない。纏つても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。従つて普通の人から見れば画とは受け取れない。描いた当人も自然界の局部が再現したものとは認めておらん、ただ感興の上した刻下の心持ちを幾分でも伝えて、多少の生命を愉悦しがたきムードに与うれば大成功と心得ている。古来からこの難事業に全然の績を収め得たる画工があるかないか知らぬ。ある点までこの流派に指を染め得たるものを挙げれば、文与可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の画家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多数を占めているから、この種の筆墨に物外の神韻（詩文・絵画などの、神わざのようなすぐれた趣）を伝え得るものはたして幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村らの力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純でかつあまりに変化に乏しい。筆力の点から言えばどういこれらの大家に及ぶ訳はないが、今わが画にして見ようと思う心持ちはもう少し複雑である。複雑であるだけにどうも一枚のなかへは感じが収まりかねる。頬杖をやめて、両腕を机の上に組んで考えたがやはり出て来ない。色、形、調子が出来て、自分の心が、ああここにいたなと、忽ち自己を認識するようにかかなければならない。生き別れをしたわが子を探ね当てるため、六十余州を回回して、寝ても寤めても、忘れる間がなかつたある日、十字街頭にふと邂逅して、稻妻の遮ぎるひまもなきうちに、あつ、ここにいた、と思うようにかかなければならぬ。それがむずかしい。この調子さえ出れば、人が見て何と言っても構わない。画でない罵られても恨みはない。いやしくも色の配合がこの心持ちの一部を代表して、線の曲直がこの気合の幾分を表現して、全体の配置がこの風韻のどれほどかを伝えるならば、形にあらわれたもの

は、牛であれ馬であれ、ないしは牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭われない。厭わないがどうも出来ない。写生帖を机の上へ置いて、両眼が帖のなかへ落ち込むまで、工夫したが、とても物にならない。

鉛筆を置いて考えた。こんな抽象的な興味を画にしようとするのが、そもその間違である。人間にそう変りはないから、多くの人のうちにはきつと自分と同じ感興に触れたものがあつて、この感興を何らの手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすればその手段は何だろう。たちまち音楽の二字がびかりと眼に映った。なるほど音楽はかかる時、かかる必要に逼られて生まれた自然の声である。楽(音楽)は聴くべきもの(聴いておくべきもの)、習うべきもの(習うておくべきもの)であると、始めて気がついたが、不幸にして、その辺の消息はまるで不案内である。(つまり、自分の何とも表現し難い様な「心の感興の心持ち」などを表現する手段として、例えば、文学、音楽、絵画、その他などがあるかと思うが、その中でも、やはり音楽が最も直接的に表現し易いものであり、次に、詩歌、短歌、俳句、散文、そして、絵画(絵)は、自分の「心の微妙な思い」などをそのまま微妙に表現する手段としては、今ひとつのところがあつても知れない。)

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングという男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとしてあせている境界もとうてい物になりそうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、通次に(順を追つて)展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来たり、二が消えて三が生まるがために嬉しいのではない。初から竊然(奥深くかすかで、よく見えない様)として同所に把住する(とらえとめおく)趣で嬉しいのである。すでに同所に把住する(とらえとめおく)以上は、よしこれを普通の言語に翻訳したところで、必ずしも時間的に材料を按排する必要はあるまい。やはり絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来るだろう。ただいかなる景情を詩中に持ち来つて、この曠然として倚托なき有様(広く広漠として、抛り所のない様子)を写すかが問題で、すでにこれを捕え得た以上はレッシングの説に従わんでも詩として成功する訳だ。(これは当然であり)、ホーマーがどうでも、ヴァーヅルがどうでも構わない。もし詩が一種のムードをあらわすに適しているとすれば、このムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを藉らずとも、単純に空間的な絵画上の要件を充たしさえすれば、言語をもって描き得るものと思う。

つまり、人間の「心の中」というものは、時間や空間などに全く縛られていない、そういうまきに超「時空」的なものである。そして、われわれ「人間の心」(或いは「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次元的思想」が平気ででき得るということであり、例えば、過去、現在、未来というまきに「時空」を、あつという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を内に宿していて、その人が「空想や想像」の翼を拡げさえすれば、あつという間にいつでも自由自在に行き来ができるとともに、現に今、主人公の画工(夏目漱石)は、ひとりぼんやりと物想いに耽っているうちに、実に多種多様な(時空を超えた)「空想や妄想」などにふけっている状態になつていたのである。

\*

\*

議論はどうでもよい。ラオコーンなどは大概忘れていたのだから、よく調べたら、こっちが怪しくなるかも知れない。とにかく、画にしそくなつたから、一つ詩に見よう、と写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶって見た。しばらくは、筆の先の尖がった所を、どうにか運動させたいばかりで、毫も（少しも）運動させる訳に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉まで出かかっているのに、出てくれないような気がする。そこで諦めると、出損なつた名は、ついに腹の底へ収まってしまふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さらさらして、箸に手応えがないものだ。そこを辛抱すると、ようやく粘着が出て、攪き滲せる手が少し重くなる。それでも構わず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。しまいには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、争って箸に附着してくる。詩を作るのはまさにこれだ。手掛りのない鉛筆が少しずつ動くようになるのに、勢を得て、かれこれ二、三十分したら、

青春二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴横虛堂。蟪蛄掛不動。

篆煙繞竹梁。

という六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。これなら始めから、画にすればよかつたと思う。なぜ画よりも詩の方が作り易かつたかと思う。ここまで出たら、あとは大した苦もなく出そうだ。しかし画に出来ない情

を、次には咏って見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末どうとう、  
独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。會得一日靜。

正知百年忙。遐懷寄何処。緬邈白雲鄉。

と出来た。もう一返最初から読み直して見ると、ちよつと面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた入つた神境を写したものとすると、索然として（心惹かれるものも乏しく）物足りない。（この「漢詩」全体の意味は、「……春の一日心静かに閑居することが出来て、人生のいたずらに多事なるを知つた。今の貴重な境地を忘れたくないが、このはるかな想いをどこに寄託（預け頼もう）か。それこそ白雲うずまく仙郷をおいて他にはあるまい」という様な意味である。）

ついでだから、もう一首作って見ようかと、鉛筆を握つたまま、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間をちらりと、奇麗な影が通つた。はてな。（本文）

## 二、那美さんの振り袖姿

余が眼を転じて、入口を見たときは、奇麗なものが、既に引き開けた襖の影に半分かくれかけていた。しかもその姿は余が見ぬ前から、動いていたものらしく、はつと思つた間に通り返した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて来た。振袖姿のすなりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行て行く。余は覺えず鉛筆を落して、鼻から吸いかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間（約十畳）の中庭を隔てて、重き空気のなかに蕭寥と（ものさびしく）見えつ、隠れつする。

女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽（側）に引く裾の音さえおのが耳に入らぬ位静かに歩行ている。腰から下にはぱつと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解

からぬ。ただ無地と模様のつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との境のごとき心地である。女はもとより夜と昼との境をあるいている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度行き何度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装をして、この不思議な歩行をつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至ってはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静肅に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨みを訴うる所作ならば何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅を飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛（あざやかで美しい）として、しばらくは冥邈の（暗く遠い）戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むるほどの帯地は金欄か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる（薄暗い）夕べのなかに包まれて、幽蘭の（侘しく静かなる）あなた、遼遠の（遙かに遠い）かしこへ一分毎に消えて去る。（それは）、燦めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に（燦めく星）が陥いる（消え去る）趣である。

太玄の闇（天界の宮門）おのずから開けて、この華やかなる姿を、幽冥の府（黄泉の国のような夜の暗黒世界）に吸い込まんとするとき、余はこう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さざめき暮らしてこそ然るべきこの装の、厭う景色（嫌う様子）もなく、争う様子も見えず、色相（目に見える）世界から薄れて行くのは、ある点において超自然の情景である。刻々と逼る黒き影を、すかして見ると女は肅然として（静かにおごそかに）、焦きもせず、狼狽もせず、同じほどの歩調を以て、同じ所を徘徊しているらしい。身に落ちかかる災を知らぬとすれば無邪気の極である。知って、災と思わぬならば物凄（ものすこ）い。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元のままなる冥漠の裏に収めればこそ、かように間観（もの静かでしとやか）の態度で、有と無の間に逍遙しているのだろう。女のつけた振袖に、紛たる模様の尽きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかしている。（これは「昼と夜の境」「夢と現の境」そして「生と死の境」を行き来しているという様な幻想になっているのである。）

またこう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りに就いて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚（現実）のまま、この世の呼吸を引き取るときに、枕元に病を護るわれらの心はさぞつらいだろう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生甲斐のない本人はもとより、傍に見ている親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。しかしすやすやと寝入る児に死ぬべき何の科がある。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果すと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念仏を唱えたい。死ぬべき条件が具わらぬ先に、死ぬる事実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの間とも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかかった煩惱の綱をむやみに引かるようで苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穏やかに寝かしてくれと思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡から救ってやろうかと思つた。しかし夢のように、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が聴けなくなる。今度とは心を定めているうちに、すう

と苦もなく通ってしまう。なぜ何とも言えぬかと考うる途端に、女はまた通る。こちらに窺う人があって、その人が自分のためにどれほどやきもき思っているか、微塵も気に掛からぬ有様で通る。面倒にも気の毒にも、初手から、余の如きものに、気をかねておらぬ有様で通る。今度は今度はと思うているうちに、こらえかねた、雲の層が、持ち切れぬ雨の糸を、しめやかに落し出して、女の影を、蕭々と封じ了る。(本文)

### 三、夕暮の物想いのまとめ

さて、夕暮の机に向い、物想いに耽る場面となるが、それは、障子も襖もみな開け放つても、今日はひとしお静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。そして、その「物想い」の内容であるが、それをごく簡単に説明をすれば、ほとんどの人たちは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害損得」)などに振りまわされているが、それらは、結局、様々な「悩みや苦しみ」などを伴うものである。なぜなら、「……いわゆる楽は物に着するより起るがゆえに、あらゆる苦しみを含む。ただ詩人とか画家なるものあって、あくまでこの待対世界(現実世界)の精華を嚼んで、徹骨徹髓の清きを知る。(中略)、彼等の楽は物に着するのではない。同化してその物になるのである」とある。

\* \* \*

これは、一般に、「詩境」に入る、「画境」に入る、或いは「物」(例えば「自然」と一体となること)によって、まさに「純粹な喜び」を味わい知るのである。つまり、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害損得」)などではなく、そういうものから離れて、むしろ物事の「真善美」などをどこまでも深く愛し求めているような時こそ、まさに「純粹な喜び」を味わい知ることができ得るのである。それは、学問であれ、芸術であれ、或いは、宗教であれ、その他、何であれ、「欲」を追い求めるところには、いわゆる「純粹な喜び」というものはなく、あるのは、楽があるだけであるが、一方、物事の「真善美」などをどこまでも深く愛し求めているような時こそ、その人の「心の状態」というのは、まさに純粹な「心の状態」になっているものである。それは、独りぼんやりと「物想い」に耽っているような時も、その一つであるということである。

主人公の画工は、ひとりぼんやりと物想いに耽っているうちに、やがてまわりの環境(春の空気)の中に深く溶け入っては「没我的状態」になっている「心の状態」であり、それを敢えて言えば、いわば『竹林の七賢』のような「境地」(心の状態)になっているのである、その「境地」を、何とか表現しようとしているのであるが、例えば、絵で、絵でだめなら、音楽で、音楽でだめなら、詩(漢詩)で何とか表現しようとしているのである。そして、主人公の画工はと言えば、今、まさに「詩境」(漢詩づくり)に深く溶け入っては、それが出来たと「純粹な喜び」を感じている状態であり、もう一返最初から読み直して見ると、ちよつと面白く読まれるが、それでも自分が今しがた入った「神境」を写したものとすると、索然として(心惹かれるものも乏しく)物足りない。ついだから、もう一首作って見ようかと、鉛筆を握ったまま、何の気もなしに、ふと入口の方を見ると、襖を引いて、開け放った幅三尺(約九十センチ)の空間をちらりと、奇麗な影が通った。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて来た。振袖姿のすらりとした

女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行て行く。余は寛えず鉛筆を落して、鼻から吸いかけた息をびたりと留めた。花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間（約十段）の中庭を隔てて、重き空気のなかに蕭寥と（ものさびしく）見えず、隠れつする。女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽（側）に引く裾の音さえおのが耳に入らぬ位静かに歩行ている。腰から下にはぱっと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解からぬ。ただ無地と模様のつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との境の境のとき心地である。女はもとより夜と昼との境をあるいている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度往き何度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装をして、この不思議な歩行をつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至ってはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静粛に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様であり、主人公の「頭の中」（或いは「心の中」）には実に様々な「想いや空想」などが次から次へと思い浮かぶことになるが、それは本文を読んでもらい、長い振り袖を着て、長い廊下を無言で何度ともなく行きつ戻りつしている女性の姿が目に入るが、それは、峠の茶店でお婆さんから、五年前、馬に乗ったお嬢さんの「裾模様の振袖（つまりは『花嫁姿』）」の話聞いて、主人公の画工が、「…さぞ美しかったろう。見にくればよかった」というような話をしたが、お嬢さんは、その話をお婆さんから聞いて、その「…お嬢さんの美しい花嫁姿が見たかったなあ」という要求に、今、いわば「遊び心」で応えているのである。

\*

\*

十八、風呂場

## 十八、風呂場

さて、次は、「風呂場」の場面へと移りたいと思うが、その「本文」は、次のようなものである。「……寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。三疊へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八疊ほどの風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影で敷き詰めた、真ん中を四尺ばかりの深さに堀り抜いて、豆腐屋ほどの湯槽を据える。槽とは言うものややはり石で豊んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んでいるのだろうが、色は純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさえ含んで見るが別段の味も臭いもない。病気にも利くそうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。もとより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。ただ入る度に考え出すのは、白楽天の「……温泉水滑らかにして凝脂を洗う」『長恨歌』の中の、楊貴妃の湯浴の描写の一節で、温泉の湯が玉となって楊貴妃の滑らかなできめ細かな白い肌を滑り落ちるという風情」の句だけである。温泉という名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快な気持になる。またこの気持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてゐる。この理想以外に温泉についての注文はまるでない。

すぼりと浸かると、乳のあたりまで這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の縁を奇麗に越している。春の石は乾くひまなく濡れて、あたたかに、踏む足の、心は穏やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤おすほどのしめやかさであるが、軒のしずくは、ようやく繁く、ぼたり、ぼたりと耳に聞える。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さえあれば、節穴の細きを厭わず洩れ出でんとする景色である（これは床から天井まで隈なく立て籠められた湯気は、隙間さえあれば、たとえ節穴のような細きを厭わず外へ洩れ出ようとしている様子である。）

秋の霧は冷やかに、たなびく靄は長閑に、夕餉炊く、人の煙は青く立って、大いなる空に、わが果敢なき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものの肌を、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。眼に写るもの見えぬほど、濃くまつわりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己れを見出すように、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すともこの（湯）煙りから出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に酔うという言葉はあるが、（湯）煙りに酔うという語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使えぬ、霞には少し強過ぎる。ただこの靄に、春宵（春の宵）の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わせてみる。ふわりふわりと、魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるものなかに、魂まで流していれば、基督のお弟子となったより難有い。なるほどこの調子で考えると、土左衛門は風流である。

スインバーンの何とかいう詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察するとだいぶ美しくなる。何であんな不愉快な所を扱んだものかと今まで不審に思っていたが、あれ

はやはり画になるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで兩岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、きつと画になるに相違ない。しかし流れて行く人の表情が、まるで平和ではほとんど神話か比喩になってしまふ。瘡癩的な苦悶はもとより、全幅の精神をうち壊すが、全然色気のない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じところに存するか疑わしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味をもつて、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。しかし思うような顔はそう容易く心に浮んで来そうもない。

### 一、三味線と子供の頃の思い出

湯のなかに浮いたまま、今度は土左衛門の賛を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろう。

霜が下りたら冷たかる。

土のしたでは暗かろう。

浮かば波の上、

沈まば波の底、

春の水なら苦はなかる。

と口のうちに小声に誦しつつ漫然と浮いていると、どこかで弾く三味線の音が聞える。美術家だのと言われると恐縮するが、実のところ、余がこの楽器における智識はすこぶる怪しいもので二が上がるうが、三が下がるうが、耳には余り影響を受けた試しがない。しかし、静かな春の夜に、雨さえ興を添える、山里の湯壺の中で、魂まで春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのははなはだ嬉しい。遠いから何を唄つて、何を弾いているか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ち付いているところから察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聴かれそうな太棹かとも思う。

小供の時分、門前に万屋という酒屋があつて、そこに御倉さんという娘がいた。この御倉さんが、静かな春の昼過ぎになると、必ず長唄の御浚いをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶島の十坪余りを前に控えて、三本の松が、客間の東側に並んでいる。この松は周り一尺(約三十センチ)もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形つくつていた。小供心にこの松を見ると好い心持になる。松の下に黒くさびた鉄灯籠(鉄の灯籠)が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、分からず屋の頑固爺のようにかく坐っている。余はこの灯籠を見詰めるのが大好きであつた。灯籠の前後には、苔深き地を歩いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、独り匂うて独り楽しんでゐる。余はこの草のなかに、わずかに膝を容るるの席を見出して、じつと、しゃがむのがこの時分の癖であつた。この三本の松の下に、この灯籠を覗めて、この草の香を臭いで、そうして御倉さんの長唄を遠くから聞くのが、当時の日課であつた。

御倉さんはもう赤い手絡の時代(新妻の頃)さえ通り越して、大分と世帯じみた顔を、帳場へ曝してゐるだろう。聾とは折合がいいか知らん。燕は年々帰つて来て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしているか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り

離せない。

三本の松はいまだに好い恰好で残っているかしらん。鉄灯籠（鉄の灯籠）はもう壊れたに相違ない。春の草は、昔、しゃがんだ人を覚えていたのだろうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知ろうはずがない。御倉さんの「……旅の衣は鈴懸の」という、日ごとの声もよも（まさか）聞き覚えがあるとは言うまい。

三味の音が思わぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたり立って、二十年の昔に住む、頑是なき（まだ幼くて物の道理もよく分からない無邪気な）小僧と、成り済ました時、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

## 二、突然、風呂場の戸が開く

誰か来たなど、身を浮かしたまま、視線だけを入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乗せているから、槽に下る段々は、間二丈（約六メートル）を隔てて斜めに余が眼に入る。しかし見上げた余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音のみが聞える。三味線は何時の間にかやんでいた。

やがて階段の上は何物かあらわれた。広い風呂場を照すものは、ただ一つの小さき釣リ洋灯のみであるから、この隔りでは澄切った空気を控えてさえ、確と物色はむずかしい。まして立ち上がる湯気の、濃かなる雨に抑えられて、逃場を失いたる今宵の風呂に、立つを誰とはもとより定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに、照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも声は掛けられぬ。

黒いものが一步を下へ移した。踏む石は天鷲毬のごとく柔らかと見えて、足音を証（証拠）にこれを律すれば（判断すれば）、動かぬと評しても差支ない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は画工だけあって人体の骨格については、存外視覚が鋭敏である。何とも知れぬものの一段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事を覚った。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考える間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。漲ぎり渡る湯煙りの、やわらかな光線を一分子ごとに含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾わす黒髪を雲とながして、あらん限りの背丈を、すらりと伸ばした女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のという感じはことごとく、わが脳裏を去って、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思った。（本文）

## 三、裸婦像について

さて、主人公の画工は、この「場面」では、女性の「裸婦像」についてあれこれ考察することになるが、その本文は、次のようなものである。つまり、「……古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世仏国の画家が命と頼む裸体画を見るたびに、あまりに露骨な肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹が、ありありと見えるので、どことなく気韻（気品の高さ）に乏しい心持が、今までわれを苦しめてならなかった。しかしその折々はただことなく下品だと評するまでで、何故下品であるかが、解らぬ故、われ知らず、答えを得るに煩悶して今日に至ったのだらう。（これが主人公の今までの状況であった）。肉を蔽えば、うつくしきものが隠れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸体画というはただかくさぬ（隠

さない)という卑しさに、技巧を留めておらぬ。衣を奪いたる姿を、そのままに写すだけにては、物足らぬと見えて、飽くまでも裸体を、衣冠の世(衣服を身にもとう世)に押し出そうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸に凡ての権能を附与せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこまでも進んで、ひたすらに、裸体であるぞという感じを強く描出しようとする。技巧がこの極端に達したる時、人は、「その観者を強うる」(これは観る人にこれでもかこれでもかかこれでもかと露骨の裸体を観るように無理やり強いること)を「陋」(見識が狭く、心が卑しい)とする(のである)。うつくしきものを、いやが上に、うつくしくせんと焦せるとき、うつくしきものはかえってその度を減ずるが例である。人事についても「満は損を招く」(これには「二つの意味合い」があり、一つは、物事は満ちる《絶頂》に達すれば、やがては減ずる《衰える》ものであるという意味合いと、もう一つは、おごり高ぶる者は、他人から敬遠されて損をするが、一方、「謙は益を受く」というのは、謙虚にへりくだる者は、他人から尊敬や信頼を得て利益を得るものである)との諺は、これがためである。

放心と無邪気とは余裕を示す。余裕は画において、詩において、もしくは文章において、必須の条件である。近代芸術の一大弊竇(欠陥)は、いわゆる文明の潮流が、いたずらに芸術の士を駆逐して、拘々として(それに拘泥して)随处に齷齪たらしむる(あくせくさせる)にある。裸体画はその好例であろう。都会に芸妓というものがある。色を売って、人に媚びるを商売にしている。彼らは嫖客に対する時、わが容姿のいかに相手の瞳子に映ずるかを顧慮するのほか、何らの表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目録はこの芸妓に似たる裸体美人を以て充滿している。彼らは一秒時も、わが裸体なるを忘るる能わざるのみならず、全身の筋肉をむすつかして、わが裸体なるを観者に示さんと力めている。(つまり、あるがままの自然のままの「裸体像」ではなく、むしろ、これでもかこれでもかにより意図的なより誘惑的な「裸体像」になっている。それが、すなわち、年々に見るサロンの目録は、この芸妓(人に媚びる)に似たる裸体美人を以て充滿している、ということである。)

#### 四、湯煙りに浮かぶ真白き「女の姿」(裸婦像)

さて、本文に戻ると、「……今余が面前に娉婷(美人)と現われたる(女の)姿には、一塵も(少しも)この俗埃の眼に遮ぎるものを帯びておらぬ。(つまり全裸姿である)。常の人の纏える衣装を脱ぎ捨てたる様と言えばすでに人界に墮在する。(それが普通であるが、今、余が面前に娉婷《美人》と現われたる《女の》姿は、それとは違って)、始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起したるがごとく自然である」。(つまり全くの自然体の裸体像である。)

室を埋むる湯煙は、埋めつくしたる後から、絶えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し拡げて、部屋一面の虹霓の世界が濃かに揺れるなかに、朦朧と、黒きかとも思われるほどの髪を暈して、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がって来る。その輪廓を見よ。

頸筋を軽く内輪(内側)に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指と分れるのである。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、また滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢

を後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾く。逆（さか）に受くる膝頭（ひざがしら）のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵（かかと）につく頃、平たき足が、すべての葛藤（かつとう）を、二枚の蹠（あしのうち）に安々と始末する。世の中にこれほど錯雑（さくざつ）した配合はない、これほど統一のある配合もない。これほど自然で、これほど柔らかで、これほど抵抗の少ない、これほど苦にならぬ輪廓（りんかく）は決して見出せぬ」とある。（この場面は、夏目漱石にしては珍らしく「女性の裸体」の細やかな描写になっているかと思う。）

しかもこの姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が眼の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄に化する一種の靈氣（れいふん）（靈氣）のなかに髣髴（ほうふつ）として、十分の美を奥床（おくゆか）しくもほめかしているに過ぎぬ。片鱗（へんりん）を洗墨淋漓（せんぼくりんり）の間に点じて、（これは、水墨画などで龍の絵を描く時に、例えば、龍の姿のすべてを露骨に描くのではなく、見える部分と何かでぼかしている部分とがある様に）、虬竜（きゅうりゅう）の怪（かい）（つまり水に棲むという龍のその怪しげな全体の姿）を、楮毫（ちゆうごう）（筆と紙で描いた絵）のほかに想像せしむるが如く（つまり絵の中では龍の姿のすべてを露骨に描かずに、むしろ見る人に想像させるようにする）、芸術的に観じて申し分のない、空気と、あたたかみと、冥邈（めいぼく）なる（暗くて遠くてはつきりと見えない）調子とを具えている。六々三十六鱗（りりん）（龍のすべてのうろこ）を丁寧（ていねい）に描きたる竜の、滑稽（こつげい）に落つる（滑稽になつてしまふ）が事実ならば、赤裸々（せきらら）の肉を淨洒々（じようしゃ）に（少しも隠すところなく、ありのままの裸の姿を露骨にもろに）、眺めぬ（眺めない）うちに（こそ）、神往（しんおう）の（つまり理想的な）余韻（よゐん）はある（理想的な余韻は残るのである）。余はこの輪廓（りんかく）の眼に落ちた時（つまり白い裸体の幽かな輪廓を見た時）、桂（か）の都（みやこ）を逃れた月界（げつがい）の嫦娥（てんじやう）（天女）が、彩虹（にじ）の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇（ちゆうちよ）する（ためらう）姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、せつかくの嫦娥（てんじやう）（天女）が、あわれ、俗界に墮落（だらく）するよと思う刹那（せつな）に、緑の髪は、波を切る靈龜（れいき）（四霊の一つ）の尾のごとくに風を起して、莽（ぼう）と靡（なび）いた。渦捲（うずま）く煙りを劈（つぎ）いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホホホと鋭（えい）どく笑う女の声（こゑ）が、廊下（らうげ）に響いて、静かなる風呂場を次第（ついで）に向（む）へ遠退（とおい）く。余はがぶりと湯を呑（の）んだまま槽（ふね）の中に突立つ。驚いた波（なみ）が、胸（むね）へあたる。縁（ふち）を越す湯泉（ゆ）の音がさあさあと鳴る。「……つまり、主人公の画工（えうこう）（敢えて「夏目漱石」）は、露骨な「女性の裸体」ではなく、むしろ、湯煙（ゆけむ）りに浮かぶ真白（ましろ）き「女の姿」（裸婦像）にこそ、まさに究極（きうごく）の一つの「美」（つまり「幽美」）を見たということである。」

## 五、「美」（エロス）と「卑猥」（エロ）との違い

さて、この「風呂場の場面」での「最大の問題」は、女性の「裸婦像」を描く場合に、どこまでが「美」（エロス）であり、そして、どこからが「卑猥」（エロ）になってしまふのか？ その「境界線」は、一体、どこにあるのかという問題になるかと思う。

例えば、有名なボツティチェリの『ヴィーナスの誕生』という作品は、もちろん、一糸纏（まと）わぬ「全裸姿」であるが、しかし、だからと言って、何から何まですべて「まる見えの状態」ということではない。絵を観てもらえればすぐにも分かるが、「……右手は胸のところに、そして、左手と長い髪（かみ）の先端（せんぽん）部分は、下半身部分」にあてられて、その部分だけは隠されているのである。それでは、一体、何のために隠すのだろうか？ それは、画家

の「知性や理性や感性」などの働きであり、そこに「抑制が働いている」のである。それでは、何のために「抑制する」のだろうか？ それは、何から何まですべて「まる見えの状態」になってしまうと、それは、いわゆる「美」（エロス）であるよりは、むしろ「卑猥」（エロ）になってしまう危険性があるからであり、また、世阿弥に有名な「秘すれば花」という言葉があるように、敢えて「隠すこと」によってこそ、かえって、観る人たちの「想像力」（或いは「妄想力」）などをより掻き立てることもなるからである。

例えば、はち切れそうな若い女性の肉体を、ぎりぎりの水着で身を纏う「水着姿」のほうか、時には、ただ単に何も身に付けていない「全裸姿」よりは、遙かに「魅力的に（美的に）見える」ことは、いくらもあり得ることであり、それは、まさに観る人たちの「想像力」（或いは「妄想力」）などをより掻き立てることもなるからである。——それでは、いったい「美」（エロス）と「卑猥」（エロ）との、「境界線」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、われわれ人間の「知性や理性や感性」などでそれなりに抑制されていけば、それは、いわば「美」（エロス）になりやすいが、一方、われわれ人間の「知性や理性や感性」などの抑制がどんどん弱まってしまい、ついには「性欲」そのもの、を呼び起こすようなものに次第になってしまうと、それは、いわば「卑猥」（エロ）になってしまう場合が多いのではないかと思う。それでは、なぜ「性欲」を呼び起こすと、「卑猥」（エロ）になってしまふのだろうか？ それは、「性欲」そのものは、本来、動物的な「本能」に過ぎないからである。それゆえ、人間の「知性や理性や感性」などから見ると、どうしても「卑猥」（エロ）に見えてしまうということである。

## 六、風呂場の場面のまとめ

さて、この「風呂場」の場面をごく簡単に要約してみると、次のようになるかと思う。それは、「……寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳ほどの風呂場へ出る。下は御影で敷き詰めた、真ん中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋ほどの湯槽を据える。湯の色は純透明だから、入り心地がよい。口に含んでも味も臭いもない。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めている。（中略）、余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わせてみる。ふわりふわりと、魂がくらのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。……」

突然、風呂場の戸がさらりと開いた。やがて階段の上に何者かあらわれた。広い風呂場を照すものは、ただ一つの小さき釣り洋燈のみであるから、まして立ち上がる湯気により、男とも女とも判別し難いが、黒いものが一步を下へ移した時、輪郭が少しく浮かび上がり、余は女と二人、この風呂場の中にあることを覚った。注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考えるあいだ、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。漲り渡る湯煙りのなか、漂わす黒髪の雲とながして、あらんかぎりの背丈をすらりと伸ばした女の姿を見た時は、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思った。

その真白き女の姿（裸婦）の持つ、これほど自然で、これほど柔らかで、これほど抵抗の少ないこれほど苦にならぬ輪郭は、決して見出せぬ。しかもその姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が目の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄に化する一種の靈氣

のなかに髻ほうふつとして、十分の美を奥床おくゆかしくもほのめかしているに過ぎぬ。芸術的に観じて申し分のない、つまり、湯煙けむりに浮かぶ真白き「女の姿」(裸婦像)に、まさに究極の「美」(つまり「幽美」)を見たということである。

\*

\*

十九、茶の招き

## 十九、茶の招き

御茶の御馳走になる。相客は僧一人、観海寺の和尚で名は大徹と言うそうだ。俗一人、二十四、五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き当って、左へ折れた行き留りにある。大きさは六畳もあるう。大きな紫檀の机を真中に据えてあるから、思ったより狭苦しい。それへとこの席を見ると、布団の代りに花毯（花模様などを織り出した毛氈）が敷いてある。無論支那製だろう。真中を六角に仕切って、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周囲は鉄色に近い藍で、四隅に唐草の模様を飾った茶の輪を染め抜いてある。支那ではこれを座敷に用いたものか疑わしいが、こうやって布団に代用して見るとすこぶる面白い。印度の更紗とか、ペルシヤの壁掛とか号するものが、ちよつと間が抜けているところに価値があるごとく、この花毯もこせつかないところに趣がある。花毯ばかりではない、凡て支那の器具は皆抜けている。どうしても馬鹿で気の長い人種の発明したものとはか取れない。見ているうちに、ぼおつとすると尊といふ。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、そうしてどこまでも娑婆気がとれない。まずこう考えながら席に着く。若い男は余とやらんで、花毯の半を占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐った。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の髻の下に敷かれている。老人は頭の毛を悉く抜いて、頬と顎へ移植したように、白い髯をむしやむしやと生やして、茶托へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。「……今日は久しぶりで、うちへお客が見えたから、お茶を上げようと思つて……」と坊さんの方を向くと、「……いや、お使いをありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰をしたから、今日ぐらい来てみようかと思つとつたところじゃ」と言う。この僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩したような容貌を有している。老人とは平常からの昵懇と見える。（本文）

さて、主人公の画工は、お茶の御馳走になる。相客は僧一人、観海寺の和尚で名は大徹と言うそうだ。俗一人、二十四、五の若い男である。それに、主人公の画工ということになるのだろう。老人（那美さんの父親）の部屋は、六畳ほどの広さであった。「……今日は久しぶりで、うちへお客が見えたから、お茶を上げようと思つて……」と坊さんの方を向くと、「……いや、お使いをありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰をしたから、今日ぐらい来てみようかと思つとつたところじゃ」と言う。この僧は、六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩したような容貌をしている。老人とは平常からの昵懇と見える。そして、この場面での話の「内容」であるが、まず、茶碗の話から、青磁の菓子皿、また、目が九つもある碗の話、書や絵画の話、そして、最後は、若い男、それは、老人の甥・久一さんであるが、彼は、これから満州へと出兵するという話で終わっている。

### 一、茶碗

では、続きの本文であるが、「……この方がお客さんかな」と聞くので、老人は首肯ながら、朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、二、三滴ずつ、茶碗の底へしたたらす。清い香りがかすかに鼻を襲う気分がした。「……こんな田舎に一人ではお淋しかる」

と和尚はすぐ余に話しかけた。「……はああ」と何とも蚊とも要領を得ぬ返事をする。淋しいと言えば、偽りである。淋しからずと言えば、長い説明が入る。「……なんの、和尚さん。このかたは画を書かれるために来られたのじゃから、お忙がしいくらいじゃ」、「……ああ左様か、それは結構だ。やはり南宗派かな」、「いいえ」と今度は答えた。西洋画だなどと言つても、この和尚にはわかるまい。「……いや、例の西洋画じゃ」と老人は、主人役に、また半分引き受けてくれる。「……ははあ、洋画か。すると、あの久一さんのやられるようなものかな。あれは、わしこの間始めて見たが、随分奇麗にかけたのう」、「……いえ、詰らんものです」と若い男がこの時ようやく口を開いた。「……お前なんぞ和尚さんに見ていただいたか」と老人が若い男に聞く。言葉から言うても、様子から言うても、どうも親類らしい。「……なあに、見ていただいたんじやないですが、鏡が池で写生しているところを和尚さんに見つかったのです」、「……ふん、そうか——さあお茶が注いだから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三、四滴に過ぎぬが、茶碗はさぶる大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかかったところか、ちよつと見当のつかないものが、べたに描いてある。「……李兵衛です」と老人が簡単に説明した。「……これは面白い」と余も簡単に賞めた。「……李兵衛はどうも偽物が多くて、——その糸底を見て御覧なさい。銘があるから」と言う。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かそうに写っている。首を曲げて、覗き込むと、李の字が小さく見える。銘は觀賞の上において、さのみ大切のものとは思われないが、好事者はよほどこれが気にかかるそうだ。茶碗を下へ置かないで、そのまま口へつけた。濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へしずくずつ落して味つて見るのは閑人適意の韻事（暇な人が気ままにする風流な事）である。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違だ。舌頭へぼたりと載せて、清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液はほとんどない。ただ馥郁たる匂いが食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用いるは卑しい。水はあまりに軽い。玉露に至つては濃かなる事、淡水の境を脱して、顎を疲らすほどの硬さを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴うるものあらば、眠らぬも、茶を用いよと勧めたい。

\*

ところで、ここに出て来る「李兵衛」というのは、江戸後期の陶芸家であった「青木木米」という人であり、この人は、陶工としては煎茶器を主に制作し、白磁、青磁、赤絵、染付などその作品は幅広いとある。中国古陶磁への傾倒から、中国物の写しに独自の世界を開き、頼山陽とも交わり、書画もよくしたとある。（生没は「明和四年〜天保四年」（一七六七年〜一八三三年）で、六十七才没とある。

## 二、菓子皿と那美さんの話

老人はいつの間にかやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かくまで薄く、かくまで規則正しく、削りぬいた匠人の手際は驚ろくべきものと思う。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだまま、逃がれ出さぬ路を失ったような感じである。中には何も盛らぬがいい。「……お客さんが、青磁を賞められたから、今日はちとばかり見せようと思うて、出して置きました」、「……どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。

あれは、わしも好きじゃ。時にあなた、西洋画では襖などはかけんものかな。かけるなら一つ頼みたいがな」と言うのであった。

かいてくれなら、かかぬ事もないが、この和尚の気に入るか入らぬかわからない。せつかく骨を折つて、西洋画は駄目だと言われては、骨の折栄がない。「……襖には向かないでしょう」、「……向かんかな。そうさな、この間の久一さんの画のようじゃ、少し派手過ぎるかも知れん」、「……私のは駄目です。あれはまるでいたずらです」と若い男はしきりに、恥かしがつて謙遜する。「……その何とかいう池はどこにあるんですか」と余は若い男に念のため尋ねて置く。「……ちよつと観海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。——なあとに学校にいる時分、習ったから、退屈紛れにやつて見ただけです」、「……観海寺と言うと……」、「……観海寺と言うと、わしのいる所じゃ。いい所じゃ、海を一目に見下しての——まあ逗留中にちよつと来て御覧。なに、ここからはつい五、六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるじゃろうが」、「……いつかお邪魔に上つてもいいですか」、「……ああいいとも、いつでもいる。ここのお嬢さんもよう来られる。——お嬢さんと言えば、今日はお那美さんが見えんようだが——どうかされたかな、隠居さん」、「……どこぞへ出ましたかな、久一、お前の方へ行きはせんかな」、「……いいや、見えません」、「……また独り散歩かな、ハハハハ。お那美さんはなかなか足が強い。この間法用で礪並まで行つたら、姿見橋の所で——どうも、善く似と思つたら、お那美さんよ。尻を端折て、草履を穿いて、和尚さん、何をぐずぐずどこへ行きなさんと、いきなり驚ろかされたて、ハハハハ。お前は、そんな形姿で地体どこへ行つたのぞいと聴くと、今芹摘みに行つた戻りじゃ、和尚さん少しやろうかと言うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んで、ハハハハハハ」、「どうも、……」と老人は苦笑いをしたが、急に立つて、「……実はこれを御覧に入れるつもりで」と話をまた道具の方へそらした。

### 三、硯と書

老人が紫檀の書架から、恭しく取り下した紋緞子の古い袋は、何だか重そうなものである。「……和尚さん、あなたには、お目に懸けた事があつたかな」、「……なんじゃ、一体」、「……硯よ」、「……へえ、どんな硯かい」、「……山陽の愛蔵したという……」、「……いいえ、そりやまだ見ん」、「……春水の替え蓋がついて……」、「……そりや、まだのようだ。どれどれ」と、老人は大事そうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。「……いい色合じやのう。端溪かい」、「……端溪で鶺鴒眼が九つある」、「……九つ？」と和尚大いに感じた様子である。「……これが春水の替え蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。

和尚は、「……なるほど。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手じゃて」、「……やはり杏坪の方がいいかな」、「……山陽が一番まずいようだ。どうも才子肌で俗気があつて、いつこう面白くない」、「……ハハハハ。和尚さんは、山陽が嫌いだから、今日は山陽の幅を懸け替えて置いた」、「……ほんに」と和尚さんは後ろを振り向く。床は平鏡のようにふき込んで、鍔気を吹いた古銅瓶には、木蘭を二尺の高さに、活けてある。軸は底光りのある古錦欄に、装幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついているから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく調

和して見える。あの錦欄も織りたては、あれほどのゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて、金糸が沈んで、華麗なところが滅り込んで、渋いところがせり出して、あんないい調子になつたのだと思う。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立って、両方に突張っている、手前に例の木蘭がふわりと浮き出されているほかは、床全体の趣きは落ちつき過ぎてむしろ陰気である。

和尚は、「……徂徠かな」と、首を向けたまま言う。「……徂徠もあまりお好きでないかも知れんが、山陽よりは善かろうと思つて」、「……それは徂徠の方が遙かにいい。享保頃の学者の字はまずくても、どこぞに品がある」、「……広沢をして日本の能書ならしめば、われはすなわち漢人の拙なるものと言つたのは、徂徠だつたかな、和尚さん」、「……わしは知らん。そう威張るほどの字でもないで、ワハハハハ」、「……時に和尚さんは、誰を習われたのかな」、「……わしか。禅坊主は本も読まず、手習いもせんから、のう」、「……しかし、誰ぞ習われたらう」、「……若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりじゃ。それでも人に頼まれればいつでも書きます。ワハハハハ。時にその端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。(徂徠は「義士の切腹を主張した人でもある。)

#### 四、硯 (眼が九つある)

とうとう緞子の袋を取り除ける。一座の視線はことごとく硯の上落ちる。厚さは殆ど二寸(約六セ)に近いから、通例のもの倍はある。四寸に六寸の幅も長さもまず並と言つてよろしい。蓋には、鱗のかたに研ぎをかけた松の皮をそのまま用いて、上には朱漆で、わからぬ書体が二字ばかり書いてある。「……この蓋が」と老人が言う。「……この蓋が、ただの蓋ではないので、御覧の通り、松の皮には相違ないが……」と言つたのであつた。——老人の眼は余の方を見ている。しかし松の皮の蓋にいかなる因縁があるうと、画工として余はあまり感服は出来んから、「……松の蓋は少し俗ですな」と言つた。老人はまあと言わぬばかりに手を挙げて、「……ただ松の蓋と言つばかりでは、俗でもあるが、これはその何ですよ。山陽が広島におつた時に庭に生えていた松の皮を剥いで山陽が手ず(みず)から製したのですよ」と言うのであつた。

なるほど山陽は俗な男だと思つたから、「……どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れそうなものですな。わざとこの鱗のかたなどをびかびか研ぎ出さなくつても、よさそうに思われますが」と遠慮のないところを言つて退けた。「……ワハハハハ。そうよ、この蓋はあまり安っぽいようだな」と和尚はたちまち余に賛成した。若い男は気の毒そうに、老人(那美さんの父親)の顔を見る。老人(那美さんの父親)は少々不機嫌の体に蓋を払いのけた。下からいよいよ「硯」が正体あらわす。

もしこの硯について人の眼を時つべき特異の点があるとすれば、その表面にあらわれたる匠人の刻(彫刻)である。真中に袂時計ほどな丸い肉が、縁とすれすれの高さに彫り残されて、これを蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走ると見れば、先にはおのおの「鴈眼」を抱えている。残る一個は背の真中に「黄な汁」をしたたらした如く煮染で見える。(つまり硯に「蜘蛛の絵柄」が彫り残されていて、それは中央の背中に大きめの一つの鴈眼があり、その中央から四方に向つて、八本の足の先には各々一つづつ鴈眼が付いている)、(その)背と足と縁を残して余る部分は殆ど

「一寸」(約三センチ) 余の深さに掘り下げてある。墨を湛える所は、よもやこの塹壕の底ではあるまい。たとい一合の水を注ぐともこの深さを充たすには足らぬ。思うに水盂(水入れ)の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨に磨り去るのだから。それでなければ、名は硯でも、その実は純然たる文房用の裝飾品に過ぎぬ。

老人は涎の出そうな口を言う。「……この肌合と、この眼を見て下さい」、なるほど見れば見るほどいい色だ。寒く潤沢を帯びたる肌の上に、はっと、一息懸けたなら、直に凝って、一朵の雲を起すだろうと思われる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と言わんより、眼と地の相交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、ほとんど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると「紫色の蒸羊羹の奥に、隠元豆を、透いて見えるほどの深さに嵌め込んだようなもの」である。眼と言えば一個二個でも大変に珍重される。九個と言ったら、ほとんど類はあるまい。しかもその九個が整然と距離に按排されて、あたかも人造のねりものと見違えらるるに至ってはもとより天下の逸品をもつて許さざるを得ない。「……なるほど結構です。観て心持がいいばかりじゃありません。こうして触つても愉快です」と言いながら、余は隣りの若い男に硯を渡した。「……久一に、そんなものが解るかい」と老人が笑いながら聞いて見る。

## 五、甥の久一さん

さて、「……久一に、そんなものが解るかい」と老人が笑いながら聞いて見る。久一君は、少々自棄の気味で、「……分りやしません」と打ち遣ったように言い放ったが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めていては、勿体ないと気が付いたものか、また取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻わした後、とうとうこれを恭しく禪師に返却した。禪師はとくと掌の上で見済ました末、それでは飽き足らぬと考えたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の背へこすりつけて、光沢の出た所をしきりに賞翫している。「……隠居さん、どうもこの色が実に善いな。使った事があるかの」、「……いいや、滅多には使いたくないから、まだ買ったなりじゃ」、「……そうじゃろ。こないなのは支那でも珍らしくろうな、隠居さん」、「……左様」と答えるのであった。

すると、「……わしも一つ欲しいものじゃ。何なら久一さんに頼もうか。どうか、買うて来ておくれかな」、「……へへへ。硯を見つけないうちに、死んでしまえうです」、「……本当に硯どころではないな。時にいつお立ちか」、「……二、三日うちに立ちます」、「……隠居さん。吉田まで送っておやり」、「……普段なら、年は取つとるし、まあ見合すところじゃが、ことによると、もう逢えんかも知れんから、送つてやろうと思つております」、「……御伯父さんは送つてくれんでもいいです」と言うのであった。

若い男はこの老人の甥と見える。なるほどどこか似ている。「……なあに、送つて貰うがいい。川船で行けば訳はない。なあ隠居さん」、「……はい、山越では難義だが、廻り路でも船なら……」と言うと、若い男は今度は別に辞退もしない。ただ黙っている。「……支那の方へおいですか」と余はちよつと聞いて見た。「……ええ」と、ええの二字では少し物足らなかつたが、その上掘つて聞く必要もないから控えた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を変えている。「……なあに、あなた。やはり今度の戦争(日露戦争)で……これが元志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」と言うのであった。

老人は当人に代って、満洲の野に日ならず（近いうちに）出征すべきこの青年の運命を余に語った。この夢のような詩のような春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めていたのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古るしたる孤村にまで逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、この青年の動脈から迸る時が来るかも知れない。この青年の腰に吊る長き剣の先から煙りとなつて吹くかも知れない。しかしその青年は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工の隣りに坐っている。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臓の鼓動さえ聞き得るほど近くに坐っている。その鼓動のうちには、百里の平野を捲く（動き廻る）高き潮が今すでに響いているかも知れぬ。運命は卒然（突然）としてこの二人を一堂のうちに会したるのみにて、その他には何事をも語らぬ。

\*

\*

これは、一方は、これから満州に行つて、戦場で血を流して死ぬかも知れないという一人の青年と、もう一方は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工と、本来ならば出会うはずもない二人が、運命は突然としてこの二人を一堂のうちに会したが、しかし、二人が何かを語り合うべき何事もないのである。

\*

\*

二十、茶の招きの後<sup>あと</sup>

二十、茶の招きの後

そして、主人公が部屋に戻ったあと、「……御勉強ですか」と、那美さんが座敷に這入って来る。この「場面」では、かなり長い「二人の会話」が続くことになるが、それは、部屋に帰った余は、三脚几に縛り付けた書物の一冊を抽いて読んでいた。「……御這入りなさい。ちつとも構いません」と言うと、女は遠慮する景色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいい頸の色が、あざやかに引き出ている。女が余の前に坐った時、この頸とこの半襟の対照が第一番に眼についた。

一、開いた所をいい加減に読む

那美さんは、「……西洋の本ですか、むずかしい事が書いてあるでしょうね」、「なあに」、「……じゃ何が書いてあるんです」、「……そうですね。実は私にもよく分らないんです」、「……ホホホホ。それで御勉強なの」、「……勉強じゃありません。ただ机の上へこう開けて、開いた所をいい加減に読んでるんです」、「……それで面白いですか」、「……それが面白いんです」、「なぜ?」、「……なぜって、小説なんか、そうして読む方が面白いです」、「……よっぽど変っていらっしゃるのね」、「……ええ、ちつと変ってます」、「……初から読んじゃ、どうして悪いでしょう」、「……初から読まなければならぬ」とすると、しまいまで読まなければならぬ訳になりましょう、「……妙な理窟だ事。しまいまで読んだっていいじゃありませんか」、「……無論悪くはありませんよ。筋を読む気なら、私だってそうします」、「……筋を読まなければ何を讀むんです。筋のほかに何か読むものがありますか」と聞くのであった。

余は、やはり女だなと思つた。多少試験してやる気になる。「……あなたは小説が好きですか」、「……私が?」と句を切つた女は、あとから「そうですね」と判然しない返事をした。あまり好きでもなさそうだ。「……好きだか、嫌いだか自分にも解らないんじゃないですか」、「……小説なんか読んだって、読まなくなつたって……」と眼中にはまるで小説の存在を認めていない。「……それじゃ、初から読んだって、しまいから読んだって、いい加減な所をいい加減に読んだって、いい訳じゃありませんか。あなたのようにそう不思議がらないでもいいでしょう」、「……だつて、あなたと私とは違いますもの」、「……どこが?」と余は女の眼の中を見詰めた。試験をするのはここだと思つたが、女の眸は少しも動かない。「……ホホホホ解りませんか」、「……しかし若いうちは随分御読みなすつたろう」、余は一本道で押し合うのをやめにして、ちよつと裏へ廻つた。

すると、「……今でも若いつもりですよ。可哀想に」と、放した鷹はまたそれかかる。すこしも油断がならん。「……そんな事が男の前で言えれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。「……そういうあなたも随分の御年じゃあ、ありませんか。そんなに年をとつても、やつぱり、惚れたの、腫れたの、にきびが出来たのってえ事が面白いんですか」、「……ええ、面白いんです、死ぬまで面白いです」、「……おやそう。それだから画工なんぞになれるんですね」、「……全くです。画工だから、小説なんか初からしまいまで読む必要はないんです。けれども、どこを讀んでも面白いのです。あなたと話をするのも面白い。ここへ逗留しているうちは毎日話をしたいくらいです。何ならあなたに惚

れ込んでもいい。そうなるとなお面白い。しかしいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初からしまいまで読む必要があるんです」、「……すると不人情な惚れ方をするのが画工なんです」と言う。

主人公は、「……不人情じゃありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤を引くように、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」、「……なるほど面白そうね。じゃ、今あなたを読んでいらつしやる所を、少し話してちょうだい。どんな面白い事が出てくるか伺いたいから」、「……話しちゃ駄目です。画だつて話にしちや一文の価値もなくなるじゃありませんか」、「……ホホホそれじゃ読んで下さい」、「……英語ですか」、「……いいえ日本語で」、「……英語を日本語で読むのはつらいな」、「……いいじゃありませんか、非人情で」、「これも一興だろうと思つたから、余は女の乞いに応じて、例の書物をぼつりぼつりと日本語で読み出した。もし世界に非人情な読み方があるとすれば、まさにこれである。聴く女ももとより非人情で聴いている。(本文以下省略)

\*

\*

さて、引用の「本文」のなかで、主人公の「画工」(敢えて「夏目漱石」)は、ことさらに、「……本を開いて、開いたところをたぐい加減に読むんです」ということを強調している。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それこそは、まさに非人情的な「読み方」であり、それは、前述の、いわゆる「第三者の地位から見ると」ということであり、登場人物(或いは「筋」)の中に同化していくのではなく、むしろ「……一歩身を引いて、全体をながめる」という「見方」(或いは「読み方」)であり、そのような「見方」(或いは「読み方」)によつてこそ、「内容」を極めて客観的に「観察」(分析)することが冷静にでき得るとともに、もう一つは、物事の「本質」を直観的にとらえたり、また、「文章の美しさ」などを感じたりすることも出来るようになるのである。

また、主人公は、「……不人情じゃありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです」とある。まず、「不人情」というのは、「人情が無い」ということであり、これでは、まさに「薄情」(人でなし)になつてしまふ。そうではなく、夏目漱石の「非人情」というのは、次のようなものである。

\*

\*

つまり、「……第三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い、小説も見て面白い」とある。これは、例えば、プロ野球を観る場合、どちらか一方を熱心に応援すれば、どうしても実に様々な「喜怒哀楽」の感情に自分自身振りまわされてしまふだろう。それゆえ、第三者の地位に立つてこそ、初めて、そういう実に様々な「喜怒哀楽」の感情などに自分自身振りまわされずに、その野球の「内容」を極めて客観的に「観察(分析)」することが冷静にでき得るようになるのである。また、芝居を観る時も、小説を読む時も、登場人物の誰かに「自分を同化させる」のではなく、むしろ「第三者の地位」(それは「一歩身を引いて、全体をながめるような立場」)に立つてこそ、芝居も小説も、その「内容」を極めて客観的に「観察(分析)」することが冷静にでき得るようになるのである。そして、野球も芝居も小説も、その他、何であれ、この世(俗世)の実に様々な「利害損得」の感情などが絡んで来れば来るほど気楽に楽しめなくなるものである。これは、当たり前のことであり、例えば、芝居に関わっている人たちは、お客は来てくれるだろうか、うまく演

技ができるだろうか、評判はどうだろうか、収益(或いは利益)は出るだろうか、その他、実に様々なことで悩むことになるだろう。それもこれもすべて「利害損得」が絡んでいからである。一方、芝居を観ている人たちは、そういう「利害損得」からは完全に開放されて、まさに気楽に芝居を楽しむことができるとともに、登場人物の誰かに「自分を同化させる」のではなく、むしろ「第三者の地位」(それは「一身身を引いて、全体をなごめるような立場」)に立ってこそ、その「内容」を極めて客観的に「観察(分析)」することが冷静にでき得るようになるのである。

## 二、突然、地震が起こる

さて、二人がそうしている時に、突然、「……轟と音がして山の樹がごとごとく鳴る。思わず顔を見合わず途端に、机の上の一輪挿に活けた椿がふらふらと揺れる。『地震!』と小声で叫んだ女は、膝を崩して余の机に寄りかかる。お互いの身軀がすれすれに動く。キキーと鋭い羽搏をして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。『雉子が』と余は窓の外を見て言う。『どこに』と女は、崩したからだを擦寄せる。余の顔と女の顔が触れぬばかりに近づく。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさわった。『非人情ですよ』と女はたちまち座住居を正しながら屹と言う。『むろん』と言下に余は答えた」とある。

これは、非常に面白い「場面」であり、つまり、われわれ人間というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうものである。それが、まさに「人情」であり、一方、そういう「人情」に振りまわされないのが、まさに「非人情」ということである。すなわち、「非人情」というのは、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされない、まさに「純粋な眼」(或いは「客観的な眼」)で対象を見るということであり、それは、小説でも、芝居でも、野球でも、自然でも、その他、何であれ、いわゆる「純粋な眼」(或いは「客観的な眼」)で見ることによってこそ、まさに人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に観て取ることができ得るようになるということである。

さて、「……岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く揺れている。地盤の響きに、満泓(水が深々とした様)の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、砕けた部分はどこにもない。円満に動くという語があるとすれば、こんな場合に用いられるのだろう。落ち付いて影をひたしていた山桜が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がったり、くねったりする。しかしどう変化してもやはり明らかに桜の姿を保っているところが非常に面白い。……こいつは愉快だ。奇麗で、変化があつて。こういう風に動かなくっちゃ面白くない」、人間もそういう風にさえ動いていけば、いくら動いても大丈夫ですね」、「……非人情でなくっちゃ、こうは動けませんよ」、「ホホホホ大変非人情がお好きだこと」、「……あなただつて嫌いな方じゃありませんまい。昨日の振袖なんか……」と言いかけると、「何か御褒美をちょうだい」と女は急に甘えるように言った。「……なぜです」と聞くと、「見たいとおっしゃったから、わざわざ見せて上げたんじゃないありませんか」、「……わたしがですか」、「山越をなさった画の先生が、茶店の婆さ

んにわざわざ御頼みになったそうで御座います」と言った。

余は何と答えてよいやらちよつと挨拶が出なかつた。女はすかさず、「……そんな忘れっぽい人に、いくら実をつくしても駄目ですわねえ」と嘲けるごとく、恨むがごとく、また真向から切りつけるがごとく二の矢をついだ。だんだん旗色がわるくなるが、どこで盛り返したのか、いったん機先を制せられると、なかなか隙を見出しにくい。

そこで、「……じゃ昨夕の風呂場も、全く御親切からなんですわね」と際どい所で漸く立て直す。女は黙っている。画工は、「……どうも済みません。お礼に何を上げましょう」と出来るだけ先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかつた。女は何喰わぬ顔で大徹和尚の額を眺めている。やがて、「……竹影松階塵不動」(これは「禪者の無心の行為は心中に何の執着も残さない」と、口のうちで静かに読み了って、また余の方へ向き直つたが、急に思い出したように、「何ですつて」と、わざと大きな声で聞いた。その手は喰わない。「……その坊主にさつき逢いましたよ」と地震に揺れた池の水のように円満な動き方をして見せる。「……観海寺の和尚ですか。肥つてるでしょう」、「……西洋画で唐紙をかいてくれて言いましたよ。禪坊さんなんてものは随分訳のわからない事を言いますね」、「それだから、あんなに肥れるんでしょう」、「……それから、もう一人若い人に逢いましたよ。……」、「久一でしょう」、「……ええ久一君です」、「よく御存じですこと」、「……なに久一君だけ知ってるんです。その外には何にも知りやしません。口を聞くのが嫌いな人ですね」、「なに、遠慮しているんです。まだ小供ですから……」、「……小供つて、あなたと同じくらいじゃありませんか」、「ホホホホそうですか。あれは私の徒弟ですが、今度戦地へ行くので、暇乞に来たのです」、「……ここに留まつて、いるんですか」、「いいえ、兄の家におります」、「……じゃ、わざわざお茶を飲みに来たわけですね」、「お茶より御白湯の方が好きなんですよ。父がよせばいいのに、呼ぶものですから。麻痺が切れて困つたでしょう。私がいれば中途から帰してやつたんですが……」、「……あなたはどこへ入らしたんです。和尚が聞いていましたぜ、また一人散歩かつて、「ええ鏡の池の方を廻つて来ました」、「……その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」、「行つて御覧なさい」、「……画にかくに好い所ですか」、「身を投げるに好い所です」、「……身はまだなかなか投げないつもりです」、「私は近々投げるかも知れません」と、あまりに女としては思い切つた冗談だから、余はふと顔を上げた。女は存外たしかである。「……私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いてるところじゃありません——やすやすと往生して浮いているところを——綺麗な画にかいて下さい」、「え?」、「……驚ろいた、驚ろいたでしよう」、女はすらりと立ち上る。三步にして尽くる部屋の入口を出る時、顧みてにこりと笑つた。茫然たる事多時、とある。

\*

\*

さて、地震後、「……岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く揺れているが、表面が不規則に曲線を描くのみで、砕けた部分はどこにもない。円満に動いている。また、水に影を落としている山桜が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がつたり、くねつたりするが、どう変化してもやはり明らかに桜の姿を保っている」とある。これは、自然のままに動いては自然のままに通り過ぎていく。そこには恣意的意図的(利害損得)などは全くなく、それゆえ、自分を見失うこともないのである。そのような「動き方」が素晴らしいと言っているのである。つまり、「……こいつは愉快だ。奇麗で、変化があつ

て。こういう風に動かなくっちゃ面白くない」、「……人間もそういう風にさえ動いていれば、いくら動いても大丈夫ですわね」、「……非人情でなくっちゃ、こうは動けませんよ」（これは、この世《俗世》の実に様々な「欲望や感情」《或いは「利害損得」》などに振りまわされていたのでは、こうは動けませんよ。「……ホホホホ大変非人情がお好きだこと」となるのである。

その後、二人の話の内容は、昨日、振袖を着て何度も行き来していたことや、また、昨夕、裸で風呂場に入って来たことなど、主人公の画工は、彼女を自然、天然に芝居（言動）をしている役者（下心は無い）と見ているのである。そして、今度戦地に赴くので、暇乞に来た久一さんのこと、最後は、お茶に招かれていた時、「……あなたは、どこへ入らしてたんですか」と訊ねると、「……鏡の池の方を廻って来ました」と答える。そこで、画工は、「……画にかくに好い所ですか」と聞くと、「……身を投げるに好い所です」と応え、「私は近々投げるかもしれません」と言い、「……私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いているところじゃないんです——やすやすと往生して浮いているところを——綺麗な画にかいてください」と頼むのであった。

\*

\*

二二、鏡が池

## 二一、鏡が池

さて、主人公の画工は、鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、途は二股に岐れて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生い重なって、殆んど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まって、どこで終わるか一応めぐった上でないと見当がつかぬ。歩いて見ると存外狭く、三丁（約三百二十七メートル）ほどよりあるまい。ただ非常に不規則な形で、所々に岩が自然のまま水際に横わっている。縁の高さも、池の形の名城しがたいように、波を打って、色々な起伏を不規則に連ねている。

池をめぐりては雑木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いておらんのがある。割合に枝の繁まない所は、依然として、うららかな春の日を受けて、燃え出でた下草さえある。壺葦の淡き影が、ちらりちらりとその間に見える。

日本の葦は眠っている感じである。「天来の奇想のように」、と形容した西人の句は到底あてはまるまい。こう思う途端に世の足はとまった。足がとまれば、厭になるまでそこにいる。いられるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追い立てる。都会は太平の民を乞食と間違えて、掏摸の親分たる探偵に高い月俸を払う所である。

\*

\*

さて、主人公の画工は、鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷に降りて、向うの山へ登らぬうちに、途は、二股に岐れて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁には熊笹が多く、ある所は、左右から生い重なって、殆んど音を立てずには通れない。そして、歩いて見ると存外狭く、池をめぐりては雑木が多い。何百本あるか勘定しきれぬほどである。主人公の画工は、やがて足をとめ、足がとまれば、厭になるまでそこにいられるのは、幸福な人である。例えば、都会では、何もしないでその場でぼうっと立っている、すぐ電車（市電）や車などに引き殺される。電車や車などが引き殺さなければ巡査が（不審者として）追い立てる。また、都会は「太平の民」（例えば、通りの道端などに腰を下ろして座っていれば）、すぐにも「乞食」と間違えられてしまう。また、掏摸は「財布」を盗んで「お金」を手に入れるが、一方、探偵は、他人の「情報」を盗んで「高い収入」を得ている。同じ「盗み」でも、探偵の方が「掏摸」より上手である。だから、「親分」になるのである。

### 一、草の上に腰を下ろし物思い

余は草を茵に太平の尻をそろりと卸した。ここならば、五、六日こうしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す気遣はない。自然のありがたい所はここにある。いざとなると（それは「自然災害」などでは）容赦も未練もない代わりには、人に因って取り扱いかえるような軽薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井（財閥）を眼中に置かぬものは、いくらでもある。（しかし）、冷然として古今帝王の権威を風馬牛し（完全に無視し）得るものは自然のみであろう。自然の徳は高く塵芥を超越して、絶対の平等観を無辺際（無限）に樹立している。天下の群小（世のつまらぬ小人物達）を磨いて（手招いて）、徒

にタイモンの憤り（義憤）を招くよりは、蘭（花）を九畹（三十畝）に滋き 蕙（ラン科シラン）を百畦（五十畝）に植えて、独りその裏に起臥する（これは「自然を相手に悠々自適の日々を送る」）方が遙かに得策である。世は公平といひ無私という。さほど大事なものならば、日に千人の小賊を戮して、満圃の草花を彼等の屍に培養うがよからう。何だか考が理に落ちて一向つまらなくなつた。こんな中学程度の観想を練りに、わざわざ鏡が池まで来はせぬ。袂から煙草を出して、寸燐をシュツと擦る。手応えはあつたが火は見えない。敷島（煙草の銘柄）の先に付けて吸つてみると、鼻から煙が出た。なるほど、吸つたんだなとようやく気がついた。寸燐は短かい草のなかで、しばらく雨竜のような細い煙りを吐いて、すぐ寂滅した。席をずらしてだんだん水際まで出て見る。余が茵は天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬという間際で、とまる。水を覗いて見る。（これは「立つて動いたのではなく、草の上に座つたまま尻を滑らせながら水際まで近づいた」ということである。）

眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んでいる。余は往生と言うよりほかに形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知っている。藻の草ならば誘う波の情けを待つ。百年待つても動きそうもない、水の底に沈められた水草は、動くべきすべての姿勢を調べて、朝な夕なに、弄らるる期（風や波などで動かされる機会）を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思いを茎の先に籠めながら、今に至るまでついに動き得ずに、また死に切れずに、生きているらしい。

余は立ち上がつて、草の中から、手頃の石を二つ拾つて来る。功德になると思つたから、眼の先へ、一つ抛り込んでやる。ぶくぶくと泡が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えたと、余は心のうちで繰り返す。（これは「水草を動かそうとして石を投げて見たが、ぶくぶくと泡が二つ浮いて、すぐ消えてしまひ、何の効果もなかったということである）。すかして見ると、三茎ほどの長い髪が、慵げに揺れかかっている。見つかつてはと言わぬばかりに、濁つた水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀仏。——今度は思い切つて、懸命に真中へなげる。ぼかんと幽かに音がした。静かなるものは決して取り合わな（動かない）。もう抛げる気も無くなつた。絵具箱と帽子を置いたまま右手へ廻る。

\*

\*

例えば、本文のその中で、「……眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んでいる。余は往生と言うよりほかに形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知っている。藻の草ならば誘う波の情けを待つ。百年待つても動きそうもない、水の底に沈められたこの水草は、動くべきすべての姿勢を調べて、朝な夕なに、弄らるる期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思いを茎の先に籠めながら、今に至るまでついに動き得ずに、また死に切れずに、生きているらしい」とある。この「水草」は恐らく、「那美」さんを想像しているのだろう。「……動きたくても動けない。どこかへ行きたくても行けない。また死に切れずに、生きていられるらしい」という想像であり、また、那美さんは、「鏡が池」は、「……身を投げるに好い所です」と応え、「私は近々投げるかも知れません」と言い、そして、「……私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いているところじゃないんです——やすやすと往生して浮いているところを——綺麗な画にかいてください」と頼まれるのであるが、そのようなところから、まさに次のような「内容の文章」となつて行くのである。

## 二、椿の花

二間余りを爪先上りに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて、身体が急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿が咲いている。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向で見ても、軽快な感じはない。ことにこの椿は岩角を、奥へ二、三間遠退いて、花がなければ、何があるか気のつかない所に森閑として、かたまっている。その花が！一日勘定しても無論勘定し切れぬほど多い。しかし眼がつけば是非勘定したくなるほど鮮かである。ただ鮮かと言うばかりで、いつこう陽気な感じがしない。ぱつと燃え立つようで、思わず、気を奪られた、後は何だか凄くなる。あれほど人を欺す花はない。余は深山椿を見るたびにいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、知らぬ間に、(妖女は)嫣然たる(色つぼくにつこりと笑いなながら)毒を血管に吹く。欺かれたと悟った頃はすでに遅い。向う側の椿が眼に入つた時、余は、ええ、見なければよかつたと思つた。あの花の色はただの赤ではない。眼を醒すほどの派出やかさの奥に、言うに言われぬ沈んだ調子を持っている。悄然として(しよんぼり)萎れる雨中の梨花には、ただ憐れな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、ただ愛らしい気持ちがある。椿の沈んでいるのは全く違ふ。黒ずんだ、毒気のある、恐ろしい味を帯びた調子である。この調子を底に持つて、上部はどこまでも派出に装っている。しかも人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぱつと咲き、ぼたりと落ち、ぼたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜(歳月)を、人目にかからぬ山陰に落ちつき払って暮らしている。ただ一眼見たが最後、見た人は彼女の魔力から金輪際、免るる事は出来ない。あの色はただの赤ではない。屠られたる(処刑された)囚人の血が、自ずから人の眼を惹いて、自から人の心を不快にする如く一種異様な赤である。

見ていると、ぼたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものはただこの一輪である。しばらくするとまたぼたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつたまま枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のないように見えるが、落ちてもかたまつているところは、何となく毒々しい。またぼたり落ちる。ああやつて落ちていくうちに、池の水が赤くなるだろうと考へた。花が静かに浮いている辺は今でも少々赤いような気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつかぬくらい静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだろうかと思ふ。年々落ち尽す幾万輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の後にはこの古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿のために、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。また一つ大きいのが血を塗つた、人魂のように落ちる。また落ちる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ帰つて、また煙草を呑んで、ぼんやり考へ込む。温泉場のお那美さんが昨日冗談に言つた言葉(身を投げる)が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子のように揺れる。あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが画でかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。原

理に背いても、背かなくつても、そういう心持ちさえ出ればいい。しかし人間を離れないで人間以上の永久という感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝ってはすべてを打ち壊してしまふ。と言つてむやみに気楽ではなお困る。一層ほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思しくない。やはりお那美さんの顔が一番似合うようだ。しかし何だか物足らない。物足らないとまでは気がつくが、どこが物足らないかが、吾ながら不明である。従つて自己の想像でいい加減に作り易える訳に行かない。あれに嫉妬を加えたら、どうだろう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎悪はどうだろう。憎悪は烈げし過ぎる。怒りでは全然調和を破る。恨？ 恨でも春恨とかいう、詩的のものならば格別、ただの恨では余り俗である。いろいろに考えた末、しまいに漸くこれだと気がついた。多くある情緒のうちで、憐れという字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ情で、しかも神にもつとも近き人間の情である。お那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情がああ女の眉宇にひらめいた瞬間に、わが画は成就するであろう。しかし、いつ勝とうと焦る人の字のみである。あれだけでは、とても物にならない。(本文)

\*

\*

さて、「……二間余りを爪先上りに登ると、向う岸の暗い所に椿が咲いている。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向で見ても、軽快な感じがしない」とある。また、花は、勘定しきれぬほど咲いているが、あの花の色は、ただの赤ではない。余は深山椿を見るたびにいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、知らぬ間に、(妖女は)嫣然たる(色つぼくにつこりと笑いながら)毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃はすでに遅い。向う側の椿が眼に入った時、余は、ええ、見なければよかつたと思つた。あの花の色はただの赤ではない。眼を醒すほどの派出やかさの奥に、言うに言われぬ沈んだ調子を持つている。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味を帯びた調子である。しかも人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。あの色はただの赤ではない。屠られたる(処刑された)囚人の血が、自ずから人の眼を惹いて、自から人の心を不快にする如く一種異様な「赤」である。

見ていると、ぼたりと赤い花が水の上に落ちた。しばらくするとまたぼたりと落ちた。あの花は決して散らない。かたまつたまま枝を離れる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる。こんなところへ美しい女の浮いているところをかいいたら、どうだろうと思ひながら、あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。そうして、「……椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたい」が、それが画でかけるだろうかと思案する。それには「……どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、ミレーはミレー、余は余であるから、余の興味を以て、ひとつ風流な土左衛門を描いてみたい。しかし想うような顔は安易く心に浮んで来そうもない」のである。そこで様々な「表情」「喜怒哀楽」の中から、ようやくこれだと気づくのであるが、それは、「憐れ」の表情であり、「……お那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情がああ女の眉宇にひらめいた瞬間に、わが画は成就するだろう。しかし、いつそ

れが見られるか解らない」となるのである。

### 三、源兵衛さんと出逢う

さて、がさがりがさりと足音がする。胸裏の凶案は三分二で崩れた。見ると、筒袖を着た男が、背へ薪を載せて、熊笹の中を観海寺の方へ渡って来る。隣りの山から下りて来たのだろう。男は、「……よい御天気で」と手拭をとって挨拶する。腰を屈める途端に、三尺帯に落した鈍の刃がぴかりと光った。四十恰好の逞しい男である。どこかで見たようだ。男は旧知のように馴々しい。「……旦那も画を御描きなさるか」と、余の絵具箱は開けてあった。

画工は、「……ああ。この池でも画こうと思って来て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」、「……はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降れなさって、さぞ御困りでござんしたろ」、「……え？ うん御前はあの時の馬子さんだね」、「……はあい。こうやって薪を切っては城下へ持って出ます」と、源兵衛は荷を卸して、その上へ腰をかける。煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は寸燐を借してやる。「……あんな所を毎日越すなあ大変だね」、「……なあに、馴れていきますから——それに毎日越しません。三日に一返、ことによると四日目くらいになります」、「……四日に一返でも御免だ」、「……アハハハハ。馬が不憫ですから四日目くらいにして置きます」、「……そりゃあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハハハハ」、「……それほどでもないで……」、「……時にこの池はよほど古いもんだね。全体いつ頃からあるんだい」、「……昔からありますよ」、「……昔から？ どのくらい昔から？」、「……なんでもよっぽど古い昔から」、「……よっぽど古い昔からか。なるほど」と言うのであった。(本文)

\*

\*

さて、源兵衛さんは、峠の茶店で出合った人であるが、彼は、五年前、花嫁姿のお嬢さんを馬に乗せて城下まで引いた人であり、今日は山から薪を切って来て、それを城下に持って行く途中であると言う。そして、主人公の画工が、「……この池はよほど古いもんだね。全体いつ頃からあるんだい？」と聞くと、源兵衛さんは、「……なんでもよっぽど古い昔から」と答えているが、これは、源兵衛さん自身もよく知らないということであり、また、なぜ、ここに突然「源兵衛さん」を登場させたのかと問えば、それは、もちろん、「次のような話」をさせるためではあるが、その「話」にしても、どこまで「正確な話」なのか、それとも昔からの「言い伝え」(いわば伝説)として「鏡が池」(この地域)に伝わっているものなのか？ 少なくとも源兵衛さん自身は、それを「正確」には知らず、いわば「他人から聞いた話をそのまま主人公の画工に話しているような内容」になっているかと思う。

### 四、昔の嬢様の自殺の話

さて、源兵衛さんは、「……なんでも昔し、志保田の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」、「……志保田って、あの温泉場のかい」、「……はあい」、「……お嬢さんが身を投げたって、現に達者でいるじゃないか」、「……いんにえ。あの嬢様じゃない。ずっと

昔の嬢様が、「……ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」、「……なんでも、よほど昔の嬢様で……」、「……その昔の嬢様が、どうしてまた身を投げたんだい」、「……その嬢様は、やはり今の嬢様のように美しい嬢様であったそうながな、旦那様」、「うん」、「……すると、ある日、一人の梵論字が来て……」、「……梵論字という虚無僧の事かい」、「……はあい。あの尺八を吹く梵論字の事でござんす。その梵論字が志保田の庄屋へ逗留しているうちに、その美しくい嬢様が、その梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしてもいつしよになりたいと言うて、泣きました」、「……泣きました。ふうん」、「……ところが庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は聾にはならんと言うて。とうとう追い出しました」、「……その虚無僧かい」、「……はあい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてここまで来て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて、——とうとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも一枚の鏡を持っていか申し伝えておりますよ。それでこの池を今でも鏡が池と申しまする」、「……へええ。じゃ、もう身を投げたものがあるんだね」、「……まことに怪しからん事でござんす」、「……何代くらい前の事かい。それは」、「……なんでもよっぽど昔の事でござんす。それから——これはここ限りの話だが、旦那さん、「何だい」、「……あの志保田の家には、代々氣狂が出来ます」、「へええ」、「……全く祟りでござんす。今の嬢様も、近頃は少し変だ言うて、皆が嘸します」、「……ハハハそんな事はなかるう」、「……ござんせんかな。しかしあの御袋様がやはり少し変でな」、「……うちにいるのかい」、「……いいえ、去年亡くなりました」、「ふん」と余は煙草の吸殻から細い煙の立つのを見て、口を閉じた。源兵衛は薪を背にして去って行った。(本文)

\*  
さて、源兵衛さんは、煙草をふかしながら、実は、「……昔、この池に志保田の嬢様が身を投げたことがあった」という話をする。それは、一人の虚無僧が志保田の庄屋に逗留した時に、その美しい嬢様は、彼を見染めて一緒にになりたいと泣くが、親が許さない。虚無僧は聾にはならんと言うて、追い出すと、志保田の嬢様は、その虚無僧をここまで追いかけて来て、その「身を投げた」という話である。

\*  
では、なぜ、ここに「昔の嬢様の自殺の話」が出て来るのかと問えば、それは、これから主人公の画工が描こうとしている「鏡が池の絵」が、決して主人公の画工の「頭の中」(或いは「心の中」)だけで勝手に「想像や妄想」したものではなく、実際、この「鏡が池」では、昔、現実に「お嬢様の自殺」という出来事があったということで、より「真実味」を持たせる効果があるのである。

#### 五、岩に那美さんの姿が……

さて、画を描きに来て、こんな事を考えたり、こんな話を聴くばかりでは、何日かかっても一枚も出来つこない。せつかく絵具箱まで持ち出した以上、今日は義理にも「下絵」をとって行こう。幸、向側の景色は、あれなりでほぼ纏まっている。あすこでも申し訳にちよつと描こう。——一丈(約三丈)余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲る角に、嗟々と構える右側には、例の熊笹が断崖の上から水際まで、一寸の隙間なく叢生している。上には三抱ほどの大きな松が、若鷲にからまれた幹を、斜めに振

って、半分以上水の面へ乗り出している。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだろう。

三脚几に尻を据えて、面画に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、さて水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈（約三メートル）あれば、影も一丈（約三メートル）ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中まで茂り込んでいるかと怪しまるくらい、鮮かに水底まで写っている。松に至っては空に聳ゆる高さが見上げらるるだけ、影もまたすこぶる細長い。眼に写っただけの寸法ではどうも収まりがつかない。一層の事、実物をやめて影だけ描くのも一興だろう。水を描いて、水の中の影を描いて、そうして、これが画だと人に見せたら驚ろくだろう。しかしただ驚ろかせるだけではつまらない。なるほど画になっていると驚かせなければつまらない。どう工夫をしたものだろうと、一心に池の面を見詰める。

奇体（不思議）なもので、影だけ眺めていては一向画にならん。実物と見比べて工夫がして見たくなる。余は水面から眸を転じて、そろりそろりと上の方へ視線を移して行く。一丈（約三メートル）の巖を、影の先から、水際の継目まで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤沢の気合から、皺皺の模様を逐一吟味してだんだんと登って行く。ようやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂きに達したる時、余は蛇に睨まれた墓のごとく、はたりと画筆を取り落した。——緑の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として（あでやかに）織り出されたる女の顔は、——花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。余が視線は、蒼白き女の顔の真中にぐさと釘付にされたぎり動かない。女もしなやかなる体軀を伸せるだけ伸して、高い巖の上の一指も動かさずに立っている。この一刹那！余は寛えず飛び上った。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、すでに向うへ飛び下りた。夕日は樹梢（樹木の梢）を掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊笹はいよいよ青い。また驚かされた。（本文）

\*

\*

まず、主人公の画工は、どのような「構図の絵」にしたものかと実際の「鏡が池」の風景を凝視しながら思索を重ねているところであるが、それは、「……余は水面から眸を転じて、そろりと上の方へ視線を移して行く。一丈（約三メートル）の巖を、影の先から、水際の継目まで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤沢の気合から、皺皺（しわしわ）の模様を逐一吟味してだんだんと登って行く。ようやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂きに達したる時、余は蛇に睨まれた墓のごとく、はたりと画筆を取り落した」。それは、「……緑の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として織り出されたる女の顔は、——花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である」。つまり、一丈（約三メートル）の岩の頂きに「那美さん」が居たということである。しかも、「……余が視線は、蒼白き女の顔の真中にぐさと釘付にされたぎり動かない。女もしなやかなる体軀を伸せるだけ伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立っている。この一刹那！余は寛えず飛び上った。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、すでに向うへ飛び下りた」とある。これは、いかにも「鏡が池」に飛び込んだような感じで、向うへ飛び下りたのである。そして、主人公の画工は、「……また（那美さんに）驚かされた」

となるのである。

## 六、「鏡や池」の内容のまとめ

さて、主人公の画工は、鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷に降りて、向うの山へ登らぬうちに、途は、二股に岐れて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁には熊笹が多く、ある所は、左右から生い重なって、殆んど音を立てずには通れない。そして、歩いて見ると存外狭く、池をめぐるては雑木が多い。何百本あるか勘定しきれぬほどである。主人公の画工は、草に腰を下ろし、煙草をふかしながら物思いに耽っている。水を覗いても見る。目の届く所はさまで深そうにもない。また、画工は立ち上がり、草の中から、手頃の石を二つ拾って来ては、それを池に投げたりもしてみる。この「鏡が池」では、特に「椿の花」にこだわっていて、それは、「……二間余りを爪先上りに登ると、向う岸の暗い所に椿が咲いている。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向で見ても、軽快な感じがしない」。また、花は、勘定しきれぬほど咲いているが、あの「花の色」は、ただの「赤」ではない。余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿を連想する。目を醒すほどの派手やかな奥に、言うに言われぬ調子を持っている。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味を帯びた調子である。屠られたる（処刑された）囚人の血が、おのずから人の目を惹いて、おのずから人の心を不快にすることく一種異様な「赤」である。

\*

\*

見ていると、ぼたりと赤い花が水の上に落ちた。しばらくするとまたぼたりと落ちた。あの花は決して散らない。かたまつたまま枝を離れる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる。こんなところへ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思いがら、あの顔を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。「……椿が長えに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたい」が、それが画でかけるだろうかと思案する。——この後、たまたま通りがかった源兵衛さんに出逢う。彼は、五年前、お嬢さんを馬に乗せて引いた人であり、薪を切っては、城下に持って行く途中だという。彼は、煙草をふかしながら、実は、「……昔、この池に志保田の嬢様が身を投げたことがあった」という話をする。それは、一人の虚無僧が志保田の庄屋に逗留した時に、その美しい嬢様は、彼を見染めて一緒にになりたいと泣くが、親が許さない。その虚無僧をここまで追いかけて来て、その「身を投げた」という話である。

\*

\*

これらは、ミレーの「オフエリヤの絵」をはつきりと意識しての「内容展開」であり、それは、「……どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、ミレーはミレー、余は余であるから、余の興味を以て、ひとつ風流な土左衛門を描いてみたい。しかし思うような顔は安易く心に浮んで来そうもない」とある。そこで、様々な「表情」（「喜怒哀楽」）の中から、ようやくこれだと気づくのであるが、それは、「憐れ」の表情であり、「……お那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情があの子の眉宇にひらめいた瞬間に、わが画は成就するだろう。しかし、いつそれが見られるか解らない」とある。

ところが、「……その瞬間は、終にやって来る」のである。それは、最後の最後の最後

の場面、久一<sup>きゆういち</sup>さんを吉田の停車場<sup>ステーション</sup>まで見送りに行き、そして、今、まさに「汽車」が動き始めた時であり、この「場面」は、最後に書き記<sup>しる</sup>したいと思う。

\*

\*

一一一、お寺と屁の勘定

## 二二、お寺と屁の勘定

さて、山里の臍おぼろに乗じてそぞろ歩く。観海寺かんかいじの石段を登り始める。仰あおぎ数春星かずしゆんせい一二三という句を得た。余は別に和尚わしちうに逢う用事もない。逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出でて足の向くところに任せてぶらぶらするうち、ついこの石磴せきとうの下に出た。しばらく不許葦酒ふしゆさんもんじう入山門いりやまもんという石を撫でて立っていたが、急にうれしくなつて、登り出したのである。——『トリストラム・シャンデー』という書物のなかに、この書物ほど神の御覚召おぼしめしに叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力じりきで綴る。あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見当が付かぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。従つて責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に嫁かした。引き受けてくれる神を持たぬ余はついにこれを泥溝どろぼの中に棄すてた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位なら、すぐ引き返す。一段登つて佇たすむとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。黙然もくぜんとして、わが影を見る。角石かくいしに遮さへぎられて三段に切れているのは妙だ。妙だからまた登る。仰いで天を望む。寝ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬またたきをする。句になると思つて、また登る。かくして、余はとうとう、上まで登り詰めた。(本文)

### 一、石段の上で思い出した事

石段の上で思い出した。昔し鎌倉へ遊びに行つて、いわゆる五山ごさんなるものを、ぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか円覚寺えんがくじの塔中たつちゆうであつたらう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から、黄な法衣きんもを着た、頭の鉢はちの開いた坊主が出て来た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭すい声でどこへ御出おいでなさると問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、同時に足を停めたら、坊主は直ただちに、何もありませんぞと言ひ捨てて、すたすた下りて行つた。あまり洒落しやらく(淡泊で心にわだかまりがない様)だから、余は少しく先を越された気味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て振り立て、ついに姿を杉の木この間に隠した。その間あひだかつて一度も振り返つた事はない。なるほど禅僧は面白い。きびきびしているなど、のっそり山門を這入はいつて、見ると、広い庫裏くらり(僧侶や家族などの居住する場所)も本堂も、がらんとして、人影はまるでない。余はその時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落しやらくな(淡泊で心にわだかまりのない)人があつて、こんな洒落しやらく(淡泊で心にわだかまりのない様)に、人を取り扱つてくれたかと思うと、何となく気分が晴々した。禅ぜんを心得ていたからという訳ではない。禅のぜの字も未だに知らぬ。ただあの鉢の開いた坊主の所作しよさが気に入つたのである。

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴やつで埋うずまっている。元来何しに世の中へ面を曝さらしているんだか、解しかねる奴さえている。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのを以て、さも名誉のごとく心得ている。五年も十年も人の臀しりに探偵たんていをつけて、人のひる屁への勘定かんじやうをして、それが人世だと思つてる。そうして人の前へ出て来て、お前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつ

たと頼みもせぬ事を教える。前へ出て言うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろの方から、お前は屁をいくつ、ひった、いくつ、ひったと言う。うるさいと言えばなおおなと言う。よせと言えばますます言う。分つたと言つても、屁をいくつ、ひった、ひつたと。そうしてそれが処世の方針だと言う。方針は人々勝手である。ただひつたひつたと。言わずに黙つて方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控えるのが礼儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと言うなら、こつちも屁をひるのを以て、こつちの方針とするばかりだ。そうなつたら日本も運の尽きだろう。(本文)

\*

\*

さて、山里の臙に乗じてそぞろ歩き、観海寺の石垣を登り始める。余は別に和尚に逢う用事もない。逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出でて足の向くままぶらぶらするうち、(中略)、とうとう上まで登り詰め、その石段の上で想い出したのは、昔、鎌倉のお寺で、余は上る、坊主は下る。すれ違った時、坊主が鋭い声でどこへ御出なさると問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、「……なにもありませんぞ」と言い捨てて、すたすたと降りて行つた。その坊主の所作が気に入つたのである。——一方、「……世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、そのうえずうずうしい、いやな奴で埋まっている。(中略)、五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁を勘定して、それが人世だと思つている。そうして人の前へ出てきて、お前は屁をいくつひつたと頼みもせぬことを教える。うるさいと言えばなおおなと言う。よせと言えばますます言う。分かつたと言つても、屁をいくつ、ひつたと言う。それが処世の方針だと言う。方針は人々勝手である。ただひつたひつたと言わずに黙つて方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控えるのが礼儀だ。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防御の方針であるが、むやみやたらに干渉しないのが、まさに礼儀になるだろう」。

\*

\*

それでは、その「屁を勘定する」というのは、一体、どのようなことかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。——まず、夏目漱石と言え、余りにも有名な「神経衰弱」というものがあるが、それは、今日の医学上の言葉で置き換えれば、それは、いわば「うつ病」(或いは「躁うつ病」)に近いものであり、それは、精神的に「不安定」であるとともに、夏目漱石の場合には、特に、例えば、自分は誰かに悪口を言われているとか、あるいは、自分は誰かに監視されているとか、その他、そのような「被害妄想」的な「精神状態」などもあつたらしいが、それはともかく、そのように、少し昔のことでも、また、今のことでも、とにかく、「……こういうことを言つた、こういうことをやつたと、いちいちあげつらう」ということであり、それは、相手に対する「人身攻撃」にもなれば、また、自分自身を守る「自己防衛」にもなるものである。——そして、われわれ人間というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害損得」)などに振りまわされてしまうものであり、それが、まさに「人情」ではあるが、その中でも、夏目漱石は、特に「俗悪」にまみれた「人情」(例えば「しつこい、毒々しい、こせこせした、ずうずうしい、その他」)などを嫌っているものであり、一方、「本来の人情」(或いは「素朴な人情」)であれば、それは、むしろ好ましいものになるだろう。そして、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害損得」)などに意味なく振りまわされないのである。

に「非人情」であり、その様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに振りまわされない「純粹な眼」（或いは「客観的な眼」）で対象を見ることが、何よりも大事なことであり、一方、いわゆる「俗悪」にまみれた「濁った眼」では、物事をより正しく「判断し、評価し、認識」することは、なかなかでき難いということである。

## 二、主人公（画工）の方針

こうやって、美しい春の夜に、何らの方針も立てずに、歩いてるのは実際高尚だ。興来たれば興来るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば、得たところに方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。これが真正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防禦の方針で、こうやって観海寺の石段を登るのは随縁放曠（これは「何事も縁にまかせて自由に振る舞う」）の（が余の）方針（行動方針）である。

仰 数 春 星 二 三 三 の 句 を 得 て、 石 磴 を 登 り つ く し た る 時、 臚 に ひ か る 春 の 海 が 帯 の ご と く に 見 え た。 山 門 を 入 る。 絶 句 は 纏 め る 気 に な ら ぬ な っ た。 即 座 に や め に す る 方 針 を 立 て る。 — 石 を 登 り 庫 裡 に 通 ず る 一 筋 道 の 右 側 は、 岡 つ つ じ の 生 垣 で、 垣 の 向 こ う は 墓 場 だ ろ う。 左 は 本 堂 だ。 屋 根 瓦 が 高 い 所 で、 幽 かに 光 る。 数 万 の 甍 に、 数 万 の 月 が 落 ち た よ う だ と 見 上 げ る。 ど こ や ら で 鳩 の 声 が し き り に す る。 棟 の 下 に で も 住 ん で い る ら しい。 気 の せ い か、 廂 の あ た り に 白 い も の が、 点 々 見 え る。 糞 か も 知 れ ぬ。（本文）

\*

\*

主人公（画工）の方針は、「……興来たれば興来るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば、得たところに方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。これが真正の方針である。こうやって観海寺の石段を登るのは随縁放曠（これは「何事も縁にまかせて自由に振る舞う」）の（が余の）方針（行動方針）である。ところで、なぜ「お寺や神社」などには「ハト」が数多くいるのだろうか？ それは、昔からハトは「神様の使い」（八幡神社の神使、その他）と考えられていたからであり、それに加えて、今日では「平和の象徴」（それは「旧約聖書」の中に出て来る「オリーブを啜えたハト」）からのイメージが強いのかも知れない。

## 三、霸王樹

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一行に並んでいる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じからいうと岩佐又兵衛のかいた、鬼の念仏が、念仏をやめて、踊りを踊っている姿である。本堂の端から端まで、一行に行儀よく並んで躍っている。その影がまた本堂の端から端まで一行に行儀よく並んで躍っている。臚夜にそそのかされて、鉦も撞木も、奉加帳も打ちすてて、誘い合せるや否やこの山寺へ踊りに来たのだから。

近寄って見ると大きな霸王樹である。高さは七、八尺もあるう、糸瓜ほどな青い黄瓜を、杓子のように押しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと継ぎ合せたように見える。あの杓子がいくつ継ぎなったら、おしまいになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破って、屋根瓦の上まで出そうだ。あの杓子が出来る時には、何でも不意に、どこからか出

て来て、ぴしやりと飛び付くに違いない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちだんだん大きくなるようには思われぬ。杓子と杓子の連続がいかにも突飛である。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。如何なるこれ仏と問われて、庭前の柏樹子（柏の木）と答えた僧があるよしだが、もし同様の間に接した場合には、余は一も二もなく、月下の霸王樹と応えるであろう。

少時、晁補之という人の記行文を読んで、いまだに暗誦している句がある。「時に九月天高く露清く、山空しく、月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たまたま人の上にあるが如し、窓間の竹数十竿、相摩裊して（互いにすれ合つて）声切々已まず。竹間の梅棕（梅の枝木）森然として鬼魅（妖怪）の離立笑鬢の状（逆立ち乱れた髪）の如し。二、三子相顧み（弟子たちは互いに振り返り）、魄動いて寝るを得ず（心魂が動揺して眠ることが出来ない）。遅明（夜明け頃）皆去る」とまた口の内で繰り返して見て、思わず笑つた。この霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして（余の心魂を動揺させて）、見るや否や山を追い下げた（山を下りた）であろう。刺に手を触れて見ると、いらいらと指をさす。（これは、有名な「ウチワサボテン」であり、確かに「……杓子と杓子の連続がいかにも突飛であり、こんな滑稽な樹はたんとあるまい」と、主人公の画工（敢えて夏目漱石）は、少なからず興味を持ったので、ここに書き記したのかも知れない。）

#### 四、木蓮の花

さて、石磴を歩き尽くして左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。ほとんど一抱えもあるう。高さは庫裏の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、また枝である。そうして枝の重なり合った上が月である。普通、枝がああ重なり、下から空は見えぬ。花があればなお見えぬ。木蓮の枝はいくら重なっても、枝と枝の間はほがらかに隙いている。木蓮は樹下に立つ人の眼を乱すほどの細い枝をいたずらには張らぬ。花さえ明かである。この遥かなる下から見上げて一輪の花は、はつきりと一輪に見える。その一輪がどこまで簇がって、どこまで咲いているか分らぬ。それにもかかわらず一輪はついに一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。いたずらに白いは寒過ぎる。専らに白いは、ことさらに人の眼を奪う巧みが見える。木蓮の色はそれではない。極度の白きをわざと避けて、あたたかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下している。余は石磴の上に立って、このおとなしい花が累々とどこまでも空裏に蔓こる様を見上げて、しばらく茫然としていた。眼に落ちるのは花ばかりである。葉は一枚もない。（この「木蓮の花」というのは、まさに此所に書かれている通りであり、それゆえ、何一つ書き足す必要もないが、ただ実際に見てみると、かなり大きめの花が一杯咲いていて、葉は一枚もなく、空が透けて見えるのである。）木蓮の花ばかりなる空を瞻る（これはまさに実感から生じた秀句である。）という句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合うている。

#### 五、了念との会話

さて、庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盗人はおらぬ国と見える。狗はもとより吠

えぬ。「御免」と訪問る。森として返事がない。「頼む」と案内を乞う。鳩の声はクウウクウウと聞える。「頼みまああす」と大きな声を出す。「おおおとおお」と遙かの向こうで答えたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向側にさした。小坊主がひよこりとあらわれる。了念であった。「……和尚さんはおいでかい」と聞くと、「……おられる。何しにござった」と聞く。「……温泉にいる画工が来たど、取次いでおくれ」と言うど、「……画工さんか。それじゃ御上り」と言うので、「……断わらないでもいいのかい」と聞くと、「よろしかろ」と答える。そこで、余は下駄を脱いで上がるとする。

すると、「……行儀がわるい画工さんじゃな」と言う。「なぜ」と聞くと、「……下駄を、よう御揃えなさい。そこを御覧」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間から五尺（約一五〇センチ）ばかりの高さを見計らって、半紙を四つ切りにした上へ、何か認ためてある。「……そおら。読めたる。脚下を見よ、と書いてあるが」と言う。「なるほど」と余は自分の下駄を丁寧に揃える。（これは、道元上人の「曹洞宗」（道元は起床・食事・掃除・洗面・入浴など、日常生活のすべての行為に坐禅と同じ価値を見だし、禅の修行として行なうことを説いているからである。）

## 六、和尚との対話

和尚の室は廊下を鍵の手に曲がって、本堂の横手にある。障子を恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばった了念が、「……あのう、志保田から、画工さんが来られました」と言う。はなはだ恐縮の体である。余はちよつとおかしくなった。「そうか、これへ」、余は了念と入れ代る。室がすこぶる狭い。中に囲炉裏を切つて、鉄瓶が鳴る。和尚は向側に書見をしていた。「……さあこれへ」と眼鏡をはずして、書物を傍らへおしやる。「……了念。りょううねえん」、「……はははははは」、「……座布団を上げんか」、「……はははははは」と了念は遠くで、長い返事をする。「……よう、来られた。さぞ退屈だろ」、「……あまり月がいいから、ぶらぶら来ました」、「……いい月じゃな」と障子をあげる。飛び石が二つ、松一本のほかには何も無い、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に朧夜の海がたちまちに開ける。急に気が大きくなったような心持である。漁火がここ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空に入って、星に化けるつもりだろう。

画工は、「……これはいい景色。和尚さん、障子をしめているのは勿体ないじゃありませんか」、「……そうよ。しかし毎晩見ているからな」、「……何晩見てもいいですよ、この景色は。私なら寝ずに見ています」、「……ハハハハ。尤もあなたは画工だから、わたしとは少し違うて」、「……和尚さんだつて、うつくしいと思つてるうちは画工でさあ」、「……なるほどそれもそうじゃろ。わしも達磨の画ぐらいいはこれで、かくがの。そら、ここに掛けてある、この軸は先代がかかれたのじゃが、なかなかようかいとる」と言う。

なるほど達磨の画が小さい床に掛っている。しかし画としてはすこぶるまずいものだ。ただ俗気がない。拙（下手）を蔽おうと力めているところが一つもない。無邪気な画だ。この先代もやはりこの画のような構わない人であったんだろう。「……無邪気な画ですね」、「……わしらのかく画はそれで沢山じゃ。氣象さえあらわれておれば……」、「……上手で俗気があるのより、いいです」、「……ははははまあ、それでも、賞めて置いてもらお

う。時に近頃は画工にも博士があるかの」、「……画工の博士はありませんよ」、「……あ、そうか。この間、何でも博士に一人逢うた」、「へええ」、「……博士と言うとえらいものじやるな」、「……ええ。えらいんでしよう」、「……画工にも博士がありそうなものじやがな。なぜ無いだろう」、「……そういえば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでしよう」、「……ハハハハまあ、そんなものかな。——何とかいう人じやったて、この間逢うた人は——どこぞに名刺があるはずだが……」、「……どこで御逢いです、東京ですか」、「……いやここで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか言うものが出来たそうじやが、ちよつと乗って見たいような気がする」、「……つまらんものですよ。やかましくつて」、「……そうかな。蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐと言うから、わしのよいうな田舎者は、かえつて困るかも知れんてのう」、「……困りやしませんがね。つまらんですよ」、「そうかな」と言うのであった。(本文)

ちなみに、「……蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐ」という諺は、広辞苑で見ると、次のようになっている。つまり、「……霧深い山国の蜀地方の犬は、時たま見える太陽に驚いて吠え、暑さに弱い呉地方の水牛は、月を見ても太陽と思つて喘ぐということから、その人の『量見や見識』などが狭いために疑い深く、思い違いをしてむだな苦勞すること」となっている。

## 七、屁の勘定

鉄瓶の口から煙が盛んに出る。和尚は茶箆筒から茶器を取り出して、茶を注いでくれる。「……番茶を一つお上り。志保田の隠居さんのような甘い茶じやない」、「……いえ結構です」、「……あなたは、そうやって、方々あるくように見受けるがやはり画をかくだめかの」、「……ええ。道具だけは持つてあるきますが、画はかかないでも構わないんです」、「……はあ、それじや遊び半分かの」、「……そうですね。そう言つても善いでしょう。屁の勘定をされるのが、いやですからね」と言う。

さすがの禅僧も、この語だけは解しかねたと見える。「……屁の勘定た何かな」、「……東京に永くいると屁の勘定をされますよ」、「どうして」、「……ハハハハ勘定だけならいいですが。人の屁を分析して、臀の穴が三角だの、四角だのつて余計な事をやりますよ」、「……はあ、やはり衛生の方かな」、「……衛生じやありません。探偵の方です」、「……探偵？ なるほど、それじや警察じやの。いったい警察の、巡査の、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」、「……そうですね、画工には入りませぬね」、「……わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になつた事がない」、「……そうですね」、「……しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてて、構わんがな。澄ましていたら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察じやて、どうもなるまいがな」、「……屁くらいで、どうかされちやたまりませぬ」、「……わしが小坊主のとき、先代がよう言われた。人間は日本橋の真中に臍腑をさらけ出して、恥ずかしくないようにしなければ修業を積んだとは言われんな。あなたもそれまで修業をしたらよかる。旅などはせんでも済むようになる」、「……画工になり澄ませば、いつでもそうなれます」、「……それじや画工になり澄したらよかる」、「……屁の勘定をされちや、なり切れませぬよ」、「……ハハハハ。それ御覧。あの、あなたの泊まつている、志保田のお那美さんも、嫁に入つて帰つてきてから、どうもいろ

いろいろな事が気になってならん、ならんと言つてしまいにとうとう、わしの所へ法を問いに来たじやて。ところが近頃はだいぶ出来てきて、そら、御覧。あのような訳のわかつた女になつたじやて」、「……へええ、どうもただの女じゃなと思ひました」、「……いやなかなか機鋒（切つ先）の鋭どい女で——わしの所へ修業に来ていた泰安という若僧も、あの女のために、ふとした事から大事を窮明せんならん因縁に逢着して——今によい智識になるようじや」と言う。

静かな庭に、松の影が落ちる、遠くの海は、空の光りに応うるがごとく、応えざるがごとく、有耶無耶のうちに微かなる、耀きを放つ。漁火は明滅す。「……あの松の影を御覧」、「……奇麗ですな」、「……ただ奇麗かな」、「ええ」、「……奇麗な上に、風が吹いても苦にしない」、茶碗に余った洪茶を飲み干して、糸底を上、茶托へ伏せて、立ち上る。「……門まで送つてあげよう。りよううねええん。御客が御帰りだぞよ」と言う。

送られて、庫裏を出ると、鳩がクウクウと鳴く。「……鳩ほど可愛いものはない、わしが手をたたくと、みな飛んでくる。呼んで見よか、月はいよいよ明るい。しんしんとして、木蓮は幾朶の雲華を空裏に撃っている。沈寥たる春夜の真中に、和尚ははたと掌を拍つ。声は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。「……下りんかいな。下りそうなものじやが」、了念は余の顔を見て、ちよつと笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思つていららしい。気楽なものだ。——山門の所で、余は二人に別れる。見返えると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石甃の上落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。ちなみに、今日では「鳩の目」は夜でも見えるという事であり、ただ夜行性ではないので、夜はあまり動かないようにしているが、逆に、夜行性の「梟の目」などは、夜活発に動いて獲物を捕らえているのである。）」

#### 八、お寺と屁の勘定のまとめ

さて、山里の臚に乗じてそぞろ歩き、観海寺の石垣を登り始める。余は別に和尚に逢う用事もない。逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出でて足の向くままぶらぶらするうち、（中略）、とうとう上まで登り詰め、その石段の上で想い出したのは、昔、鎌倉のお寺で、余は上る、坊主は下る。すれ違った時、坊主が鋭どい声でどこへ御出なさると問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、「……なにもありませんぞ」と言い捨てて、すたすたと降りて行つた。その坊主の所作が気に入つたのである。——一方、「……世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、そのうえずうずうしい、いやな奴で埋まっている。（中略）、五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁を勘定して、それが人世だと思つている。そうして人の前へ出てきて、お前は屁をいつくひつたと頼みもせぬことを教える。うるさいと言えばなおお言う。よせと言えばますます言う。分かつたと言つても、屁をいくつ、ひつたと言う。それが処世の方針だと言う。方針は人人かつてである。ただひつたひつたと言わずに黙つて方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控えるのが礼儀だ。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防御の方針であるが、むやみやたらに干渉しないのが、まさに礼儀になるのだろう」。

\*

\*

それでは、その「屁を勘定する」というのは、一体、どのようなことかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。——まず、夏目漱石と云えば、余りにも有名な「神経衰弱」というものがあるが、それは、今日の医学上の言葉で置き換えれば、それは、いわば「うつ病」（或いは「躁うつ病」）に近いものであり、それは、精神的に「不安定」であるとともに、夏目漱石の場合には、特に、例えば、自分は誰かに悪口を言われているとか、あるいは、自分は誰かに監視されているとか、その他、そのような「被害妄想」的な「精神状態」などもあつたらしいが、それはともかく、そのように、少し昔のことでも、また、今のことでも、とにかく、「……こういうことを言った、こういうことをやったと、いちいちあげつらう」ということであり、それは、相手に対する「人身攻撃」にもなれば、また、自分自身を守る「自己防衛」にもなるものである。——そして、われわれ人間というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに振りまわされてしまうものであり、それが、まさに「人情」ではあるが、その中でも、夏目漱石は、特に「俗悪」にまみれた「人情」（例えば「しつこい、毒々しい、こせこせした、ずうずうしい、その他」）などを嫌っているのであり、一方、「本来の人情」（或いは「素朴な人情」）であれば、それは、むしろ好ましいものになるのだろう。そして、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに意味なく振りまわされないのであるが、まさに「非人情」であり、その様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに振りまわされない「純粹な眼」（或いは「客観的な眼」）で対象を見ることが、何よりも大事なことであり、一方、いわゆる「俗悪」にまみれた「濁った眼」では、物事をより正しく「判断し、評価し、認識」することは、なかなかでき難いということである。

\*

\*

ところで、寺の「和尚さんとの対話」では、主人公の画工は、あまり月がいいからぶらぶらと歩いて来ましたと話を切り出し、次に、和尚さんも描くという、床に掛かっている「達磨」の絵の話となり、やがて、例の「屁の勘定」の話も出るが、和尚さんは、その真の「意味合い」がよく分からないままに終わってしまう。そして、門まで送って上げようと、和尚さんと了念さんに見送られて、山門の所で、二人と別れるのであった。

#### 九、主人公（敢えて夏目漱石）の芸術家論

翌朝、主人公の画工は、「……基督は最高度に芸術家の態度を具足したる（備えたる）ものなりとは、オスカー・ワイルドの説と記憶している。基督は知らず。観海寺の和尚のごときは、まさしくこの資格を有していると思う。趣味があるという意味ではない。時勢に通じているという訳ではない。彼は画という名のほとんど下すべからざる達磨の幅を掛けて、ようできたなどと得意である。彼は画工に博士があるものと心得ている。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思つてゐる。それにも関わらず、芸術家の資格があると言う。彼の心は底のない囊のように行き抜けである。何にも停滞しておらん。随所に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈殿する景色がない。もし彼の脳裏に一点の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行尿走尿の際にも、完全たる芸術家として存在し得るだろう。余のごときは、探偵に屁の数を勘定される間は、どうい画家にはなれない。画架に向う事は出来る。小手板（パレット）を握る事は出来る。しかし画工にはな

れない。こうやって、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色のなかに五尺の瘦軀を埋めつくして、始めて、真の芸術家たるべき態度にわが身を置き得るのである。一たびこの境界に入れば美の天下はわが有に帰する。尺素を染めず、寸縑を塗らざるも、われは第一流の大画工である。技において、ミケランジェロに及ばず、巧みなる事ラファエルに譲る事ありとも、芸術家たるの人格において、古今の大家と歩武を斉ゆうして、毫も譲るところを見出し得ない。余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画もかかない。絵具箱は酔興に、担いで来たかの感さえある。人はあれでも画家かと嗤うかもしれない。いくら嗤われても、今の余は真の画家である。立派な画家である。こういう境を得たものが、名画をかくとは限らん。しかし名画をかき得る人は必ずこの境を知らねばならん」とある。

\*

\*

これは、もう実に優れた「名文」そのものであり、夏目漱石のいわば「芸術家論の結論」そのものでもある。例えば、「……彼の心は底のない囊のように行き抜けである」とある。それは、まさに「……底が抜けていて、何にも停滞しておらず、随所に動き去り、任意に作し去って、些の塵滓（少しも世俗のけがれ）を腹部に沈殿する景色がない」ということであり、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに執拗にこだわって、それらに意味なく振りまわされる俗人でもなければ、また、この世の実に様々な「利害損得」などにことさらに固執する欲人でもない。それは、もう何物にもこだわらず、心がゆつたりとしていて、こせこせしておらず、そして、かかわりの生じるままに、こだわらなく立ち振る舞っては任意に（その人の意思に任せて）作し去って行くということである。それが、まさに「芸術家の素質なり」と見ているのである。

\*

\*

一方、「……余のごときは、探偵に屁の数を勘定される間は、とうてい画家にはなれない」とあるが、それは、他人にああでもないこうでもない干渉されたり、また、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに振りまわされている「心的状態」では、とうてい画家にはなれない。画家になるためには、「……こうやって、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色のなかに五尺の瘦軀（身体）を埋めつくして、始めて、真の芸術家たるべき態度にわが身を置き得るのである」。——これは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」（などに振りまわされている雑然としたふだんの「自我」から離れて、まさに百%「自分自身」になりきれている、まさに「純粹自己」（つまり「本来の自分自身」）となつて、初めて、画家になれるということである。

それは、画家であれ、小説家であれ、また、学者であれ、その他、もう誰であれ、いわゆる「没我的状態」にどこまでも深く溶け入っては、例えば、絵を描いている時、小説を書いている時、或いは、研究活動に深く溶け入っているような時こそは、もう何物にも換え難いほどの、最も充実した、最も満ち足りた、まさに「至福の時間」を生きている状態であるとともに、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、時には、真に優れた人類的な「発明、発見、創造、行動、その他」などが生み出されることにもなるのである。それをもつと言え、それは、まさに百%「自分自身」になりきれている、まさに「純粹自己」（つまり「本来の自分自身」）となつて、例えば、「詩境」に深く溶け入り、あるいは「画境」に深く溶け入っているような時こそは、誰が何と言おうと、自分は、まさに天下の大芸術家の「心的状態」になっているということである。そして、「……こう

いう境地を得たものが、(必ず)名画をかくとは限らないが、しかし、名画をかき得る人は、必ずこの境地を知らねばならない」となるのである。

さて、朝飯を済まして、一本の敷島(煙草の銘柄)をゆたかに吹かしたる時の余の観想は以上の如く(基督は最高度に…)である。日は霞を離れて高く上っている。障子をあけて、後ろの山を眺めたら、蒼い樹が非常にすき通って、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空気と、物象と、彩色の関係を宇宙でもっとも興味ある研究のひと考えている。色を主にして空気を出すか、物を主にして、空気をかくか。または空気を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの気合一つで色々な調子が出る。この調子は画家自身の嗜好で異なってくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ずから制限されるのもまた当前である。英国人のかいた山水に明るいものは一つもない。明るい画が嫌いなのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空気では、どうする事も出来ない。同じ英人でもグーダルなどは色の調子がまるで違う。違はずである。彼は英人でありながら、かつて英国の景色をかいた事が無い。彼の画題は彼の郷土にはない。彼の本国に比すると、空気の透明の度の非常に勝っている、埃及または波斯辺の光景のみを扱んでいる。従つて彼のかいた画を、始めて見ると誰も驚ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑うくらい判然出来上っている。

個人の嗜好はどうする事も出来ない。しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、われわれもまた日本固有の空気と色を出さなければならぬ。いくら仏蘭西の絵がうまいと言つて、その色をそのままに写して、これが日本の景色だとは言われぬ。やはり面のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態を研究したあげく、あの色こそ思つたとき、すぐ三脚几を担いで飛び出さなければならぬ。色は刹那に移る。一たび機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端には、滅多にこの辺で見事な出来ぬほどな好い色が充ちている。せつかく来て、あれを逃すのは惜しいものだ。ちよつと写してきよう。――襖をあけて、椽側へ出ると、向う二階の障子に身を倚たして、那美さんが立っている。頤を襟のなかへ埋めて、横顔だけしか見えぬ。余が挨拶をしようと思つた途端に、女は、左の手を落としたまま、右の手を風のごとく動かした。閃くは稲妻か、二折れ三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞆がある。姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝つばらから歌舞伎座を覗いた気で宿を出る。(本文)

主人公の画工は、「……余は常に空気と、物象と、彩色の関係を宇宙でもっとも興味ある研究のひと考えている。色を主にして空気を出すか、物を主にして、空気をかくか。または空気を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの気合一つで色々な調子が出る。この調子は画家自身の嗜好で異なってくる。個人の嗜好はどうする事も出来ないが、しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、われわれもまた日本固有の空気と色を出さなければならぬ。いくら仏蘭西の絵がうまいと言つて、その色をそのままに写して、これが日本の景色だとは言われぬ。やはり面のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態を研究したあげく、あの色こそ思つたとき、すぐ三脚几を担いで飛び出さなければならぬ。色は刹那に移る。一たび機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が

今見上げた山の端には、滅多にこの辺で見る事の出来ないほどな好い色が充ちている。せっかく来て、あれを逃すのは惜しいものだ。ちよつと写してきよう。――襖をあけて、椽側へ出ると、向う二階の障子に身を倚たして、那美さんが立っている。頤を襟のなかへ埋めて、横顔だけしか見えぬ。余が挨拶をしようと思ふ途端に、女は、左の手を落としたまま、右の手を風のごとく動かした。閃くは稻妻か、二折れ三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分（約二十九センチ）の白鞘がある。姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝っぱらから歌舞伎座を覗いた気で宿を出る。――とところで、この「白鞘」（短刀）というのは、一体、何かと問えば、それは、那美さんの父親が「……これから満州に出兵する久一さんのために送った餞別の品」であり、途中、那美さんと「元夫との出逢い」の場面があるが、その後、那美さんはその餞別の品を「兄の家」にいる久一さんの所に主人公（画工）と一緒に届けに行くという展開になるのである。

\*

\*

二三、別れた夫の出現

## 二三、別れた夫の出現

さて、(宿の)門を出て、左へ切れると、すぐ岨道(石のいっこつした山道)続きの、爪上りになる。鶯が所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑が一面に植えてある。右には高からぬ岡が二つほど並んで、此所にもあるは蜜柑のみと思われる。何年前か一度この地に来た。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であった。その時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝売ってくれと言ったら、幾願でも上げますよ、持つていらつしやいと答えて、樹の上で妙な節の唄をうたい出した。東京では蜜柑の皮でさえ菓種屋へ買いに行かねばならぬのにも思った。夜になると、しきりに銃の音がする。何だと聞いたたら、獵師が鴨をとるんだと教えてくれた。その時は那美さんの、なの字も知らずに済んだ。(本文)

### 一、那美さんの言動について

あの女を役者にしたたら、立派な女形が出来る。普通の役者は、舞台へ出ると、よそ行きの芸をする。あの女は家のなかで、常住芝居をしている。しかも芝居をしているとは気がつかん。自然天然に芝居をしている。あんなのを美的生活とでも言うのだろう。あの女の御蔭で画の修業がだいぶ出来た。

あの女の所作を芝居と見なければ、薄気味がわるくて一日も居たたまれん。義理とか人情とかいう、尋常の道具立を背景にして、普通の小説家のような観察点からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すぐいやになる。現実世界に在って、余とあの女の間には纏綿した(絡まった)一種の關係が成り立たとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶するだろう。余のこのたびの旅は俗情を離れて、あくまで画工になり切るのが主意であるから、眼に入るものはことごとく画として見なければならん。能、芝居、もしくは詩中の人物としてのみ観察しなければならん。この覚悟の眼鏡から、あの女を覗いて見ると、あの女は、今まで見た女のうちでもっともうつくしい所作をする。自分でうつくしい芸をして見せるという気がないだけに役者の所作よりもなおうつくしい。

こんな考をもつ余を、誤解してはならん。社会の公民として不適當だなどと評してはもつとも不届きである。善は行い難い、徳は施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい。これらを敢えてするのは何人にと取っても苦痛である。その苦痛を冒すためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに潜んでおらねばならん。画というも、詩というも、あるは芝居というも、この悲酸(悲惨)のうちに籠る快感の別号(別の呼び名)に過ぎん。この趣きを解し得て、始めて吾人(われわれ)の所作は壮烈にもなる、閑雅にもなる、凡ての困苦に打ち勝って、胸中の一点の無上趣味を満足せしめたくなる。肉体の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思わず、勇猛精進の心を駆って、人道のために、鼎鑊に烹らるる(釜ゆで刑)を面白く思う。もし人情なる狭き立脚地に立って、芸術の定義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪えられぬという一念の結晶して、燦として白日を射返すものである。(本文)

\*

\*

例えば、本文に、「……善は行い難い、徳は施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい。これらを敢えてするのは何人に取っても苦痛である」とある。これは、一体、何故なのか？ それは、一般的に言って、われわれ人間は、何よりも「自分が一番かわいい（大事）」という意識、『利害損得』の上に立ってものを考え『行動』（言動）している傾向がある」からである。それは、「……自分に得になるようなことなら喜んでするが、自分に損になるようなことなら、できるだけ避けたい」ということである。つまり、自分にとって「害や損」になるような「……善は行い難い、徳は施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい」が、一方、自分にとって「益や喜びになる」ような「……善は行い易い、徳は施こし易い、節操は守り易い、義のために命を捨てるのも出来易い」となるのである。

それでは、われわれ人間は、その「利害損得」だけで生きていくのだろうか？ 勿論、そうではない。それでは、その「利害損得」を越えるものとして、一体、何かあるのかと問えば、それは、本文では、「……その苦痛を冒すためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに潜んでおらねばならぬ。画というも、詩というも、あるいは芝居というも、この悲酸のうちにも籠る快感の別号に過ぎん。この趣きを解し得て、始めて吾人の所作は壮烈にもなる、閑雅にもなる、凡ての困苦に打ち勝って、胸中の一点の無上趣味を満足せしめたくなる」のである。つまり、われわれ人間の「利害損得」を越えるためには、まさに「愉快や快樂」などがなければならぬ。つまり、何かそこに、「……楽しい、面白い、愉快だ、快感だ、素晴らしい、美しい、その他」というものがなければならぬ。それが、まさに「趣味」であり、この世に存するありとあらゆる「趣味」というものは、誰でも「楽しい」から行なうのであり、「趣味」を「利害損得」だけで行なう人はない、もし「趣味」を「利害損得」だけで行なう人がいれば、それは、純正の「趣味」ではなく、むしろ「仕事」になっってしまう。「仕事」となれば、必ず「苦痛や困苦」などが伴うことになり、その（仕事）代償として「報酬」（金銭等）を得ることになるのである。

最初は、何であれ、すべて「遊び」（真似事）から入り、それが楽しいので続けて行くのと、やがて上達して、その人の「趣味」の一つになる。それを続けて行くと、さらに上達して、本格的な「趣味」となっていく。その後、その「趣味」をどこまでも極めようとするのが、まさに純正の「趣味」であるが、その場合、そのまま純正の「趣味」のまま留まる場合と、やがて「プロ化」して、その人の「仕事」となる場合とがあるのである。

それでは、「趣味」と「仕事」との違いは、一体、何かと問えば、「趣味」は、本来、「個人的な楽しみ」であり、それゆえ、その人が好きな時に好きなことを好きなように行なえば、それでよいものであり、しかも、その「活動や結果」などに対しても、特に「責任を負うという様なこともない」のである。——一方、「仕事」というのは、何よりも「収入」を得るための「一つの手段」であり、そのための「労働」でもあるが、それは、「趣味や遊び」などとははっきりと違っていて、与えられた業務を「誠実に遂行する」ことが、暗黙のうちに要求されているとともに、その「活動や結果」などに対しても、何らかの「責任を負わなければならない」ということである。それは、決して気楽なものではないが、しかし、生きるためには、どうしても「金銭的な収入」等を得ることが必要不可欠であり、その「金銭的な収入」等を、まさに「仕事」（つまりは「社会的な活動」）によってこそ、得ているというのである。

それでは、どのような「仕事」に従事するのが、いちばんよいのかという問題が生じて来るかと思うが、それは、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「最もよいこと」になるのだろう。もちろん、生きるためには、どのような「仕事」でも従事しなければならないものではあるが、できれば、その人の「資質」に最も適した「仕事」に従事するというのが、まさに「理想」であり、それは、言葉を換えれば、いわゆる「天職」を見つけ出すということにもなるのだろう。

それでは、その「天職」というのは、一体、どういうものかと問えば、それは、その人に最も適した「仕事」であり、それゆえ、その仕事に従事しているような時には、その人自身、まさに「最も充実した時」を過ごしているような状態であるということである。そして、その人の「仕事の内容」とともに、その人の「人生」もより深まっていくようなものである。それゆえ、ただ単に「収入が多い」とか、「カツコいい」というようなことではなく、その人の「資質」に最も適したものである。その仕事に従事しているような時には、その人は、まさにその人自身になりきって活動している状態であり、それゆえ、まさに「確かな手応えや充実感」などを全身で感じている状態にもなるわけである。

それは、その人にとって、「……なるほど、これに従事（専念）しているような時こそは、自分は、最も自分らしく生き生きと躍動して生きている。そして、張りつめた空気と精神とのなかで、確かな手応えと充実感を深く味わい、感じている」。そのようなものは、まさにその人にとっての「天職」（或いは「純正の趣味」）になるということである。

## 二、芝居気について

芝居気があると人の行為を笑う事がある。うつくしき趣味を貫かんがために、不必要なる犠牲を敢えてするの人情に遠きを嗤うのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機会を待たずして、無理矢理に自己の趣味観を銜う（いかにも知識・才能があるように見せかける）の愚を笑うのである。真に個中の消息を解し得たるもの、嗤うはその意を得ている。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許しがたい。昔し巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある。余の視るところにては、彼の青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。死そのものは洵に壮烈である、ただその死を促すの動機に至つては解しがたい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるものが、いかにして藤村子の所作を嗤い得べき。彼らは壮烈の最後を遂ぐるの情趣を味い得ざるが故に、たとい正当の事情のもとにも、とうてい壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤う権利がないものと余は主張する。（これは「あれこれ批判するばかりで、自らは何もしない実行力のない人をそう見ているのである。」）

余は画工である。画工であればこそ趣味専門の男として、たとい人情世界に墮在するも、東西両隣りの没風流漢よりも高尚である。社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画なきもの、芸術のたしなみなきものよりは、美しくしき所作が出来る。人情世界にあつて、美しくしき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上において示すものは天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅中に人情界に帰る必要はない。あつてはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じやりじやりする砂をふるって、底にあまる、うつくしい金のみを眺めて暮さなければならぬ。余自らも社会の一員をもつて任じてはおらぬ。純粹なる専門画家として、己れさえ、纏綿たる利害の累索を絶つて、優に画布裏に往来している。いわんや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作といえどもただそのままの姿と見るよりほかに致し方がない。(本文)

\*

\*

さて、本文に、「……芝居気があると人の行為を笑う事がある。うつくしき趣味を貫か人がために、不必要なる犠牲を敢えてするの人情に遠きを嗤うのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機会を待たずして、(未熟なのに)無理矢理に自己の趣味観を銜う(いかにも知識・才能があるように見せかける)の愚を笑うのである」とある。——まず、「芝居気がある」というのは、本心からそういうことを言ったりやったりしているというよりは、むしろ「奇を銜つて」(何か人が驚いたり面白がつたりすることを狙つて言ったりやったりすること)であり、多くの場合、意図的なものである。これは、「心からのもの」と「意図的なもの」との区別であり、「心からのもの」であれば、それは、まさに純正の「趣味」(或いは「仕事」)になるが、一方、「意図的なもの」は、本文では、「……無理矢理に自己の趣味観を銜う(いかにも専門的な「知識・才能」などがあるかのように見せかけて、例えば、鑑賞眼も無いのに『骨董趣味』などを気取るような人)の愚を笑う」のである。例えば、テレビなどでの「言動」なども、その多くは、「奇を銜つた」(パフオーマンズ的なもの)が多く、それゆえ、「心からのもの」(純正なもの)は少ないのである。

ところで、本文に、「……もし人情なる狭き立脚地に立つて、芸術の定義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪えられぬという一念の結晶して、燦として白日を射返すものである」とあるが、これは、特に、詩、小説、随筆、評論、その他などの「文筆活動」などでは、その傾向は強く、また、「……余は画工である。画工であればこそ趣味専門の男として、たとい人情世界に随在するも、東西両隣の没風流漢(風流を理解出来ない人)よりも高尚である。社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画なきもの、芸術のたしなみなきものよりは、美しくしき所作が出来る。人情世界にあつて、美しくしき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行爲の上において示すものは天下の公民の模範である」とあり、また、冒頭でも、「……住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である。画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに言えば写さないでもよい。(心の中で思い描くだけでもよい)。煩惱を解脱するの点において、清浄界に出入し得るの点において、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である……」とある。

もちろん、これは、夏目漱石の「考え方」の一つであるが、ここで大事なことは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や快樂」などを貪欲に貪ることによって得られる「喜び」と、もう一方は、この世の実に様々な「真善美」などをどこまでも愛し求めて得られる「喜び」との「根本的な違い」であり、それは、画家であれ、小説家であれ、また、学者であれ、その他、もう誰であれ、いわゆる「没我的状態」にどこまでも深く溶け入っては、例

えば、絵を描いている時、小説を書いている時、或いは、研究活動に深く溶け入っているような時こそは、もう何物にも換え難いほどの、最も充実した、最も満ち足りた、まさに「至福の時間」を生きているという、そういう「至福の喜び」が得られるとともに、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、時には、真に優れた人類的な「発明、発見、創造、行動、その他」などが生み出されることにもなるのである。それをもつと言えば、それは、まさに百%「自分自身」になりきれている、まさに「純粹自己」(つまり「本来の自分自身」となつて、例えば、「詩境」に深く溶け入り、あるいは「画境」に深く溶け入っているような時こそは、誰が何と言おうと、自分は、まさに天下の大芸術家の「心的状態」になつていようとすることである。そして、「……こういう境地を得たものが、(必ず)名画をかくとは限らないが、しかし、名画をかき得る人は、必ずこの境地を知らねばならない」となるのである。そして、このような「境地」を味わうことのでき得るような人たちは、この世の実に様々な「真善美」などをどこまでも真に愛し求めてやまない人たちは、世間一般の人たちとは違つて、「……煩惱を解脱するの点において、清浄界に出入し得るの点において、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である」となるのである。

### 三、草原からの四方の景色

さて、三丁(約三百坪)ほど上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だなどと思う。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返つたら、下から赤い腰巻をした娘が上ってくる。腰巻がしだいに尽きて、下から茶色の脛が出る。脛が出切つたら、藁草履になつて、その藁草履が段々動いて来る。頭の上に山桜が落ちかかると。背中には光る海を負っている。

岨道(険しい山道)を登り切ると、山の出鼻の平な所へ出た。北側は翠りを置む春の峰で、今朝椽(側)から仰いだあたりかも知れない。南側には焼野ともいうべき地勢が幅半丁ほど広がって、末は崩れた崖となる。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨いで向を見れば、眼に入るものは言わずも知れた青海である。

路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬところに変化があつて面白い。

どこへ腰を据えたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。椽(側)から見たときは画になると思つた景色も、いざとなると存外纏まらない。色も次第に変わってくる。草原をのそつく(うろつく)うちに、何時しか描く気がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構わん、どこへでも坐つた所がわが住居である。染み込んだ春の日が、深く草の根に籠つて、どつかと尻を卸すと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰したような心持ちがする。

海は足の下に光る。遮る雲の一片さえ持たぬ春の日影は、普く水の上を照らして、何時の間にかほとぼりは波の底まで浸み渡つたと思はるるほど暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗を畳んで濃やかに動いている。春の日は限りなき天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は全く動かない。往昔(その昔)入貢の高麗船が遠くから渡つて来るときには、あんなに見えただであらう。そのほかは大千世界を極めて、照

らす日の世、照らさるる海の世のみである。(本文)

#### 四、木瓜の花

さて、ごろりと寝る。帽子が額をすべって、やけに阿弥陀となる。所々の草を一、二尺抽いて、木瓜の小株が茂っている。余が顔はちようどその一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲った事が無い。そんなら真直かというのと、けつして真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突して、斜に構えつつ全体が出来上っている。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔かい葉さえちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものである。世間には「拙を守る」(利巧に立ちまわらず純粹な生き方を貫く)という人がある。この人が来世に生れ変わるときと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切って、面白く枝ぶりを作って、筆架(筆掛け)をこしらえた事がある。それへ二銭五厘の水筆(穂に芯を入れず、全体に墨汁を含ませて使う筆)を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて楽んだ。その日は木瓜の筆架(筆掛け)ばかり気にして寝た。あくる日、眼が覚めるや否や、飛び起きて、机の前へ行つて見ると、花は萎え葉は枯れて、白い穂だけが元のごとく光っている。あんなに奇麗なものが、どうして、こう一晩のうちに、枯れるだろうと、その時は不審の念に堪えなかった。今思うとその時分の方がよほど出世間的(世間の煩らしさから超然としていた)のである。(これは恐らく、夏目漱石自身の経験になるのだろう。)

寝るや否や眼についた木瓜は二十年来の旧知己である。見詰めていると次第に気が遠くなって、いい心持ちになる。また詩興が浮ぶ。――寝ながら考える。一句を得るごとに写生帖に記して行く。しばらくして出来上ったようだ。始めから読み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停※而矚目。万象帶晴暉。聽黃鳥宛轉。觀落英紛霏。行尽平蕪遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空斷鴻歸。寸心何窈窕。縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遙随物化。悠然对芬菲。(ルビ省略)

ああ出来た、出来た。これで出来た。寝ながら木瓜を観て、世の中を忘れてる感じがよく出た。木瓜が出なくなっても、海が出なくなっても、感じさえ出ればそれで結構である。と唸りながら、喜んでいると、エヘンという人間の咳払が聞えた。こいつは驚いた。(本文)(……ちなみに、木瓜の花は、まだ寒い冬の頃からポツポツと咲き始め、春になると枝一杯に鈴なりに咲き誇るとともに、花の色は、紅色をはじめ、白・ピンク・オレンジなどもあり、木瓜の木の背丈は約二、三メートルくらいで大きくなく、花言葉は「……先駆者、早熟、妖精の輝き、平凡、退屈、その他」とあり、織田信長の家紋でもあったそうである。)

#### 五、一人の男の出現

さて、寝返りをして、声の響いた方を見ると、山の出鼻を回って、雑木の間から一人の男があらわれた。――茶の中折れを破っている。中折れの形は崩れて、傾く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、慥かにきよるときよるときよるつくようだ。藍の縞物の尻を端折って、素足に下駄がけの出で立ちは、何だか鑑定がつかない。野生の髻だけで判

断するとまさに野武士の価値はある。

男は岨道（険しい山道）を下りるかと思いのほか、曲り角からまた引き返した。もと来た路へ姿をかくすかと思うと、そうでもない。またあるき直してくる。この草原を、散歩する人の外に、こんなに行きつ戻りつするものはないはずだ。しかしあれが散歩の姿であろうか。またあんな男がこの近辺に住んでいるとも考えられない。男は時々立ち留る。首を傾ける。または四方を見廻わす。大に考え込むようにもある。人を待ち合せる風にも取られる。何だかわからない。

余はこの物騒な男から、ついにわが眼をはなす事が出来なかつた。別に恐しいでもない、また画にしようという気も出ない。ただ眼をはなす事が出来なかつた。右から左、左りから右と、男に添うて、眼を働かせているうちに、男ははたと留った。留ると共に、またひとりの人物が、余が視界に点出された。

二人は双方で互に認識したように、次第に双方から近づいて来る。余が視界はだんだん縮まつて、原の真中で一点の狭き間に置まれてしまう。二人は春の山を背に、春の海を前に、ぴたりと向き合った。——男は無論例の野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に吞んでおりはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もただ、ひやりとした。

男女は向き合うたまま、しばらくは、同じ態度で立っている。動く景色は見えぬ。口は動かしているかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、いるとも見える。しばらくすると、男は屹と、垂れた首を挙げて、半ば踵を回らしかける（半ば踵を回して帰りかける）。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、（山から）海の方へ向き直る。帯の間から頭を出しているのは懐剣らしい。男は昂然として、行きかかる（行きかける）。女は二歩ばかり、男の踵を縫うて進む（男の方へと進む）。女は草履ばきである。男の留まったのは、（女に）呼び留められたのか。（男の）振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出したのは、九寸五分（約二十九センチの短刀）かと思いの外、財布のような包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふらふらと春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸に、紫の包。これだけの姿勢で充分画にはなろう。

紫（の包）でちよつと切れた凶面が、二、三寸（約六センチ）約九センチの間隔をとつて、振り返る男の体のこなし具合で、うまい按排につながれている。不即不離（つかず離れず）ちよつと切れた距離）とはこの刹那の有様を形容すべき言葉と思う。女は前を引く態度で、男は後々に引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いてもひかれてもおらん。両者の縁は紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れている。（これは「……振り返る男の体のこなし具合と、片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した白い手頸に紫の包との間隔は、約六センチ約九センチ、まさに不即不離（つかず離れず）ちよつと切れた距離）とはこの刹那の有様を形容すべき言葉だろう」となるのである。）

二人の姿勢がかくのごとく美妙な調和を保っていると同時に、両者の顔と、衣服にはあくまで、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

背のずんぐりした、色黒の、髯づらと、くつきり締った細面に、襟の長い、撫肩の、

華奢姿。ぶつきらぼうに身をひねった下駄がけの野武士と、不断着の銘仙さえしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身に控えたる瘦形。はげた茶の帽子に、藍縞の尻切出立ちと、陽炎さえ燃やすべき櫛目の通った鬢の色に、黒縹子のひかる奥から、ちらりと見せた帯上の、なまめかしき。すべてが好画題である（対照の妙味がある）。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平均を保ちつつあった二人の位置はたちまち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かりようともせぬ。心的状態が絵を構成する上に、かほどの影響を与えようとは、画家ながら、今まで気がつかなかった。（本文）

## 六、那美さんの会話

二人は左右へ分かれる。双方に気合がないから、もう画としては、支離滅裂である。雑木林の入口で男は一度振り返った。女は後をも見ぬ。すらすらと、こちらへ歩いてくる。やがて余の真正面まで来て、「……先生、先生」と二声掛けた。これはしたり、いつ目付かったろう。「……何です」と余は木瓜の上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。「……何をそんな所でしていらっしゃる」、「……詩を作って寝ていました」、「……うそをおっしゃい。今のを御覧でしょう」、「……今の？ 今の、あれですか。ええ。少々拝見しました」、「……ホホホ少々でなくても、たくさん御覧なさればいいのに」、「……実のところはたくさん拝見しました」、「……それ御覧なさい。まあちよつと、こつちへ出ていらっしゃい。木瓜の中から出ていらっしゃい」と言うのであった。

余は唯々として（言われるままに）木瓜の中から出て行く。「……まだ木瓜の中に御用があるんですか」、「……もう無いんです。帰ろうかとも思うんです」、「……それじゃごいっしょに参りましょうか」、「ええ」、余は再び唯々として（言われるままに）、木瓜の中に退いて、帽子を被り、絵の道具を纏めて、那美さんといっしょにあるき出す。「……画を御描きになったの」、「……やめました」、「……ここへいらして、まだ一枚も御描きなさらないじゃありませんか」、「ええ」、「……でもせっかく画をかきにいらして、ちつとも御かきなさらずにちや、つまりませんわね」、「……なにつまってるんです」、「……おやそう。なぜ？」、「……なぜでも、ちやんとつまるんです。画なんぞ描いたって、描なくったって、つまるところは同じ事ですか」、「……そりゃ洒落なの、ホホホ随分呑気ですなあ」、「……こんな所へくるからには、呑気にでもしなくちや、来た甲斐がないじゃありませんか」、「……なあにどこにいても、呑気にしなくちや、生きている甲斐はありませんよ。私なんぞは、今のようなところを人に見られても恥かしくも何とも思いません」と言うのであった。

画工は、「……思わんでもいいでしょう」、「……そうですかね。あなたは今の男をいったい何だと御思いです」、「……そうさな。どうもあまり金持ちじゃありませんね」、「……ホホホ善くあたりました。あなたは占いの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本にいられないからって、私にお金を貰いに来たのです」、「……へえ、どこから来たのです」、「……城下から来ました」、「……随分遠方から来たもんですね。それで、どこへ行くんですか」、「……何でも満洲へ行くそうです」、「……何しに行くんですか」、「……何しに行くんですか。お金を拾いに行くんだか、死に行くんだか、分りません」と言う。

この時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が

消えかかりつつある。意味は解せぬ。「……あれは、わたくしの亭主です」と言う。  
迅雷を掩うに違あらず(突然の雷鳴に耳をふさぐ暇もない位)、女は突然として一太刀浴びせかけた。余は全く不意撃ちを喰った。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、此所まで曝け出そうとは考えていなかった。「……どうです、驚ろいたでしょう」と女が言う。「……ええ、少々驚ろいた」、「……今の亭主じゃありません、離縁された亭主です」、「……なるほど、それで……」、「それぎりです」、「……そうですか。——あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いい地位にあるが、誰の家なんですか」、「……あれが兄の家です。帰り路にちよつと寄つて、行きましよう」、「……用でもあるんですか」、「……ええちつと頼まれものがあります」、「……いっしょに行きましよう」と言うのであった。

岨道(険しい山道)の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、また一丁ほどを登ると、門がある。門から玄関へかからずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につかつか行くから、余も無遠慮につかつか行く。南向きの庭に、棕栢が三、四本あつて、土塀の下はすぐ蜜柑島である。——女はすぐ、椽鼻へ腰をかけて、言う。「……いい景色だ。御覧なさい」、「……なるほど、いいですね」、障子のうちは、静かに人の気合もせぬ。女は音のう景色もない。ただ腰をかけて、蜜柑島を見下して平気である。余は不思議に思った。元来何の用があるのかしら。……

しまいには話もないから、両方とも無言のまま蜜柑島を見下している。午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏まで、蒸し返されて耀いている。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大きな声を出して、コケコッコウと鳴く。「……おやもう。御午ですね。用事を忘れていた。——久一、久一さん」、女は及び腰になって、立て切った障子を、からりと開ける。内は空しき十畳敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾っている。「久一さん」、納屋の方でようやく返事がする。足音が襖の向でとまって、からりと、開くが早いか、白鞆の短刀が畳の上へ転がり出す。「……それから御伯父さんの餞別だよ」と言う。

帯の間に、いつ手が這入ったか、余は少しも知らなかった。短刀は二、三度とんぼ返りを打つて、静かな畳の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆるすぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸(約三秒)ばかり光った。(本文)

## 七、別れた夫の出現のまとめ

さて、次は、春の山の海の見える草原で、那美さんと別れた夫が出会う場面になるが、それは、まず、主人公の画工は、木瓜の花が咲いている、その草原に寝そべって、のんびりと、まさに「漢詩」などを作り出していると、そこに、「……雑木の間から、一人の男があらわれる。それは、茶の中折れを被つていて、目はぎよるぎよるさせ、素足に下駄がけの出で立ちで、野生の髭だけで判断すると、まさに野武士のように見えた」とある。その野武士と那美さんとが出会って、何やら話をしているようだがよく分からない。男は手を出して財布を受け取る。やがて、二人は別れて、那美さんは、主人公の画工の方にやつて来て話す内容を要約すると、まず、彼は、「別れた夫」であり、「……あの男は、貧乏して、日本にいられなくなり、私にお金をもらいにきた」と言い、また、「……なんでも

満州に行くそうで、なにしにいくんだか、お金を拾いに行くんだか、死に行くんだか、分かりません」と言うのであった。

その後、那美さんと主人公の画工は、蜜柑山に立派な白壁の家が建っている、その那美さんの「兄の家」(そこに久一さんが泊まっている)へと向かい、そして、那美さんは、「久一さん」と呼び、「……そら御伯父さんの餞別だよ」と言って、持っていた「短刀」を畳に投げると、二、三度とんぼ返りをして、久一さんの足元へ走り(転がり)、作りがゆるすぎたとみえて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光ったとある。(この「短刀」は、一方では、お守りや護身用であるとともに、一方では、自害用でもあるのである。)

\*

\*

二四、見送り

## 二四、見送り

最後は、川舟で久一さんを吉田の停車場まで見送る場面になる。舟のなかに座ったものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛さんと、それから余である。余は無論お紹伴（お共）に過ぎん。

御招伴でも呼ばれれば行く。何の意味だか分らなくても行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏に縁をつけたように、底が平たい。老人を中に、余と那美さんが艫（後）、久一さんと兄さんが舳（前）に座を取った。源兵衛は荷物と共に独り離れている。「……久一さん、軍は好きか嫌いかい」と那美さんが聞く。「……出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだろうが、愉快な事も出て来るんだろう」と戦争を知らぬ久一さんが言う。

「……いくら苦しくつても、国家のためだから」と老人が言う。「……短刀なんぞ貰うと、ちよつと戦争に出て見たくなりやしないか」と女がまた妙な事を聞く。久一さんは、「そうさね」と軽く首肯う。老人は髻を掀げて笑う。兄さんは知らぬ顔をしている。「……そんな平気な事で、軍さが出るかい」と女は、委細構わず、白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと兄さんがちよつと眼を見合せた。「……那美さんが軍人になったらさぞ強かろう」と、兄さんが妹に話しかけた第一の言葉はこれである。語調から察すると、ただの冗談とも見えない。「……わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりやとうになつています。今頃は死んでいます。久一さん。御前も死ぬがいい。生きて帰つちや外聞がわるい」「……そんな乱暴な事を——まあまあ、めでたく凱旋をして帰って来てくれ。死ぬばかりが国家のためではない。わしもまだ二、三年は生きるつもりじゃ。まだ逢える」と言うのであった。

老人の言葉の尾を長く手繰ると、尻が細くなつて、末は涙の糸になる。ただ男だけにそこまでだま（心底の思い）を出さない。久一さんは何も言わずに、横を向いて、——岸の方を見た。岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めている。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、その前を通つた時、この男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた兩人の間には何らの電気も通わぬ。男は魚の事ばかり考えている。久一さんの頭の中には一尾の鮎も宿る余地がない。一行の舟は静かに太公望の前を通り越す。（一般に、「……百人いれば百人がそれぞれ一人一人みな違つた「思いや考え」で生きているもの」なのである。）

日本橋を通る人の数は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔に立つて、行く人の心に蟠まる葛藤を一々に聞き得たならば、浮世は目眩しくて生きづらからう。ただ知らぬ人で逢い、知らぬ人で別れるから結句日本橋に立つて、電車の旗を振る志願者も出て来る。太公望が、久一さんの泣きそうな顔に、何らの説明をも求めなかつたのは幸である。顧り見ると、安心して浮標を見詰めている。大方日露戦争が済むまで見詰める気だろう。

川幅はあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。舷に倚つて、水の上を滑つて、どこまで行くか、春が尽きて、人が騒いで、鉢合せをしたがる所まで行かねばやまぬ。腥き一点の血を眉間に印したるこの青年は、余ら一行を容赦なく引いて行く。運命の繩はこの青年を遠き、暗き、物凄き北の国まで引くが故に、ある日、ある月、ある年の因果に、この青年と絡み付けられたるわれらは、その因果の尽くる所までこの青年に引かれて行かねばならぬ。因果の尽くるとき、彼とわれらの間にふつと音がして、彼一人は

否応なしに運命の手元まで手繰り寄せらるる。残るわれらも否応なしに残らねばならぬ。頼んでも、もがいても、引いてもらおう訳には行かぬ。

舟は面白いほどやすらかに流れる。左右の岸には土筆でも生えておりそう。土堤の上には柳が多く見える。まばらに、低い家がある。家鴨はガアガアと鳴いて川の中まで出て来る。時によると白い家鴨を出す。家鴨はガアガアと鳴いて川の中まで出て来る。

柳と柳の間に的礫（白く鮮明）と光るのは白桃らしい。トンカタンと機を織る音が聞える。トンカタンの絶間から女の唄が、はああい、いようう——と水の上まで響く。何を唄うのやらいっこう分らぬ。「……先生、わたくしの画をかって下さいな」と那美さんが注文する。久一さんは、兄さんときりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。「……書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら解け（自然と解ける） 繻子の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、「……こんな一筆がきではいけません。もつと私の気象の出るように丁寧に描いて下さい」、「……私も描きたいのだが。どうもあなたの顔はそれだけじゃ画にならない」、「……御挨拶です事。それじゃ、どうすれば画になりますか」、「……なに今でも画に出来ませんがね。ただ少し足りない所がある。それが出ない所を描くと惜しいですよ、「……足りないたつて、持つて生れた顔だから仕方ありませんわ」、「……持つて生れた顔はいろいろになるものです」、「……自分の勝手にですか」、「ええ」、「……女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」、「……あなたが女だから、そんな馬鹿を言うのですよ」、「……それじゃ、あなたの顔を色々にして見せて頂戴」、「……これほど毎日いろいろになつていけば沢山だ」と言う。

女は黙つて向をむく。川縁は、いつか水とすれすれに低く着いて、見渡す田の面（表面）は、一面のげんげん（レンジ）で埋っている。鮮やかな紅の滴々が、一つの雨に流されてか、半分溶けた花の海は霞のなかに果しなく広がって、見上げる半空には崢嶸たる（高く険しい）一峰が半腹から微かに春の雲を吐いている。「……あの山の向うを、あなたは越していらした」と女が白い手を、舷から外へ出して、夢のような春の山を指さす。「……天狗岩はあの辺ですか」、「……あの翠の濃い下の、紫に見える所がありますか」、「……あの日影の所ですか」、「……日影ですかしら。禿げてるんでしょう」、「……なあに凹んでるんですよ。禿げていりや、もつと茶に見えますか」、「……そうでしょうか。ともかく、あの裏あたりになるそうです」、「……そうすると、七曲りはもう少し左になりますね」、「……七曲りは、向うへ、ずっと外れます。あの山のまた一つ先の山ですよ」、「……なるほどそうだった。しかし見当から言うのと、あのうすい雲が懸つてるあたりでしょう」、「……ええ、方角はあの辺です」と言うのであった。（本文）

\*

\*

居眠をしていた老人は、舷から、肘を落して、ほいと眼をさます。「……まだ着かんかな」と、胸膈を前へ出して、右の肘を後ろへ張つて、左り手を真直に伸して、ううんと欠伸をするついでに、弓を彎く真似をして見せる。女はホホホと笑う。「……どうもこれが癖で、……」、「……弓が御好きと見えますね」と余も笑いながら尋ねる。「……若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でもたしかです」と左の肩を叩いて見せる。舳では戦争談が酣である。

舟は漸く町らしいなかへ這入る。腰障子に御肴と書いた居酒屋が見える。古風な縄暖簾

が見える。材木の置場が見える。人力車の音さえ時々聞える。乙鳥がちちと腹を返して飛ぶ。家鴨がガアガア鳴く。一行は舟を捨てて停車場に向う。

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と言う。汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百という人間を同じ箱へ詰め込んで通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へ停まって、そうして、同様に蒸気の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると言う。余は積み込まれると言う。人は汽車で行くと言う。余は運搬されると言う。汽車ほど個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段を尽くして、個性を發達せしめた後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする。一人前何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよというのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これより先へは一步も出てはならぬぞと威嚇かすが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅にしたものが、この鉄柵外にも自由を擅にたくなるのは自然の勢いである。憐むべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に噛み付いて咆哮（吠え立て）ている。文明は個人に自由を与えて虎のごとく猛からしめた後、これを檻（檻や落とし穴）の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世はめちやめちやになる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのである。個人の革命は今すでに日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾人（われわれ）に与えた。余は汽車の猛烈に、見界なく、凡ての人を貨物同様に心得て走る様を見るたびに、客車の内に閉じ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに払わざるこの鉄車とを比較して、——あぶない、あぶない。気を付けねばあぶないと思う。現代の文明はこのあぶないで鼻を衝かれるくらい充滿している。おさき真闇に盲動する汽車はあぶない標本の一つである。

停車場前の茶店に腰を下ろして、蓬餅を眺めながら汽車論を考えた。これは写生帖へ書く訳にも行かず、人に話す必要もないから、黙って、餅を食いながら茶を飲む。

向うの床几には二人かけている。等しく草鞋穿で、一人は赤毛布、一人は千草色の股引の膝頭に継布をあてて、継布のあたった所を手で抑えている。「……やつぱり駄目かね」、「……駄目さあ」、「……牛のように胃袋が二つあると、いいなあ」、「……二つあれば申し分はなえさ、一つが悪くなりや、切つてしまえば済むから」と言う。

この田舎者は胃病と見える。彼らは満洲の野に吹く風の臭いも知らぬ。現代文明の弊をも見認めぬ。革命とは如何なるものか、文字さえ聞いた事もあまい。あるいは自己の胃袋が一つあるか二つあるかそれすら弁じ得んだらう。余は写生帖を出して、二人の姿を描き取った。（本文）

\*

\*

じやらんじやらんと号鈴が鳴る。切符はすでに買うてある。「……さあ、行きましよ」と那美さんが立つ。「……どうれ」と老人も立つ。一行は揃って改札場を通り抜けて、プラットホームへ出る。号鈴がしきりに鳴る。

轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇が蜿蜒て来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。「……いよいよ御別かれか」と老人が言う。「……それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。「……死んで御出で」と那美さんが再び言う。「……荷物は来

たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前でとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入ったりする。久一さんは乗った。老人も兄さんも、那美さんも、余もそこに立っている。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでにわれらが世の人ではない。遠い、遠い世界へ行ってしまう。その世界では煙硝の臭いの中で、人が働いている。そうして赤いもの(血)に滑って、むやみに転ぶ。空では大きな音がドンドンドンと言う。これからそういう所へ行く久一さんは車のなかに立って無言のまま、われわれを眺めている。われわれを山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はここで切れる。もうすでに切れかかっている。車の戸と窓があいているだけで、お互いの顔が見えるだけで、行く人と留まる人の間が六尺ばかり隔っているだけで、因果はもう切れかかっている。

車掌が、びしやりびしやりと戸を閉てながら、こちらへ走って来る。一つ閉てることに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もびしやりとまった。世界はもう二つに為った。老人は思わず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。「……あぶない。出ますよ」という声の下から、未練のない鉄車の音がごੱとごੱとごੱとごੱと調子を取って動き出す。窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなって、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごੱとごੱとごੱとと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている。

「……それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声に言った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。(完)

さて、最後は、川舟で久一さんを吉田の停車場まで見送る場面になる。舟のなかに座ったものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛さんと、それから余である。余はむろんお同伴にすぎん。そして、舟は川をゆつたりと下って、やがて、一行は舟を捨てて停車場に向かう。それから一行は揃って改札場を通り抜けて、プラットホームに出る。「……いよいよお別かれか」と老人が言う。「……それではご機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。「……死んでおいで」と那美さんが再び言う。——蛇(汽車)が我々の前でとまる。横腹の戸がいくつも開き、人が出たり、入ったりする。久一さんが乗る。やがて、汽車はごੱとごੱとごੱと動き出す。——これらは、すべて「現実世界」そのものであり、主人公の「画工」としての、ひとときの草枕の「旅」は、ここに「終り」を告げることになるのである。

ところで、日本の場合、江戸時代までは、人や物の運びは、ほとんど「水路」を利用して、「陸路」は、歩くか籠か輿か馬か荷車を引くしかなく、余りにも未発達であったのである。やがて、明治時代に入ると、今度は、人力車や馬車や鉄道それから車やトラックその他などの普及により、人や物の運びは、今までの「水路」から、やがて「陸路」が非常に発達して来て、今日へと至っているのである。特に、明治時代の「鉄道」(汽車)の登場は、まさに画期的なものであり、それは、人や物を「陸路」で「大量に運ぶ」こと

を初めて可能にしたのである。——一方、夏目漱石は、「……汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百という人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へ停まって、そうして、同様に蒸気の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車に乗ると言う。余は積み込まれると言う。人は汽車で行くと言う。余は運搬されると言う。汽車ほど個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段を尽くして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする」とある。

例えば、或る一つの「……考え方、価値観、道徳観・倫理観、思想、政策、その他」などを詰め込まれて、みながみな「同じ方向」に向かって進んで行く。「……情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へ停まって、そうして、同様に蒸気の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車に乗ると言う。余は積み込まれるという。人は汽車で行くという。余は運搬されると言う。汽車ほど個性を軽蔑したものはない」とある。それは、例えば、今、現に起こっている「日露戦争」そのものが、まさにそういう「危機的状態」（それは或る一つの「……考え方、価値観、道徳観・倫理観、思想、政策、その他」などを人々は詰め込まれて、みながみな「同じ方向」に向かって進んで行く状態）にあると言えるものである。——つまり、その汽車に詰め込まれた実に数多くの兵隊さん達は、実際に戦地で「戦死」しているのである。そして、「……余は汽車の猛烈に、見界なく、すべての人を貨物同様に心得て走るさまを見るたびに、客車の内に閉じ込められたる個人と、個性に寸毫の注意を払わざるこの鉄車（それは「国家や社会或いは組織や団体」などもそうであるが）と比較して、——あぶない、あぶない。気を付けねばあぶないと思う」となるのである。しかも、実際、その後の「太平洋戦争」では、この時の「日露戦争」よりも遙かに数多くの「犠牲者」を出しているのである。

つまり、文明というのは、一方では、あらゆる限りの手段を尽くして、個人（個性）を発達せしめるものではあるが、一方では、あらゆる限りの方法によって、個人（個性）など全く容赦なく踏み付けるものでもあるのである。——一般に、「文明の恩沢に浴する」という言葉があるが、その場合、文明の利器を善用すれば、それは、人類の繁栄へと導くが、一方、文明の利器を悪用すれば、それは、人類の滅亡へと導くものでもあるのである。

\* \* \*  
さて、書き残した最後の場面、「……その瞬間は、終にやって来た」のである。それは、「汽車」が動き始めた時であり、汽車が動き出し、「……窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなり、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た」とある。それは、「……茶色のはげた中折帽の下から、髭だらけな野武士（別れた夫）が名残り惜気にクビを出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合わせた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見たことのない『憐れ』が一面に浮いていた」とある。主人公の画工は、「……それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と、那美さんの肩を叩きながら小声に言った。余が「胸中（心の中）の画面」は、この咄嗟の際に成就したのである。

旅<sup>たび</sup>をしばしと  
湯<sup>ゆ</sup>の宿<sup>やど</sup>か

「参考文献」

- ※底本「草枕」夏目漱石（「青空文庫」）
- ※底本「草枕」夏目漱石（「岩波文庫」）
- ※底本「草枕・二百十日」（「角川文庫」）
- ※ウエブ「公営社団法人・能楽協会」を参照。
- ※ウエブ「<http://www.nenka.com>」から文章を一部引用。

夏目漱石の世界  
こころ (完全版)  
新バージョン

はじめに

さて、今回の夏目漱石の世界『こころ』（完全版）という作品は、第一部「先生と私」、第二部「両親と私」、そして、第三部「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、われわれ日本人にいちばん多く読まれていている作品の一つでありながら、なかなか作者のその真の「意図」がどこにあるのか判断としないところがあるかと思う。

そこで、今回は、まず、第一部（先生と私）から考えてみたいと思うが、その内容は、まず、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）の海水浴場であった。そして、その「先生」と何回か浜辺で会って話をするようになるに連れて親しくなり、その後、東京に帰ったあとも、「私」という人は、なぜか「心惹かれる」その「先生」の家を頻繁に訪ねるようになって行くのである。そして、最初、訪ねた時には、留守であり、二度目も留守であったが、やがて「奥さん」が出てきて、先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある「或る仏」へ花を手向けに行く習慣があるというので、そこで、私も散歩がてら雑司ヶ谷の「墓地」へと行ってみると、茶店の中から先生らしい人が出て来たので、出し抜けに「先生」と大きな声を掛けると、先生は突然立ち留まって私の顔を見るなり、「どうして……、どうして……」と、異様な調子をもって繰り返されるのであった。もちろん、この墓地の「仏」（親友）との関係においてこそ、先生の「謎」が奥深く隠されているのである。

ところで、この第一部の「先生と私」というのは、それぞれ「本文」＋「\*」＋「解説」という構成になっていて、「……最初から最後まで、一字一句、丁寧に読み辿りながら深く考察したもの」であり、それゆえ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

こころ (新バージョン)

はじめに

一、 先生と私 (上)

二、 両親と私 (中)

三、 先生と遺書 (下)

※ 参考文献

夏目漱石の世界  
こころ (先生と私)

目次

こころ

序 はじめに

上、 先生と私

- 一、 冒頭の文章
- 二、 先生との出逢い
- 三、 当分鎌倉の宿に留まる<sup>と</sup>
- 四、 私は毎日海へ入りに出掛けた
- 五、 先生と白い皮膚の西洋人
- 六、 日本の海水浴の歴史
- \* \* \*
- 七、 先生への好奇心
- 八、 先生への接近
- 九、 先生の眼鏡を拾い上げる
- 十、 先生の後<sup>を</sup>に続いて海へ飛び込む
- 十一、 先生と懇意になる
- \* \* \*
- 十二、 東京に帰る
- 十三、 先生宅を訪ねる
- 十四、 雑司ヶ谷<sup>がや</sup>の墓地
- 十五、 墓<sup>ほひ</sup>の墓標<sup>いぢよう</sup>と銀杏の木
- 十六、 先生宅訪問<sup>たく</sup>を重ねる
- 十七、 墓参<sup>ほさん</sup>と散歩の区別
- 十八、 私は寂<sup>さび</sup>しい人間です
- \* \* \*
- 十九、 先生宅で食事や酒を飲む
- 二十、 夫婦間の子供の話
- 二十一、 仲の好<sup>い</sup>い夫婦の<sup>いっぺい</sup>一対
- 二十二、 先生と奥さんの喧嘩<sup>けんか</sup>（言逆<sup>いさか</sup>い）
- 二十三、 天下にただ一人しかない相手同士
- \* \* \*
- 二十四、 私と奥さんの会話
- 二十五、 恋（恋愛）は罪悪です
- 二十六、 人間が自分は信じられない
- 二十七、 先生の思想はどこから生じたのか
- \* \* \*

- 二八、盗難よけの留守番を頼まれる  
二九、もし奥さんがいなくなったら、先生は、  
三十、元は、ああじゃなかったんです  
三一、実は、少し思いあたる事が……  
三二、先生が十時頃帰宅する  
三三、秋が暮れて冬が来る……  
\* \*  
三四、父の病気のことでも国へ帰る  
三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く  
三六、父の病気は思った程悪くはなかった  
三七、先生にお札の手紙を書く  
三八、父の将棋の相手をする  
三九、東京へ帰りたい気持ちが生じて来る  
\* \*  
四十、東京へと戻る  
四一、父の病気についての談義が続く  
四二、卒業論文に専念する  
四三、論文完成させ、先生宅訪ねる  
\*  
四四、先生を散歩へと誘い出す  
四五、何々園の中に入る  
四六、財産の話をする  
四七、人はいざという間に急に悪人になる  
\*  
四八、犬と子供の突然の出現  
四九、犬と子供の去った後のこと  
五十、やがて二人は植木屋を出て行く  
\*  
五一、人間は誰でもいざという間に急に悪人になる  
五二、先生は、さつき少し興奮しましたね  
五三、私は他に欺かれたのです  
五四、やがて二人は電車に乗って帰る  
五五、あなたはほんとうに真面目ですか  
\* \*  
五六、大学を無事に卒業する  
五七、先生の家へ御馳走に招かれていた  
五八、先生の家で御馳走にあずかる  
五九、これから何をする気ですか  
\*  
六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか

六二、先生宅の玄関先にある木犀もくせいの木を見て

\* \*

六三、帰郷への準備をする

六四、汽車で故郷へと帰る

\* \*

※ 上「先生と私」のまとめ

※ 参考文献

上  
(先生と私)

しる

## 序 はじめに

例えば、夏目漱石の代表的な「作品」の一つには、いわゆる『こころ』という作品があるかと思うが、それは、「先生と私」、「両親と私」、「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、最初は、第一部（「先生と私」）の部分から考えてみたいと思う。

まず、「先生と私」という第一部の内容は、私（或いは「奥さん」という第三者から見た（つまり「外から見た」）時の「先生」という存在の「行動（言動）」の描写などが主であり、それは、いわば「外的事実」であり、例えば、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）を初めとして、その時々に表示される「先生」という人間の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他、また、生い立ち、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」の描写になるかと思う。——例えば、私が初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）であった。そして、「先生」という人は、外から見ると、終始静かであり、落ち着いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切ることがあった。また、先生には美しい奥さんがいたが、子供はなく、大学出身でありながら、仕事もしないでぶらぶら遊んでいる。それは、それなりの「財産」があるからではあるが、私は、「……先生は、なぜ宅で考えたり勉強したりするだけで、世の中に出て仕事をなさらないのですか？」と聞くと、「……私は世間に向かって働きかける資格のない男だから仕方がない」と答える。また、体は健康であるが、友だちは少なく、それは、人間は信用できないからだということであり、外出は嫌いでも、毎月友人の墓参りだけは行なっている。もちろん、夫婦仲は悪くはないが、ただ、なぜ夫が人を嫌い（避ける）のか？ 奥さんにもよく分からないという。むしろ私が聞きたいくらいだと答えるのである。それが、外から見た「先生」という「人間の姿」であったということである。

### 上 先生と私

#### 一、冒頭の文章（一）

まず、日本で最も読まれている夏目漱石の『こころ』という作品の、その余りにも有名な「冒頭部分」であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち開けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ『先生』といたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない」とある。——これは、これから何かが「始まる」という内容の文章ではなく、それは、すでに過去にあったことを「回想」しているという文章になるかと思う。

#### 二、先生との出逢い（一）

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は

多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費さんちやした。ところが、私が鎌倉に着いて三日と経たたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ことわつてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強しいられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分からなかつた。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は、鎌倉に一人残された。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢つたのは、夏の鎌倉の海岸(浜辺)の「海水浴場」であつた。その時、私はまだ若々しい書生(大学生)であり、一方の友達は、ある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、その友達は、急に国元から母が病気だから帰れという電報を受けるが、それを信じなかつた。というのも、友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強しいられていたからである。——これは、当時は、多くの場合、親が「子供の結婚」を決めていたのであり、また、主人公の「先生」も、両親を賜たまチフスでほぼ同時に失つた後、東京の「高校」へと進んだが、毎年、夏休みに実家に帰ると、叔父おじから同じように「勧めない結婚」を強しいられるような経験けいけんをしているのである。それはともかく、友達は、まだ年も若く、それに肝心の当人が気に入らなかつたので、夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであり、それで彼はとうとう帰る事になり、せつかく来た私は、鎌倉に一人残されたとなるのである。

### 三、当分、鎌倉の宿に留まる(一)

学校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日数ひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇きんごにいた私は、当分元の宿とどに留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかつた。従したがつて、一人ひとりぼつちになつた私は、別に恰好かっこうな宿を探す面倒ももたなかつたのである。——宿は鎌倉でも辺鄙へんびな方角ほうかくにあつた。玉突たまつきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇なまを一つ越さなければ手が届とどかなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘べつしやうは其所そのこゝにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利しごくべんりな地位ちゐを占めていた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、「……学校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日数ひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇きんごにいた私は、当分元の宿とどに留まる覚悟をした」とある。——まず、当時の「大学」は、三年制であり、しかも、「新学期」は、九月から始まる制度であつた。それに加えて、友達は、中国(地方)のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、学校が学校なのと年が年なので、これは、私立でなく国立大学であり、しかも、まだ学生なので、生活の程度は私とそれほど変わりもなかつたということ

である。従つて、一人ぼっちになつた私は、別に恰好な宿を探す面倒もたなかつたのであるが、これは、友達は、金持ちの息子だからと言つて、特別高い宿ではなく、ごくふつうの宿を借りていたので、別に恰好な宿（他に安い宿）を探す面倒もたらずに、そのままその宿に留まる覚悟をしたということである。

そして、その宿は、鎌倉でも辺鄙な方角にあり、玉突だのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇（田んぼ道）を一つ越さなければ手が届かなかつたとある。――まず、玉突だのアイスクリームだのというのは、幕末維新の頃に、西洋人とともに日本に入つて来たものであり、それが徐々に「ハイカラなもの」として人気を得て普及するようになるのである。また、「車」で行くとあるが、これは「人力車」のことであり、この周辺には、個人の別荘なども其所所にいくつでも建てられていて、しかも、海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていたとある。

#### 四、私は毎日海へはいりに出掛けた（一）

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていない。ここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。（本文）

さて、「私」という人は、「……毎日海へはいりに出掛けた」とある。そして、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、浜辺は避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。――そして、「……私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出した」というのである。

それは、「……その時、海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた」とある。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていない。ここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。――というのも、彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた」とある。

まず、「掛茶屋かけぢや」とあるが、それを「辞書」で見ると、「……道端などによしずなどをかけて簡単に造った茶店であり、注文に応じて茶や菓子などを提供する処」とある。これは、よく時代劇などでも旅人たちが休憩のためにちよつと立ち寄るあの茶店のことであるが、ここでは特に「海水浴場」用に設けられた簡易な「掛茶屋かけ」になるのである。

ところで、日本には江戸時代まで「海水浴」の風習などは全くなく、幕末から明治時代に入って、まず最初は、日本にいた外国人たちが「海水浴」を始めるようになり、やがて、日本の政財界や華族などの「上流階層」の人たちが海岸に保養を兼ねた別荘などを建てるようになるが、それが、まさに「長谷辺はせへんに大きな別荘を構えている人たち」であり、一方、明治末から大正・昭和には、一般の人たちにも海水浴は「体に良い」ということで非常に普及して大ブームとなり、本文のような大変な賑わいになるのである。そして、当時の「掛茶屋かけ」がいわば今日の「海の家」のような役割をしていたのである。

## 五、先生と白い皮膚の西洋人（二）

私わたしがその掛茶屋かけぢやで先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がって来た。二人の間あいだには目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫ほうまんであったにも拘わらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴ともれていたからである。——その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否いやや、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣ゆかたを着ていた彼は、それを床几しょうぎの上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股さるまた一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」（本文）とある。

というのも、私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻しりをおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍わきがホテルの裏口になっていたので、私の凝じつとしていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾ずんを被かぶって、海老茶えびぢやや紺こんや藍あゐの色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆みんなの前に立っているこの西洋人が如何いかにも珍らしく見えた」（本文）とある。

## 六、日本の海水浴の歴史

これは、まさに日本の「海水浴」の歴史をそのまま物語っているものであり、まず、日本での最初の「海水浴」の幕開けは、幕末から明治に「横浜や築地」の「居留地」で暮らしていた「外国人」たちが、それは、日本に居住していた欧米各国の公使たちをはじめ、宣教師や商人たち、その他の上流階層の人たちが現在の横浜市金沢区の「富岡海岸」を療養・保養地として、夏は、そこで「海水浴」を好んで楽しんでいたのである。——やがて、日本の政界人（高官）をはじめ、華族や財界人の「上流階層」の人たちも、そこに「避暑」で訪れたり、また、長期滞在のための「別荘」なども数多く建られるようになるのである。

そして、明治十六年（一八八三年）には、鎌倉の由比ヶ浜に「海水浴場」が開設されたり、また、明治十八年（一八八五年）には、大磯の照ヶ崎海岸にも「海水浴場」が開設されることになるが、特にこの大磯の「海水浴場」では、大勢の人たちで大変な賑わいを見せるようになるのである。——それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、もちろん、鉄道の「交通網の発達」であり、例えば、「大磯海水浴場」が大変な賑わいを見せるようになった理由の一つには、従来の「富岡海水浴場」の場合には、鉄道の駅から「人力車や小舟」などで移動する必要があったそうであるが、一方、大磯の「海水浴場」では、「大磯駅」から歩いてすぐに「海水浴場」へと行けたのである。そして、様々な「鉄道」の開通によって、「海水浴場」への交通の便もよくなると、一部の「上流階層」の人たちだけではなく、やがて、様々な「社会階層」（つまり庶民）の人たちも海岸（浜辺）での「海水浴」を楽しむようになるのである。

それを本文でみると、「……海岸には掛茶屋が二軒あり、私という人は、その一軒の方に行き慣れていた。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に専有の着替場を拵えていない、ここのらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なのであった」とある。——これは、まさに先生も私も一人の西洋人も、いわば「一般の人たち」であり、一方、「……長谷辺に大きな別荘を構えている人（たち）」と違って」というのは、それは、まさに「上流階層や富裕層」の人たちということになるのだろう。そして、「……私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆の前に立っているこの西洋人がいかにも珍らしく見えた」とある。——これは、ホテルから出て来て泳いでいる西洋人たちとは、まさに「上流階層」（或いは「富裕層」）の人たちであり、特に「上流階層」の人たちというのは、いわば「道徳や倫理或いは宗教、その他」などの理由から、自分たちの「裸体」を人前に曝すようなことを極力避けていたのである。

一方、先生と一緒にいた「西洋人」という人は、恐らく、「上流階層」でも「富裕層」でもなく、ごく一般の「西洋人」であり、それゆえ、「……猿股一つで済まして皆の前に立っていた」ということになるのだろう。——ところで、当時の「日本人」は、一体、どのような「格好」で泳いでいたのかと問えば、男性の場合は、ふつうは「褌」で泳いでいたかと思うが、一方、女性の場合は、最初の頃は、ただ見ているだけか、或いは、衣服を身に付けて、海水を浴びたり浸かったりすることが中心で、泳ぐというようなことはあまりなかったようで、明治二十三年には、日本で初めての女性用水着が誕生し、そして、明治末期には、現代の「水着のルーツ」につながる「シマウマ水着」などが、初めて、ここに登場することになるのである。

\*

\*

七、先生への好奇心

## 七、先生への好奇心(二)

さて、本文に戻りたいが、「……純粹の日本の浴衣を着ていた彼(西洋人)は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」とある。そして、「……彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこんなにいる日本人に、一言二言何か言った。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。——私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」(本文)とある。

\*

\*

さて、少し前の本文に、「……私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた」というのがあるが、これは、「……先生が丁度着物を脱いで、(禪姿になつて)、海へ入ろうとするところであつた」ということであり、しかも、先生は、「……砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した」とある。これは、西洋人の「頭に護謨製の頭巾を被っている」のを真似てのことなのか? それとも、暑さよけか? それとも、泳ぐ時に、「……髪の毛が濡れて邪魔になつたりするので、そうしているのか?」、そのどれかと思うが、一方、色白の西洋人は、まさに「猿股一つ」の状態で、二人は、並んで浜辺を下りて行き、彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そして、「……遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」とある。

さて、「……二人とも泳ぎ出した。(そして)、彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った」とある。それでは、先生は、一体、どのような「泳ぎ方」をしたのだろうか? 頭がずつと見えていたということは、もちろん、今日の「自由形」(クロール泳法)ではなく、むしろ、日本泳法の「抜き手」という方法だと思ふが、それは、首から上を出したままの状態で、抜き手で泳ぐというものである。もちろん、「平泳ぎ」もあつたかと思ふが、それはともかく、沖の方まで行つて、また、一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこかにいつてしまつた」ということであれば、それは、まさに「泳ぐことを第一の目的」として、この海岸(浜辺)へと来ていたのであり、しかも、泳ぎが軽々と出来るだけの「健康な肉体」をも持ち合わせていたということである。

## 八、先生への接近(二)

さて、「私」という人は、「……彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうも何処かで見えた事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしても何時何処で会った人が想い出せずじまつた。——その時の私は屈托がないというより寧ろ無聊（退屈）に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけて見た。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い付たくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって岸の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った」（本文）とある。

\* \* \*

まず、その時の「私」は、無聊（退屈）に苦しんでいた。これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまう時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、もしかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくださいませんか」というような感じであり、（そういう雰囲気を感じ出して、だからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになるのであり、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしい感じの人だ、ということになるのだろう）。その「感じ」から何故か「心惹かれていく」のであり、それゆえ、「……私は急にその後が追い掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳ねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった」とある。——この「私の目的」というのは、むしろ、先生と「懇意」になるということであるが、一方、先生は、恐らく、勢いよく泳いで自分の方に迫って来る若者を見た時に、今は他人を避けて生きている先生にとつて、取り敢えずは、それを「避けた」ということになるのだろう。

### 九、先生の眼鏡を拾い上げる（三）

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と

帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それには殆ど注意を払う様子が見えなかった。最初一所にきた西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。——或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」(本文)とある。

\*

\*

さて、この場面は、「私」という人は、何度も「先生」との接触を試みようとしたが、なかなか「……物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。しかも、先生はいつでも一人であった」とある。——これは、「先生」という人は、何となく人との「関わり」を避けるような雰囲気はどこか醸し出していたということである。——ところが、それは、ほんの一寸した偶然の「出来事」から、何と「先生」と接触できる機会を得ることになるが、それは、「……或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とある。——これは、「私」という人が、「先生」の「行動」を意識して、注意深く見守っていたからであり、そうでなければ、誰も気づきようのない余りにも小さな一瞬の「出来事」(眼鏡が板の隙間から下へ落ちた)のを見つけて、「……私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とはならないのである。——この先生の「有難う」は、ごく自然な「有難う」ではあるが、しかし、もし、「私」という人が見付けてくれなかったら、眼鏡をかけない先生は、その「眼鏡」を見つけ出すのにかなり苦労したかも知れないという、そういう「意味合い」も含まれた「有難う」にもなるのである。これによって、二人は、全くの「他人同士」ではなく、まさに一つの「縁」が出来たということであり、だからこそ、次のような積極的な「行動」も可能になるのである。

#### 十、先生の後につづいて海へ飛び込んだ(三)

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上

寝た。私もその真似をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言つて私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいかなかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。——私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここに居るつもりですか」と聞いた。考えない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられた。これが私の口を出した先生という言葉の始まりである。(本文)

\*

\*

さて、一つの「縁」が出来たことで、「私」という人は、非常に積極的に「先生」のところへと近づいて行くが、それは、「……次の日は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁(約二二八呎)ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」とある。——これは、「先生」にしてみれば、恐らく、「若者」は自分の後を追って泳いで来るだろうと予測していたことであり、それは、そういうことが実際に一度あったからであり、だからこそ、今度は逃げずに、「……先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」となるのである。——それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それは、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、この「若者」であれば、あるいは自分の「話し相手」として「悪くはないかも知れない」と次第に思うようになって行くのである。——そして、しばらく、先生は、手足の運動を已めて仰向けになつたまま浪の上に乗っていたが、やがて、その姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言つて、二人とも、また元の路を浜辺へと引き返して来るのであった。そして、——私はこれから先生と懇意になった。そして、それから三日目の午後だったと思うが、先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここに居るつもりですか」と聞いたので、何の考えない私は、「どうだか分かりません」と答えた。一方、にやにやと笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいられた。これが私の口を出した先生という言葉の始まりであった、とある。

まず、二人とも相手の「名前」を知らない状態であり、それゆえ、相手をどう呼ぶかは、一つの問題になるが、先生の方は、自然と「君は」という言葉を使っている。一方、「私」という人は、どう呼ぶかは少し迷つたかと思うが、ふつうであれば、「あなたは」と呼ぶところかも知れないが、「私」という人は、思わず「先生は」と言つてしまつたということである。そして、なぜ、「先生」と呼んだのかは、「私」自身にもよく分からなかったかも知れないが、しかし、潜在的には、そのように「相手」を見ていたということになるのだろう。(例えば、「私」という人は、いわば東京帝国大学(今の東大)の学生である

ので、それなりの能力《教養》もあるかと思うが、一方、「先生」という人も、外国人と一緒にいたこともあったので、ふつう一般の人とは少し違って、少なくとも英語を理解でき得る能力《教養》などはあるのだらうと見ているのである。

#### 十一、先生と懇意になる(三)

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付きになったのは不思議だと言つたりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言つた。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑つた。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」と言つたので私は変に一種の失望を感じた。(本文)

\*

\*

さて、「……私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。——ここで、再び、なぜ「先生先生」と呼ぶのが問題になっているが、それに対して、「……私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。もちろん、その通りだとしても、すべての「年長者」に対して、すべて「先生先生」と呼ぶ人はいないのであり、やはり、それなりの「存在感や雰囲気などを持った人」でなければ、ふつう「先生」とは呼ばないものである。……

また、「……私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。それに対して、先生は、日本人にさえあまり交際を持たないのに、そういう外国人と近付になったのは不思議だと言つたりした」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、やはり、誰か「話し相手」というものをどこか渴望するようなところがあったのである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、人生をあれこれ深く語り合える、そういう「相手」(話し相手)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばつたりとめぐり逢つたということである。

また、「私」という人は、「……最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言つた。それに対して、先生はしばらく沈吟したあとで、どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですかと言つたので、

私は変に一種の失望を感じた」とある。——これは、「私」にとって、「先生」という人は、もちろん、初めて会った人に過ぎないが、それでも、全くの「他人」として見えているというよりは、むしろ、なぜか遠い昔から知っているような感じに見えているということであり、それは、「先生」に対して、どこか「親しみ」を感じているからということになるのだろう。例えば、われわれ人間は、毎日、毎日、実に様々な人間と直接的でも間接的にも出合っていることになるが、その中で、ある人に対しては、なぜかいつまでたっても「他人」という感じが残る人と、ある人に対しては、なぜか最初の頃からどこか「親しみを感じるような人」とがいるかと思うが、それは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、いわばお互いの「相性や雰囲気或いは考え方や性格その他などがどこか合うような場合と合わないような場合とがある」ということになるのだろう。

さて、ここまですが「先生」と「私」との鎌倉の海岸（浜辺）の「海水浴場」での二人の「出逢いの場面」になるかと思うが、この二人の「出逢い」というのは、作品上の設定では、恐らく、明治天皇崩御の一年前の「明治四十四年」（一九一一年）の夏の鎌倉の「海水浴場」ということになるかと思う。

\* \* \*

十二、東京に帰る

十二、東京に帰る（四）

さて、私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になったつもりでいたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛ったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える。（本文）

\*

\*

まず、私は先生と別れる時に、「……これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。すると、先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであった。——これは、他人を避けて生きている先生にとつては、まさに「最上級の歓迎の言葉」だと思つた。まだ若い「私」という人にとつては、どこか物足りない返事で少し失望されられたとある。しかし、「……私はこのような軽微な失望を繰り返しながらも、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私はずもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた」とある。これは、もちろん、自分はなぜ「先生」に「心惹かれるのだろうか？」という問題でもあり、先生が醸し出しているその「魅力と秘密」とは、一体、どこから生じて来るものなのだろうか？ それは、「……もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた」ということであり、（だからこそ、先生宅を頻繁に訪ねるようになるのである）。そして、先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来たことは、「……先生は始めから私を嫌っていたのではなく、傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える」とあるが、それは一体なぜなのかの「疑問や問題点」などは、まさに第三部の「先生と遺書」の中でやがて明らかになって行くという展開になるのである。

\* \* \*

ところで、私はむろん先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来たが、授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思いつながら、しかし、帰って二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなり、その上、大都會の空気が往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じ、私はしばらく先生の事を忘れた。――授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みが出来てきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始め、そして、私の頭には再び先生の顔が浮いて出て、私はまた先生に会いたくなつたのである。(本文)

ちなみに、この頃の帝国大学の「新学期」というのは、今とは違って、九月から始まつていたとともに、この「私」という人は、大学三年目であり、しかも、当時の大学は「三年制」で三年で卒業になるのである。

### 十三、先生宅を訪ねる(四)

私が始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであつた。――私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれた。私は会釈して外へ出た。賑やかな町の方へ一丁(約一〇九段)ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になつた。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。(本文)

\* \* \*

さて、いよいよ「先生の宅」を訪ねることになるが、最初は、留守で、二度目も留守であつたが、その時は、すぐに玄関先を去らずに躊躇してそこに立っていると、やがて、奥さんらしい人が代つて出て来て、美しい奥さんであつたが、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と話してくれた。しかも、「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれたとある。――まず、「先生の宅」を訪ねてみたら、二度とも留守であつた。先生からは、いつでも大抵宅にいと聞いていたので、理由もない不満をどこかに感じたが、その美しい奥さんらしい人からは、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と鄭寧に先生の出先を教えてもらふことになる。――それでは、この「或る仏」とは、一体、誰なのか? こここそ、先生の「行動」「言動」のすべての「謎と答え」とが奥深く隠されているのであるが、それはここでは伏すとして、「私」という人は、やがて、散歩がてら雑司ヶ谷へ行つ

てみる気になるが、それは、そこへ行って、先生に会えるか会えないか（果たして、そのどっちなのかという、そういう）好奇心も働いたということである。

#### 十四、雑司ヶ谷の墓地（五）

私は墓地の手前にある苗島なえはたけの左側から這入はいって、両方に楓かえでを植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端はすれに見える茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。そして、「どうして……、どうして……」と、先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼の中に異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応えられなくなった。「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と、先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいった。けれどもその表情の中には判然はつきり言えないような一種の曇りがあった。私は私がどうして此処ここへ来たかを先生に話した。すると、「誰だれの墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞くので、「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」と答える。「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたららしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解わらなかつたとある。（本文）

\*

\*

さて、この雑司ヶ谷ぞうしがやの墓地での「出来事」は、夏目漱石の『こころ』という作品の中なかでも、最も大事な「場面」の一つであるが、それは、次のような理由からである。——つまり、この「先生」のその尋常じんじょうとも思えぬ「驚き方」、それは、「どうして……、どうして……」という、この「先生」の異常なまでの「心の激しい動揺」、こそは、まさにすべてを物語っているのであり、それは、「……決して誰にも見られてはいけないところを、突然、誰かに知られてしまったような、或いは、決して誰にも知られてはならないことを、突然、誰かに知られてしまったような」時の、そういう時のような凄まじいまでの「動揺と驚愕おどろおどろと戦慄せんりつ」とに襲われているのである。——このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものを、この「私」という若者にもしかしたら感づかれてしまったかも知れないという「動揺と驚愕と戦慄」であり、だからこそ、先生は、「どうして……、どうして……」と叫なばずにいられず、また、「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と問い正しては、さらに、「……誰だれの墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞きかすにはおられず、そして、「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であったとある。——つまり、このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものについて、当然のことながら、この「若者」にそれを感じられるはずもないと考え直して、やっと思とくしん得心とくしん（安心）したということである。

## 十五、墓の墓標と銀杏の木（五）

さて、「……先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあった。全権公使何々というのもあった。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「……これは何と読むんでしよう」と先生に聞いた。「……アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」と言つて先生は苦笑した。——先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼此言いたがるのを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何とも言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利かなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶら一緒に歩いて行つた。——「……すぐお宅へお帰りですか」、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。「……先生のお宅の墓地はあそこにあるんですか」と私がまた口を利き出すと、先生は、「いいえ」と答える。そこで、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と、先生はこれ以外に何も答えなかつた。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あそこには私の友達の墓があるんです」、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」、「そうです」、先生はその日これ以外を語らなかつた。（本文）

さて、先生と私は「通り」へ出ようとして墓の間を抜けたが、その時に、若者は、様々な墓石の「墓標」を見ては、しきりに彼此言いたがるのを、先生は、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに、「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありますね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何も言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ一緒に歩いて行き、そして、「……すぐお宅へお帰りですか」と聞くと、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「……先生のお宅の墓地はあそこにあるんですか」と聞くと、「いいえ」と答え、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と答えるだけであつた。それから、一町（約一〇九呎）ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あそこには私の友達の墓があるんで

す」と言い、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」と聞くと、「そうです」と答えるだけであった。先生はその日これ以外に何も語らなかったとある。

さて、この場面は、「墓地」(「人の死」) というものに対する「若者の意識」と「先生の意識」との「決定的な違い」がはっきりと浮き彫りにされているところであり、それは、この「若者」にとっては、「墓地」(「人の死」) というのは、まだ自分とは「直接には何の関係ない」いわば「他人事の場合」に過ぎないが、一方、先生にとっては、決して「他人事の場合」などではなくて、先生のその「人生」とまさに直結している、「現実の場所」になっているのである。——それにしても、毎月一度の「墓参り」(その命日)を欠かさないとするのは、誰がどう考えても「多過ぎる」という感じを抱かせることになるが、その「謎」も、第三部の「先生と遺書」の中で、やがて明らかにされる事になるのである。

#### 十六、先生宅訪問を重ねる(六)

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であった。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時も静かであった。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであった。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない。しかし私の私だけにはこの直感が後になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと言われても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉しく思っている。人間を愛し得る人、愛せずにはいけない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を拡げて抱き締める事の出来ない人、——これが先生であった。(本文)

\*

\*

さて、先生のお宅を訪ねることを何度も重ねていくうちに、次のようなことが分かって来た。それは、「……先生の私に対する態度は、初めて挨拶をした時も、懇意になったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時も静かであった。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていたが、それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない」とある。——つまり、先生にはどこか他人を避けて近づけないようにしているところがあるとともに、一方では、「私」という若者をなぜか惹きつけて止まない不思議な「魅力と謎」とを深く秘めているところがあつたということである。そして、その「先生」という人は、もともとは「人間嫌い」でも何でもなく、「……人間を愛し得る人、愛せずにはいけない人、それでいて、(ある出来事をきっかけとして)、自分の懐に入ろうとするものを、(無条件で)手を拡げて抱き締める事の出来ない人(或いは出来なくなってしまう人)、——これが先生であった」ということである。

## 十七、墓参と散歩の区別（六）

今言った通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があった。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であった。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞に過ぎなかった。私の心は五分と経たないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れていた。再び、それを思い出させられたのは、小春の尽きる頃の或る晩の事であった。先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏の大樹を眼の前に想い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参に行く日が、それからちようど三日目に当たっていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であった。私は先生に向かって、「……先生雑司ヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしようか」と聞くと、「……まだ空坊主にはならないでしょう」と言うので、そこで私はすぐさま、「……今度お墓参りにいらつしやる時にお伴をしても宜ござんすか。私は先生と一緒にあすこいらが散歩してほしい」と言うと、先生は、「……私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」と答えるので、「……しかし、ついでに散歩をなすつたらちようど好いじゃありませんか」と言うと、先生は何とも答えなかつた。

しばらくしてから、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言つて、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとする風に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になつた。「……じゃお墓参りでも好いからいつしよに伴れて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」と言つた。実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると、先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであつた。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。「私は」と先生が言つた。「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といつしよにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」と答えるのであつた。（本文）

\*

\*

さて、この場面は、まだ若い「私」という人と、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」との、人の「死」やその「墓参り」に対する「考え方」の「根本的な違い」の表れているところであり、それは、次のようなことである。——まず、この「私」という若い人（書生）の、その「家族」（両親や兄や妹その他）などは、まだ生きてるのであり、それゆえ、まだ親しい人の「死」に直面したという生の「経験や想い出」などの持ち合わせがないのである。それゆえ、人の「死」もその「墓参り」も、まだどこか他人事のように感じられて、その「重み」（「現実味」「リアリティー」）というものが感じられないのである。だからこそ、「……実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われた」となるのである。——つまり、「散歩」と「墓参り」、それは「全く違うもの」であるが、この「私」という若者にとつては、ほとんど同じように見えているのである。

一方、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」にとつては、自分の「行動」（言動）が、

結果として、親友を「死に追いやるようなこと」になつてしまったことに、……あの時、自分は、なぜ、あのようなことを言つてしまつたのか？ 或いは、あの時、自分は、なぜ、あのような行動をしてしまつたのか？ そのような「後悔の念や自責の念」などに襲われているのであり、その「想い」が、先生の「心」を「深く苦しめている」とともに、毎月一度の「墓参り」を欠かさずさせているのであり、それゆえ、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言うのも、それは、まさに親友にいわば「懺悔（謝罪）に行つてゐる」ようなものであり、それゆえ、他人は邪魔になるだけであるとともに、そのような「姿」は、誰にも見られたくないし、ましてや、誰よりも「妻」に知られることを何よりも恐れているのである。それが、つまり、「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といつしよにあそこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴つて行つた事がないのです」という言葉になるのである。

#### 十八、私は寂しい人間です（七）其の一

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるところの時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。（本文）

\*

\*

さて、「……私は不思議に思った」とある。これは、「……何かよほどの理由があるのだらうとは思つた」が、「……私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。（それゆえ）、私はただそのままにして打ち過ぎた」。——それは、つまり、先生の「心の中」を根ほり葉ほり探るようなことはしなかつた。それが結果としてよかつたのであり、「……もし間違えて裏（探り）へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたからである」となるのである。

#### 十八、私は寂しい人間です（七）其の二

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなものの宅へやつて来るのですか」、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔なんですか」、「……邪魔だとは言いません」と言う。なるほど迷惑という様子は、先生の何処にも見えなかつた。私は先生の交際の範圍の極めて狭い事を知つていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものは殆

ど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。すると、「……私は淋しい人間です」と先生が言った。「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいきます。だからなぜそう度々来るのかと言って聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いた。この問答は私にとつてすこぶる不得要領のものであったが、私はその時底まで押さずに帰ってしまった。(本文)

\*

\*

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなものの宅へやってくるのですか」と聞くと、「私」という人は、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません。——しかし邪魔なんですか」と聞き返すので、先生は、「……邪魔だとは言いません」と言う。そして、「……私は淋しい人間です」、「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいきます。だからなぜそう度々来るのかと言つて聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかったとある。

まず、先生が、「……あなたは何でそう度々私のようなものの宅へやってくるのですか」と聞くのは、それは、「……一体、何がよくてそう度々やって来るのですか」と聞いていたのである。それに対して、「私」という人は、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません」と答えている。それは、まだ本人にも「よく分かつていない」ということなのかも知れない。すると、先生は、「……私は淋しい人間です」と言うのであった。

それでは、この「……私は淋しい人間です」というのは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、一言で言えば、それは、まさに「話し相手」がないということであるが、しかし、それは、ごく「ふつう一般に世間話などをするような話し相手」のことではなく、もっと「心を割つて親しく話し合える話し相手がいない」ということである。だからこそ、(比較的信頼できて親しく話せる)「……あなたの来て下さる事を喜んでいきます」となるのである。——これは、何度も書き記しているように、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もっと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」(真の「話し相手」)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばつたりとめぐり逢つたということである。

そして、「先生」という人は、「心の中」ではまさに真に信頼でき得る「話し相手」というものを、知らず識らずのうちに、探し求めていたのであり、一方、「私」という人

は、無聊（ぶりょう）に苦しんでいたが、これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまふ時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものがあり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真（まこと）に「深く満たしてくれるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、若（わか）しかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というような感じであり、そういう雰囲気を醸し出していたからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになったのである。

ところで、先生は、私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いて来た。この間答は私にとつてすこぶる不得要領（ふとくようりょう）（要点がはつきりしないもの）であつたが、私はその時底まで押さずに帰つてしまつたとある。——この「底まで押さずに帰つた」というのは、恐らく、「……なぜ、年齢のことなどを聞くのですか？」と問い詰めることはせずに、そのまま帰つたということである。

#### 十八、私は寂しい人間です（七） 其の三

しかし、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つた。私は外の人からこう言われたらきつと癩（しやく）に触つたらうと思う。しかし、先生にこう言われた時は、まるで反対であつた。癩（しやく）に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。「……私は淋しい人間です」と、先生は、その晩またこの間の言葉を繰り返した。「……私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか……」と言つと、「……私はちつとも淋しくはありません」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞く。ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。そして、「……あなたは私に会つてもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませう」と、先生は、こう言つて淋しい笑い方をしたとある。（本文）

さて、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つたとある。——これは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もつと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」（真の「話し相手」）というものを二人とも非常に強く渴望していたということである。すると、先生は、「……私は淋しい人間ですが、ことによ

るとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか」と言うのと、「……私はちつとも淋しくはありませぬ」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞くのであった。

これは、誰であれ、特に若い時期には、「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であるが、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人は、若しかししたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というように感じたということである。しかし、「先生」という人は、「……あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。（それゆえ）、あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならぬくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませぬ」と言うのであった。——それは、一体、何故なのか？（本来であれば、この若者のその期待に応えて、彼の人生を正しく導くようなことを言ったりやったりして上げたいが、また、本来、それができ得る人でありながら）、先生の「言葉」を借りて言えば、「……私は世間に向かつて働きかける資格のない男だから仕方がない」（つまり私は他人に「働きかける資格」のない人間だからそれが出来ない）ということであり、この「謎めいた言葉」というのは、「第三部」（先生と遺書）を読み解くことによつて、やがては明らかになるということである。

\*

\*

十九、先生宅で食事や酒を飲む

十九、先生宅で食事や酒を飲む(八) 其の一

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった。——普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇から言つて、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因かどうかは疑問だが、私の興味は往來で出会う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれと言つてとくに奥さんについて語るべき何物も持たないような気がした。——これは奥さんに特色がないと言うよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正當かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない。(本文)

\*

\*

この場面は、まさに「書いてある通り」だと思つて、まず、「……その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった」とある。この「先生の食卓で飯を食うようになった」とすれば、当然のことながら、先生とはより親しくなつて行くだろうし、また、奥さんとも話をするようになって行く。——例えば、人と「親しくなる方法」の一つとして、食事を一緒にする(或いは「飲み食いを一緒にする」というのは、まさに「基本中の基本」(古典中の古典)であり、例えば、「友達関係」であれ、「男女関係」であれ、その他、どのような関係であれ、相手と「親しくなろう」とするならば、その極めて有効な「方法」の一つとして、遙か遠い大昔から、相手と「食事を一緒にする」(或いは「飲み食いを一緒にする」)ことによつてこそ、一般的に、それだけ「親しさを増して行く」ことになるのである。それはともかく、「私」という人にとつて、「……始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない」とあるが、しかし、やがては、「奥さんとも親しく話をするようになる」ことによつてこそ、この「私」という人は、今まで知り得なかつた「先生に関する実様な事実を知る」ことになるのである。

十九、先生宅で食事や酒を飲む(八) 其の二

さて、ある時、私は先生の宅で酒を飲まされた。その時、奥さんが出て来て傍で酌をしてくれた。先生は、いつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。「……珍ら

しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」、「……お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。いい心持になるよ」、「……ちつともならないわ。苦しいぎりでもあなたは大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上がると」、「……時によると大変愉快になる。しかし何時でもという訳にはいかない」、「今夜はいいかです」、「今夜はいい心持だね」、「……これから毎晩少しづつ召し上がると宜ござんすよ」、「そうはいかない」、「……召し上がって下さいよ。その方が淋しくなくて好いから」と言うのであった。(本文)

\*

\*

さて、この「夫婦の会話」は、実に自然かつ滑らかに進んでいるが、それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、この「二人の間」には、第三者の「私」という人が存在するからである。——まず、夫が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。そして、「……珍しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」となるのである。——だとすれば、先生は、酒を飲む時は、ほとんど「ひとりで飲んでいること」が多くて、奥さんは傍にいて、その先生のお酒のお酌をしていることになるのだろう。だとすれば、例えば、「夫婦二人」だけで、「……世間話をするにしろ、自分たちの話をするにしろ、その他、どのような話をするにせよ」、どうしても「相手との直接的な対話形式」にならざるを得ないものである。——つまり、「……夫がこう言えば、妻はそれに対してこう応え、妻がこう言えば、夫はそれに対してこう応える」というような二人だけの「対話形式」がずっと続くことになる。特にこの「先生」の場合は、妻と直接面と向かつて「一対一」になることは、死んだ親友をなぜか「想い出す」ことになってしまい、それは、非常に辛いことになるのである。——ところが、そこに「第三者」が入れば、「夫と妻だけ」の対話だけではなく、「夫から第三者」(逆に「第三者から夫」)、また、「妻から第三者」(逆に「第三者から妻」)というように、実に様々な「対話形式」が自然と生じて来ることになり、それだけいわば「楽な気持ち」になれるのである。

例えば、その「第三者」が「夫婦の間」の「実の子供(たち)」であれ、また、可愛がつている犬やネコの「愛玩動物」(ペット類)であれ、或いは、親戚、親友、友達、その他、誰であっても、いわば気心の知れた「第三者」であれば、「夫婦だけの時」とはまた違つて、一般に、何かもつと「楽な気持ち」になれるものではないかと思う。特に「先生」の場合は、妻と「直接面と向かうこと」を出来るだけ避けているのであり、それゆえ、そこに「私」という「第三者」がいることで、最初から最後までずっと妻と「向き合う」必要がなくなり、それだけ「楽な気持ち」になれて、この時の「夫婦の会話」のように、実に自然かつ滑らかに進んで行くことにもなるのである。

## 二十、夫婦間の子供の話(八)

ところで、先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は、宅の中にいるものは先生と私だけのよう気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。私は、「……そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らな

った。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。「……一人貰もらってやろうか」と先生が言った。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。「……子供はいつまで経たったってできっこないよ」と先生が言った。奥さんは黙もくっていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「天罰だからさ」と言いって高く笑わらった。(本文)

\*

\*

それでは、なぜ、先生「夫婦」には、子供がいなかったのだらうか？ それは、次のような理由からなのである。——まず、「……子供でもあると好いいんですがね」と、奥さんは、私の方を向いて言いった。これは、極めて「大事な言葉」であり、それは、奥さんの心の底からの「本音」そのものだからであり、この「言葉」に対して、夫（先生）がどのように「反へん応おう」するのかわをじつと見ているのである。それに対して、夫（先生）は、「……一人貰もらってやろうか」と言いった。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向むいたとある。これは、当然のことながら、夫（先生）の「子供こそが欲しい」であり、何も「他人の子供」が欲しいということではないのである。すると、夫（先生）は、実に「恐おそるべき言葉」を発するのである。それは、「……子供はいつまで経たったってできっこないよ」と先生が言いった。この「言葉」を聞いて、妻（奥さん）は、まだ「希望」を捨すてずに抱かかっていた、その「想おもい」が、まさに一気に「地獄の底」へと突き落とされてしままうのである。だからこそ、奥さんは黙もくっていた（いや黙もくり込むしかなかったのである）。そこで、「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「……天罰だからさ」と言いって高く笑わらった、とある。——それでは、その「天罰」とは、一体、具体的にはどのようなものになるのかについては、ここでは「伏ひそして」、後述の「第三部」（先生と遺書）のところこで、出来るだけ詳しく考察してみたいと思おもう。

## 二一、仲の好い夫婦の一对（九）

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。家庭の一員として暮くした事のない私のことだから、深い消息は無む論解わらなかつたけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。（奥さんの名は静しずと言いった）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞きこえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなだ素直すじであった。ときたまご馳走ちそうになつて、奥さんが席へ現あわれる場合などには、この関係が一層明らかあに二人の間あいだに描えがき出でされるようであった。——先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行いった。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰もらった絵端書えはぎをまだ持っている。日光にっこうへ行いった時は紅葉もみぢの葉を一枚封じ込めた郵便も貰もらった。当時の私の眼に映うつった先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。(本文)

\*

\*

さて、私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。そして、先生は、「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞き

こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であった。ときたまご馳走になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出された。——先生は時々奥さんを伴れて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつたとある。——これは、「私」という人から見た、まさに先生「夫婦」のいわば「外的事実」であるが、しかし、一方、先生「夫婦」の間には、当然のことながら、二人だけにしか解りようのない「内的事実」というものもあつたのである。それは、まさに次のようなものである。

二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（九）其の一

そのうちにたった一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていたので、格子の前に立っていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つた。——妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は帰つたなりまだ袴を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。（本文）

\*

\*

さて、今度は、先生と奥さんとの「喧嘩」（言逆い）であるが、それは、「……先生の宅の中から、尋常の談話でなくつて、どうも言逆いらしい声が聞こえてきた。そして、そのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた」とある。——もちろん、これだけでは、この夫婦がどのようなことで揉めているのかは全く分からないが、しかし、もうちよつと先を読み進んでいくと、次のような言葉が出て来る。それは、先生が、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまつたんです」、「……妻が私を誤解するのです。それを誤解だと言つて聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。むろん、これだけでは、具体的なことは何一つ分からないが、しかし、この先をずっと読み進めていけば、やがては分かつて来る問題であり、それゆえ、これはこのままにして前に進みたいと思う。——ところで、「私」という人は、その時、どうしようかと迷つたが、そのまま下宿へ帰つた。……すると、驚いたことに、「……先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた」とある。もしそうだとすれば、先生の「宅」と「私」という人の「下宿先」とは、二人が歩いて、「往き来でき得るような距離」（約一時間内）に住んでいるというのであり、そして、二人は、散歩に出かけることになるのである。

その晩私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であった。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険の出来ない人であった。「……今日は駄目です」と言って先生は苦笑した。「……愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。——私の腹の中には始終先刻の事が引つ懸っていた。肴の骨が咽喉に刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止した方が好かるうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。「……君、今夜はどうかしていますね」と先生の方から言い出した。「……実は私も少し変なのです。君に分りますか」と聞かれて、私は何の答えもし得なかつた。「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」と先生がまた言った。「どうして……」とだけ、私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。「……妻が私を誤解するので。それを誤解だと言って聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……どんなに先生を誤解なさるんですか」と聞くと、先生は私のこの問いに答えようとはしなかつた。「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。（本文）

\*

\*

さて、「その晩」（正確には夜八時過ぎ以降であるが）、外で、私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。（中略）、そして、「……今日は駄目です」と言って先生は苦笑したとある。これは、前に、先生が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した時には、先生は、「……今夜は好い心持だね」と言つていた。ところが、今回は、「……今日は駄目です」と言つて先生は苦笑したとなるのである。それは、当然のことながら、奥さんと「喧嘩」（言逆い）を起こしているからである。——つまり、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」、「……妻が私を誤解するので。それを誤解だと言つて聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであるが、この「問題」を解く鍵としては、次のような「言葉」を参考までに書き記しておきたいと思う。

それは、少し後で、「私」と「奥さん」の「二人の対話」の中に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く變つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」、「書生時代よ」、「……じゃ先生がそう變つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそういわれると実に辛いですね、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからというだけで、取り合つてくれないうです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改め

るからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなあの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。——つまり、「……先生は、なぜ変わつてしまつたのか？ それをどうしても打ち明けてはくれなかつた」ということである。

## 二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（十）其の三

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁（約一〇九頁）も二丁（約二一八頁）もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。「……悪い事をした。怒つて出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀（かわい）そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」、先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。「……そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽（こつげい）だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」、「……中位（ちゆうゐ）に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとつて少し案外（あんがい）らしかつた。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅（うち）へ帰るには私の下宿（しよく）のついで傍（そば）を通るのが順路（じゆんろ）であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に濟（た）まないような気がした。「……ついでにお宅（たく）の前までお伴（とも）しましょうか」と言つた。先生は忽（たちま）ち手で私を遮（さ）つた。「……もう遅いから早く帰りましたまえ。私も早く帰つてやるんだから、妻君（さいくん）のために」、先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかつた。——先生と奥さんの間に起つた波瀾（はらん）が、大したものでもない事はこれでも解（わか）つた。それがまた滅多（めつた）に起る現象（げんさう）でなかつた事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほほ推察（すいさつ）ができた。それどころか先生はある時こんな感想（かんさう）すら私に洩（も）らした。（本文）

\* \* \*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……悪い事をした。怒つて出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀（かわい）そうなものですね。私の妻などは私より外（ほか）にまるで頼りにするものがないんだから」、そして、「……もう遅いから早く帰りましたまえ。私も早く帰つてやるんだから、妻君（さいくん）のために」と、先生は最後に付け加えたのである。——これは、先生がいかにどれだけ「奥さん」のことを心の底から愛しているかがはっきりと分かるところであり、だからこそ、次のような「言葉」を先生は（ある時）語ることもなるのである。——それは、先生の「本心（ほんしん）」そのものである。

## 二三、天下にただ一人しかない相手同士（十）

つまり、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴（こ）えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思つてくれています。そういう意味から言つて、私たちは最も幸福（きふ）に生れた人間の一对（いっぴ）であるべきはずです」。——私は今前後（きんぜんご）の行き掛（が）りを忘れてしまつたから、先生が何のためにこんな自白（じはく）を私にして聞かせたのか、判然（はつきり）言（い）う事が出来ない。けれども先生の態度（たいど）の真面目（まじめ）

であったのと、調子の沈んでいたのとは、今だに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間と言い切らないで、あるべきであるかと断わったのか。私にはそれだけが不審であった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事実をたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑<sup>うたぐ</sup>らざるを得なかった。けれどもその疑<sup>い</sup>は一時限りどこかへ葬<sup>ほうむ</sup>られてしまった。(本文)

\*

\*

さて、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对<sup>いっつい</sup>であるべきはずですよ」と言うのであった。

これは、お互いが「天下にただ一人しかない相手」と深く思っているのであり、それゆえ、当然のことながら、この世で誰よりも「仕合わせな夫婦の一对<sup>いっつい</sup>」であるべきはずであるが、実際は、そうなっていないところに、先生「夫婦」には何か大きな「謎<sup>めい</sup>」が奥深く匿<sup>かく</sup>されているということである。

\*

\*

二四、私と奥さんの会話

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向いで話をする機会に出合った。先生はその日横浜を出帆する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋へ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に来た友人に対する礼義としてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているようにと言ひ残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。(本文)、——この「奥さん」と話をする事によつてこそ、今まで知り得なかつた先生に関する「実に様々な情報その他」などを得ることになるのである。

その時の私はすでに大学生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていて、しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ帰つて少し経つてから始めて分かつた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。——先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切の關係をもっている私より外に敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜しい事だと言つた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」と答えるがりで、取り合はなかつた。私にはその答えが謙遜過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰彼を捉えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」と言つた。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇氣が出なかつた。(本文)

さて、「私」という人は、八月の「夏休み」に鎌倉の海水浴場で始めて「先生」に出逢つた。そして、九月にはいよいよ「新学年」が始まるが、この時、「私」という人は、恐らく「大学三年生」になつたはずであるが、本文では何も詳しくは記されていない。しかも、当時の「帝国大学」は「三年制」であつた。そして、九月に「……始めて先生の宅へ来た頃から見るとずっと成人した氣でいた」とある。——それは、つまり、九月、十月、十一月……と過ぐすことで、「……奥さんとも大分懇意となり、私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をする」ようになっていたのである。

ところで、先生は大学出身(帝国大出)でありながら、何もしないで遊んでいた。それ

は、両親から譲り受けた「財産」がかなりあったからではあるが、それに対して、「……私は常に惜しい事だと言った」。それは、「……世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである」とある。——それに対して、先生は、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と語るだけであった。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつたとある。

それでは、先生は、なぜ、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と言うのか？ この「問題」は、第三部の「先生と遺書」のなかで解明されるべきものであり、それゆえ、ここでは伏して前に進めたいと思う。

#### 二四、私と奥さんの会話（十一） 其の二

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのじゃないですか。だから気が毒ですわ」と言う。「……しかし先生は健康から言つて、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。分からないから気の毒でたまらないんです」、奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけでは微笑が見えた。外側から言えば、私の方がむしろ真面目だつた。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く變つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」と私が聞いた。「書生時代よ」、「……書生時代から先生を知つていらつしやつたんですか」と聞くと、奥さんは急に薄赤い顔をした。（本文）

\*

\*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品の中でも、この「二人の会話」で様々な「言葉」というのは、実に「大事なもの」であり、まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」とある。これこそは、最大の「謎」の一つではあるが、それに対して、奥さんは、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟つていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのじゃないですか。……やっぱり何かやりたいのじゃないですか。それでいて出来ないんです。だから気が毒ですわ」

ということであるが、それは、一体、なぜなのか？ その真の「理由」を、二人（私も奥さん）も全く「知らない」状態にあるということである。そして、奥さんは、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変わってしまったんです」、「……若い時っていつ頃ですか」、「書生時代よ」と続くのである。

#### 二四、私と奥さんの会話（十二） 其の三

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と言った。奥さんの父親はたしか鳥取かどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸と言った時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥さんは冗談半分そう言ったのである。ところが先生は全く方角違いの新潟県人であった。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈しても見た。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでいるのだろうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もともとどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。（本文）

\*

\*

さて、奥さんは「東京」の人であった。父親はたしか「鳥取」かどこかの出であり、母親は、まだ江戸と言った時分の「市ヶ谷」で生れた人であった。それゆえ、奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と冗談半分にそう言っていたのである。一方、先生は、全く方角違いの「新潟県人」であった。それゆえ、先生と奥さんとは、「郷里の関係」から親しくなった間柄ではないことは明らかであった。——つまり、二人は、先生が「書生」（大学生）、一方、奥さんは「女学校の学生」の時に、東京で、奥さんの「母親」（軍人の未亡人であった）が、自分の家の「空き部屋」（一つの部屋）を個人に貸すという「素人下宿」を行なっていたが、その「空き部屋」（一つの部屋）に先生（その時は大学生）がたまたま下宿することになったので、自然と、その家の「奥さん」（軍人の未亡人）と「お嬢さん」（今の奥さん）とも親しくなることになったという経緯があるのである。

そして、「……先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった」とある。そのことについて、「私」という人は、最終的には、「……二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。（その理由として）、奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために」としているのである。

二四、私と奥さんの会話（十二） 其の四

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた。——私は今この悲劇については何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たとも言える二人の恋愛については、先刻言つた通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。（本文）

\*

\*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……私はただ恋の半面（花やかなロマンスの面）だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた」とある。——これは、すでに「すべてを知っている私」という人のいわば感想（感慨）であり、そして、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることの、いわば一つの「実例」にもなっているのである。ただ、「……私は今その悲劇については何事も語らない」としているのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十二） 其の一

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた。「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言つた。「仲が好さそうですね」と私が答えた。先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。「……君は恋をした事がありますか」、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」、私は答えなかつた。「……したくない事はないでしょう」、「ええ」、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交つていましょう」、「……そんな風に聞こえましたか」、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」、私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。（本文）

\*

\*

まず、「……或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた」とある。そして、「……

：新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好きそうですね」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評ひやひやしましたね。あの冷評ひやひやのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声こゝろが交まじわりましたよ」と言うので、「……そんな風ふうに聞こえましたか」と応こたえると、「……聞こえませんでした。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」(恋愛)というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以て誰よりも骨身に染みてよく知っているのであり、だからこそ、「恋」(恋愛)は、罪悪ですよ、と言うのである。

## 二五、恋(恋愛)は罪悪です(十三) 其の二

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉うれしそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。「……恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。「……罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であった。思いあたるようなものは何にもなかった。「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」、「……目的物がありませんから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」、「……今それほど動いちゃいません」、「……あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」、「……それはそうかも知れませんが。しかしそれは恋とは違います」、「……恋に上のぼる階段かいでんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」、「……私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられない人間なのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです」。(本文)

\*

\*

さて、当然のごとく、「私」という人は、「……恋は罪悪ですか」と聞いている。すると、先生は、「……罪悪です。たしかに」と、先生の語気は前と同じように強かったとあ

る。それは、もちろん、先生は、まさに「わが身を以って誰よりもそれを骨身に染みてよく知っている」からではあるが、しかし、それだけではなく、たとえどれほど「知性や理性に強く支配されている君子・聖人」であったとしても、ひとたび、「恋（恋愛）の世界」に心からどっぷりと深く陥（おちい）つてしまえば、誰であれ！ まさに「正気」を失ってしまうものである。……それは、先生も、また、まさに「そうだった」ということである。

さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、それは、「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言うと、先生は、「……目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」とある。

\* \*  
これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」（大金）が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思って、多くの人たちは、まさに「金儲け」へと動き出すのである。また、自分は、「恋」（恋愛）をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」（恋愛）をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思って、「恋」（恋愛）へと動き出すのである。しかし、「恋」（恋愛）というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かしやく）」などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何かが欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思って、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

\* \*  
さて、「私」という人は、「……今（私は）それほど動いちゃいません」と言うと、先生は、「……あなたは（ほかの人では）物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」と言う。それに対して、「……それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」と言う。すると、先生は、「……恋に上る階段（かいたん）なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」と言う。すると、「……私には二つのものが全く性質を異（こと）にしているように思われます」と言う。先生は、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないのです。私は実際お気の毒に思っています。（なぜなら、「私」という人は、知らず識らずのうちに、先生から「何かを得よう」として、先生の所に来ているのである。ところが）、あなたが私から（満足できるようなものが得られず、やがて）よそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです」となっていくのである。

\* \*  
さて、ここで「最も大事」なことは、次のようなことであり、それは、まだ若い「私」

という人は、「恋」というものは、まさに男女間の「恋愛」だけだと限定して、それだけが「恋」だと思ひ込んでるのである。一方、先生は、男女間の「恋愛」だけではなく、「恋」というのは、もつと幅広く、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであると見ているのである。——それゆえ、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、例えば、ゲームに心惹かれ、夢中になっている、また、カラオケに心惹かれ、夢中になっている、或いは、ゴルフに心惹かれ、夢中になっている、もちろん、誰かに心惹かれて、夢中になっている。或いは、ある動植物（ペット類）などに心惹かれ、夢中になっている。その他、何であれ、ある「対象」に「……心惹かれて、夢中になっている心の状態」というのは、基本的には、すべてその「対象」にまさに「恋をしている状態」と同じような「心のあり方」になっているのである。——つまり、「恋」というのは、何であれ！ ある対象に「心惹かれて、いる心の状態」のことであるが、その中でも、われわれ人間というのは、特に男女間の「恋」（恋愛）こそは、まさに格別の「恋」（数多くの「恋」の中でも最上無比の「恋」）だと思ひ込んでるのである。それは、当然のことながら、われわれ人間の「本能的性的欲求」（それは「愛情欲」と「セックス欲」それに「子孫欲」から成る）とも深く結びついているからである。——つまり、「心の渴き」は、「愛情」によって深く満たされ、また、「肉体の渴き」は、「セックス」によって深く満たされ、そして、「子孫保存欲」は、生まれ育つ「子供たち」によって深く満たされるのである。

## 二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の三

私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思ひになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」と言うと、先生は私の言葉に耳を貸さなかった。「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつた。その上私は少し不愉快になつた。——「……先生、罪悪という意味をもつと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言うと、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と言い、先生と私とは博物館の裏から鶯溪の方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹が幽邃に見えた。「……君は私がなぜ毎月雑司ヶ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこう言つた。「……また悪い事を言つた。焦慮せるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」と言うのであつた、私には先生の話がますます解らなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつたのである。（本文）

\*

\*

さて、私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」とある。これは、まさにその通りであり、「先生」が亡くなった今も、こうして「先生」について語っているのである。つまり、「先生」からは、離れていないのである。——例えば、晩年のソクラテスは、七〇歳の時、「……ソクラテスは、国の認める神々を認めず、別の新奇な鬼神のまつりを導入するという罪をおかし、かつまた、青年たちに有害を与えるという罪をおかしている。これは死刑に値する」という罪状で訴えられて、その結果、「刑死」（毒杯を仰いで従容として死んでいく）という悲惨な結末になるが、それに対して、「晩年」（七十四歳）のプラトンは、その『第七書簡』のなかで、「……当時の人々のなかでいちばん正しかったと言ってもおそらくわたしの恥にはならないであろう方を、——わが敬愛すべき年長の友ソクラテスを、……」と記している。……これは、すでに七十四歳という晩年を迎えているながらも、今なおそのプラトンの「心の中」には、「師ソクラテスへの敬愛の情」というものが、すこしも色褪せない状態で存在していたことの明らかな証拠となるものである。——つまり、ソクラテスの「刑死」後も、プラトンという人は、師ソクラテスからは少しも離れることはなかったということである。

それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんとが親しく話している場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに男女間の「恋」（恋愛）なのである。

## 二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の四

さて、「私」という人は、「……先生、罪悪という意味をもっと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言う。すると、先生は、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と。

やがて、「……君は私がなぜ毎月雑誌司ケ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であった。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこう言った。「……また悪い事を言った。焦慮せるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」とある。（本文）

さて、これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」（恋愛）については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」（恋愛）については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになると共に、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

## 二六、人間が自分は信じられない（十四）其の一

年の若い私は稍ともすると一凶になり易かった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」。「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言うのであった。（本文）

さて、「私」という人は、「……私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった」とある。——だからこそ、その「人」を、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしいということにもなるのだろう。それはともかく、「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。それに対して、「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」とある。

つまり、「先生」は、君は私を「過大評価し過ぎていて」と言っているのである。やがて、私の「本当の姿」（その「実体」）を知ったならば、恐らく、がっかりするか、軽蔑するようになるだろう。だからこそ、「……私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、な

お苦しくなります」となるのである。ところが、一方の、「私」という人は、「……その時の熱に浮かされてものを言い、その熱がさめればもう厭になるという、そういう取るに足りない軽薄な人間だと思つて居るのですか」と、言つて居るのである。それが、まさに「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言い寄つて居るのである。

## 二六、人間が自分は信じられない（十四）其の二

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた。「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」、その時生垣の向うで金魚売りらしい声が出た。その外には何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであつた。家の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知つていた。黙つて針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知つていた。しかし私は全くそれを忘れてしまつた。「……じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。——先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。「……私は私自身さえ信用して居ないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになって居るのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」、「……そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしょう」、「……いや考えたんじゃない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」と言うのであつた。（本文）

\*

\*

さて、先生は、「……迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とある。——この「椿の花」というのは、有名な『草枕』の中にも出て来る「花」であり、それは、「……あの『花の色』は、ただの『赤』ではない。余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿を連想する。目を醒すほどの派手やかなの奥に、言うに言われぬ調子を持つて居る。黒ずんだ、毒気のある、恐ろしい味を帯びた調子である。屠られたる（処刑された）囚人の血が、おのずから人の目を惹いて、おのずから人の心を不快にすることく一種異様な『赤』である。——そして、見ていると、ぼたりと赤い花が水の上に落ちた。しばらくするとまたぼたりと落ちた。あの花は決して散らない。かたまつたまま枝を離れる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる」とある。——つまり、庭にその「椿の木」が植えられていて、しかも、「……先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とすれば、或いは、夏目漱石という人は、「……余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿（世にも妖しき女性の姿）を連想させられるが、その『椿の花』があるいは好きだつた」（つまり「なぜか心惹かれる対象であつた」）のかも知れない。

そして、「先生」という人は、「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言う。すると、「私」という人は、「……じゃ奥

さんも信用なさらぬですか」と先生に聞いてゐる。――まず、先生は、「……信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言つてゐる。これは、両親を「腸チフス」でほぼ同時に亡くした後、家の「財産の管理」はずべて「叔父」に任せていたが、その「叔父」に裏切られて、「家の財産」の多くを奪われてしまふのである。――それ以来、まさに「人間不信」が生じて来るが、しかし、それは、まだ「決定的なもの」ではなく、それに加えて、先生自身、自らが「親友」を裏切るような行動をしてしまふのである。それが、まさに「……いや考えたんじゃやない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」という「言葉」になるのである。それゆえ、まさに「……私は私自身さえ信用していません。つまり自分が信用できないから、人も信用できないようになってゐるのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」という「言葉」になるのである。――ちなみに、「……じゃ奥さんも信用なさらぬんですか」と聞かれて、もちろん、先生自身は、「……奥さんを信用している」のであるが、しかし、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のような「想ひ」があるのである。それは、つまり、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」になるのである。それは、「……自分自身がまさにそうだったから」という意味合いを含んでゐる」のである。

## 二六、人間が自分は信じられない(十四) 其三

私はもう少し先まで同じ道を辿つて行きたかつた。すると襖の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」と言つた。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解らなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ帰つて来た。「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。「……そりやどういふ意味ですか」と聞くと、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思つたのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」、私はこういう覚悟をもつてゐる先生に対して、言うべき言葉を知らなかつた。(本文)

\*

\*

さて、先生は、「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。すると、「私」といふ人は、「……そりやどういふ意味ですか」と聞くと、先生は、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思つたのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わ

わなくてはならないでしょう」と言うのであった。私はこういう覚悟をもっている先生に對して、言うべき言葉を知らなかった、となるのである。

これは、前にも記したように、「……君は私を『過大評価し過ぎている』のである。やがて、私の『本当の姿』(その『実体』)を知ったならば、恐らく、君は、がっかりするだろうし、また、軽蔑し、今度は、何でこんな人間に自分は跪いたのかと後悔をし、そして、逆に、侮辱するようになるだろう」と言っているのである。それが、まさに「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです」という「言葉」になるのである。だからこそ、「……私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです」と言うのである。そして、「……自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」と言うのであった。——これは、例えば、江戸時代の「封建時代」のような社会であれば、その「主従関係」や「上下関係」或いは「人間関係」などはそれなりにしつかりとしていただろうが、明治時代という、この「……自由と独立と己れ(エゴ)とに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲(代償)として、お互いの「人間関係」や「上下関係」或いは「主従関係」なども容赦なく激変するような「淋しさ」(孤独や悲哀など)を誰もが味わわなくてはならないのでしよう」と語っているのである。

例えば、親子関係なども、封建時代には、「……父上、母上」と呼び、自然と親を敬い、子が親に逆らうなどは、とでもでき難い時代であったろうが、今日では、平気で親に逆らい、平気で親の悪口を言い、そして、平気で親を馬鹿にするのである。それが、まさに「自由と平等とエゴ」の社会であり、それは、親だけではなく、ありとあらゆる人間との関係において、その他、すべてにおいて同じことが言えるのである。さらに加えて、今日のよいうな「インターネット時代」ともなれば、その規模は一気に拡大して、世界中の何十億というありとあらゆる階層のありとあらゆる分野のありとあらゆる人たちが実在にありとあらゆる「意見」(むろん実在に多種多様な罵詈雑言なども含めて)絶えず飛び交うような時代になっているのである。

## 二七、先生の思想はどこから生じたのか(十五) 其の一

その後、私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であったから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかったから。

私の疑惑はまだその上にもあった。先生の人間に對するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であった。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪廓とは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、

強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。(本文)

\*

\*

まず、「私」という人は、「……先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか」とある。先生は、奥さんに対しては、出来るだけ「優しくしようとしている」のである。ただ、奥さんと直接面と向かうことはどこか避けるようなところがあるのである。それが奥さんにとっては不満なのである。それに加えて、私の疑惑はまだあった。それは、「……先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。……私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった」とある。——もちろん、それは、その通りであるが、それについては、「第三部」(先生と遺言)を読めば、すべては明らかになることであり、ここではこのまま伏して、次に進みたいと思う。

## 二七、先生思想はどこから生じたのか(十五) 其二

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであった。……私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。(本文)、——この部分は、それ(先生が経験した事実)が具体的には一体どのようなものであつたかはよく分からなかつたが、しかし、何か得体の知れないそら恐ろしいものをなぜか感じて、私の神経を震わせたのである。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。(無論先生と奥さんとの間に起つた)。先生がかつて恋は罪悪だと言つた事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」と言つた先生の言葉は、現代一般の誰彼について用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようにもあつた。(本文)、——外から見ると、先生と奥さんとの間はそれなりにうまく行っているように見える。それゆえ、二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがないと思うが、しかし、男女間の「恋」(恋愛)には、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」もあることを、どうしてもイメージ出来ないでいたということである。

雑司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命の断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つてその墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。むしろ二人の間に立つて、自由の往来を妨げる魔物の

ようであった。(本文)、——この「ぞうし雑司ヶ谷がやにある誰だれだか分らない人の墓」、それは、「…  
：私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎには  
ならなかった」とあるが、しかし、この「墓」、こそは、実は、すべ凡ての「なぞ謎」を解き明かす、  
まさに「かぎ鍵」そのものになっていくのである。

\*

\*

二八、盗難よけの留守番を頼まれる

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の一

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰って行くせわしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であった。先生の附近で盗難に罹ったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の口であった。大したものを持って行かれた家はほとんどなかったけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情が出来てきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外の二、三名と共に、ある所でその友人に飯を食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰って来る間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。（本文）

\*

\*

さて、「……そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た」とある。——この「私と奥さんと二人だけの会話」をするという機会は、何度かあるが、そのどれも非常に「大事な場面」であり、それは、一体、なぜかと問えば、それは、先生からは直接聞き出せないような実に様々な「情報」（特に先生に関する情報）を、奥さんから直接聞くことができ得るからである。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の二

私の行ったのはまだ灯の点くか点かない暮方であったが、几帳面な先生はもう宅になかった。「時間に後れると悪いって、つい今しがた出掛けました」と言った奥さんは、私を先生の書斎へ案内した。

書斎には洋机と椅子の外に、沢山の書物が美しい背皮を並べて、硝子越に電燈の光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団の上へ私を坐らせて、「……ちつと其所いらにある本でも読んでいて下さい」と断って出て行った。私は丁度主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかった。私は畏まったまま烟草を飲んでみた。奥さんが茶の間で何か下女に話している声が聞こえた。書斎は茶の間の縁側を突き当って折れ曲った角にあるので、棟の位置から言うと、座敷よりもかえって掛け離れた静かさを領していた。一しきりで奥さんの話し声が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝としながら気をどこかに配った。

十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」と言って、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪らしく控えている私をおかしそうに見た。「……それじゃ窮屈でしょう」、「いえ、窮屈じゃありません」、「……でも退屈でしょう」、「……いいえ。泥棒が来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」と言うのであった。（本文）——この場面は、まだ若い書生のどこか女性慣れしていない初々しさや真面目さなどが描かれているところになるのかも知れない。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の三

奥さんは手に紅茶茶碗を持ったまま、笑いながらそこに立っていた。「……ここは隅っ

こだから番をするには好くありませんね」と私が言った。「……じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければ彼方で上げますから」、私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴つていた。私はそこで茶と菓子の御馳走になった。奥さんは寝られないといけなうと言つて、茶碗に手を触れなかつた。——「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌になるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。「……それじゃ奥さんだけが例外な人ですか」、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」、「……あなたは学問をする方だけあつて、なかなかお上手ね。空っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか。それと同なじ理屈で」、「……両方とも言われることは言われますが、この場合は私の方が正しいのです」、「……議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよくあ飽きずに献酬（酒杯のやり取り）ができると思ひますわ」、奥さんの言葉は少し手痛かつた。しかしその言葉の耳障から言うと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。（本文）

\*

\*

まず、「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたとある。——これは、奥さんは、すでに何度となく先生になぜですかと問い正しても、先生は全く取り合つてくれないので、今ではもう仕方がないというような心の状態になつているのである。そこで、「私」という人は、「……それじゃ奥さんだけが例外なんですか」と聞くと、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」と答える。これは、奥さんの「実感」であり、それは、「……奥さんを避けるようなところがある」からである。すると、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」とある。これは実に分かり難い「理屈」であるが、恐らく、「……誰よりも奥さんがこの世で一番好きになつたので、それに比べれば、世間の人々などはもうどうでもよい」というようなことであり、それに対して、奥さんは、「……世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか」と言う。こちらの方が、遙かに無理のない「考え方」になるかと思うが、「私」という人は、「……両方とも言えますが、この場合は私の方が正しいのです」と言い張る根拠は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、先生の次のような「言葉」にあるのである。それは、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しか知らない男と思つてくれています。そういう意味から言つて、私たち

は最も幸福に生れた人間の「一対」であるべきはずだ」という、この「言葉」を根拠として  
そう言うのである。

ちなみに、男たちの「議論好き」に対して、奥さんは、「……よく男の方は議論だけな  
さるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに献酬ができると思いますわ」と言  
うのは、実に面白いところであり、また、「議論好き」は、「……自分に頭脳のある事を  
相手に認めさせて、そこに一種の誇り（や優越感）などを見出す」という説明も、非常に  
面白いところである。

## 二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の一

私はまだその後（あと）に言うべき事をもっていた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛け  
る男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗の底を覗い  
て黙っている私を外らさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶  
碗を奥さんの手に渡した。「……いくつ？ 一つ？ ニっつ？」、妙なもので角砂糖をつ  
まみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数（かず）を聞いた。奥さんの態度  
は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消そうとす  
る愛嬌（あいぎょう）に充ちていた。私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。「……あな  
た大変黙り込んだね」と奥さんが言った。「……何か言うとまた議論を仕掛ける  
なんて、叱り付けられそうですから」と私は答えた。「まさか」と奥さんが再び言った。

（本文）

\*

\*

まず、「……飲み干した紅茶茶碗の底を覗いて黙っている私」とあるが、ここに出て来  
る「紅茶茶碗」というのは、恐らく、（夏目漱石の趣味から言つても）、イギリス製の表  
面の肌（はだ）のきめ細やかで滑らかな「磁器」の「紅茶茶碗」に違いなく、それゆえ、でこぼこ  
とした「陶器」の茶碗とは違うのである。——例えば、『草枕』の中でも、主人公の「画  
工」は、まず、自分は羊羹が好きで、それは、べつだん食べたくはないが、その「肌合」  
が滑らかで、緻密（ちみつ）なのが良くと賞賛し、また、青磁の菓子皿も良いとほめる。（これが本  
当であるならば、夏目漱石は、陶器よりも磁器をより好んだ人かも知れない。）

次に、「……奥さんの態度は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い  
言葉を力めて打ち消そうとする愛嬌に充ちていた」とあるが、これは、もつと「相手（私）  
と話がしたい」という態度の表れであり、それが、まさに「……あなた大変黙り込んだま  
ったのね」という「言葉」となつて外に現われ出るのである。（これは、奥さん自身、《先  
生の事で》あれこれ話してみたいという思いがどこ潜在的にあつたということなのか  
も知れない）。一方、「私」という人は、「……何か言うとまた議論を仕掛けるなんて、叱  
り付けられそうですから」と答えると、「まさか」と奥さんが再び言ったとあるが、もち  
ろん、大事なものは、これから先の「文章」である。

## 二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の二

二人はそれを緒口にまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題

にした。「……奥さん、先刻の続きをもう少し言わせて下さいませんか。奥さんには空な理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上の空で言ってる事じゃないんだから」。「じゃおっしゃい」、「……今奥さんが急になくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」、「……奥さん、私は真面目ですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」、「……正直よ。正直に言っただけに私には分らないのよ」、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」、「……何もそんな事を聞き直つて聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急になくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急になくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そう言うとおのぼれ己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があつても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」、「……その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」、「……それは別問題ですわ」、「……やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」、「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんです。世間というより近頃では人間が嫌いになつていられるでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」、奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込めた。（本文）

\*

\*

さて、「私」という人は、突然、「……今奥さんが急になくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」と答える。そこで、「私」という人は、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直つて聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急になくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急になくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていま

すわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答える。

\*

\*

まず、「私」という人は、なぜ、このような「質問」をしたのかと問えば、それは、結局は、奥さんの「心の中」を確かめてみたかったからである。——例えば、先生は、前に、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」と言っていた。ほんとうにそうなのか？ それを奥さんに直接聞いて、奥さんの「心の中」を確かめてみたかった。——それは、本文では、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直って聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」と答えるのであった。

すると、「私」という人は、再び、最初の質問に戻って、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどつちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見ると、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。——これは、まさに「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの「疑問」を解くための「質問」でもあるが、それに対して、奥さんは、「……そりゃ私から見れば分つています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答えるのであった。

つまり、「……私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ」、さらに加えて、「……私は嫌われてとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになっていくんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と言っている。——だとすれば、「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの直接の「……原因は奥さんにはない」ということになるのである。

三十、元は、ああじゃなかったんです（十八）其の一

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私

の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。——私は女というものに深い交際つぎあいをした経験のない迂闊うかつな青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた。奥さんに対して私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。(本文)

\*

\*

まず、最初は、「私」から見た「奥さん」の「感想や評価」になっているが、それは、「……私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とある。——まず、奥さんは、当時の「女学校」をしっかりと卒業しているのであり、それゆえ、「……奥さんの理解力や奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも」一応領けるとともに、「……その頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とすれば、その時々「流行やブーム」などにすぐに影響を受けて流されてしまうタイプの女性ではなく、どこか芯のある女性なのかも知れない。——一方、まだ若い「私」という人の「女性観」であるが、それは、「……私は女というものに深い交際つぎあいをした経験のない迂闊な青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。

これは、恐らく、多くの若い男性に共通した意識であり、まず、「男性」というものは、「……異性に対する本能から、(女性は)憧憬どうけいの目的物(あこがれの対象)」として常に女を夢みている」ものであるが、しかし、「……実際の女の前へ出ると、私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。——つまり、「……一方では、引き付けられ、一方では、反発する、これは、一体、どういう心理かという問題である」が、まず、一方では、引き付けられる、これは、まさに「本能的なもの」からであるが、一方では、男女の「脳」の違い等、そこから生じる実に様々な「意見の違い」などから反発し合う、そして、もう一つは、お互いに「自分の存在」を主張し合って反発し合うのである。……ところが、「奥さん」に対しては、そのような「反発心」、「……そんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた」とある。——これは、意味なく「反発し合う相手(女)」としてではなく、私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として「奥さんをそのまま素直に受け入れた」ということである。

三十、元は、ああじゃなかったんです(十八) 其の二

そこで、「……奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだろうと言つて、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう変つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」とある。(本文)

\*

\*

さて、この場面では、非常に「大事な言葉」が数多く出て来ますが、まず、最初は、「……あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」と聞くと、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」とある。——つまり、先生という人は、前々から今のような状態だったのでなく、元は、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だった」ということであり、だからこそ、奥さん(当時のお嬢さん)は、その先生(当時は大学生)に強く心惹かれて、結婚をしたのである。そこで、「私」という人は、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」と聞くと、奥さんは、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」と答えるのであった。

例えば、「急に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すのも比較的容易かも知れないが、一方、それが「段々に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すことも難しいことになるのだろう。だからこそ、次のような「会話」が続くのである。——つまり、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう変つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」とある。

さて、ここで最も「大事な言葉」はと言えば、その一つは、まさに「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」というこの「言葉」であり、(例えば、前に出て来た「夫婦喧嘩」などもまさにこの事なのである)。そして、もう一つは、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」というこの「言葉」

である。——つまり、奥さんは、「どうしてもその原因が知りたい」がために、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」となるのであり、一方、先生の方は、逆に、「……何があつてもそのことだけは絶対に話すことは出来ない」と思っているからこそ、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」となるのである。これでは、どこまで行つても二人の「思い」は、「平行線」であるしかないのである。

三十、元は、ああじゃなかつたんです(十八) 其の三

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。「いいえ」と私が答えた。「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまた言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」。「……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」、奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めたとある。(本文)

\*

\*

さて、ここにも極めて「大事な言葉」が出て来ますが、その前に、奥さんは、「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然言い出した。「いいえ」と私が答えると、「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまた言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」、……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」と言うのであった。——まず、奥さんは、「……私に責任があるとそう思われるのは身を切られるより辛い」と言い、また、「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」と言っている。つまり、奥さんは、夫(先生)のために「身も心も尽くしている」と言いたいのである。それだけ「夫(先生)のことを心の底から愛している」ということでもあるのである。

それは、まさに「その通り」であり、それに加えて、ここで何より「大事な言葉」というのは、それは、次の言葉になるのである。——つまり、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」と、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた、となるのである。

さて、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めます」からと。これは、もうどうにも行き詰まつての「捨て身」の訴えであり、たとえ「どんな欠点(悪い所)を露骨に指摘されようとも、また、どんなに聞くに堪えない罵詈雑言などを浴びせられようと、それを甘んじて受け入れる……」というような、まさに必死の「覚悟」の表れになるのである。それに対して、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです」とある。——これは、極めて「大事な言葉」であり、つまり、奥さんには、文字通り、「何の欠点もない」のである。それゆえ、奥さんが、「……私にはどう考えても、考えようがないんですもの」と言うのも、もつともなことである。つまり、「……欠点はおれ(先生)の方にあるだけだ」と言っているが、それは、まさにその「言葉通り」なのである。……それでは、その「欠点」とは、一体、具体的には何かと問えば、その「ヒント」として、「……実は、少し思いあたることがある」と続くのである。

\*

\*

ちなみに、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」とあるが、これは、前のところで、「先生と奥さんの喧嘩(言逆い)」があつた時の、その二人の「喧嘩(言逆い)」の「原因」こそは、まさに「この事」であり、一つは、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、しかし、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだ」と言うだけであり、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」と、奥さんは、ただ泣くばかりになつてしまふのである。

### 三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の一

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私はその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に變つて来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かした。始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられた。底を割ると、かえつてその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、どうとう世の中まで厭になったのだらうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかつた。先生の態度はどこまでも良人らしかつた。親切で優しかつた。疑いの塊りをその日その日の場合で包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたどう思つて？」と聞いた。「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とかいうものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」、私は何も隠す気はなかつた。

けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。「……私には解りません」、奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情をその咄嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。「……しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」と言った。(本文)

\*

\*

さて、「……奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓(心)を動かし始めた」とある。そして、「……自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭になったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかった」とある。——つまり、真の「原因」が一体何なのかは、奥さんにはどうしても「解りかねていた」のである。しかも、「……先生の態度は、どこまでも良人らしく、親切で優しくかった」のである。

奥さんは、その「疑いの塊り」をそつと胸の奥にしまっておいたが、その晩、その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたはどう思つて?」、「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とか言うものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」と聞くのであつた。(もちろん、その両方とも違うのである)。それに対して、「私」という人は、「……私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた」とある。——つまり、「私」という人は、「……そこに私の知らないあるものが(きつと何かがあるに違いない)と信じていた」が、それが、一体、何であるかは、私も奥さんも未だ「知らない状態」にあつたということである。しかし、はつきりと言えることは、「……先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」となるのである。……

### 三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の二

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこう言つた。「……実は私すこし思いあたる事があるんですけども……」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、奥さんは言い渋つて膝の上に置いた自分の手を眺めていた。「……あなた判断して下さつて。言うから」、「……私にできる判断ならやります」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱られないところだけよ」、私は緊張して唾液を呑み込んだ。「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する

少し前に死んだんです。急に死んだんです」、奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「……実は変死したんです」と言った。それは、「どうして」と聞き返さずにはいられないような言い方であった。「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があってから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷にあるのは」、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」、私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。(本文)。

\*

\*

さて、いよいよ「核心に迫るヒント」が登場して来るのである。それは、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、「……あなた判断して下さい。言うから」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱られないところだけよ」、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があってから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」と言うのであった。

さて、ここで最も「大事な言葉」としては、一つは、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、そして、もう一つは、「……その事があってから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。

つまり、大学時代に、非常に仲のいい友達が一人いたが、その友達が卒業する少し前に急に死んだ、実は変死したのである。しかし、なぜ「変死」したのか？ それは、「……私には解らないの」、恐らく、先生にも解っていないでしょう」とある。この「……私には解らないの」という言葉こそ、最も「大事な言葉」(キーワード)であり、奥さん(当時はお嬢さん)は、「その人が死んだ」ということだけは知らされたが、その人がどのような状態で死んでいたかなどの、それ以外のことは何一つ知らされてはいなかったのである。ここにこそ「大きな謎」が隠されていることになるが、それはともかく、奥さんは、「……その事があってから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。……それから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。すると、「私」という人は、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷にあるのは」と聞くと、奥さんは、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそ

こを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」と聞くのであった。——つまり、奥さんにとつての「最大の疑問」は、「……人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」となるのである。それに対して、「……私の判断はむしろ否定の方に傾いていた」となるのである。

### 三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の一

私は私のつかまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまた出来るだけ私によって慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合った。けれども私はもともと事の大根を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった。従って、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。（本文）

\*

\*

さて、二人は、「……同じ問題（先生のこと）でいつまでも話し合った」が、しかし、「……私はもともと事の大根（大元）を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった」とある。——つまり、私も奥さんも、その事の「大元」（ほんとうの原因）は、全く知らないでいた。あり、それゆえ、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながらも、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。——つまり、奥さんは、先生がなぜ変わってしまったか？ その「真の原因」を何が何でも知りたくて、覚束ない「私の判断」に縋り付こうとしていたのである。

### 三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の二

十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までの凡てを忘れたように、前に坐っている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生を殆ど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行った。下女だけは仮寝でもしていたと見えて、ついでに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜った涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた人の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかった。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。（本文）

\* \*  
さて、夜十時頃に「先生」が帰って来る。それは、「……十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐っている私をそつちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生をほとんど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行つた」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、考えられることは、「奥さん」というのは、まさに夫の「妻」であり、それゆえ、その「夫の帰宅」というものには、無意識のうちにも、どこか「心待ち」にするようなところがあるとともに、一般的に、その「夫の帰宅」には敏感に反応しやすいものなのである。ましてや、奥さんは、夫（先生）を心から愛しているのである。——もちろん、それだけではなく、今晚の「奥さん」は、「私」という人と「先生のこと」でいろいろ話をすることによって、自分が「先生に嫌われているのではなく、むしろ愛されている」ことを「私」から聞かされて、また、先生が変わつた原因にしても、自分が「直接の原因」ではないらしいことを知って、むしろ「ほっとした」のである。だからこそ、「……先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた（となるのである）。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた」とある。が、それは、今までの「疑いの塊り」を「私」という人に打ち明けることによって、かえって「心の重荷」が取り除かれ、むしろ「心が軽くなつた」ということである。

### 三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十） 其三

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合が抜けやしませんか」と言った。——帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰させて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒が這入らなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそう言いながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。（本文）、——この場面は、先生と奥さんとがいかにも「幸せな夫婦」のように見えているのである。

\* \*  
私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、奥さんに菓子を貰つて帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日午飯を食いに学校から帰つて来て、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗つた鶯色のカステラを出して頬張つた。そうしてそれを食う時に、必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わつた。（本文）

\* \*  
さて、ここで「大事な言葉」としては、「……私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、

奥さんに菓子を買って帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった」とある。——それは、一体、何故なのかと問えば、それは、若しも「……先生が自殺という形で亡くなるということがなければ、恐らく、その晩のことを思い出すようなこともなかったに違いない」とともに、今もなお、「……必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一对として世の中に存在しているのだ」と、私は思い続けていたに違いないということである。

### 三三、秋が暮れて冬が来る（二十）

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで繻絆というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈凌ぎになって、結局身体のだ位ぐんいの事を言っていた。——「……こりゃ手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」、こんな苦情を言う時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。（本文）

さて、先生とは、夏、鎌倉の「海岸」（海水浴場）で初めて出逢い、その後、東京に帰って来てからは、九月の「新学年」以降、「私」という人は、先生の宅を頻繁に出這りするようになり、九月、十月、十一月、そして、今は、十二月、秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかったとある。そして、私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだとある。——これは、奥さん（当時のお嬢さん）は、いわゆる「女学校」に通いながらも、一方では、「縫いもの」（仕立て方）などを習いに通っていたのである。というのも、当時は、当然のことながら、まだ「ミシン」などは一般家庭には普及しておらず、すべては「手縫い」であり、それがここで役立つということがある。

\*

\*

三四、父の病氣のことで国へ帰る

三四、父の病氣のことで国へ帰る(二十一)

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間があった。私は学期の終りまで待つていても差支えあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私は、どうしよう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。(本文)

\*

\*

さて、今度は「私」という人の「家族」の問題が出てくるが、それは、まず、「……母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子で、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった」とある。そして、「……父はかねてから腎臓を病んでいたが、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。(中略)、その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになった」とある。

まず、この「私」という人の「家族」構成であるが、それは、父や母の「両親」をはじめ、九州で働く「長男」と、大学生である「私」(次男)と、そして、もう一人は、他国(他県)に嫁に行き、今は妊娠中の「妹」(長女)の、全部でこの「五大家族」から成るものである。——そして、そのうちの「父親」が、まさに慢性的「腎臓病」を患つていて、母の手紙によると、「……庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った」ということで、家族は、最初、軽い「脳溢血」だろうと思ひ違ひをして、そのような手当をしたが、医者の話だと、それは、やはり「持病(腎臓病)の結果」だろうという判断を得て、初めて「卒倒」と「腎臓病」とを結び付けて考えるようになるのであった。

それでは、なぜ慢性的「腎臓病」なのか? その「理由」の一つとしては、例えば、突然の「脳溢血や心筋梗塞」などでは余りに話が急過ぎて、その病状に応じた「話の展開」が出来にくいと共に、もう一つは、恐らく、先生の「奥さん」(元お嬢さん)の「母親」(軍人の未亡人)も、同じ病氣で亡くなつていてという設定にして、その両者を親密に「関連付ける」ことで、作者(夏目漱石)は、いわば「話の展開」を巧みに組み立てているの

である。

### 三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く(二十一)

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆劫だと言って、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入って稀に見るような懐かしい和らかな日光が、机掛けの上に射していた。先生はこの日当たりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盥から立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。——「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言つた先生は、苦笑しながら私の顔を見た。先生は病氣という病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑ひたくなつた。「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」、私は先生の言う事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。「……そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」、先生は奥さんをお呼びで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆笥か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭重に重ねて、「……そりゃご心配ですね」と言つた。「……何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くと、「ええ」と応え、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。「……どうせむずかしいんでしょう」と私が言つた。「……そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが。——嘔気はあるんですか」、「……どうですか、何とも書いてないから、大方はないでしょう」、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つた。私はその晩の汽車で東京を立つた。(本文)

\*

\*

まず、先生は、少し風邪気味で、「座敷」(茶の間)へ出るのが臆劫だと言って、私を先生のいるその「書齋」へと通した。そして、先生は、「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言つて、苦笑しながら私の顔を見たという。一方、病氣らしい病氣をした事のない先生の言葉を聞いて、私は笑ひたくなつた。そして、「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言つと、先生は、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」と言うのであつた。

さて、これらは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。——まず、われわれ人間にとつて何よりも「恐いもの」は、それは、自分が「死ぬ」ということである。自分にとつて、「死ぬ」こと以上に怖いものは、この世に何もないのである。それゆえ、「死」に直結しない「病氣」であれば、多くの場合、それほど「怖い」とは思わないものである。むしろ、何の病氣であれ、誰でも「真平御免」ではあるのである。だからこそ、「私」という人は、まさに「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言うのである。つまり、「病氣」で苦しむのは、誰でも「真平御免」

ではあるが、それ以上に「真平御免」なのが、まさに「自分が死ぬ」ということである。これが最も一般的な「考え方」であるが、それは、この世に「一秒でも長く生きていたい」と願う人たちの心から自ずと生じて来る「考え方」である。……

一方、「先生」という人には、いわば「自殺願望」というものが潜在的にあり、それゆえ、先生は、「……大病はいいが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものです」と言ったり、また、「……そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてゐる」と言うのである。それは、「……大病ならば、まさに『死ぬる』が、風邪や（大病ではない）病気などでは、ただ『苦しむ』だけであつて、とても『死ぬる』からであり」、だからこそ、先生は、「……（死ねない）病気になるくらいなら、（死ぬる）死病に罹りたいと思つてゐる」という「言葉」になるのである。それに対して、「私」という人は、「……私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた」とある。それは、つまり、「……先生は、何か冗談か、或いは、自分をからかうために、そんなことを言つてゐるのだろう」と思つて、軽く聞き流してしまつたからである。……といふのも、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）のその奥深くに、まさか「自殺願望」が棲み付いてゐるなどとは、夢にも、また、露ほども決して思へなかつたということである。

\*

\*

次に、「私」という人は、「……すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た」とある。すると、先生は、「……そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」と言う。先生は、奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆筒か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭重に重ねて、「……そりやご心配ですね」と言つたとある。——まず、父の病気の経過が面白くない様子なので、そのことが日ごとに心配になり、結局、国へ帰る決心をしたが、そのために、国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。すると、先生は、「……そりや困るでしょう」ということで、快くお金を立て替えてくれて、奥さんも、「……そりやご心配ですね」と、心やさしく言つてくれるのであつた。

すると、先生は、「……何遍も卒倒したんですか」と聞いて来た。これは、先生の奥さんの「母親」が同じ病気で亡くなつていたので、その「腎臓病」の症状については、よく知つていたことである。すると、「私」という人は、「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くので、先生は、「ええ」と答えて、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなつたのだという事が始めて私に解つたということになるのである。そして、「……どうせ（治るのは）むずかしいんでしよう」と私が聞くと、先生は、「……そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが」とあるが、この「……私が代られれば代つてあげても好いが」というのは、実に不思議な返答であるが、これは、先生の心の奥深くには「自殺願望」があつて、それがこのようなところにもふと姿を表すのである。そして、「……嘔気はあるんですか」と先生が聞くので、「……どうですか、何とも書いてないから、大方ないんでしよう」と答えると、今度は、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つたとある。これは、奥さんも「腎臓病」のことは、当然のことながら、「母親」の看病等で、誰よりもよく「熟知してゐた」ということである。そして、私は、その晩の汽車で東京を立つた、

となるのである。

### 三六、父の病氣は思ったほど悪くはなかった（二十二）

父の病氣は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床の上に胡坐をかい、  
「……みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じょうとしている。なにもう起きてもいいの  
さ」と言った。しかもその翌日からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせて  
しまった。母は不承無性に太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前が帰って来  
たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。私には父の挙動がさして虚勢を張って  
いるようにも思えなかった。——私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の  
事がある場合でなければ、容易に父母の顔を見る自由の利かない男であった。妹は他国へ嫁  
いだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹  
三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母のいい  
付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足で  
あった。——「……これしきの病氣に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山  
な手紙を書くものだからいけない」、——父は口ではこう言った。こう言つたばかりでな  
く、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。「……あんまり軽  
はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と言う、私のこの注意を父は愉快そうにしかし極  
めて軽く受けた。「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言う。  
実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じ  
なかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状で  
もないので、私たちは格別それを気に留めなかった。（本文）

\*

\*

さて、父の病氣は思ったほど悪くはなかった。そして、着いた時は、床の上に胡坐をか  
いていたが、翌日からは、母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。  
一方、母は「不承無性」（しぶしぶ）太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前  
が帰って来たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。——むろん、その通りだと  
思うが、息子が帰って来て素直に「嬉しかった」とともに、もう一つの理由としては、少  
しでも元氣なところを見せて、息子に余計な心配をかけまいという気持ちもあったのかも  
知れない。——ところで、私の兄は、ある職を帯びて遠い九州にいた。また、妹は、他国  
へと嫁いだ。それゆえ、両方とも「万一の場合」でもなければ、家に容易には帰って来ら  
れないのである。つまり、兄妹三人のうちで、一番便利なのは、やはり書生をしている  
私だけであり、その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来た  
という事が、父には大きな満足であったとある。

さて、この「……父には大きな満足であった」というのは、まず、「……親の言うこと  
を聞いて、素直に帰って来てくれた」ことが、少しでも自分のことを気に掛けて心配して  
くれているのかと思つて、素直に「嬉しい」のである。——例えば、子供も大人になると、  
何だかんだと理由を付けて、帰ってこないことも多く、それは、親からすれば、どこか子  
供に見捨てられたような、そのような「淋しい」感じを抱くことにもなるのである。そし  
て、もう一つは、父親は、「……自分の病氣はすでに末期近くで、いつどうなるか分から

ないことは自ずと感じている」のであり、その「心細さや淋しさ」などから、また、元気で生きている間に、息子に逢えたことが素直に「嬉しい」ということにもなるのだろう。そして、父親は、「……これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山（大げさ）な手紙を書くものだからいけない」と言っているが、これは、息子に「気を遣うこと」ではあるが、実際、この時は、まだ「元氣そうにしていた」のである。一方、「私」という人は、先生からこの「病気の怖さ」を聞かされていたので、父親のことを心配して、「……あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と注意を促すが、父親は、「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言って、極めて軽く受け流した。——それは、「……実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった」とある。——もちろん、この「病氣」（腎臓病）の最大の「怖さ」は、本人にも「自覚症状」があまりないということであり、今回倒れたということは、やがて「何回も倒れる」ことが続く前ぶれでもあり、その末期症状は、もうそこまでやって来ているのである。

### 三七、先生にお礼の手紙を書く（二十一）

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど陰悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔気も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたのである。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂などをしながら、遥かに先生の書齋を想像した。「……こんど東京へ行く時には椎茸でも持つて行つてお上げ」、「……ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」、「……旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」と言うのであった。私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかったのも、（より）驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というのと私の間に書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰っていない。その一通は今言うこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである。——父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣つて、私が引き添うように傍に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかつた。（本文）

\*

\*

まず、「私」という人は、故郷に帰つてから、手紙で先生に「恩借」（好意で金銭を借

り受けたこと)の礼を述べたとある。これは、当然のことながら、当時は、まだ電話も一般には普及しておらず、急な時は、電報、ふだんは、手紙かはがきで連絡を取り合っていたのである。金銭は、正月上京する時に持参して返済すること、また、先生も気にしているだろうと思つて、父親の「病状」については、「……父の病状は、思つたほど険悪ではなく、この分なら当分安心であり、眩暈も嘔気も皆無なことなどを書き連ねて、そして、最後に先生の風邪(かぜ)についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪(かぜ)を実際軽く見ていたので」という内容になるが、最後の「……私は先生の風邪(かぜ)を実際軽く見ていたので」とすれば、実際の先生はその「風邪」をこじらせていたのかも知れない。そして、先生からの返事が来た時には、私はちよつと驚かされたのである。——これは、例えば、何らかの用件で手紙を出した場合には、その「用件」についての「返答」が返つて来ても何の不思議も特別なこともないが、これという「用件」もないのに、その「返信」が返つて来るのは、「……先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった」とある。これは、——例えば、大好きな芸能人やその他の人にファンレターやその他の手紙などを書いたが、恐らく、返事などは返つてこないだろうと思つていたら、何と丁寧な手紙が送られて来て、非常に嬉しかったというような心理と基本的には全く同じことである。

\*

\*

さて、先生と私との間の「手紙」のやり取りは、まず、最初は、十二月の中頃(冬休み前)、私の方から先生に「恩借の礼」や「父親の病状」などを書いた手紙を一通送つた。それに対して、先生の方からは丁寧な「返信の手紙」が送られてきた。この時は、それだけであったが、翌年、「私」という人は、卒業論文に専念して、やがて無事に大学を卒業する。そして、その「卒業証書」を持って、七、八月、再び、故郷へと帰ることになる。父親の病状は、小康な状態を保っていたので、この頃、先生にこちらの様子を書いた「手紙」を一通書いて送つたが、その「返信の手紙」は送られて来なかった。

一方、七月、明治天皇のご病気の報知があり、やがて、七月三十日、崩御の報道が伝えられると、父親は、その新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元氣は、一気に衰えて行くのである。そこで、母親は、父親を安心させるためにも、「……お前の先生先生という方にも(就職先を)お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に「手紙」を書くが、いつまで経つてもその返事は送られて来なかった。この時、先生は、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、九月、「私」という人は、東京に帰京しようとするが、突然、父親が風呂場で倒れて帰れなくなる。やがて、九月十三日、明治天皇の御大葬の日、「乃木大将の殉死」という報道が流れる。翌日、先生から、「……ちよつと会いたいが来られるかという」内容の「電報」(急報)を受ける。「私」という人は、父の病状が悪化して、「……行かれない」という「電報」(返電)と(それに関連した詳細の手紙)を出すと、今度は、二日後、先生は、「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来る。

その後、しばらくして、「私」という人は、父親の「看病」をしている時に、先生からの実に長い「手紙」を受け取るが、それがまさに「先生の遺書」であり、本文では、「……先生が死ぬ前にとくに私宛で書いた大変長いもの」というものであり、これらが「先生

と私の間」での「手紙や電報」のやり取りの全部になるのである。

### 三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の一

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かった。二人とも無精な性質なので、炬燵にあたったまま、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団の下から出すような事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸で挟み上げるといふ滑稽もあった。――「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言った。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であった。始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった。私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。（本文）

\*

\*

さて、私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かったとある。――例えば、炬燵の中に足を入れて、父親と「息子」（大学生）との二人が向き合って行なう遊びとしては、やはり「将棋か囲碁」になるかと思うが、しかし、「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」と、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言い、そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であったとある。一方、「息子」（大学生）の方は、「……始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった」とある。そこで、私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくび（退屈の仕草）をしたり、或いは、次のようなことを考えるようになる。

### 三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の二

私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。――私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭といるのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいると言っても、血のなかに先生の命が流れていると言っても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまた言うまでもな

く、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。(本文)

\*

\*

さて、今度は、「父親」と「先生」との比較対照になるが、それは、「……私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどつちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた」とある。——まず、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどつちも零であった」とある。これは、一言で言えば、まさに「社会的な活動」(つまり世の中に出て「仕事」など)を行なっていないからである。

また、「……この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた」とあるが、それは、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、「父親」は、それらの様々な「教養」なども先生ほどには豊かではなく、また、人間としての「成熟度」なども先生ほどではないという感じがして、それゆえ、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」としては物足りない、と、そのように「父親」を見ているのである。——一方、先生に対しては、逆に、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、それらに対する様々な「教養」などを豊かに持ち合わせていると共に、人間としても真に「内的成長(成熟)」している、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」である、と見ているのである。だからこそ、「私」という人は、その「先生」という人に、うそ偽りなく、強く心惹かれているとともに、次のようにも語るのである。

\*

\*

つまり、「……ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでい、と言つても、血のなかに先生の命が流れていると言つても、その時の私には少しも誇張でない、ように思われた」。だからこそ、「私」という人は、「……私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた」となるのである。そして、「……私は父が私の本當の父であり、先生はまた言うまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた」とあるが、これは、本来であれば、「私」という人間の、その「……肉のなかに本来実の『父親の命』が喰い込んでい、るはずのものであるが、しかし、実際は、そうではなく、全くの赤の他人に過ぎない「先生」という人の、その「先生の力」が自分(私)の肉のなかに喰い込んで「力」となっているとともに、「先生の命」が自分(私)の血のなかに流れて赤き「血潮」となっているからこそ、自分(私)の、「……漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動が聞こえるが、それは、先生の力で強められているように感じた」となるのである。

そして、全くの赤の他人に過ぎない「先生」からは、意外なほど大きな「影響」を受けているのに比べて、一方、実の「父親」からは、これという「影響」をあまり受けていないことを知って、まるで「初めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いている」のである。——むろん、これは、「私」という人がまだ「若い」ので、極めて「上昇志向」(ここでは「自分を少しでも成長させようとする気持ち」)がより強いために、全くの赤の他人に過ぎない「先生」ではあるが、その「先生」の方に、「私」という人は、実の「父親」よりも「より強く心惹かれて、いる」ということである。

三九、東京へ帰りたいたい気持ちが生じて来る(二十三)

私がゆる事もなく退屈のつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほやもてなやもてな歓迎されるのに、その峠ていぎとねを定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有っても無くとも構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持って帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留とまった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった。

父の病気は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにはわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらってもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つと言い出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。「……もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母が言った。「……まだ四、五日いても間に合うだろう」と父が言った。私は自分の極まめた出立しゅつたつの日を動かさなかった。(本文)

\*

\*

さて、「……私がゆる事もなく退屈のつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほやもてなやもてな歓迎されるのに、その峠ていぎとねを定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有っても無くとも構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである」とある。——例えば、一般に、最初は、大事や親切にされても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるようになって行く。これは、結局、今までの生活の中に「第三者」(元家族でも)入って来ると、今までは生活が変わり、最初のうちはそれでよくても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるのも、「第三者」が居いるということ自体わづらが煩わづらわしいことになり、その「第三者」のいない元の「今までの生活に戻したい」という気持ちになるからである。むろん、そうならない場合も、多々、あるということである。

それはともかく、「……私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて

帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった」とある。——まず、「儒者の家」というのは、いわば「昔からの古い保守的な考え方をする家」のなかに、切支丹キリシタン（それは「西洋風の新しい考え方」の臭いにおを持ち込むために、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。——つまり、「私」という人の「……ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが父や母とは違っているのである。

むろん、「……私はそれを隠していたが、元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。それは、父や母に理解してもらえないからである。だから、早く東京へ帰りたくなった」となるのである。——しかも、父の病気は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。私は、冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にしたのである。

\*

\*

四十、東京へ戻る

四十、東京へ戻る（二十四）

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。——私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれと言いましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念の問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事を言った。「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事も無いようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知っていた。「……自分で病気に罹っているながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝ていた細君が看病をする暇も何にもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいと言つて、細君を起したぎり、翌る朝はもう死んでい たんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつて言うんだから。」（本文）

\*

\*

さて、ここで「面白い」と思うのは、「……私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。椎茸は、新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、『こりや何の御菓子』と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた」とある。——まず、家で栽培した「椎茸」を「新しい菓子折」に入れて持つて行った。当然、奥さんは、中には「何らかの菓子類」が入っているのだらうと思つた。ところが、その「新しい菓子折」を手を持ってみたら、何らかの「菓子類」にしては、あまりに「軽い」ので、ほとんど無意識のうちに、「こりや何の御菓子」と聞いたのである。

例えば、まだ小さな子供であれば、誰かから包装された「何か土産やプレゼントなど」をもらった時に、子供は、とかく無遠慮に「これなーに？」とか、「この中身なーに？」などと、いきなり聞いたりするものであるが、そのような「感じ」があったということである。——つまり、ふつう大人であれば、気を遣つて、手に持つてあまりに軽いからと言って、いきなり「こりや何の御菓子」などと無遠慮の「質問」はしないものであるということである。そういう意味では、そういうことにはあまりこだわらない、さっぱりとした、「……極めて淡泊な小供らしい心を見せた」となるのである。

次に、先生も奥さんも心配していただであらう、私の「父の病気」についての質問がいろいろあつたが、その中で、先生は、「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事も無いようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」と言つた、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知つていたとある。そして、実例を挙げて、この「病気」（腎臓の病）がいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること）を語るのであつた。

四一、父の病気についての談義が続く（二十四）

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。「……私の父もそんなになるでしょうか。ならんとも言えないですね」、「……医者は何と申すのです」、「……医者は到底治らないと言っています。けれども当分のところ心配はあるまいとも言っています」、「……それじゃ好いでしよう。医者がそういうのなら。私の今話したのは気が付かずにはいた人の事で、しかもそれが随分乱暴な軍人なんだから」と言うのであった、

私はやや安心した。私の変化を凝と見ていた先生は、それからこう付け足した。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」と言うので、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思つ間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力で何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、「……殺される方はちつとも考えていかなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言うのであった。

その日はそれで帰った。帰つてからも父の病気はそれほど苦にならなかった。先生の言った自然に死ぬとか、不自然な暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度か手を着けようとしては手を引つ込めた「卒業論文」を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。（本文）

\*

\*

まず、私の「父の病気」については先生との会話のなかで、「……医者は何と申すので」と聞くので、「……医者は到底治らないと言っています。けれども当分のところ心配はあるまいとも言っています」、「……それじゃ好いでしよう。医者がそういうのなら。……」と言うのであった。そのあとに、先生は、こう付け足したとある。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。そして、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思つ間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力で何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、先生は、「……殺される方はちつとも考えていかなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言い、その日はそれで帰つたとある。

まず、われわれ人間の「死に方」としては、一つは、何らかの「病気」で亡くなる場合、一つは、何らかの「事故」や「自然災害」などに遭遇して亡くなる場合、一つは、人や動物などに「殺害されて」亡くなる場合、一つは、薬や食中毒或いは医療ミスその他などで亡くなる場合、そして、もう一つは、自ら「命を絶つて」（自殺をして）なくなる場合、

その他、いろいろとあるかと思うが、先生は、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言う。すると、「私」という人は、「……不自然な暴力で何ですか」と聞くと、先生は、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょ」と言う。「私」という人は、「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですわね」と言うので、先生は、「……殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそう言えばそうだ」とあるが、ここで最も「興味深い」のは、先生は、「不自然な暴力」としては、「……殺される方はちつとも考えていなかった」ということであり、先生が考えていたのは、まさに「……自ら命を絶つ自殺の方ばかりであった」ということである。……こういうところにも「先生の心」が見え隠れするのである。

一方、「私」という人は、「……帰ってからも父の病気はそれほど苦にならなかったし、また、先生の言った自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を受けただけで、後は何らのこだわりも私の頭に残さなかった」とある。それは、まだ「若い」ので、「死の問題」は、所詮他人事に過ぎないのである。そして、「私」という人の「頭の中」(或いは「心の中」)にあったものは、むしろ「卒業論文」のことであり、「……いよいよ本式に書き始めなければならないと思いついた」ということである。

#### 四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の一

その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった。他のものは余程前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなった。今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、いよいよ本格的に「卒業論文」に取りかかることになるが、それは、「……その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった(大丈夫の想いが揺れた)。他のものはよほど前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった」とある。そして、実際、「……私はその決心でやり出したら、忽ち動けなくなった」。それは、「……今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を

並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした」とある。——これは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）だけであれこれ思ったり考えたり空想したりすることは比較的容易にでき得るとしても、それを実際に「卒業論文」としてより、正確かつより厳密な「文章」として書き連ねていく作業ともなれば、それはもう極めて大変なことになるといふことであり、それゆえ、仕方なく、「……論文の問題を小さくした」ということである。

#### 四二、卒業論文に専念する（二十五）其の二

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言った。狼狽した気味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうと言った。しかし先生はこの点について毫も私を指導する任に当らうとしなかった。「……近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」、先生は一時非常の読書家であったが、その後どういふ訳か、前ほどの方面に興味が無くなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。——「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を讀んでみよと、先生の言葉はむしろ平静であった。世間に背中を向けた人の苦味を帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応えもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰った。（本文）

\*

\*

まず、「……私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言った」とある。それでは、それは、一体、どのような「学問」かと問えば、それは、本文には「何も明記されていない」ので分かりようもないが、ただ、理工系ではなく、文化系であり、法学をはじめ、政治学、経済学、教育学、文学や芸術学、語学、社会学、心理学、歴史学、その他、いろいろとあるかと思うが、先生自身は、自らを「思想家」と見ているのであり、それゆえ、恐らく、思想や倫理などを扱う「哲学」（か文学）のようなものではないかと思う。

それはともかく、「私」という人は、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を讀んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を讀んでみよ

うという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と、先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味(くみ) (苦言) を帯びていなかっただけに、私にはそれほど手応えもなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つたとある。

それは、先ず、まだ若い「私」という人は、まさに「向上心」に燃えているのであり、それゆえ、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」と聞きたくなるのも、当然であるが、一方の「先生」は、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしよう」と言い、また、「……以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と言うのであつた。

むろん、これには大きな「理由」があるのであり、それは、先生自身は、本来は、社会に出て、出来るならば何らかの活動をしたと思つて来た時期もあり。そのために、先生は一時非常の読書家でもあつたが、しかし、先生には、どうしても「社会に出て活動したくとも活動でき得ないような余りに重い『心の傷』(罪) を背負い込んでしまった」がために、読書に対する「意欲」も次第に衰えてしまったのである。——一方、それに対して、「私」という人は、「……私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずには帰つた」とある。これは、まさに「向上心」に燃えている若者から見れば、何か「物足りなさ」を感じたということである。

#### 四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の三

それからの私はほとんど論文に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切の日(しめきり) に車で事務所へ駆けつけて漸く間に合わせたと言つた。他の一人は五時を十五分ほど後(おく) らして持つて行つたため、危く跳ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたと言つた。私は不安を感じると共に度胸を据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫に這入つて、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更えて行つた。それが一仕切経つと、桜の噂(うわさ) がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭(むち) うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかつた。(本文)

\*

\*

さて、この「場面」は、学生にとつて「卒業論文」を書くということが、いかに大変な「一大事業」であるかを友だちの実例などを挙げて書き記しているものであり、「私」自身も、毎日毎日、「論文」に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、あれほど頻繁に行き来していた、先生の敷居をも跨がなかつた」ということである。

ちなみに、当時の大学では、卒業論文提出が「四月一杯」までであり、また、口述試験は、「六月」にあり、そして、卒業式は、ふつう「七月」となっていたそうである。が、ただ、この夏目漱石の『こころ』という作品の中では、卒業は「六月」となっている。

#### 四三、論文を完成させ、先生宅を訪ねる（二十六）

私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しなごら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていた、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生は何時もの調子で、「なるほど」とか、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。（本文）

さて、「……私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった」とある。だとすれば、それは、まさに「五月」のことであり、「……私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした」。そして、「……私はすぐ先生の家へ行った」とある。——これは、「卒業論文」を完成させるために長く「部屋」に閉じ籠められていた状態から、やっと解放されて、行きたくもずつと我慢していた、その「先生の家」へとすぐに出かけたが、その道々には枳殻の枝の上に、萌るような芽が吹いていたり、また、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた、とある。

例えば、われわれ人間というのは、若しも貪欲な「利害損得」などに振りまわされている「目」で「自然」を見た場合、例えば、仕事やその他などに追われている人たちは、まわりの「自然の風景」などをしみじみ見ることもなければ、ましてや道端の「タンポポの花」などには目もくれないだろう。そんなものは、腹の足しにもならなければ、一円にもならないからである。そんなものよりも、遙かに仕事やその他の方が遙かに大事だからである。むろん、それは、それで大事なことではあるが、しかし、それでは、「自然」というもの（敢えて「美」というもの）は、永遠に見えてはこないものである。

つまり、大事なことは、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」などに振りまわされ

ている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で「対象」そのものを見ること  
によってこそ、初めて、あるがままの「自然の風景」（その「美しさ」）がはつきりと見  
えて来ることになるが、しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに大事なことは、  
次のようなことである。——つまり、われわれ人間は、この世に生まれて今日まで生きて  
きた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自  
ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道德観、人生観、生  
き方、その他」などが生み出されることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガ  
ネ」であり、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、百  
%純粹な「眼」で「対象」そのものが見えて来ることであり、その結果、実に様々  
な「対象」の「色そのもの」、「形そのもの」、「音そのもの」、「匂いそのもの」、「味そのもの」  
「感触そのもの」、その他を、初めて、真に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ  
得るようになるということである。

さて、先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構です  
ね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」  
と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これ  
から先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいたとある。

これは、学生にとつて「卒業論文」を書き上げ完成させるといふことが、いかに大変な  
「一大事業」であるかを物語るものであると共に、この上もない「達成感や満足感或いは  
開放感」などに充たされていて、だからこそ、次のように語るのである。つまり、「……  
私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、し  
きりにその内容を喋々とした（つまりしゃべりまくった）」とある。——これは、自分の  
論文について、何か凄いとかが、素晴らしいとか、その他、とにかく、先生にほめてもら  
いたいという心理からである。ところが、一方、先生は、いつもの調子で、「なるほど」と  
か、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物  
足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であつたとある。

これは、まだ若い「私」にとつては、「……自分の論文に対して充分の自信と満足を持  
つていた」としても、「先生」をはじめ、その分野で何年も何十年も専門かつ最先端の研  
究などを行っている大学教授たちにとっては、実に数多くの学生たちが書き上げる「卒業論  
文」などを読んでも、多くの場合、そこに真に驚くべき人類的な発見の内容のものを見  
出すことは少なく、それゆえ、学生たちが期待するほどの「高い評価」などは得られ難  
いのである。それでも、「……その日の私の気力は、因循らしく（それが何だと）見える先  
生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた」と続くのである。

\*

\*

四四、先生を散歩へと誘い出す

#### 四四、先生を散歩へと誘い出す(二十六)

私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」、「……何処へ」、私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持ですよ」と誘うと、先生は、「……何処へ」と聞くのであった。私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。そして、——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私は「かなめの垣」(これは「かなめもちで造った生け垣」)から、若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いたとある。——この場面は、先生を散歩に誘い出し、そして、約一時間後、あてもなく歩いて辿り着いたその地点とは、まさに次のような場所であったが、これは、結局、その「場所設定」のための導入部分になっているのである。

やがて、若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えたとある。——そして、この「場所」(この「何々園」)で、先生の余りにも有名な「せりふ」が登場して来るのである。それは、つまり、どこでその有名な「せりふ」を先生に言わせようかと考えた末に、恐らく、作者(夏目漱石)という人は、まさにこの「場所」を選んだということである。

#### 四五、何々園の中に入る(二十六)

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」と、二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が

来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のよ  
うなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹  
かした。先生は着い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われて  
いた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝  
にかけているものは一つもなかった。細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生  
の帽子が風に吹かれて落ちた。(本文)

\*

\*

さて、その「何々園」の中は、次のようなものであった。つまり、「……植込の中を一  
うねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も  
見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静  
かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」、二人はま  
た奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかったとある。そして、躑躅が燃えるよ  
うに咲き乱れていた。「満開」だとすれば、季節は、まさに「五月」、先生はそのうちで樺色  
の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一  
面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかったと  
ある。例えば、「……芍薬は、牡丹が咲き終わるのを待つようにして咲く」とある。牡丹  
は、東京では、ふつう「五月」頃、その後「芍薬」が咲き匂うということになるのだ  
ろう。そして、この芍薬畠の傍にある古びた「縁台のようなもの」の上に先生は大の字  
なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は着い透き徹る  
ような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよ  
く眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けているものは一つもな  
かったとある。——これは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害  
損得」)などに振りまわされている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で  
「対象」そのものを見ているということであり、そのような「見方」によってこそ、初め  
て、あるがままの「自然の風景」(その「美しさ」)がはっきりと見えて来るということ  
である。その時、細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生の帽子が風に吹かれ  
て落ちたとある。

#### 四六、財産の話をする(二十七) 其の一

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。  
「……先生帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれ  
を受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞  
いた。「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」、「……あるという程ありや  
しません」、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」、「……どの位って、山と田地  
が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と言った。

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私  
の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった  
始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の  
胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとば

かり思つて何時でも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。――「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」「……私は財産家と見えますか」。(本文)

\*

\*

さて、いよいよ「本題」が登場して来るが、それは、まず、「……先生、帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。それは、「財産」のことであるが、「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」「……あるという程ありやしません」、すると、先生は、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」と聞く。私は、「……どの位って、山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と答えるのであった。ここまでは、ふつうの会話ではあるが、しかし、「……先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた」とともに、一方、「私」の方でも、「……まだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つた。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つて何時でも控えていた」が、ついに、「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」と問うのであつた。――もちろん、これは、いわば「前振り」に過ぎないのであるが、しかし、その「財産」をめぐる「問題」からこそ、先生は、今日のような先生になつてしまつた「大きな要因」の一つがあるのである。……先生は、「……私は財産家と見えますか」と聞くのであつた。

#### 四六、財産の話をする(二十七) 其の二

先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、あたじけなく(けちけちと)切り詰めた無弾力性のもではなかつた。「……そうでしょう」と私が言つた。「……そりゃその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」、この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」、先生の言葉は半分独言のようであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると、先生がまた問題を他へ移した。(本文)

\*

\*

さて、「……先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、けちけちと切り詰めた無弾力性のもではなかつた」のである。「……そうでしょう」と

私が言った。「……そりやその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」となるが、大事なのは、この次であり、この時、先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のようであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとある。——さて、「……竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた」とあるが、これは、まさに「過去」を思い出しては、その「怒りや恨み」などで興奮している、「心の状態」から生じている「行為」になるのである。そして、「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のように言い、そして、再び、「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとあるが、——これは、元々は、まさに「財産家」であつたのである。ところが、その「財産」の多くを「人に欺し取られてしまう」のである。だからこそ、「先生」という人は、「財産」の話になると、その「過去」のことを思い出しては、今でも、その「怒りや恨み」などで興奮してしまうのである。そこで、「……先生はまた問題を他へ移したとなる」のである。

#### 四六、財産の話をする（二十七） 其三

先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる為替と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱していなかつた。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」、「……好ければ結構だが、——病症が病症だからね」、「……やっぱ駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしよう。何とも言つて来ませんよ」、「……そうですか」と言うのであつた。私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。（本文）

\*

\*

さて、今度は、「父の病気」の問題になるが、先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる「為替」（現金書留）と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。（これは、本人だからこそ余計な心配をかけまいと何も書かないのであり、母親であれば、もつといろいろと細かなことを書いて来たかも知れない）。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱していなかつた。（だとすれば、手の震えは、まだないのだらう）。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」とあるが、（これは、余りに暢気な言

葉であり)、一方、先生は、「……好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」という根拠は、(妻の「母親」の「腎臓病」を実際に見てきた経験があるからである)。すると、「私」という人は、「……やっぱ、駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんですよ。何とも言つて来ませんよ」とあるが、これは、「父の病氣」は「もう治らない」とは覚悟しているが、しかし、まだ「しばらくは大丈夫だろう」と見ているのである。……先生は、「……そうですか」と言うだけであつた。

ところで、私は、「……先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた」とある。——これは、第三部(先生と遺言)を読めば、詳細に書き記されているので、ここではごく簡単に説明をすると、一人息子の「先生」がまだ中学生の終わりの頃、突然、父も母も「腸チフス」の病氣でほぼ同時に亡くなつてしまふのである。そこで、「父親」が遺した実家の旧家の「財産管理」は、親戚の「叔父」(父親の実の弟)にすべてを任せて、「先生」は、東京の「高等学校」に入学することになるのである。そして、夏休みだけは「実家」に戻り、あとは、ずっと「東京」で暮らすような生活をしていたが、その「高校三年間」の間に、その実家の旧家の「財産」の多くを親戚の「叔父」(父親の実の弟)にまさに「欺し取られてしまふ」のである。そのような絶対に許せない苦々しい「経験」(つまり「生々しい実体験」)があればこそ、先生は、次のようなことを何度も「私」に対して言つたり、また、聞いたりしているのである。

#### 四七、人はいざという間に悪人になる(二十八) 其の一

先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をして、一人もいないと私は信じていた。その上先生の言う事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。……あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想して掛かるような言葉遣いをするのが気に触つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なもので、いつ死ぬか分らないものだからね」と、先生の口氣は珍らしく苦々しかった。

「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と私は弁解した。(本文)

\*

さて、いよいよ「核心部分」に迫つて来ましたが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心

配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実地的なのに、私は少し驚かされたのである。

つまり、「私」という、まだ「若い人」ととって、いわば尊敬する「先生」という人が、なぜ、どうしてこのような「財産の問題」などにここまで執拗にこだわり尋ねて来るのか、その「真意」が全く分かり兼ねているのである。一方、「先生」としては、自分と「同じような経験」をこの若者に絶対にさせたくないという、その「一念」（深い想い）からであり、それは、次のようなことである。——つまり、まだ若い「私」という人は、「……私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた」とある。つまり、「財産問題」などで「家族や親戚」などがまさに「骨肉の争い」などを起こすことなど絶対にあり得ないと固く信じ切っているのである。それは、「それでよい」のである。問題は、絶対により得ないと固く信じ切っていた、その「家族や親戚」などに「裏切られた時」のことを、「先生」という人は、心の底から心配しているのである。なぜなら、「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」からである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになつて行く。「大きな要因」の一つになつているのである。もちろん、それだけではなく、もう一つの極めて「大きな要因」があつて、それらがまさに「今のような先生にしている」要因であるが、それは、次の機会に説明をするとして、一方、「私」という人は、「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と、弁解するのであつた。

#### 四七、人はいざという間に急に悪人になる（二十八）其の二

先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問うなどした。そうして最後にこう言つた。「……みんな善い人ですか」、「……別に悪い人間という程のものもないようです。大抵田舎者ですから」、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」、——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚などの中に、これと言つて、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」（本文）

\*

\*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品のなかで、最も「有名な文章（せりふ）」の一つが、まさにこの「場面」で登場して来るが、それは、次のようなものである。——まず、先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞き

たり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただした」とある。これは、もちろん、どのような「可能性」があるのかを見ているのである。——例えば、まず、「父親」が亡くなれば、残された「母親」と「三人兄弟」（兄と私と妹）で、その家の「財産」の「分配」を行なうことになるかと思う、その場合、「私」という人は、「……山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いでしょう」と言っていた。もちろん、「家」は、母親が受け継ぐことになるだろうが、その他、例えば、その「山や田地」などは誰が「遺産分け」として受け継ぐのかという問題が生じるかも知れない。また、数多くの親戚や叔父や叔母などがあるとして、この「家」の「遺産分け」などにどのように関わって来るのかは分からないが、とにかく、そのような「可能性」を見ているのである。

そして、「先生」は、終に「その言葉」を発するのである。それは、「……みんな善い人ですか」と聞くと、「私」という人は、「……別に悪い人間という程のものでもないよ。大抵田舎者ですから」と答える。すると、先生は、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」と聞く。——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだと思います。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」である。

例えば、「夏目漱石」という人は、生後すぐに四谷の古道具屋（一説に八百屋）に「里子」に出されるが、姉が不憫に思い、実家へ連れ戻される。そして、一歳の時、今度は、父親の友人であった塩原家のところに「養子」に出されるが、義父の「女性問題」から「家庭不和」となり、七歳の時、養母とともに一時生家に戻る。そして、九歳の時、「養父母」の離婚により、生家に戻るようになるが、養父と実父との対立は続き、「塩原」から「夏目家」への復籍は、二十一歳の時になるのである。

その後、「夏目漱石」が有名な「作家」になると、今度は、金銭に困っていたその「義父」（塩原昌之助）という人は、有名になった「夏目漱石」の家にその姿をたびたび現わしては、毎回、お金の「無心」をするようになるのである。そのために、「夏目漱石」という人は、そのことで非常に「悩み苦しむ」ことにもなるのであるが、そのような「経験」（実体験）が実際にあるのであり、そのようなことも「このような言葉」の中には反映されているのである。

それはともかく、ここでの最も「重要な言葉」は、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだ

から恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」ということである。そして、この「言葉」が「先生」の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来た「最大の理由」の一つが、まさに「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の弟）にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」ということである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く「大きな要因」の一つになっているのである。もちろん、「先生」にはもう一つの「決定的な要因」があるのであるが、それは、第三部の「先生と遺書」のところで詳しく述べたいと思うので、ここでは先へと進みたいと思う。

\*

\*

四八、犬と子供の突然の出現

先生の言う事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何か言おうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって」、——小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長になつてるところなんだよ」、小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらしい年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けて行った。（本文）

\*

\*

さて、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った」とある。これは、今までの先生と私との「会話」を一度中断させるような展開になつてゐる。それでは、なぜ、二人の「会話」を一度中断させるような展開が必要になるのだろうか。むろん、それには様々な「理由」が考えられるかと思うが、まず、考えられることは、二人の「会話」がずっと続いているために、今、二人はどのような「風景の場所」でどのような状況で話をしているのかが分かり難くなつてゐる。そこで、一度、二人だけの「会話の世界」から、「現実の世界」へと引き戻してゐるのである。——例えば、犬が急に吠え出すとか、また、突然、雨が降り出すとか、その他、そのような「変化の描写」を書き加えることによつて、二人が居る、その「現場の状況」がより生々しい「真実味」を以つて再び見えて来るのである。それが、まさに次のような「描写」になるのである。

つまり、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。すると、縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉の苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬は、その顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって」、——小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長（偵察部隊の隊長）になつてるところなんだよ」と言う。（これは、怪しい二人が何々園の中に侵入したので、子供たちの間でお前が行つて《或いは自分が行つて》話を聞いて来るといふことので出て来たのである）。小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。

犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらしい年格好の小供が二、三人、これも斥候長せつこうちやうの下りて行った方へ駆けて行った、となるのである。

そして、もう一つの「大きな理由」は、一気に「最後の結末」まで行くのではなく、一度、中断して、再び、「最後の結末」の方へと向かうという手法の方が、より強い「鮮明な衝撃」を与えることができ得るからである。それが、次からの「言葉」になるのである。

#### 四九、犬と子供の去った後のこと（二十九）

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事が出来なくなったので、私はずいぶんその要領を得ないでしまった。先生の気にする財産云々の掛念はその時の私には全くなかった。私の性質として、また私の境遇から言って、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨まないためでもあつたらうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた。

犬と小供が去つたあと、広い若葉の園は再び故の静かさに歸つた。そうして我々は沈黙に鎖ざされた人の様にしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失つて来た。眼の前にある樹は大概楓であつたが、その枝に滴るように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往來を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日へでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想から呼吸を吹き返した人のように立ち上がった。（本文）

\* \* \*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』（その真意）であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた」というこの部分である。——これは、読者も全く「同じ心理」に置かれていたのである。ところが、再び、周りの風景やその様子の描写などになつて行く。なぜ、すぐに「本題」に入らないのか？ それはもちろん、いわば「読者を焦らす」ということでもあるが、それ以上に大事なことは、一方の「私」という人は、「……人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』（その真意）を底まで聞きたかつた」と今もそう強く思っているが、一方の「先生」の方は、犬と子供の突然の出現によつて、あれほど興奮して「財産」のことについて語っていた先生の「心の状態」は、今は本来の「心の静けさ」を取り戻しているのである。だからこそ、次のような言葉になつて行くのである。

#### 五十、やがて二人は植木屋を出て行く（二十九）

先生は、「……もう、除々そろそろ帰りましょう。大分だいぶ日が永くなつたようだが、やっぱりこう安閑あんかんとしているうちには、何時いつの間にか暮れて行くんだね」、先生の背中には、さつき縁台の上に仰向あおむきに寝た痕あとがいつぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。「……ありがとう。脂やにがこびり着いてやしませんか」と聞くので、「……綺麗きれいに落ちました」と言う。と、「……この羽織こまひだこしらはつい此間こまひだこしら拵こしらえたばかりなんだよ。だから無闇むやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難ありがたう」と言い、二人はまただから坂さかの中途ちゆうとにある家の前へ来た。這入はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかつた縁側えんがわに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻いとまきへ糸を巻き付けていた。二人は大きな金魚鉢ぼちの横から、「……どうもお邪魔じやまをしました」と挨拶あいさつした。お上かみさんは、「……いいえお構かまい申しも致いたしませんで」と礼を返した後、先刻さうき小供こどもに遣やつた白銅はくどうの札はがきを述べた。(本文)、――さて、これで、「何々園じやま」(植木屋)の場面は終了して、いよいよ「核心部分かくしんぶぶん」そのものへと入って行くのである。

\*

\*

五一、人間は誰だれでもいざという間際まぎわに急に悪人になる

五一、人間は誰でもいざという間際に急に悪人に変わる（二十九）

門口を出て二、三町来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言った風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後れがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だつて、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」、待ち合わせるために振り向いて立ち留まつた私の顔を見て、先生はこう言つた。（本文）

\* さて、「何々園」（植木屋）の門口を出て、一、三町（二町は約一〇九メートル）来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」と言うのであつた。——この「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」というのは、一体、どういう「意味合い」になるのかと敢えて問えば、それは、例えば、「……われわれ人間は、誰でも、遅かれ早かれ、やがては死ぬものだ。これは、理屈じゃないんだ、つまり事実なんですよ」という、そういう「意味合い」を含むものになるのである。

それでは、なぜ、「……人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだ」と言い切れるのか？ それが「最大の問題」になるが、それは、次のようなことである。——つまり、この「悪人」という「言葉」を、どのように「解釈」するかについてはかかつているのである。つまり、この「悪人」という「言葉」は、すなわち、「悪い心」になるということであり、これは、ほぼ「百％」近くそうなるということであるが、しかし、その「悪い心」になつた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまふ場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがある、その「悪い心」になるものである。——つまり、「……人間は誰でもいざという間際に悪人（悪い心）になるものであるが、しかし、その「悪い心」になつた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまふ場合と、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがある」ということになるのである。

\* 例えば、太宰治の『走れメロス』の場合、メロスは、町へと走って戻る途中、一度だけ、親友を裏切るような想い（悪い心）に襲われてしまふ。また、人質になつていた「親友」も、一度だけ、メロスを疑う「気持ち」（悪い心）に襲われてしまふ。一方、暴君（ディオニス）は、人間が信じられないという想い（悪い心）に襲われて、疑わしい人間は、次

から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、三人が三人とも、いざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時に）、みんな悪人（悪い心）になっているのである。しかし、メロスの場合は、その「悪人」（悪い心）に襲われながらも、その想い（悪い心）を振り切って、最後まで走り続けるのである。一方、暴君（ディオニス）の場合は、人間が信じられないという想い（悪い心）に襲われた時に、そのまま「悪人」（悪い心）のままに、実際に、疑わしい人間は、次から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、「……人間というのは誰でもいざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時には）誰でも悪人（悪い心）になってしまふものであるが、しかし、その「悪い心」になった時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

\*

\*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であったとある。

さて、「先生」という人は、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。もちろん、これは、まだ中学生であった「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」という、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）があつて、その「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、まさに生じて来た「金さ君」という言葉（想い）になるのである。

例えば、道ばたに「大金」が落ちていけば、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい気持ち（衝動）に襲われたとしても、それを責めることは出来ないだろう。ただ「問題」なのは、その「ねこばば」したいという気持ち（衝動）のままに実際に「ねこばば」をしてしまう場合と、「ねこばば」したい気持ちは、山々だけれども、それを「交番」（警察）に届け出る場合とがあるかと思う。——つまり、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい「気持ち」（衝動）、つまり、誰でも「悪人」（悪い心）に襲われてしまうものであるが、しかし、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

それでは、どういう時に、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまうのかと問えば、それが、まさに「いざという間際に」（つまり「何かに追い詰められたような状況に置かれた時に」）、誰でも悪人（悪い心）のままに実際に行動（言動）してしまう傾向があるのである。——それが、すなわち、「先生」が言う、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだ」と

言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際まぎわに（それは『何かに追い詰められたような状況に置かれた時に』、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という言葉の、まさに「真意」になるかと思う。

\*

\*

さて、「私」という人は、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つままらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。それゆえ、（不満を抱きながら）、私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だつて、私の返事一つ（期待したような返事でなかつたの）で、すぐ変る（不満を抱いている）じゃないか」と、待ち合わせるために振り向いて立ち留どまつた私の顔を見て、先生はこう言つた、となるのである。

つまり、われわれ人間というのは、その人の置かれたその時々、状況に依つて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりすることである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々、状況に依つて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりすることである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分らないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要がある、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考へやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分らない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

## 五二、先生は、さつき少し興奮しましたね（三十）

その時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こたわる様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹しゅうはらになつた。何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなって来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し興奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮こうふんしたのを滅多めったに見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」。

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的まとが外れたようにも感じた。仕方がないから後は言わない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗きれいに刈り込んだ生垣いけがきの下で、裾すそをまくつて小便をした。私は先生が用を足す間あいだぼんやりそこに立つていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私達の通る道は段々賑にぎやかに

なつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであつた。(先生は本気で答えているのであるが)、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味になつて、不満の気持ちが残つてしまつた。そこで、「私」という人は、何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなつて来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんです、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」と言うのであつた。

すると、先生は、「……すぐ(には)返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的が外れたようにも感じた。仕方がないから後は言わない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立っていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑やかになつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていたとある。——これは、一体、どのような「意味合い」のものになるのかと問えば、それは、段々と賑やかになる方向(町中)へと向かつて、二人が道を歩いている間じゆう、「先生」という人は、ずつと、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」という、「言葉」を、先生は「頭の中」(或いは「心の中」)で何度も何度も繰り返しながらずつと「考えていた」ということである。

### 五三、私は他に欺かれたのです(三十)

先生は、突然、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えませんか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、

私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立っても二十年立っても忘れやしないんだから」と言うのであった。

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自分を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼等が代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉の言葉さえ口へ出せなかった。(本文)

さて、先生は、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えませんか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立っても二十年立つても忘れやしないんだから」とある。——これは、つまり、「先生」が受けた「心の傷」がいかに「深いもの」であつたかを極めて如実に物語っているものである。

さて、「私」という人は、「……先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自分を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉(慰め)の言葉さえ口へ出せなかったとある。

\* \*  
これは、まだ中学三年生であった「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」のである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対許せない苦しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く。「大きな要因」の一つになっているのである。それが、つまり、「……私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」となるのである。

#### 五四、やがて二人は電車に乗って帰る（三十一）

その日の談話も遂にこれぎりで発展せずじまった。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかったのである。——二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」と言った。私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として不得要領に終つた。その日二人の間に起つた郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残つた。（本文）

\* \*  
さて、「……その日の談話も遂にこれぎり発展せずじまった。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかった」とある。そして、「……二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、『……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ』と言った。（今は五月）、私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった」とある。

\* \*  
これは、まさに外から見た「外的事実」であり、その時々表れる先生の様々な「外的事実」（例えば様々な顔の表情や言動その他）というものは、われわれ人間の「五感」を

通じて、いくらでも「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ得るとともに、それらをもとにして、われわれ人間というところは、とかく、あの人は、ああいう人、この人は、こういう人と、勝手に決めつけているところがあるかと思うが、一方、先生の奥深くにある「内的事実」というものは、前述の「内容のようなもの」であり、それは、先生自身が「素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。そして、その「告白」を聞いて、「私」という人は、その余りの「衝撃」のために、いわば「言葉」を失っているのである。それを見ていて、先生は、少しでも元気づかせようとして、常よりは晴やかな調子で、まさに「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ！」と、明るい顔で言うのであった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として「不得要領」（肝心な所が分からないまま）に終わった。その日、二人の間に起った郊外の談話も、この「不得要領」（肝心な所が分からないままに終わった）「二例」として私の胸の裏に残ったということである。

#### 五五、あなたはほんとうに真面目ですか（三十一）

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はいこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解ってる癖に、はつきり言ってくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらいっしやいます」、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」、「先生はあきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた。「……あなたは大胆だ」、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」、「……私の過去を許してもですか」、「許くという言葉が、突然恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼かった。「……あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、「私の声は顫えた。「よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。

それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから」、私は下宿へ帰ってから一種の圧迫を感じた。(本文)

\*

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解つてる癖に、はつきり言つてくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらつしやいます」と言う。——これは、まだ若い「私」という人から見ると、例えば、「……私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞いた時にも、先生は、笑い出し、そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのを聞いて、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。つまり、「……ちゃんと解つてる癖に、はつきり言つてくれない」と不満に思うわけである。ところが、先生は、まさに「……本気で答えているのである」、「つまり、「……私は何にも隠してやしません」となるのであるが、まだ若い「私」という人には「お金ではないもつと何かがあるはずだ」と思うのである。

\*

\*

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないので」と言うのであった。——つまり、何らの「体験も経験」も踏まえない、ただその人の「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ想像したり考え出した「思想や意見」というものがあるとするれば、一方、その人の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあるということである。そして、「先生」という人の「思想や意見」というのは、言うまでもなく、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」になつていようことである。

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」と言う。——つまり、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあり、その「思想や意見」を無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども、私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になる」と言う。——つまり、自分の「思想や意見」を人に語ることで、自分の「過去」を人に語ることは、全く「別々のこと」だと言つているのである。

一方、「私」という人は、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言うのである。——これは、先生の「思想や意見」だけではなく、先生の過去の一体どのような「体験や経験」から、このような「思想や意見」が生み出されて来たのか、その「両方」を「合わせて知りたい」と言っているのである。

すると、先生は、「……あきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた」とある。——これは、先生は、自分の「過去の或る事」をこれだけは、決して誰にも妻にさへ絶対に語らずと心の奥深くに隠して来たものであり、それを「いきなり語れ！」と言われて、思わず、「……あなたは大胆だ」と言うのである。すると、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。……

まず、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのであった。……

ところで、まだ若い「私」という人、この書生（大学生）は、帝国大学（つまり東大）の「三年生」だと思うが、この人は、一体、何のために「先生の宅」に頻繁にやって来ては、先生と親しく「話をしていく」のだろうか？ それはもちろん、「遊興」のためではなく、それは、まさに「……先生から人生の教訓を得るため、しかも、それは、ふつう一般的なものでは決してなく、真面目に『人生から（真の）教訓』を受けたのです」と語るのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。

すると、まだ若い「私」という人にとって、この「……私の過去を許してもですか」という言葉が、突然、恐ろしい「響き」を以て、私の耳を打ったとある。——それは、全く「想像すらし得なかった言葉」であったからであり。だからこそ、まだ若い「私」という人は、「……今、私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした」となるのである。一方、先生の方はと言えば、それは、「……先生の顔は蒼かった」（蒼ざめていた）ということになるのである。

先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。

例えば、「先生」という人は、（去年の）夏、鎌倉の海岸（海水浴場）で偶然にも出逢った、この「若者」を、なぜ、どうして自宅に「受け入れる」ようなことにしたのだろうか？ というのも、先生は、自ら「人間嫌い」とも「人間不信」だとも言っていたからである。それなのに、なぜこの「若者」を受け入れたのだろうか？ むろん、それにも幾つかの理由があったかと思うが、その「最大の理由」としては、やはり「話し相手」が欲しかったということである。しかも、その「話し相手」というのは、ごく「一般的な世間

話」などをするような相手ではなく、もっと「……人生を深く語り合える相手である」ともに、人間としても真面目であり、真に信用でき得るような相手」というものを、知らず識らずのうちに、先生は長年探し求めていたということである。そして、一年近く、この「若者」と親身に「付き合つて」みた結果、次のように想うようになったのである。

それが、すなわち、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれませんか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。——ここにこそ、先生の「長年の想い」があるということである。つまり、このまま自分の「思いや考え」などを誰にも語らず、また、誰にも知られず死んで行く、それには堪えられないということである。それゆえ、たった「一人」でもいい、真面目で、信用できる相手に自分の「思いや考え」などをすべて語つてから死にたいということである。だからこそ、先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と、何度も何度も念を押して聞いているのである。そして、もしあなたがうそ偽りなく真に「真面目で、信用できる相手」であるならば、その時は、自分の「過去のすべて」をあなたにすべて語つて上げててもよいと言つているのである。

それが、まさに「……あなたは腹の底から真面目ですか」と先生が聞いた時に、「私」という人は、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言つた事も真面目です」と、その声は顫えていたとある。(それだけ緊張感があつたということである)。すると、先生は、「よろしい」と言つた。そして、「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」となるのである。それでは、その適当の時期とは、一体、どのような時期かと問えば、それは、実は、「……自分が死んでもよいと思える時期」ということになのである。一方、「私」という人は、下宿へ帰つてからも一種の「圧迫」(ただ事ではないという感じ)を感じていたということである。

\*

\*

五六、大学を無事に卒業する

五六、大学を無事に卒業する (三十二)

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、いよいよ「大学を無事に卒業する」ことになるが、当時の「大学」というのは、「三年制」であり、「私」という人も、今年の一月から、二月、三月、四月一杯をかけて、ひたすら「卒業論文」を書くことに専念をして、ようやく完成させることになる、その間は、先生宅の「敷居を跨がなかった」とある。そして、五月になって、さっそく先生宅を訪ねては、先生を郊外に散歩に誘い出し、そこで「財産」の談話などをすることになるのである。そして、六月になると、「口述試験」があり、また、大学の「卒業式」は、当時は、「七月」(本書では六月)であった。だからこそ、「……私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった」となるのである。

そして、「私」という人は、「……式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた」とある。——例えば、大学の「卒業証書」というものは、一体、どれほどの意味のあるものなのか、それとも、それほど意味などないものなのか、という問題であるが、ふつう一般的に言って、大学を卒業した当人にとっては、何々大学(例えば有名校など)を卒業したからと言って、それほどどうということもないものであるが、しかし、世渡りをする時には、これが意外と「大きな役割」を果たすことになるのである。というのも、結局、その人の「……年齢、性別、出身地、学歴、職歴、趣味、その他」、何であれ、それは、結局、その人の様々な「外的事実」(つまりその人の学校や職場或いは趣味や生活や遊びなどでの色々な言動や学歴或いは職歴その他)などからこそ、その人をあれこれ「判断し、評価する」方法しかないからである。一方、その人の様々な「内的事実」などがどのようなようになっていくかなどは、本人が「自分の心の中を素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。それゆえ、世間一般的

には、その人の「履、歴書」（その中の「学歴」というものが、その人を判断する一つの「ものさし」にもなっているのである。

## 五七、先生の家へ御馳走に招かれていた（三十二）

私はその晩先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であった。――食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあった。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた。「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのをを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」、こう言われて見ると、なるほど先生は潔癖であった。書斎なども実に整然と片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まった。「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があつた。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言うと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う神経質という意味か、又は倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。（本文）

\*

\*

さて、私は、「……その晩、先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた」とある。むろん、これは、「私」の「卒業祝い」の為のものであるが、一方、作者（夏目漱石）としては、この三人揃つた「晩餐の席」で、最後、私の「父親の病氣から二人のうちどちらが先に死ぬか」という問題を提示する為のものでもあるが、それはともかく、――食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた」とある。――ところで、御馳走として、こういう具体的な「料理」があつたと描写してもよい場面であるが、何も描かれていないという事は、夏目漱石自身、料理への「こだわり」は、それ程はなかつたのかも知れない。それはともかく、先生は、「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのをを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」と言う。こう言われてみると、なるほど先生は「潔癖」であつた。書斎なども実に整然と片付いている。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつたとある。――これは、「先生」という人の「性格や性質」などがどういふものであるかを、まさに「卓布の純白さ」で表現しているところである。つまり、「不純」を非常に嫌う「潔癖症」のところがあり、それがまた、先生を「苦しめる大きな要因の一つ」にもなっているのである。

それが、まさに「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……

「でも着物などは、それほど気にしないですよ」と答えた事があった。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言う」と、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う「……神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつたのである。

つまり、先生は、自ら「……本当を言う」と、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。これは、夏目漱石の「神経衰弱」とも共通するところがあるのかも知れない。——一方、「私」という人は、先生の「精神的に癩性」という意味については、「……俗にいう神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた」とあるが、それは、恐らく、両方であり、だからこそ、「先生」という人は、いわゆる「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などに長年悩まされ続けるのである。

#### 五八、先生の家で御馳走にあずかる（三十二）

その晩、私は先生と向い合せに、例の白い卓布の前に坐つた。奥さんは二人を左右に置いて、独り庭の方を正面にして席を占めた。——「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれ程嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかつたのが、一つの原因であつた。けれども先生の言い方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たという真情も汲み取る事が出来なかつた。先生の笑いは、「……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです」と私に物語つていた。奥さんは私に「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言つてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかつた。（本文）

\*

\*

さて、「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれほど嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかつたのが、一つの原因であつたとある。——それでは、なぜ、そうなのかと問えば、まず、希望する大学に入学できた時には、まさに「飛び上がるほどの嬉しさ」があつたかと思つたが、一方、大学を卒業する時というのは、多くの場合、ごくふつうに講義に出て、必要な単位を修得すれば、（むろん卒業論文を書く大変さはあるが）、大体、「卒業」出来るようになってるのであり、それゆえ、何か特別に大騒ぎをしてまで喜ばなければならぬほどのものではないからであり、それは、先生も大学を卒業しているのです、そのような「心理」はよく解つていたのである。だからこそ、次のようになるのである。「……けれども先生のいい方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の

悪いアイロニー（皮肉）を認めなかったが、同時に目出たいという真情も汲み取る事が出来なかった。先生の笑いは、『……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです』と私に物語っていた」となるのである。

一方、奥さんの方は、私に、「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。——これは、いかにも「女性の視点」からであり、大学を卒業出来た当人も「結構」ではあるが、それ以上に、「……さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」という見方になるのである。——一般に、男の場合、先生もそうであるが、そこまでは「気が回らない」ものである。すると、私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行って見せてやろうと思った。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞くと、「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかったとある。——つまり、何々大学を卒業したという「学歴」こそが大事であり、それを証明する「卒業証書」というものは、多くの場合、どこかにしまい忘れていくという、（なぜか）そのような「扱い」を受けているのである。

#### 五九、これから何をする気ですか（三十三） 其の一

飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戲される程食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子を運ばせた。「……これは家で拵えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更えてもらった。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をやる気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子に靠たせていた。（本文）

さて、飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない（内々の）客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。（それだけお互いに打ち解けた関係になっているのである）。しかし、その日は、時候が時候なので、そんなに調戲されるほど食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」とある。例えば、日本最初の「扇風機」は、一八九四年（明治二十七年）に発売したものが最初とあるので、この「小説」が書かれる「大正三年」頃は、金持ちであれば、或いは持つていたかも知れない時期に当たる

のかも知れない。すると、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子<sup>みずがし</sup>を運ばせた。「……これは宅で拵<sup>こしら</sup>えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞<sup>ふるま</sup>うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更<sup>か</sup>えてもらったとある。明治時代は、アイスクリームはかなり高価な食べ物であったが、大正時代になると、かなり一般化して行くことになるのである。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居<sup>しきいざわ</sup>で背中を障子<sup>しょうじ</sup>に靠<sup>も</sup>たせていたとある。

五九、これから何をする気ですか（三十三） 其の二

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的<sup>あて</sup>もなかった。返事<sup>へんじ</sup>にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人<sup>やくにん</sup>？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。「……本当言うと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解<sup>わか</sup>らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>財産があるからそんな呑気な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」、私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌<sup>ろく</sup>なかぶれ方をし下<sup>くだ</sup>さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない<sup>あて</sup>と決して油断はならない」とある。（本文）

\*

\*

さて、私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的<sup>あて</sup>もなかった。返事<sup>へんじ</sup>にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人<sup>やくにん</sup>？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出したとある。——これは、非常に面白いところであり、例えば、当時、帝国大学（東大など）の「文化系」を出ると、一般的には、「先生か役人」などになる場合が多かったのだらう。夏目漱石も、学校の先生になっている。むろん、政治家や司法界或いは銀行や一流会社、その他、実に様々な職種はあるが、それはともかく、「私」という人は、「……本当言うと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解<sup>わか</sup>らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>財産があるからそんな呑気な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」と言う。私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌<sup>ろく</sup>なかぶれ方をし下<sup>くだ</sup>さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない<sup>あて</sup>と決

して油断はならない」とある。——先生は、一貫して「このこと」を気にかけている。

五九、これから何をする気ですか（三十三） 其の三

私は先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった。「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」、「……何だってそんな事を御聞きになるの」、「……先生に聞いても教えて下さらないから」、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていられるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」、先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為さなくっちゃ本当にいいやしませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」、「……ごろごろばかりしていやしないさ」、先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。（本文）

\*

\*

さて、先生は、「……かぶれても構わないから、その代りこの間言つた通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産（自分に見合つた財産）を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」と言う。これは、うまく欺（だま）されて、「自分に見合つた財産」以下になってしまう可能性は常にあるからである。——それを聞いて、「私」という人は、「……先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった」。

そこで、改めて、「私」という人は、「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」と聞くと、「……何だってそんな事を御聞きになるの」と訊く。「……先生に聞いても教えて下さらないから」と言うと、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていられるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」と言う。先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為さなくっちゃ本当にいいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うのであった。

これは、意外と面白いところであり、まず、自分の「財産」については、誰であれ、他人からあれこれ聞かれても、ふつうあまり語りたがらないものであるが、それは、やはり自然と「警戒心」が働くことになるからだろう。それと、もう一つ、奥さんは、「……あなたはこのから何か為さなくっちゃ本当にいいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うと、「……ごろごろばかりしていやしないさ」と言う。つまり、

奥さんは、先生が世に出て働かないことに対しては、まあ仕方ないかなあと思いながらも、やはり「心の底」では、「夫（先生）には世に出て何か仕事をして欲しい」と思っているのである。だからこそ、「……あなたはこれから何か為（な）さらくつちゃ本当に、いけませんよ」という言葉になるのである。

五九、これから何をする気ですか（三十四） 其の四

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国する筈（はず）になっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇（いとま）乞（こ）いの言葉を述べた。「……また自分お目にかかれませんか」「……九月には出ていらつしやるんでしようね」、私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。「……まあ九月頃（ころ）になるでしょう」、「……じゃ随分（ずいぶん）ご機嫌（きげん）よう。私たちもこの夏はことによると何処（どこ）かへ行くかも知れないのよ。随分（ずいぶん）暑（あつ）そうだから。行ったらまた絵端書（えがき）でも送って上げましょう」、「……どちらの見当（まど）です。若（も）しいらつしやるとすれば」、先生はこの問答（もんた）をにやにや笑って聞いていた。「……何まだ行くとも行かないとも極めていやしいんです」と言うのであった。——席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康（けんこう）について殆ど（ほとんど）知るところがなかった。何とも言うて来ない以上、悪くはないのだろう位（くらい）に考えていた。（本文）

さて、ここまでの「内容」は、そのまま書いてある通りかと思うが、ここで大事なところは、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんですか」と聞いて来たことであり、それを「切つ掛け」として、再び、「父の病気」の話になるとともに、やがて、「……先生と奥さんのどちらが先に死ぬか」という問題へと展開して行くのである。——これは、以前に、「……奥さんが先に死んだら、先生はどうなるでしょうか」という談義があり、その時には、奥さんは、「……先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが」と言っていたが、今度は、「……先生が先に死んだら奥さんはどうなるのか」という問題であり、先生は、この話を何気なく持ち出してはいるが、実は、先生が何よりも知りたいと思っていたことは、まさに「このこと」だったのである。

\*

\*

六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六十、父の病氣の話からどちらが先に死ぬか(三十四)

先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」、尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな術語をまるで聞かなかつた。「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したって仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言ったなり下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつた。

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前ようになってるね」、「……そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だって丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」、先生は私の顔を見た。私は笑つた。「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」、「……どうするつて……」、奥さんはそこで口籠つた。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう氣分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていうくらいだから」、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう言つた。(本文)

さて、先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によつて、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廢物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なつているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。一方、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したつて仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言つたなり下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつたとある。——そして、この場面で大事なのは、次からの「内容」である。

\*

\*

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」とある。——まず、先生は、「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」と何気なく遠回しに聞いている。これは、むろん、自分の「本心」(本当は己が死んだらお前はどうか)と聞きたいのだが)それを奥さんに悟られないためであり、すると、奥さんは、当然の如くに「なぜ」と聞き返すので、先生は、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」と、話を「先生が一番聞きたいところ」へと持って来るのである。すると、奥さんは、それに気づかず、「……そう極った訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」と言う。先生は、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」と言うと、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だつて丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」と言う。先生は私の顔を見た。私は笑つたとある。

むろん、これでは、先生が「本当に知りたいこと」が少しも聞き出せていないので、あらためて、次のように「聞き直す」のである。それは、「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と。今度は、直球を投げて来たのである。すると、奥さんは、さすがに動揺が生じてきて、「……どうするつて……」と、奥さんはそこで口籠つた、となるのである。先生の死に対する「想像的な悲哀」が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかなかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(ろうしやうふじょう)(人の寿命は、決まつたものではなく、老人でも若者であつても、いつ死ぬかは分からない)つて言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく言うつたとある。——これは、もちろん、奥さんは、いわば「本心」(答え)を避けたということになるが、その「本心」とは、すなわち、「……天下に一人しかいないと心の底から愛している夫を失えば、それは大変な悲しみに襲われることは間違いない」ことになるのである。

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか(三十五)

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になつていた。「……君はどう思います」と先生が聞いた。——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑つていた。「……寿命は分りませんね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日間で同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであつた。私は不思議に思つた。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」、奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮つた。「……そんな話はお止しよ。つまらないから」、先生は手に持った団扇をわざとばたばたいわ

せた。そうしてまた奥さんを顧みた。「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰っても仕様がないわね」、「……古本屋に売るさ」、「……売ればいくらぐらいになって」、先生はいくらとも言わなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」。(本文)

\*

\*

さて、私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていたとある。これは、席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんです」と聞かれて、そのままずっと「……話の区切りの付くまで二人の相手になっていた」ことになるが、そこには先生の「このような展開」に持っていたという「思惑」(企て)があったのかどうかは判別しがたいが、先生は、「……君はどう思います」と聞くのであった、「私」という人は、——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。「……寿命は分りませんね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極った年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなったのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だって続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであったとある。

これは、第三部(先生と遺言)を読めば、すぐにも分かることであるが、先生が「三年」の終わりの頃に、父親が「腸チフス」の病気になり、それを看護していた「奥さん」もその「腸チフス」の病気になってしまい、結局、二人とも「ほぼ同じ時期」に死んでしまったということである。一方、私にとつてはこの「知識」は新しいものであったので、私は不思議に思った。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」と聞くと、奥さんは私の問いに答えようとしたが、先生はそれを遮った。「……そんな話はお止しよ。つまりないから」と言い、先生は手に持った団扇をわざとばたばた言わせたのである。——それでは、なぜそのようなことを敢えてしたのか問えば、それは、「先生」にはまだ「言うべき言葉」が残っていたからであり、それは、次のようなものである。

\*

\*

さて、大事なのは、この後であり、先生は、奥さんの方をまた顧みて、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言う。すると、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」と言うと、先生は、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。奥さんは、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰っても仕様がないわね」と言うと、先生は、「……古本屋に売るさ」と言う。奥さんは、「……売ればいくらぐらいになって」と聞くと、先生はいくら

とも言わなかったとある。——これは、一体、何かと問えば、これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

そのように、先生の話は、容易に「自分の死」という「遠い問題」を離れなかった。そして、その「死」は、必ず「奥さんの前に起るもの」（つまり「先生が先に死ぬもの」と仮定されていたのである。——これは、結局、先生には「自殺願望」があつて、それゆえ、先生の「本心」というのは、一つは、「……己が死んだらお前はどうかと、奥さんの本心が聞きたいのであり」、そして、もう一つは、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言い、また、「……地面は他のものだから仕方がないが、その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

一方、奥さんも、最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えたが、それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。（これは「実際に夫が先に死んだらと思つたら、急に心が重苦しくなつた」ということである）。だからこそ、次のように言うのである。つまり、「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おつしやるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言う。——これは、奥さんは、本気で怒つて、いるのであり、それだけ奥さんは、心の底から先生のことを大事に思い、そして、心から愛しているのである。

## 六二、先生宅の玄関先にある木犀の木を見て（三十五）

先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。「……病人をお大事に」と奥さんが言つた。「……また九月に」と先生が言つた。——私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張つていた。私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われているその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないもののように、いつしよに記憶していた。私が偶然その樹の前に立つて、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入つたらしかなかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調える買物もあつたし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにかしに会つた。彼は私を無理やりある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餓を聞かされた。私の下宿へ帰つたのは十二時過ぎであつた。（本文）

\*

\*

さて、先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなつたとある。——これは、先生がぜひとも「……聞きたかつたこと、また、言い残しておきたかつたこと」は、一通り言えたからであろう。私はあまり長くなるので、すぐ席を立つ

たとある。先生と奥さんは玄関まで送って出た。「……ご病人をお大事に」と奥さんが言った。「……また九月に」と先生が言った。——これは、非常に「大事な言葉」であり、先生は、この時にはまだ「……自殺のことなど考えてはいなかった」ということである。私は、挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。「玄関と門」との間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張っていたとある。——まず、「木犀」の木であるが、これは、中国から入って来た「木」であり、一般には、有名な「金木犀」と「銀木犀」とがあり、「金木犀」は、小さな橙色の花を無数に咲かせて、甘い香りが漂う。一方、「銀木犀」は、小さな白い花を無数に咲かせて、香りは、金木犀に比べると弱い。どちらも実は結ばず、花は、毎年秋の十月頃に咲き匂うことになるのである。

私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われていてその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、一所に記憶していた。私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入ったらしかった。私は一人暗い表へ出たとある。——例えば、「……私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた」とある。これなどはほとんど誰も気づかないほどの自然な描写であるが、しかし、これは、実は暗に「或る事」を暗示しているのである。それは、次のようなことである。

つまり、この「私」という人が、再び、九月、この「先生の宅」にやって来るのは、実は、先生からの「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という「長い手紙」（先生の遺書）を受け取って、急遽、慌てて「汽車」に乗り込んで、「先生の宅」へと駆けつけるといふ展開になるのである。

また、「……私は一人暗い表へ出た」とあるが、これなども先生が亡くなりいなくなれば、再び、この「先生の宅」を、再び、訪ねることもなく、また、親しく人生を語り合える唯一無二の「話し相手」もいなくなり、結局は、「……私は一人暗い表（世の中）へ出る（放り出される）」しかないということである。

\*

\*

私はすぐ下宿へは戻らなかった。国へ帰る前に調える買物もあったし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあったので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行った。町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた。私の下宿へ帰ったのは十二時過ぎであったとある。

例えば、「……町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とある。——例えば、用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く姿や、今日私といっしょに卒業したなにかしに、私は無理やりにある酒場へ連れ込まれ、そこで「麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とあるが、これなども、先生の「……ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などと比べてみると、ほとんど取るに足らない「麦酒の泡のようなものに見えていた」ということになるのだろう。

\*

\*

六三、帰郷への準備

私はその翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った。

私はこの一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行った。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うのと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かったり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かったりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかったかを悔いた。

私は鞆を買った。無論和製の下等な品に過ぎなかったが、それでも金具やなどがびかびかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であった。この鞆を買うという事は、私の母の注文であった。卒業したら新しい鞆を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。(本文)

\*

\*

さて、私は、「……その翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った」とある。——これは、夏の「暑さ」とともに、もともと男性というものは、他人から頼まれた「買い物」などをあちこち買いまわること自体、女性とは違つて、それほど楽しいことではないのである。しかも、自分の時間を奪われ体も疲れるばかり、それが、まさに「……他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者(そういうことが全く分かっていない人)を憎らしく思った」ということである。

一方、私は、一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行ったとある。——例えば、「私」という人は、すでに「大学を卒業」しているのである。それゆえ、しばらくは「学問」から離れてもよいのであるが、この「私」という人は、まじめな性格で、「遊ぶ」ことよりは、むしろ「勉学」にこだわっている。また、「就職」はどうするのか? 全くその気がないとすれば、しばらくはぶらぶらするのか、それとも、さらに上の「大学院」へと進むのか、この辺のところは全く分らない。

また、買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかったかを悔いたとある。

例えば、まだ大学出たての若者が、女性の「衣服類」などをあれこれ買い求めるとなれば、まさに「……さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかったかを悔いた」となるのである。

また、私は靴を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であつた。この靴を買うという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい靴を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。——これは、わが子が「東京の帝国大学」を立派に卒業して晴れがましいぴかぴかの姿で帰つて来る。それは、田舎の人たち（郷里の人たち）にも「自分の息子」をこれでもかと自慢出来るとともに、そのようなことが出来ることが、実の母親にとつては何よりも嬉しく誇らしいことでもあるのだろう。一方、それを「息子」から見れば、一種の滑稽のように感じられたということである。

#### 六四、汽車で故郷へと帰る（三十六）

私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰つた。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、出来るなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりでも田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違つていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に氣の変わりやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になつた。私はまた先生夫婦の事を想ひ浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶ひ出した。「……どつちが先に死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起つた疑問を独り口の内でも繰り返して見た。そうしてこの疑問には誰も自信をもつて答える事が出来ないのだと思つた。しかしどつちが先

へ死ぬと判然分っていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思った。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。(本文)

\*

\*

さて、私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。(だとすれば、七月ということになる)。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかったとある。——これは、まだ若い生命力に満ち溢れている「私」という人にとっては、総じて「人の死」というものは、すべて「他人事」のように見えていて、たとえ「自分の父親」であつても、どこか「真実味」が感じられないようなところがあるのである。それは、なぜかと問えば、それはまだ若いので「死に直結する病気とか老いとか死への恐怖」などは経験もなく、それゆえ、実感として分かりやうがないからである。そして、私はむしろ父がいなくなったあとの母を想像して気の毒に思ったとある。(これはこれでもっともなことではあるが)、そのくらいだから私は心のどこかで、父はずでに亡くなるべきものと覚悟していたに違いなかったとあるが、これは、そのように「父親の死」を軽々しく決めつけて考えてしまうのも、父は、やがて病気で死んでいくという、その医学的「事実」だけを見ていて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などが全く実感として理解できていないからである。ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ考えているだけに過ぎないからである。それゆえ、大事なことは、父親の身になって、考えて見れば、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる事ができ得るようになるのである。

\*

\*

また、九州にいる兄へやった手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎり田舎にいらぬのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使った。私は實際心に浮ぶまを書いたとある。——これなども、ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ思っているだけに過ぎないのであり、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などは何一つ実感として理解出来ていないのである。それゆえ、父親の身になって、考えてみる事によつてこそ、初めて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる事ができ得るようになるのである。——つまり、ただ単に「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ考えることと、相手の身になってあれこれ真剣に親身に考えることでは、全く全然違うことになるのである。

それはともかく、「私」という人は、「……私は實際心に浮ぶまを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた」とある。——これは、一方では、「父の病氣」をあれこれ心配している自分と、一方では、もう治らないのだとあきらめているさめた自分とがいて、その「矛盾」を感じているということである。

\* \* \*

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。「……どっちが先へ死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事が出来ないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じたとある。——例えば、私は人間を果敢ないものに観じた。それは、人の「生命の果敢なさ」とともに、死に近づきつつある父を前にして、当人も私も医師も、その他、誰でも、どうすることも出来ないままでいるからである。

\* \* \*

例えば、人は、やがて「死ぬもの」である。これは、もう何を以てしてもどうにもならない事実である。しかし、生きている間は、誰でも出来るだけ「幸せ」であるべきであり、また、出来るだけ「痛みや苦しみ」などから少しでも解放されているべきである。

例えば、末期ガンのため、死を待つばかりの人がいるとする。この人は、やがて死ぬのだから、苦しんで死のうが楽に死のうがどっちでも結局同じではないかと考えてはいけないのである。——人間は、生きている限りは、死ぬその瞬間まで、出来るだけ「幸せ」であるべきであり、死ぬのは仕方がない。しかし、生きている限りは、少しでもその「痛みや苦しみ」などから解放されて、出来るだけ「幸せな状態」のまま、そして、みんなに「感謝」しながら死んでいく。それが、その人にとっては一番幸せなことであり、また、残された人たちにとっても一番幸せなことになるのである。——これが、まさに「ホスピス」(末期ケア)の根本的な「考え方」になるのである。

\* \* \*

上「先生と私」のまとめ

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）の海水浴場であった。そして、その「先生」と何回か浜辺で会って話をするようになるに連れて親しくなり、その後、東京に帰ったあとも、「私」という人は、なぜか「心惹かれる」その「先生」の家を頻繁に訪ねるようになって行くのである。そして、最初、訪ねた時には、留守であり、二度目も留守であると「下女」に言われるが、やがて「奥さん」が出てきて、奥さんは、美しい人であったが、先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある「或る仏」へ花を手向けに行く習慣があるということ、……たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは氣の毒そうに言うのであった。そこで、私も散歩がてら雑司ヶ谷の「墓地」へと行ってみると、茶店の中から先生らしい人がふいと出て来たので、出し抜けに「先生」と大きな声を掛けると、先生は突然立ち留まって私の顔を見るなり、「どうして……、どうして……」と、異様な調子をもって繰り返されるのであった。もちろん、この墓地の「仏」（親友）との関係においてこそ、先生の「謎」が奥深く隠されているのであるが、私は私がどうしてここへ来たかを先生に話すとともに、その先生の「奥さん」とも次第に親しくなるに連れて、いろいろと話をするようにもなるが、その前に、まず最初は、「恋」（恋愛）は罪悪である、について考えてみたいと思う。

一、恋（恋愛）は罪悪である

まず、本文から引用してみると、「……或る時花時分に私は先生といっしよに上野へ行った。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だしている人が沢山あった」とある。そして、「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好さそうです」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交っていますよ」と言うので、「……そんな風に聞こえましたか」と応えると、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以って誰よりも骨身に染みて

よく知っているものであり、だからこそ、「恋」(恋愛)は、罪悪です、と言うのである。

\* さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、当然の如く、「……なぜですか」と聞くと、「……なぜだか今に解ります。今にじやない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじやありませんか」と言うので、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言うと、先生は、「……目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きなくなるのです」とある。

\* これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」(大金)が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、多くの人たちは、まさに「金儲け」に動き出すのである。また、自分は、「恋」(恋愛)をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」(恋愛)をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、「恋」(恋愛)へと動き出すのである。しかし、「恋」(恋愛)というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何かが欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思つて、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

\* それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが。——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)なのである。

\* これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」(恋愛)については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」(恋愛)

については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

## 二、私と奥さんとの最も重要な会話部分

それでは、第一部の「先生と私」という作品の中から、私と奥さんとの最も重要な会話部分を、その「本文」から少し引用してみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」、「……しかし先生は健康から言って、別にどこも悪いところはないでしょ」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」、「……若い時ついでいつ頃ですか」、「書生時代よ」と言うのであった。

では、「……どんなだったんですか」、それは、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすったんですか」、「……急にじゃありません、段々あななって来たのよ」、「……じゃ先生がそう変って行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」、「……これでも私は先生のため出来るだけの事はしているつもりなんです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がなないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。

すると、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけど」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」、「……先生はまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちやうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、

そして、「……その事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われたい事もないのよ」、「……しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だから、そこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」、私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

### 三、「外的事実」と「内的事実」

さて、これらが、まさに「先生と私」という第一部における、「私」(或いは「奥さん」という第三者から見た(つまり「外から見た」)時の「先生」という存在の描写(理解)であり、それは、まさに「外的事実」にあたるものである。そして、その最も「核心部分」については、第三者である「私」(或いは「奥さん」)からは、どうしても解くことができ得ない、まさに大きな「謎」として残されたままになるのである。

むろん、この問題は、彼らだけに限ったことではなく、実は、すべての人間に当てはまることなのである。——つまり、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」(つまりその人の表面的な「姿・形」すがたかたち)やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるかと思う。そして、そのような傾向がはつきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによつて、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるのである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」(容姿・容貌)などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」としての、今日まで生きてきたその「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などの膨大な量の蓄積(蓄え)と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、一体、どのようなものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということであり、それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。——そして、残された「謎」の部分には、まさに第三部の「先生と遺書」というその中なかで、はつきりと語られることになるのである。それは、

先生（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それが、まさに「内的事実」になるのである。

\*

\*

さて、第一部の終盤（二十一）の「本文」に戻りたいと思うが、それは、次のようなものである。――秋が暮れて、冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。父はかねてから腎臓を病んで慢性化していたのである。そこで、冬休みになる少し前、先生の所へ行つて、必要な金を一時立て替えてもらい、その晩の汽車で東京を立つたが、父の病気は思ったほど悪くはなかった。私という人は、三人兄妹であり、兄は、九州にいて仕事に忙しく、また、妹は他国へ嫁にいき、今は妊娠中であり、二人とも「万一の時」ぐらしいか帰れないという状況であり、一番便利なのは書生をしている私だけであり、母の言いつけ通り、休み前に帰つて来たということが、父には大きな満足であつたとある。

これは、「父親と私」との関係であり、父親の病気は、今は健康そうに見えても、すでに末期に近く、やはりどこかに「心細さ」があつたに違ひなく、一方、「私」という人は、父親と将棋を差しながら、その父親と先生とを比較対照してみると、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であつた。他に認められるという点から言えばどっちも零であつた。それでいて、この将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭（や胸）に影響を与えていた」のである。これは、人間として父親よりも、むしろ先生の方に心惹かれていたということである。そこで、冬休みの尽きる少し前に故郷を立ち、東京へ帰つてみると、松飾はいつか取り払われていて、私は早速先生のうちへ椎茸も手土産に金を返しに行くと、父親の「病気」の話になり、実は奥さんの「母親」も「腎臓病」で亡くなっているのです、その病気のことをよく知っていて、この病気は、「……病気に罹つていながら、気が付かないで平気でいるのが特徴」であり、十分に注意しなければならぬという話になるのである。

ところで、「私」という人は、その年の六月に卒業を控えていたので、何が何でも四月いっぱいまでには、まさに「卒業論文」を仕上げなければならず、それに専念することとなるが、予定通り書き上げるまでは、先生の敷居を跨がなかつた。そして、「私」が自由になつたのは、初夏の季節（五月）であり、私はすぐ先生の家へ行つたとある。すると、先生は、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」ということになり、解放された気分だったので、先生を郊外に散歩へと誘い出し、一時間後、蕨とした小高い所には、門の柱に「何々園」（それは「植木屋」であつたが）という標札があり、その中へと二人して入つて行つた。そして、植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があつたが、静かで誰もいなかった。ここで、先生は、「……突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」と聞くので、「……あるというほどありません」という展開になるが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけない。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うのであつた。これは、先生にしては、あまりに実際的なので私は少し驚かされたのである。

しかし、これこそは、まさに「作者」（夏目漱石）がどうしても書き遺しておきたかつ

た「本題」の一つであり、それは、次のようなことである。まず、本文では、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と言うのであった。

これに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味はありません。——つまり事実なんです。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間にという意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は笑い出して、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えた。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつたとある。

#### 四、人に裏切られる

やがて、先生は、「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通してしよう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をしにいます。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのです」とある。

これは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「……（心から）信じていた人間から思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈であり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。——それは、例えば、（心の底から）信じていた「……祖父母、両親（父や母）、夫、妻、兄弟（姉妹）、わが子、孫、親戚、その他」などをはじめ、（心から）信じていた「……恩師、先生、監督、コーチ、リーダー、上司、部下、同僚、親友、友だち、仲間、恋人、愛人、その他」などから思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。

ふつう、われわれ人間というのは、「他人」というものをそれほど深くは信用していないものである。それゆえ、それほど信用していない「他人」からたとえ裏切られても、われわれ人間というのは、（ある程度はそういうこともあり得るだろうと想定している）、それほど深くは傷つかないものであり、確かに、その時には相手を心から強く恨んだり憎んだり呪ったりもするが、やがてはうすれていくものである。それゆえ、ここで最も大事なことは、われわれ人間が真に深く傷つくのは、まさに（心の底から）信じていた人間に裏切られた時であり、それは、先生のように、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いに深く陥りやすいということである。

ある。(むろん、これだけでは、まだ「先生のような人間」にはならないのである。)

さて、本文に戻りたいと思うが、それは、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を、悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言う。先生はあきれたと言った風に、私の顔を見ては、「……あなたは大胆だ」と言い、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言う、「……私の過去を許してもですか」と、突然、恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。「……あなたは本当に真面目ですか」と先生は念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、私の声は顫えた。「……よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増しかも知れません。ただ、今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい」と言うのであった。

その後は、私が卒業したらと、先生の家へ御馳走に招かれていたので、その晩、訪ねてみると、先生は、「御目出とう」と杯を上げ、奥さんは、「結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。先生から、「……君は卒業して、これから何をやる気ですか」と聞かれ、奥さんは、「先生？ 役人？」と聞くが、「……本当言うと、まだ何を考える考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないからです」と答えると、「……財産があるからそんな呑気な事を言っていられるのですわ」となり、また、財産の問題になるが、これは、やはり家族等が財産(お金)で「骨肉の争い」をする悲惨さを骨身に染みてよく知っていたからであり、その後、夜の十時頃、席を立とうとした時、先生は急に私をつかまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんですか」と聞いて来た。そして、「……尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言うところから、今度は、「……先生と奥さんのどちらが先に死ぬか？」という問題になり、先生は、「……もしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と聞くと、「……どうするって」と、奥さんはそこで口籠り、そして、「……どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(人の寿命は、決まったものではなく、老人でも若者であっても、いつ死ぬかは分からない) って言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう言ったとある。

さて、ここでの「最大の問題」というのは、もちろん、先生の「……もしおれの方が先

へ行くとするね。そうしたらお前どうする」というこの言葉(問、いかけ)であり、これは、まさに先生の心の底からの「問、いかけ」であり、それゆえ、この「言葉」に対する反応(答え)が、先生は、ぜひとも知りたかったということである。——一方、奥さんは、通り一遍のありきたりの「答え方」しかしていない。それは、一体、なぜなのか？ それは、先生が近い将来「死ぬ」ということが全く考えられないからであり、若しも先生が病気がちでもあれば、少しは「真実味」を持つが、全くの健康体では、奥さんは、むしろ「自分の方が先に死ぬ」と思っている位なのである。そして、先生は、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、また、「……おれの持っているものも皆お前にやるよ」と、(まるで遺言みたい)言うのを聞いて、奥さんは、「……おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言い、先生は庭の方を向いて笑ったとある。これが奥さんの心の底からの「本心」であり、奥さんは、本気で怒っているのであり、それだけ、いわば「先生」を心の底から愛しているということにもなるのだろう。

\*

\*

一方、若しも「……奥さんが先に死んだら先生はどうなるのだろうか？」という問題が残されているが、これは、もつとずつと前の段階で、すでに「奥さんと私」との対話の中に出てきたものであり、それは、次のようなものである。——つまり、「私」という人から、「……奥さんは、先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか？」と聞かれた時に、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直して聞かなくとも好いじゃありませんか」、「……つまり、分り切っているとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てもいい。あなたから見てもいい。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりゃ私から見れば分っています。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚れるようになるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚れるようになるんですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」。「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになっていくんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と答えるのであった。——これが、先生の「謎」に対する、いわば「奥さん」なりの「一つの解釈」(答え)であり、このような「解釈」によって、奥さんの「心」は、いわば「落ち付いていられた」ということになるのだろう。

\*

\*

夏目漱石の世界  
（両親と私）

はじめに

さて、今回は、夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、まず、「私」という人は、東京の帝国大学を無事に卒業をしたので、七月、汽車で故郷へと帰ることになる。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっていっている。

まず、宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。そこで、母に「父親」の様子を聞くと、「もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。しかし、この「慢性腎臓病」の恐ろしさは、「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること」である。

さて、両親は、息子の「卒業祝い」の相談を始めるが、「私」という人は、それには反対で、「あんまり仰山な事は止してください」と言うと、母親は、「仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。そう遠慮をお為でない」と言い、また、父親も、「呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、こうも言うのであった。その結果、「卒業祝い」の日取りは決まるが、その日取りが来る前に、新聞による明治天皇の御病気の報知を受けて、「まあ、（今回は）ご遠慮申した方がよからう」と取りやめになるのであった。

やがて、明治天皇の「崩御」とともに、父親の病状も悪化し、母親は、（夫を少しでも元気づけさせようと）、息子に「先生に就職口を頼んだら」と言うので、「私」という人は、先生に条件の好い「就職口をお願い」の手紙を出す。先生からの返事はいつまで経っても来ない。そこで、九月初め、東京へ出ようと決めるが、その出発日の二日前の夕方に、父親が風呂場で突然に倒れる。しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事となり、そこで最初は兄や妹に父の現状を知らせる長い手紙を出す。やがて急を知らせる電報を兄や妹に急遽打つこととなり、やがて、兄と妊婦の妹代わりの夫が急ぎ駆けつけることになる。そして、天皇の「崩御」から約一ヶ月半後の明治天皇の「御大葬の夜」に「乃木大将の殉死」という大きな出来事が起こるのである。

もちろん、東京にいた先生も、当然のことながら、この「乃木大将の殉死」を、正にその夜の号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことになって、先生は、ある「決心」をして、その日（午前中）に、「私」に「……ちよつと会いたい。来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」（実家）へと届くのである。ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に（東京へは）「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、今度は「……来ないでもよろしい」という「電報」（急報）を打って来るのである。

やがて、父親の病気は最後の「一撃」を待つ間際まで進んで来て、家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入る、そのような状態が続くなかで、「私」という人は、看護婦を相手に、父の水枕を取り替え、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せていると、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を私の手に渡した。その先生から

の「分厚い郵便物」を看護の合間、合間を見ては、自分の部屋でただ最初から最後までさつと頁を急ぎ開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一旬が眼に入り、それは、「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というこの言葉に衝撃を受けて、夢中で医者の家へ馳け込み、父はあど何日保つのか聞こうとするが、医者は生憎留守で、そこですぐ俵を停車場へ急がせ、その停車場で紙切れに母や兄宛ての簡単な手紙を書き、それを急ぎ宅へ届けるよう車夫に頼むとともに、思い切った勢いで東京行き汽車に飛び乗り、ごうごう鳴る三等列車の中で、先生の手紙を漸く最初から最後まで読むという内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

中、 両親と私

- 一、 冒頭の文章（父親の想い）
- 二、 母親に父の病状を尋ねる（前）
- 二、 父親にその病状を直接聞く（後）
- 三、 赤い飯を炊いて客を呼ぶ相談（前）
- 三、 日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）
- 四、 友達や先生に葉書や手紙を書く（前）
- 四、 陛下の御病気と父親の病状（後）
- \* \* \*
- 五、 父親の元気が衰えて行く（前）
- 五、 天皇の崩御と父親の病状の悪化（後）
- 六、 「私」の就職口の問題について（前）
- 六、 母は就職口を先生に頼んだらと（後）
- 七、 先生に就職口のお願いの手紙を出す（前）
- 七、 先生からの返事を待つも来なかった（後）
- \* \* \*
- 八、 九月初め、東京へ出ようと考えた（前）
- 八、 蟬の鳴き声に人の運命の変化も感じ（後）
- 九、 父親が風呂場で突然に倒れる（前）
- 九、 三四日後、再び風呂場で倒れる（後）
- 十、 兄や妹に長い手紙を出す（前）
- 十、 兄や妹に急遽電報を打つ（後）
- \* \* \*
- 十一、 母は先生への手紙をもう一度と（前）
- 十一、 先生への手紙は結局出さなかった（後）
- 十二、 兄や妹の夫が急ぎ駆けつける（前）
- 十二、 先生から最初の電報を受け取る（後）
- 十三、 先生から二度目の電報が来る（前）
- 十三、 作さんという人が見舞いに来る（後）
- \* \* \*
- 十四、 最期の一撃を待つ間際まで（前）
- 十四、 兄と床を並べて寝る私（後）
- 十五、 先生先生とは一体誰の事だ（前）

十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）  
十六、父は時々譚言<sup>うわごと</sup>を言うようになる（前）  
十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

\*

十七、父親は危険な状態へと陥る（前）  
十七、手紙の冒頭部分を読むと（後）

十八、この手紙があなたの手<sup>あわ</sup>に落ちる頃には（前）  
十八、慌てて三等列車に乗り込む（後）

\*  
\*

※ 中 両親と私（概略）

※ 参考文献

中 (両親と私)

うさぎ

さて、今度の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっている。

## 一、冒頭の文章

宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と言うのであった。

父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦藁帽の後へ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻って行った。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。「……卒業が出来てまあ結構だ」と、父はこの言葉を何遍も繰り返した。——私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家の食卓で、「御目出とう」と言われた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それ程にもないものを珍しそうに嬉しがる父よりも、却って高尚に見えた。私は仕舞いに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した。

そこで、「……大学ぐらい卒業したって、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」と、私はついにこんな口の利きようをした。すると父が変な顔をした。「……何も卒業したから結構とばかり言うんじゃない。そりや卒業は結構に違いなが、おれの言うのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解つていてくれさえすれば、……」と言うのであった。

私は父からその後を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこう言った。「……つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。（本文）

\*

\*

まず、冒頭で、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変わっていない事であった」とあるが、これは、まさに「安心」ということであり、父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「……卒業が出来てまあ結構だった」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」(本当の「意味合い」)は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解つたかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

\*

\*

さて、本文に戻つて、「……私は一言もなかった。詫まる以上に恐縮して俯向いていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思ひ定めていたと見える。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚ものであった。私は靴の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに押し潰されて、元の形を失っていた。父はそれを鄭重に伸した。「……こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」、「……中に心でも入れると好かつたのに」と母も傍から注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置いた。何時もの私ならすぐ何とかいう筈であったが、その時の私はまるで平生と違つていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかつた。私はだまつて父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙(上質の和紙)の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢いを得て倒れようとした。(本文)

\*

\*

これは、両親にとつて、長い歳月をかけて、大変な「思いや苦勞」などをしながら育て上げてきたわが子が、めでたくも東京の「帝国大学」(今の東大)を無事に卒業出来たという事で、わが子の将来も「前途洋々」であり、まさに感無量の思ひになっているのであり、(そこが「他人の先生」とは全く違ふところである)。そして、その「証拠」(明かし)としての「卒業証書」に対する両親の「考え方や価値観」と、卒業などは当り前で、ましてやその「証書」などにどれほどの「意味や価値」があるのかと軽く見ていたまだ若い「私」という人の「考え方や価値観」とは全く違つていたということである。

## 二、母親に父の病状を尋ねる(前)

私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出た  
り何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好  
くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住  
んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であった。それにしても  
この前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうち  
で独り異なる感じを抱いた。「……でも医者はその時到底むずかしいって宣告したじやあり  
ませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あ  
れほどお医者が手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さん  
も始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思ってたんだがね。それ、あの気  
性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかな  
か私の言う事なんか、聞きそうにもなさらないからね」と言うのであった。

私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を思い出し  
た。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言ったその  
時の言葉を考えてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかった。「……しかし傍でも  
少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつ  
た。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかし  
その大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も  
見せなかった。ただ「……へえ、やっぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡  
くなりかえ、その方は」などと聞いた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、「……私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた」とある。これ  
は、余りにも当然のことであり、この「私」という人が、今、何よりも知りたく心から心  
配していることは、まさに「……父親の病状が一体どうなっているのか？」ということであ  
り、そこで、「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれで  
いいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」  
と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、  
母はこういう事に掛けてはまるで無知識であったとある。これは、この「病氣」(腎臓病)  
がいかに「恐ろしいものか」(それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化してい  
く病であること」)を知らないということである。

一方、「私」という人は、「……でも医者はあの時到底むずかしいって宣告したじやあ  
りませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。  
あれ程お医者の手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さん  
も始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思ってたんだがね。それ、あの気  
性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら(つまり  
『自覚、症状があまりない』)ので、なかなか私の言う事なんか、聞きそうにもなさらない  
んだからね」と言うのであった。

そこで、私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を  
思い出した。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言  
ったその時の言葉を考えてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかったとある。これ  
は、「見た目」には、父親はいかにも「元気そうに見えた」からであり、それゆえ、「……

：しかし傍でも少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかったとなるのである。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。(それはこの「病の特徴」を説明したのである)。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかったとある。

つまり、先生は、「……そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。尿毒症が出る時、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。

この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によって、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廃物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なっているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになる時、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。

しかし、「……母は別に感動した様子も見せなかつた」とあり、ただ「……へえ、やっぱり同なじ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いたということである。

## 二、父親にその病状を直接聞く(後)

さて、私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かつた。父は私の注意を母よりは真面目に聞いてくれた。「……尤もだ。お前の言う通りだ。けれども、己の身体は必竟己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」と言うのであつた。それを聞いた母は苦笑した。「……それご覧」と言つた。「……でも、あれでお父さんは自分でちやんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰つたのを大変喜んでゐるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者なうちに免状を持つて来たから、それが嬉しいんだつて、お父さんは自分でそう言つていましたぜ」と言つと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思つてお出なのだよ」、「……そうでしようか」と言つと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出なのだよ。尤も時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家にいる気かなんて」と言うのだと言う。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。この家から父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でゐるうちに、分けて貰うものは、分けて貰つておけという注意を、偶然思い出した。

母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつて言う人に死んだ試しはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫の人の方が剣呑さ(危険さ)」と云うのであつた。私は

理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐ちんぷなような母の言葉を黙然もくねんと（黙って）聞いていた。（本文）

\*

\*

さて、「……私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった」とある。そして、父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「……尤もともだ。お前の言う通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひつきよう己おれの身体からだで、その己おれの身体からだについての養生法ようじようは、多年の経験上、己おれが一番能く心得ているはずだからね」と言うのであった。これは、まさに「その通り」ではあるが、しかし、父親は、母親と同じように、この「病気」（腎臓病じんぞうびよう）というものがいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病やまいであること」）を知らないでいるのである。

父親の言葉ことばを聞いた母親は、苦笑をして、「……それご覧」と言うが、「私」という人は、「……でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟かくごだけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思ったのが、達者たつしやなうちに免状めんじやうを持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそう言っていましたぜ」と言うのと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹なかのなかではまだ大丈夫だと思ってお出いでなのだよ」、「……そうでしょうか」と言うのと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出いでなのだよ。尤もとも時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」と言うのだと言う。——つまり、母親は、すっかり「樂觀的」になっているが、一方、父親は、むしろ「樂觀らくげんと不安ふあん」とか複雑くわんざんに入り交じった「心的状態」になっているのである。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫たふさでいるうちに、分けて貰もらうものは、分けて貰もらつておけという注意を、偶然思ひ出したとある。——これは、父親が死んだ後あと、家族は、一体、どうなるのだろうか？ 遺産相続問題を初めとして、実に様々な問題が発生することになるが、しかし、今は、そういう問題はあまり考えたくないという心状こころざしでもあるのだろうか。

また、母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつていう人に死んだ試たましはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫のの方が剣呑けんおんさ（危険さ）」と言う。これはもちろん、何ら「科学的根拠」も何もないものだが、ただ今は、「夫の病状悪化や死」というものは出来るだけ考えたくないという「心理」でもあり、それゆえ、「樂觀的な発言」が多くなるが、しかし、一方では、若しも「夫の病状が悪化したら」という、一抹いちまつの「不安」も決して消し去ることはでき得ないのである。

### 三、赤い飯めしを炊たいて客を呼ぶ相談（前）

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間に起った。私は帰った当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。……

私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた。私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

すると、「……仰山仰山とお言のだが、些ども仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当り前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰つたと同じ程度に、重く見ているらしかった。「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分の予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であつた。「……東京と違つて田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言つた。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我を張る訳にも行かなかつた。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言うだけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご主意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強い主張したつて仕方がありません」と言うのと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だつて世間への義理ぐらひは知つているだろう」と言う。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言つた。その代り口数から言うと、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかつた。(本文)

\*

\*

さて、この場面は、所謂「卒業祝い」をどうするかで、三人三様の「考え方」が披瀝されているところであるが、まず、「私」という人は、次のように考えるわけである。つまり、私は帰つた当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。

その理由として、「……私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた」とある。これは、例えば、「私」の「大学卒業」を心から祝つてくれるような人達ではなく、その「最後の目的」(つまり「真の目的」)は、結局、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎの宴会などがしたいだけであり、そういう「どんちゃん騒ぎの宴会」などが出来るような「行事や祝い」その他などがあればよいと思つていような人たちばかりだと思つているのであり、「……私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙(下品で卑しい人)を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した」とある。もちろん、これは、この「私」という人がまだ世間をよく知らない若い人ならではの「考え方」に沿つているのであり、

むしろ「飲み食い」だけで人が集まって来るのではなく、むしろ「社会的な付き合い」として人が集まって来るのである。また、「卒業祝い」をするのも、親戚や近所の人たちに自分の息子が無事に「大学を卒業することが出来た」ということでの感謝とそのことを広く知ってもらうためのものでもあるのである。

例えば、「結婚式」や「披露宴」なども全く同じことであるが、それは、今までの「恋人関係」から正式の「夫婦関係」になるためのいわば一つの「社会的な儀式」であり、これによって、二人の「関係」は国や地方自治体などをはじめ、家族や親戚或いは友達関係や世間一般の人たちに認められたまさに正式な「社会的な結びつき」の関係」となり、それによって、地方自治体などからも実に様々な「社会保障」などが得られると共に、いつでもどのようなことを夫婦で行なおうと、それが犯罪的なことでもない限りは、基本的には認められていることであり、早く子供を作った方が良いなどと勧められたりするものだが、それもこれも、まさに「社会的に認められた結びつきの関係」であるからである。

つまり、「恋人関係」と「夫婦関係」との「決定的な違い」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、「恋人関係」とは、すなわち、二人だけが認め合っている「個人的な結びつき」に過ぎず、社会的に認められた関係ではないので、それゆえ、他人から絶えずああでもないこうでもないといふ色々なことを言われ続けることにもなりかねないが、一方、「夫婦関係」の場合は、まさに国や地方自治体などが正式に認めた「社会的な結びつき」であり、それゆえ、夫婦でいつでもどのようなことを行なっても、それが何か犯罪的な事でもない限りは、基本的には認められている「社会的な結びつきの関係」にあり、であり、それゆえ、世間の人たちも、その夫婦が二人でいるのをあれこれ言う人は一人もいないのである。

一方、母親は、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰ったと同じ程度に、重く見ているらしかったとある。それでは、なぜ、母親はこのような「考え方」になるのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、一般論として、父親はふつう「外に働き」に出、子供は「幼稚園」や「学校」などに通うことになる。一方、家に残るのは、ふつう母親であり、実に様々な「家事や育児」或いは介護その他」などを行なうことになる。また、昼間、近所の人や知り合いの人などに会えば、そこでいろいろなおしゃべりなどをするにもなるが、その内容の多くは、今日の天気や最近の社会の出来事、また、それぞれの家庭でこういうことがあった、例えば、子供がどうした孫がどうしたなどの話になるかと思うが、そのように「母親」というのは、一般に、最も「近所付き合い」が多いのであり、時には他人の「子供自慢」などを聞かされることもあるかと思うが、そのような中で、「……お宅のお子さんはどうなんですか？」と聞かれた時に、自慢出来るような子供であれば、母親としては誇らしいことにもなるのだろう。ましてや東京の「帝国大学」（今の東大）を無事に卒業出来たということとは、何よりも自慢になるものであり、それゆえ、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うことにもなるのである。

また、父親は、「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、こ

れは父の言葉であった。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であった。「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言った。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えたのである。——つまり、日本の「村社会」では、何よりも「しきたりや人間関係」などが最も大事であり、それゆえ、いわば「やるべきこと」を怠れば、村の人たちから、それこそ、何だかんだと陰口を言われることにもなるのである。

それゆえ、私は我を張る訳にも行かなかった。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言うだけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご主意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事が私が強いて主張したって仕方がありません」と言うのと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義理（社会的な付き合い）ぐらいは知っているだろう」と言う。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言った。その代り口数から言うると、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかったのである。

### 三、日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜また気を更えて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起きしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であった。私はこの穏やかな父の前に拘泥らない頭を下げた。私は父と相談の上招待の日取りを極めた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であった。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡ったこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まろうとした私の卒業祝いを、塵のごとくに吹き払った。「……まあ、ご遠慮申した方がよからう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言った。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大挙へ行幸になった陛下を憶い出したりした。（本文）

\*

\*

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見たのである。——これは、もし「学問」（高等教育）などを受けなければ、もっと素直に「親の言うことを聞いてくれる子になった」だろうに、却って「学問」（大学）などを出たがために、親の言うことに対して、いちいち「ああでもないこうでもない」と理屈を付けて反対して来る」ような子になってしまい、それに対して、父親としてははつきりと「不平・不満」を持っているのである。

しかも、「……私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず」とあるが、

これは、いわば親に対して「口幅くちばしつたいことを言う」（つまり「身の程もわきまえず、大きなことや生意気なことを言ったりしていること」）に気づかず、「……父の不平の方ばかりを無理のように思った」とあるが、これも、自分の論理（言い分）の方こそが正しいのに、父親がそれに対して「不平・不満」を持つのは「無理のように」（つまり「間違っている」）ように思ったということである。

ところが、その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払つた。「……まあ、（今回は）ご遠慮申した方がよかるう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言つたとある。——この「……明治天皇の御病気とその後崩御その約一ヶ月半後に明治天皇の『御大葬の夜』の乃木大将の殉死」などが、先生の「自殺への決心」への大きな一つの切っ掛けになつて行くものである。ちなみに、「……私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸（天皇のおでかけ）になつた陛下を憶い出したりした」とあるが、これは、当時の「東京帝国大学」の卒業式には、直接、明治天皇が臨席して、成績優秀な卒業生には「銀時計」などを授与したのである。

#### 四、友達や先生に葉書や手紙を書く（前）

小勢こせいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私は行李こしりを解いて書物を繕ひもとき始めた。何故なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくつて行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。

私は稍ややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあつた。眼が覚めると、蟬せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸むねに抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがき又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残つていた。あるものは遠い故郷に帰つていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私はもとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ帰つてから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つづつたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと疑うたつた。先生が奥さんといつしよに宅うちを空あける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類しんるいと思ひ違えていた。先生は「……私には親類しんるいはありませんよ」と答えた。先生の郷里きょうりにいる続きつづきあいの人々と、先生は一向いっこう音信の取り遣りやりをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽たのしに後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下きりさげのお婆おばさんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの気転きてんと親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程ほどの必要の事も書いてないのを、

私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、無事に「大学」を卒業して「実家」に戻っている状態であるが、その実家は、「……小勢な人数には広過ぎる古い家のひっそりしている中に、私は行李を解いて書物を繻き始めた。何故か私は気が落ち付かなかった。あの目眩しい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁を一枚一枚まくって行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。私は稍ともすると机にもたれて仮寝をした。時にはわざわざ枕さえ出して本式に昼寝を貪ぼる事もあつた。眼が覚めると、蟬の声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とある。

これは、大学を無事に卒業出来て、今は「ゆつたりとした気分」の状態にあるかと思ふが、しかも、これというはつきりとした「目標」がないために、逆に、毎日だからだと時を過ごしている状態であり、また、「……私は凝と蟬の声を聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とあるが、これも、いわば「……鳴く蟬の明日は無き身の激しさか」ということであり、それは、父親の病状などとも重ね合わせて聞いているのだろう。

そして、暇なので、「……私は筆を執つて友達のだれかれに短い端書又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信の届かないのもあつた。私はもとより先生を忘れなかった。原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと思つた。先生が奥さんといつしよに宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人はどこから来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思ひ違えていた。先生は「……私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。(これは「先生は親類とは完全に縁を絶つて、いる」ということである)。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行ったあとへこの郵便が届いたら、あの切下(髪)のお婆さんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの気転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程の必要の事も書いてないのを、私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかったとある。(その理由は、その頃、先生は「自分の身をどうしたらよいのか？」と深く真剣に考え悩んでいて、それどころではなかったということである。)

#### 四、陛下の御病氣と父親の病状(後)

父はこの前の冬に帰つて来た時ほど将棋を差したがらなくなつた。将棋盤はほこりの溜つたまま、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込ん

でいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた。

「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかつて来そうな危険を予感しているらしかった。

「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いた。(本文)

\*

\*

さて、「……父はこの前の冬に帰って来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜ったまま、床の間の隅に片寄せられてあった」とある。これは、一体、何を意味するかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、前の時には、「将棋」それ自体を差して楽しむことが出来るようなまだ「心の余裕」があつたのである。だからこそ、勝つても負けても、必ず「もう一番」やろうとなるのである。ところが、今回は、「将棋」を差して楽しめるような「心の余裕」はもう無くなっているのである。

ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込んで見るように見えた。そして、「……毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ」とある。——これは、いったい何を意味するかと言えば、この頃は、まだ「ラジオ放送」(大正十四年開始)もなく、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によつていたのである。しかも、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来たのである。そして、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた、となるのである。

そして、「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかつて来そうな危険を予感しているらしかった。「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いたとある。(この場面は、父親もまた「私」という人も、その病状をかなり深刻に受け止め始めているが、一方、母親は、むしろ不安はよぎっていないながらも、まだ大丈夫だろうと信じたいのである。)

\*

\*

五、父親の元気が衰<sup>おと</sup>ろえて行く(前)

## 五、父親の元気が衰ろえて行く(前)

父の元気は次第に衰えて行つた。私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のようになり、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた。私は父の健康についてよく母と話し合った。

「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。「……気じゃない。本当に身体が悪くないんでしょうか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうと言ひ出したのは、それから一週間後であつた。そうして愈と極めた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎に帰つた私は、お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかつた。(本文)

\*

\*

さて、父の元気は次第に衰えて行つた。その「象徴的なもの」として、「……私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のようになり、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた」。私は父の健康についてよく母と話し合った。「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。これは、むろん不安ははつきりとよぎつていながらも、まだ大丈夫だろうと信じたのである。

一方、「私」という人は、「……気じゃない。本当に身体が悪かないんでしょうか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。すると、母親は、「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

これは、母親の「頭の中」(或いは「心の中」)では、息子の晴れ舞台にもなつたであろう「卒業祝い」というものが出来なかつたことを未だ残念がつているのである。一方、「私」という人は、むしろ「……お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であり」、その中止を密かに喜んでいるのである。

## 五、天皇の崩御と父親の病状の悪化(後)

さて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。

私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていませんか」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつた。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふっと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。(先生に宛ててそういう事を書いて仕方がないとも思つたし、前例に徴して見ると、とても返事をくれそうになかったから)。私は淋しかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いと思うのであつた。(本文)

\*

\*

まず、天皇の崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。——これは、父親の受けた「衝撃」がいかに大きかつたかを物語っていると共に、天皇と一緒に何とか頑張つて来たつもりでいたが、天皇の崩御の報知によつて、今度は「己も……」(つまり今度は「己の番か!」)という想いに襲われているのである。そして、「……私は黒いうすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった」とある。

例えば、昔は、祝日には、国旗を掲げる習慣があつたが、今は、どうなのか? それはともかく、旗竿の先端に付いているのは「金色の球」であるが、その旗竿の球を(黒いうすもの)で包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。(これは、弔旗で、天皇様への哀悼の意を表す)。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。

私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもなかった。また先生に見せるのが恥ずかしくもあった。——それは、一体、なぜなのか？ 先生の家は、新潟県の地元ではよく知られた「旧家」（名家）であったが、「私」の郷里の宅は、一体、何県にあるのか？ はつきりと明記されていないので、それを敢えて推測してみると、恐らく、次のようになるかと思う。

まず、「私」という人は、友達から鎌倉の海水浴場に来ないかと葉書を受け取る。その友達は、中国（地方）のある資産家の息子で金に不自由のない男であったとある。この友達とはかなり「親しい友達関係」にあるからこそ、わざわざ呼び出されているのだろう。だとすれば、「私」という人は、同じ「中国」（地方）の出身かも知れない。次に、兄は、学問をした結果、今は遠国にいとあり、それは「九州」（地方）である。だとすれば、「私」という人は、当然、九州の人ではない。そして、もう一つは、母親は、「仰山」という言葉（方言）を多用している。この「方言」は、例えば、愛知県、岐阜県、関西方面などでも使われているとあるが、「私」という人には、「名古屋訛りも関西訛りも全くない」ので、「恐らく」この地方の人ではない。また、「中国」（地方）では、岡山や広島の方言として、「仰山」という言葉があるとある。これらを総合してみると、例えば、中国地方（五県）は、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県であるが、島根県と山口県は九州に近いので、違うかも知れない。だとすれば、残るは、鳥取県、岡山県、広島県のどれかになるが、恐らく、岡山県か広島県になるのではないかと思う。

ちなみに、昔は「近国、中国、遠国」という呼び方があり、「近国」は、京都や奈良や大阪を中心とした関西地方、「遠国」は、「九州」（地方）（七県）、そして、その中間にあるので「中国」（地方）五県となり、それに「四国」（地方）四県があるのである。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなつた都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。（それは、「先生」の突然の「自殺」であった。）

私は今度の事件（天皇の崩御）について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。（先生に宛ててそういう事を書いてでも仕方がないとも思つたし、前例に倣して見ると、とても返事をくれそうになかったから）私は淋しかった。それで手紙を書くのであった。そうして返事が来れば好いと思うのであった。「これは、一体、どのような心理かと問えば、それは、先生をいわば「心の抛り所」（一点の燈火）として見ているのであり、それ

ゆえ、手紙を出して、先生から何らの返事も来なければ、淋しいし、また、手紙を出して、先生から何らかの返事が来れば好い（嬉しい）という心理になるのである。」

#### 六、「私」の就職口の問題について（前）

八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かるうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであった。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言うのと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすつて何をしてお出でですかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と言う。父は洪面をつくった。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていた。（本文）

\*

\*

さて、八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かるうと書いたとある。（例えば、第一部でも、先生や奥さんとの会話の中で、卒業してこれからどうするのという問題が出て来た時に、奥さんが、「……先生？ それともお役人？」という場面があるが、「私」という人は、就職のことはまだ何も考えてはいないと言うのであった。）

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであつ

た。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言くと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすって何をしてお出でですかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と。

父は洪面をつくつた。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていたとある。——これは、ふつう父や母の方が世間一般の常識的な「考え方」になるかと思うが、それでは、なぜ、「私」という人は、いわゆる「就職」のことを考えようとはしないのだろうか？ それは、恐らく、次のようなことではないかと思う。つまり、「私」という人は、先生から心の底から納得の行くような「人生の教訓」のようなものを得てから、それから「就職先」のことは考えてみたいと思っているのかも知れない。

#### 六、母は就職口を先生に頼んだらと（後）

母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きていううちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（幹旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものがね」と言うのであった。

父はこう言つて、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟やくざだから遊んでいのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だつて、月給こそ貰つちやいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好いからお出しな」、「ええ」と、私は生返事をして席を立った。（本文）

\*

\*

さて、母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。

こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（しゅうせん）（斡旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げつつもりであった。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものだがね」と言うのであった。

父はこう言って、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟（ひつじやう）やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だって、月給こそ貰（もら）っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好（こ）いからお出しな」「ええ」と、私は生返事（なまへんじ）をして席を立ったとある。

これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「私」という人にとって、「先生」という人は、いわば「人生の何たるかを教えてくれる存在」であり、だからこそ、まさに「先生」と呼んでいるのであり、それゆえ、ただ単に、社会的地位があるとか、人生の成功者であるとか、或いは大学の教授であるとか、その他、そのような人たちを「先生」と呼ぶのとは全く違う意味合いになるのである。例えば、中国の有名な「孔子」という人は、まさに「先生」と呼ばれていたかと思うが、そのような意味合いの「先生」になるのである。

#### 七、先生に就職口のお願いの手紙を書く（前）

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者（いしゃ）の来るたびに蒼蠅（そうじやう）質問を掛けて相手を困らす質（たち）でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像（さうぞう）して見るらしかった。「……小供（こども）に学問をさせるのも、好（よ）し悪（あ）しだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅（うち）へ帰って来ない。これじゃ手もなく親子を隔離（かくり）するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国（えんこく）にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴（ぐち）はもとより不合理ではなかった。永年（ながねん）住み古した田舎（なかや）家の中に、たった一人取り残されそうな母を描（えが）き出す父の想像はもとより淋（さび）しいに違（ちが）いなかった。

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後（あと）、この孤獨（こどく）な母を、たった一人伽藍堂（がらんどう）のわが家に取り残すのもまた甚（はなは）だしい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言（い）って、私を強（し）いたがる父の頭には矛盾（むじ）んがあった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのお蔭（かげ）でまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いつながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いつながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。(本文)

\*

\*

さて、父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者 of 来るたびに蒼蠅質問を掛けて相手を困らす質でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。「……小供に学問をさせるのも、好し悪だね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅へ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつたとある。(親は、子を大事に育て、その子は、すくすくと育ち、やがて巣立つていく。それは、親としては、嬉しいことであるが、また、寂しいことでもあるのだろう。)

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切つていた。その中に住む母もまた命の間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たった一人伽藍堂のわが家に取り残すのもまた甚しい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言つて、私を強いたがる父の頭には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭でまた東京へ出られるのを喜んだ。(母親の面倒は、兄も私も妹も出来そうにないので、当面、親戚の叔父さんにも頼むかという展開へとなるのである……)。

私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いつながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いつながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いたとある。(これらは、まだ若いので、親のことその他のことでも、どうしても自分のことを「第一」《中心》に考えてしまう傾向があるのかも知れない。)

#### 七、先生からの返事を待つも来なかつた(後)

私はそれを封じて出す前に母に向つて言つた。「……先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しやつた通り。一寸読んでご覧なさい」と言つた。

母は私の想像した如くそれを読まなかつた。「……そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他が気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」と言うのであつた。

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。「……しかし手紙じや用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくっちゃ」と言うど、「……そりやそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」と言う。「……ええ。とにかく返事は来るに極つてますから、そうしたらまたお話ししましょう」と。私はこんな事に掛けて几帳面な先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外れた。先生からは一週間経つても何の音信もなかった。「……大方どこかへ避暑にでも行っているんでしよう」と言った。

私は母に向かって言訳らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強いても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があつた。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父に言い出す機会を得ずに過ぎた。(本文)

\*

\*

さて、先生からの「返事」は来なかつたが、それには、次のような事情があつたのである。それは、第三部の「先生と遺書」の冒頭部分に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考えたのです。しかし自由すると、私はあなたの依頼に對して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮していると言つた方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢えてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩らつていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は『それとも』という言葉を中心で繰り返すたびにぞつとしました。(中略)

その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかつたと言つても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。——宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言つて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ濟まないあなたに對して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無様な言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思ひます」となるのである。

\*

\*

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かつた。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。その時の私は父の前に存外おとな大人おとなしかつた。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎いなかを出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（本文）

\*

\*

さて、九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り「学資」（生活費）を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。（これは、言うまでもなく、仕事を探しに行くのではなく、何よりも先生に会いに行くためであり、また、そこで生活するための資金を得るための方便でもある）。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。（これは、まさにその通りであり、若い頃は、親がどれほど苦勞をして金を稼いでいるかなどは全く考えずに、親が金を出すのは当然当たり前あたりまえの如くに考えているのである。）

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。（これも非常に興味深い言葉であり、昔は、家のために年季奉公などに出されたりしたものである）。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とう

とした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かった。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。（これは、よく「その日が大安か仏滅か或いは友引かなど」を見たりするものである）。その時の私は父の前に存外大人しかった。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（これは、意外と父親は、このまま田舎にいてくれることを密かに望むところも（母親の為にも）少しはあったのかも知れない。しかし、子供の夢や希望また将来のことなどを考え合わせれば、この小さな田舎町に引き留めておくことには、やはり躊躇いが生じているのだろう。）

#### 八、私を取り巻く人の運命が動いているように（後）

私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変る如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋しそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。

私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解っていないかった。話す約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらって、東京へ立つ日取りを極めた。（本文）

\*

\*

さて、私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていたとある。——まず、蝉は、ふつうアブラゼミからミンミンゼミへそれからツクツクボウシへと鳴き移って行くものであるが、「……私の哀愁は、いつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた」とある。それは、結局、「……鳴く蝉の明日は無き身、

の激しさか」ということであり、あれほど激しく鳴いていた蝉も、やがて亡骸となつて死んでしまふ運命であり、そこに「生命の儚さ」を感じているのであり、だからこそ、それが「私の哀愁」となつて行くのである。

つまり、「……私の哀愁は、この夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蟬の声がつくつく法師の聲に変わる如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた」とあるが、それは、明治天皇の崩御をはじめ、父親の病状の悪化、そして、先生のまさかの自殺という、そのような私を取り巻く人の運命の変化を、「私」という人は、なぜか蝉の鳴き声の変化から感じていたのである。

そして、父と先生とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。——私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあただけであった。先生の多くはまだ私に解つていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとつて薄暗かった。(だからこそ、もつと知りたいという強い欲求となり)、私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとつて大いな苦痛であった。私は母に目を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極めた。(それは早く先生に会いたいということでもある。)

ちなみに、蝉については、「子供の遊び4」で書いた内容があるので、それを参考程度に引用してみると、それは、次のようなものである。

まず、初夏から秋にかけては、様々な『セミ』の鳴き声が聞こえて来ると思うが、例えば、ジージーと鳴くアブラゼミや、チーチーと鳴くのが、ニンニンゼミであり、カナカナと鳴くのは、ヒグラシ(カナカナ)であり、また、ミンミンと鳴くのは、ミンミンゼミであり、そして、オーシーシクシクと鳴くのが、ツクツクボウシである。

ところで、その「セミの一生」というのは、まず樹皮の下などに産みつけられたタマゴは、翌年の梅雨の時期に「幼虫」となり、その「幼虫」は、木から下りて、土の中で生活をするようになるが、その「土の中」での生活がかなり長くて、主に木の根の汁などを吸つて生活している。——例えば、ツクツクボウシは、約一〜二年、アブラムシとミンミンゼミは、約二〜四年、クマゼミは、約二〜五年、そして、ニイニイゼミは、約四〜五年ぐらいとされているが、むしろ、それらは、それぞれ育つ「環境や個体差」などによつても違いは生じて来るものであり、長い間、その「土の中」で十分に成長した「幼虫」から、やがて、夕方頃、地上に出て来て、近くの木の幹に登り、そこで日没頃から「脱皮」を始めて、約二、三時間ぐらいで「成虫」(セミ)となるのだそうである。そして、その「成虫」(セミ)というのは、木の幹の「樹液」を吸つて生きているが、オスもメスも「種族保存欲」(それは「交尾と産卵」とを終えて、約二週間から一ヶ月ぐらいで死んでしまふのだそうである。また、セミの「発音器」は、オスのセミの「腹の基部」にあり、その「発音筋」を収縮させて音を出し、それが「共鳴室」で拡大されて、大きな音となつて外に出て来るのだそうであるが、鳴くのはオスだけである。

## 九、父親が風呂場で倒れる(前)

私がいよいよ立とうという間際になつて、(たしか二日前の夕方の事であつたと思うが、)

父はまた突然引つ繰り返った。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入ったところであった。父の背中を流しに行った母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後から抱かれています。それでも座敷へ伴て戻った時、父はもう大丈夫だと言った。念の為に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷やしていた私は、九時頃になると父は思ったより元気が好かった。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行った。

翌日になると父は思ったより元気が好かった。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行った。父は「……もう大丈夫」と、父は去年の暮倒れた時に私に向つて言つたと同じ言葉をもた繰り返した。その時は果して口で言つた通りまあ大丈夫であった。私は今度も或はそうなるかも知れないと思つた。しかし医者はただ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然した事を話してくれなかった。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。

「……もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「……そうしておくれ」と母が頼んだ。母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ての間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。「……お前は今日東京へ行く筈じゃなかったか」と父が聞いた。「……ええ、少し延ばしました」と私が答えた。「……おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇した。そうだと言えば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであつた。私は父の神経を過敏にしたくなかつた。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかつた。「……気の毒だね」と言つて、庭の方を向いた。(本文)

\*

\*

さて、私がいよいよ立とうという間際になつて、(たしか二日前の夕方の事であつたと思うが)父はまた突然引つ繰り返つた。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入つたところであつた。父の背中を流しに行った母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後から抱かれています。それでも座敷へ伴て戻つた時、父はもう大丈夫だと言つた。念の為に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷やしていた私は、九時頃になつてようやく形ばかりの夜食を済ましたとある。

さて、父親が「風呂場で倒れる」という展開によつて、事態は一気に「大きく動き出す」ことになるが、それは、第一部の「先生と私」の本文の中にも、先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたとある。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によつて、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廃物が血中にたまるのが原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なつていのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本心に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言つた。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれっきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。つまり、「卒倒」(倒れる)ということとは、この「腎臓病」の大きな「特徴の一つ」になつていのである。

翌日になると父は思ったより元気が好かつた。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行った。父は「……もう大丈夫」と、父は去年の暮倒れた時に私に向つて言つたと同じ言葉を

また繰り返した。その時は果して口で言った通りまあ大丈夫であった。私は今度も或はそうなるかも知れないと思った。しかし医者はまだ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然した事を話してくれなかった。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。(これは、緊急事態発生でもう仕方のないことである。)

「……もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「……そうしておくれ」と母が頼んだ。母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。「……お前は今日東京へ行く筈じゃなかったか」と父が聞いた。「……ええ、少し延ばしました」と私が答えた。「……おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇した。そうだとすれば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過敏にしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。「……気の毒だね」と言つて、庭の方を向いたとある。

これは、父親も、自分の「病状の悪化」をはっきりと自覚しているとともに、息子に「余計な心配」をかけていることに「済まないね」(気の毒だね)と言っているのである。

### 九、三、四日後、再び風呂場で倒れる(後)

私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支ないように、堅く括られたままであった。私はほんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細そうであった。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかった。話をするとところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であった。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかった。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであった。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入れられるには住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼりぼり嚙んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やっぱりに心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところに却つて頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使われない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかった。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であったが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。(本文)

\*

\*

さて、私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出して差支ないように、堅く括られたままであった。私はほんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。——私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分です。また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。(この

ように頻繁に「卒倒」が起こるのは、末期の症状になるのだろう。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細うであつた。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかった。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかつた。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであつた。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入られるするには住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼりぼり噛んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やつぱり心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところへ却つて頼みを置いた。そのくせ病氣の時にしか使わな

い渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかつた。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であつたが、母や私が、食べたいただけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしいとある。

ちなみに、今日の医学では、一般に、「……腎臓機能の低下が進むと、夜間の頻尿をはじめ、吐き気や食欲不振、むくみやかゆみ、皮膚の色素沈着や息苦しき、高血圧など尿毒症と呼ばれる症状が現れると共に、痙攣、感覚の喪失、手足のしびれ、その他などの神経症状のほか、心不全、肺水腫など致命的な合併症も懸念される」となっている。一方、食欲が異常に進む病氣として、初期の糖尿病を初めとして、ストレスや鬱状態或いは睡眠不足などの精神的要因から過食になる場合もあれば、また、軽い胃炎や胃潰瘍、そして、甲状腺機能亢進病、その他などがあるということである。

#### 十、兄や妹に手紙とやがて電報を打つ（前）

父の病氣は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然した事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、

停車場のある町から迎えた医者は私にこう言った。私は母と相談して、その医者の周旋（仲立ち）で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて

頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするとまた非常に淋しがった。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の前では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しやっちゃいけませんよ。今に癒ったら東京へ遊びにいらつしやるはずじやありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやる時と吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としていた時は、まあ二六時中一分もないと言っているくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。(本文)

\*

\*

さて、父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めたのである。

ところで、当時(明治天皇崩御の頃)の「伝達手段」としては、新聞や雑誌或いは書物などをはじめ、個人的には「葉書と手紙それに急報の電報」ぐらいで、電話はまだ一般には普及していない。それゆえ、作品の中には電話のことは全く出て来ない。また、ラジオ放送は、大正十四年(一九二五年)であり、最初は「東京」で始まったとある。

さて、兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かなかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然とした事になると(つまりいつかは)私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、停車場のある町から迎えた医者には私にこう言つた。私は母と相談して、その医者の周旋(仲立ち)で、町の病院から「看護婦」を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。(この「看護婦」を一人頼むというのは、谷崎潤一郎の「鍵」の中にも、主人公の大学教授が「脳卒中」で倒れた時にもそのような対応をしている。)

父は死病に罹っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするときとまた非常に淋しがつた。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑いを帯

びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。(ところが、先生は本気であり、何が何でも妻の本心を聞いておきたかったのである。だからこそ、何度もしつこく聞いているのである)。今私が聞くのはいっつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しゃつちやいけませんよ。今に癒たら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやるときつと吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としている時は、まあ二六時中一分もないと言つていくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

ところで、日本の場合、江戸時代までは、人や物の運びは、ほとんど「水路」を利用して、「陸路」は、歩くか籠か輿か馬か荷車を引くしかなく、余りにも未発達であったのである。やがて、明治時代に入ると、今度は、人力車や馬車或いは鉄道その他などの普及によって、人や物の運びは、今までの「水路」から、やがて「陸路」が非常に発達して来て、今日へと至っているのである。特に、明治時代の「鉄道」(汽車)の登場は、まさに画期的なものであり、それは、人や物を「陸路」で「大量に運ぶ」ことを始めて可能にしたのである。

#### 十、病人があるので家の出入りも多くなった(後)

病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘡せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打つた。兄からはすぐ行くという返事が came。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかった。(本文)

\*

\*

さて、病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘡せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めたのである。

ここまでの内容は、ごく自然に思われるが、しかし、今日であれば、多くの場合、いわゆる「病院に入院する」ことが多いのではないかと思う。その医療の歴史を見てみると、次のようなことらしいのです。――まず、江戸時代の医療は、漢方が中心で、自宅療養し

ている病人を医師が往診し、薬を処方する方法が一般的だったそうで、病院はなかったそうである。唯一の例外は、徳川吉宗が始めた「小石川養生所」があり、ここでは、貧しい病人を収容して薬草園から採った薬を与えて、看護していたらしい。その後、明治に入ると、官（国）公立病院、公的病院、民間（私立）病院などが出来て来ることになる。

まず、官（国）公立病院には、軍事病院をはじめ、伝染病に関する病院や精神疾患の病院その他などがあり、また、公的病院では、経済的困窮者への治療を理念としたものが多く、その代表として、日赤病院や済生会病院があり、そして、民間（市立）病院としては、最初は、西洋留学帰りの名医の経営する個人病院という色彩が強く、治療費は高額で、主に富裕層相手の治療が行われていたらしい。一方、民間病院のもう一つの流れとして、貧困者に無料或いは低額で医療を提供する慈善病院などがあったとある。（この文章は第六三巻第十一号「厚生の指標」二〇一六年九月からの引用である。）

ただ、当時の日本では、一部の大病院を別にすれば、小規模なものが多数を占めており、大正二年（一九一三年）時点で、一病院当たりの平均病床数は十三床に過ぎなかったとある。それゆえ、この頃は、多くの場合、自宅で「療養」し、かかり付けの「医師」などがいわば定期的に往診して治療し、最期は「自宅で息を引き取る」という形式の方が遙かに多かったのである。例えば、谷崎潤一郎の「鍵」の場合も、看護婦一人を頼み、最期は、自宅で「息を引き取る」という形になっている。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移って行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に「電報」を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかったとあり、その通り、妹の夫がやって来ることになるが、妹は「他国」に嫁いだというだけで、具体的に「何県」とは明記されていないのである。

\*

\*

十一、母親は先生への手紙をもう一度と（前）

十一、母親は先生への手紙をもう一度と(前)

こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していながつた。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかつた。私は単簡に礼を述べた。母はまだ室の入口に立つていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言った。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。(本文)

\*

\*

さて、こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

それでは、なぜ、そうなのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。例えば、「私」という人は、いわゆる「卒業論文」を書き上げるためには、毎日毎日、それこそ「論文」に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、あれほど頻繁に行き来していた、先生の敷居をも跨がなかつた」とあるように、これというはつきりとした、「目標(目的)」が

ある時には、誰でもそれに向かって「一生懸命になれる」ものであるが、今の「私」という人は、無事に東京の「帝京大学」を卒業したばかりで、まだこれという新たな「目標（目的）」が、はつきりと見つからないために、それゆえ、毎日をだらだらと無為に過ごしてしまふような傾向があったということである。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に「地位、教育、性格」の全然異なつた二人の面影を眺めたのである。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していかなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。（これは「自分の複雑な気分を母親に理解してもらえぬ」と期待するほど子供でもなかった）。私は単簡（簡単）に礼を述べた。母はまだ室の入口に立っていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言つた。（母親がこの事にこだわる理由については、やがて次のところで自らその理由を語ることになるのである。）

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件（就職口）で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていたとある。（例えば、尊敬する孔子という先生からは「本来人生の何たるかを教えてもらふ存在」であり、その先生に最も俗にまみれたお金や地位などの条件のいい「就職口」などをお願いするなどは、何とも苦痛であり耐えられないという心理である。先生から「……あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた」と続くのである。

#### 十一、先生への手紙は結局出さなかつた（後）

「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言つと、「……だつてお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言うので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしてゐるつもりです」と言つと、「……そりゃ解り切つた話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言つ。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのさわざわした際に持ち出したのか理解出来なかつた。私が父の病気をよそに、静かに坐つたり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑つた。その時、「……実はね」と母が言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。(本文)

\*

\*

さて、「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言うので、「……だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言うので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」と言うので、「……そりゃ解り切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言う。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。(これは「私がなぜ東京に出るのかその本当の理由を知らないからである」)。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解出来なかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑った。その時、「……実はね」と母が(本心)を言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかったとある。(それは「書くこと自体苦痛であると共に、たとえ書いても返事は来ないだろう」と思うからである。)

## 十二、兄と妹の夫が駆けつける(前)

兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元気なら結構なものだ。よっぽど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却つて不調和に聞こえた。それでも父の前を外して私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」と応えると、兄は私の弁解を黙つて聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍っているように観察したらしい。「……そりゃ慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありませんよ。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であった。父は彼に向かって妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体が身体だからむやみに汽車になんぞ乗

って揺れない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、却ってこっちが心配だから」と言っていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言っていた。(本文)

\*

\*

さて、兄が帰って來た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元氣なら結構なものだ。よつほど悪いかと思つて來たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却って不調和に聞こえた。(これは、当然の対応であり、ひどそうだねと言う人はいないのである)。それでも父の前を外して私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」と応え、兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍っているように観察したらしい。「……そりや慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありません。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体がからだからむやみに汽車になんぞ乗って揺れない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、却ってこっちが心配だから」と言っていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言っていたとある。(こころ辺の場面は、このような重い病氣になつた時にはごく一般的に交わされる「患者と見舞客或いは身内」などとの会話であり、それゆえ、大事なものは、実は「この次の場面」からであり、それは、次のようなものである。

## 十二、最初の電報を受け取る(後)

乃木大将の死んだ時も、父は一番先きに新聞でそれを知つた。「……大変だ大変だ」と言つた。何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。「……あの時はいよいよ頭が変になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私に言つた。「……私も実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。

その頃の新聞は實際田舎ものには日毎に待ち受けられるような記事ばかりであつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持つて來て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて來て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取つた。洋服を着た人を見ると犬が吠えるような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取つた母は、果して驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。「……何だい」と言つて、私の封を開くのを傍

に立って待っていた。

電報には一寸会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあった。私は首を傾けた。「……きつとお頼もうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私も或はそうかも知れないと思った。しかしそれにしても少し変だとも考えた。とにかく兄や妹の夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打遣って、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。出来るだけ簡略な言葉で父の病気の危篤に陥りつつある旨も付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委細手紙として、細かい事情をその日のうちに認ためて郵便で出した。頼んだ位地の事とはかり信じ切った母は、「……本当に間の悪い時は仕方のないものだね」と言っただけで残念そうな顔をした。(本文)

\*

\*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年(一九一二年)の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経った「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」(先生と遺書)の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番先きに新聞でそれを知った。そして、『大変だ大変だ』と言って、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりであった。私は父の枕元に坐って鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたいに来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことよって、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたいに来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろし

い)、話ししましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたいのが来られるかという」内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打って来るからである。

### 十三、二度目の電報が来る(前)

私の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とか言ってくるだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。「……大方手紙で何とか言つて来て下さるつもりだろうよ」と言った。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくれる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向かってこんな分り切った事を言った。

母はまた尤もらしく思案しながら「……そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているに……。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣腸などをして帰って行った。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらっていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌ったが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従って、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却って平気でいたりした。尤も尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがっても、舌が欲しがらただけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであった。(本文)

\*

\*

さて、私の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とか言

って来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには「……来ないでもよろしい」という文句だけしかなかったとある。

まず、先生から「……ちよつと会いたいのが来られるかという」電報（急報）を受ける。この時の先生は、「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたのである。それゆえ、この時、「私」という人が、直ぐにも東京へと行き、そして、先生に会って直接話を聞いていたら、（少なくとも）この時期での「先生の自殺」ということは回避されたかも知れない。ところが、「私」という人は、父親の病状が重篤であるので、（東京には）「……行かれない」という電報（急報）を先生へと打つ。先生は、その電報（急報）を受けて、失望し、その後、二日間、あれこれ考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手（私）に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」（つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変化してしまうのである。それが、まさに「……来ないでもよろしい」という電報（急報）の「意味合い」になるのである。

ところで、私の母親という人は、この「電報」（急報）を条件のいい「就職口」のことだろうと思ひ込んでいて、それゆえ、それを母親に見せると、「……大方手紙で何とか言つて来て下さるつもりだろうよ」と言った。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかとも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくれる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、（だとすれば二日間では葉書や手紙などは届かない距離であり）、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向つてこんな分り切った事を言った。母はまた尤もらしく思索しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打つたという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになつていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者 は立ち合ひの上、病人に浣腸などをして帰つて行つた。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌つたが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病氣の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従つて、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却つて平気でいたりした。尤も尿の量は病氣の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがらただけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る氣力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであつたとある。（父親の病状は、まさにここまで悪化したということである。）

### 十三、作さんという人が見舞いに来る（後）

子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人

が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言うのと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つた。(本文)

さて、子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言つと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。(この二人は、まさに「幼なじみ」の親友であり、それゆえ、お互いの「氣心」はよく知れているかと思つが、それゆえ、いわば「氣さくに」話が出てくるのかも知れない。)

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。(これは、夫を何とか元氣づけようとする妻の必死の愛情の表れなのかも知れない)。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つたとある。(これは、病氣の父親が喜んでくれるのであれば、それは、それで(うそでも)よいのかも知れないということである。)

\*

\*

十四、最後の一撃を待つ間際<sup>まぎわ</sup>まで（前）

#### 十四、最後の 一撃を待つ間際まで（前）

父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つた。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（本文）

\*

\*

さて、父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するように見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つたとある。（これは、終にその時を待つばかりの段階へと入つたということである。）

父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。（これは、實際誰にもよくある事ではないかと思ふ）。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（やがて兄弟二人の關係が語られていくのである。）

#### 十四、兄と床を並べて寝る私（後）

兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は

子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚<sup>はば</sup>かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。

実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「……お前の卒業祝いは已<sup>や</sup>めになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽<sup>あお</sup>られたその時の乱雑な有様を想い出して苦笑した。飲むものや食うものを強<sup>し</sup>いて廻<sup>まわ</sup>る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩<sup>けんか</sup>をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>ってからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺<sup>なが</sup>めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったので、また懸<sup>た</sup>け隔<sup>だ</sup>たつた遠くいたので、時から言つても距離から言つても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合つてみると、兄弟の優<sup>やさ</sup>しい心持がどこからか自然に湧<sup>わ</sup>いて出た。場合が場合なのもその大きな原因<sup>げんいん</sup>になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとして枕<sup>まくら</sup>元<sup>もと</sup>で、兄と私は握手したのであった。

「……お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違つた質問を兄に掛けた。「……一家<sup>いっか</sup>の財産はどうなってるんだろう」と言うと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産<sup>ざいぜん</sup>って言ったところで金としては高<sup>たか</sup>の知れたものだろう」と言い、母はまた母で先生の返事の来るのを苦しめていた。「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。(本文)

\*

\*

さて、兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあった。どうせ助からないものならばという考えもあった。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚<sup>はば</sup>かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。その代り自分の病気が治<sup>な</sup>つたらというような事も時々付け加えたのである。(これは、最後の最後の最後まで、「……自分が何年何月何日の何時頃<sup>なんじ</sup>に死ぬのかは？」本人ですらも極めて分かり難<sup>がた</sup>いことになるのである。)

また、「……お前の卒業祝いは已<sup>や</sup>めになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコール(酒)に煽<sup>あお</sup>られたその時の乱雑な有様(いわば「狂乱の宴会<sup>けいれん</sup>)」を想<sup>おも</sup>い出して苦笑した。飲むものや食うものを強<sup>し</sup>いて廻<sup>まわ</sup>る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。(このような「過去の記憶」があるからこそ、「私」という人は、いわゆる「卒業祝<sup>そつぎょうしゆい</sup>い」というものを殊更<sup>ことさら</sup>に嫌<sup>きら</sup>う大きな要因の一つになっているだろう。いわば「トラウマ」に近いものになっているのかも知れない。)

ところで、私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩<sup>けんか</sup>をして、

年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入<sup>はい</sup>つてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったのも、また懸<sup>くた</sup>け隔<sup>へだ</sup>たった遠くにいたので、時から言っても距離から言っても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合<sup>あ</sup>ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因<sup>げんいん</sup>になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕<sup>まくらもと</sup>元<sup>もと</sup>で、兄と私は握手したのであったとある。(此所<sup>ここ</sup>には、兄弟二人の子供の頃からの関係が簡単に語られていると共に、先生が言っていた「財産の問題」も遂に「私」という人の口を突いて出て来ているのである。)

それは、本文では、「……お前<sup>まへ</sup>これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違<sup>ちが</sup>った質問を兄に掛けた。「……一家<sup>いっか</sup>の財産はどうなってるんだろう」と言うと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産<sup>ざいぜん</sup>って言ったところで金としては高<sup>たか</sup>の知れたものだろう」と言い、そして、母はまた母で先生の返事の来るのを苦<sup>くる</sup>にしている、「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めるのであった。

## 十五、先生先生とは一体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい (前)

「……先生先生というのはい体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明<sup>せつめい</sup>を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。「……聞いた事は聞いたけれども」と、兄は必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>聞いても解<sup>わか</sup>らないと言<sup>い</sup>うのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解<sup>りかい</sup>してもら<sup>もら</sup>う必要<sup>ひつ</sup>はな<sup>な</sup>かった。けれども腹は立<sup>た</sup>った。また例の兄らしい所<sup>ところ</sup>が出てきたと思<sup>おも</sup>った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考<sup>かん</sup>えていた。少なくとも大学の教授<sup>けう</sup>ぐらいだろうと推察<sup>すいさつ</sup>していた。名<sup>な</sup>もない人、何<sup>なに</sup>もして<sup>して</sup>いない人、それがどこに価値<sup>かち</sup>をもっているだろう。兄の腹はこの点<sup>てん</sup>において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊<sup>あそ</sup>んでいるのだと速断<sup>すみだん</sup>するのに引きかえて、兄は何<sup>なに</sup>かやれる能力<sup>のうりよく</sup>があるのに、ぶらぶらしているのは詰<sup>つま</sup>らん人間<sup>じんかん</sup>に限<sup>かぎ</sup>ると言<sup>い</sup>った風の口<sup>くち</sup>吻<sup>くち</sup>を洩<sup>も</sup>らした。「……イゴイストはいけないね。何<sup>なに</sup>もしないで生きていようというの<sup>の</sup>は横<sup>よこ</sup>着<sup>ぎ</sup>な<sup>な</sup>了<sup>り</sup>簡<sup>かん</sup>だからね。人は自分<sup>おのれ</sup>のもっている才能<sup>たのう</sup>を出来るだけ働<sup>はたら</sup>かせなくつちや嘘<sup>うそ</sup>だ」と言<sup>い</sup>う。私は兄に向<sup>むか</sup>かって、自分の使<sup>つか</sup>っているイゴイストという言葉<sup>ことば</sup>の意味<sup>いみ</sup>がよく解<sup>わか</sup>るか<sup>か</sup>と聞き返<sup>かえ</sup>してやりたかった。「……それでもその人<sup>ひと</sup>のお蔭<sup>かげ</sup>で地位<sup>ちゐ</sup>が出来ればまあ結構<sup>けつこう</sup>だ。お父<sup>とう</sup>さんも喜<sup>よろこ</sup>んでるようじゃないか」と言<sup>い</sup>った。(本文)

\*

\*

さて、「……先生先生というのはい体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問<sup>しつもん</sup>をしておきながら、すぐ他の説明<sup>せつめい</sup>を忘れてしまう兄<sup>あに</sup>に対して不快<sup>ふくたい</sup>の念<sup>ねん</sup>を起<sup>おこ</sup>した。「……聞いた事は聞いたけれども」と、兄は必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>聞いても解<sup>わか</sup>らないと言<sup>い</sup>うのであった。私から見ればなにも無理に先生<sup>せんせい</sup>を兄<sup>あに</sup>に理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>してもら<sup>もら</sup>う必要<sup>ひつ</sup>はな<sup>な</sup>かった。けれども腹<sup>はら</sup>は立<sup>た</sup>った。また例<sup>れい</sup>の兄<sup>あに</sup>らしい所<sup>ところ</sup>が出てきたと思<sup>おも</sup>った。

先生先生と私が尊敬<sup>そんけい</sup>する以上、その人は必ず著名<sup>しよめい</sup>の士<sup>し</sup>でなくてはならないように兄<sup>あに</sup>は考<sup>かん</sup>えていた。少なくとも大学の教授<sup>けう</sup>ぐらいだろうと推察<sup>すいさつ</sup>していた。(この「先生」という言

葉については、何度も説明して来ているので、ここでは省略したいと思う。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限ると言った風の口吻を洩らした。「……イゴ（エゴ）イストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着な了簡だからね。人は自分のもっている才能を出来るだけ働かせなくっちゃ嘘だ」と言う。私は兄に向かって、自分の使っているイゴ（エゴ）イストという言葉の意味がよく解るかと言き返してやりたかったとあるが、兄は、恐らく、イゴ（エゴ）イストを「横着やわがまま或いは身勝手ぐらい」に考えているのだろう。

ちなみに、「検索」で引いてみると、それは「利己主義者」（自己の利益を重視し、他者の利益を軽視、無視する考え方の人であり、それにより、他者が不利益や損害を被ることも少なくない）とある。

## 十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）

「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでるようじゃないか」と、（兄は）後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまった今となって見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなった。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちっとも頓着していない事に、神経を悩まさなければならなかった。

さて、父が変な黄色いものも嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言った母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「……聞いたか」と言った。それは医者か帰り際に兄に向って言った事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。「……お前ここへ帰って来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言った。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行っても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」と言うので、「……兄さんが帰って来るのが順ですね」と私が言った。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんがここを動かかないかがすでに大きな疑問ですよ」と私は言った。兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合った。（本文）

\*

\*

さて、「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでるようじゃないか」と、(兄は)後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまつた今となつて見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考へているような衣食の口の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちつとも頓着していかない事に、神経を悩まさなければならなかつた。

これは、世間一般的に考えれば、例えば、どのような大学を卒業し、どのような職業に就き、そして、どのくらいの収入を得て、どれくらいの社会的地位についているのか、また、どのくらい社会的に認められている存在であるのか、いわばその人の「社会的な評価」になつているかと思う。一方、先生の場合は、大学は、東京帝国大学を卒業しているが、それ以外は、社会的な活動は全くしていない存在であり、そのような存在に、一体、どのような「価値」があるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、前者の「学歴、職歴、所得、社会的地位、知名度、生活ぶり、その他」などは、いわば俗人の「世俗的評価」に過ぎず、それは、人間として真に優れているかどうかとは全く違うものになるのである。一方、先生は、人間として真に「内的(成長)成熟」しているということであり、それは、例えば、孔子をはじめ、ソクラテス、釈迦、イエス、その他、実に様々な人物がいるかと思うが、そのように人間として真に「内的(成長)成熟」を遂げている人たちであれば、いわゆる「……人生の何たるかを教えてくれる存在」でもあり、そのような「存在」こそは、まさに「先生」と呼ぶにふさわしいということである。

さて、父が変な黄色いものも嘔吐した時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言つた母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合つた時、兄は「……聞いたか」と言つた。それは医者が帰り際に兄に向つて言つた事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解つていた。「……お前ここへ帰つて来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言つた。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行つても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」と言うので、「……兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私が言つた。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんの死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合つた。

例えば、父親の死後、葬儀を無事に終えて、やがて「財産分与」が始まることになるが、その場合、家や土地或いは現金その他などをどのように分配するのか、先生が心配していたようなことが起こり得るのかどうか、また、兄も私も妹も母親の面倒を見ないとすると、

当面は、「……まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんは（最終的には）どっちかで引き取らなくっちゃなるまい」となるのである。

## 十六、父は時々囁語を言うようになった（前）

父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起って母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐れっぽい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かつたんだよ」と言うのであつた。

母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違つた気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。

父は自分の目の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつた。そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えて却つて喜んだ。「……まあああして楽に寝られれば、傍にいるものも助かります」と言つた。（本文）

\*

\*

さて、父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起つて母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。（これは、夫婦だけの《子供達には知りようもない》実に膨大の「過去の記憶」があり、その実に膨大な過去の様々な喜怒哀楽の記憶の中の幾つかがふと甦つて来るのである）。そうだからこそ、そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐

れつばい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かったんだよ」と言うのであった。母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつたとある。

例えば、まさに死の間際に、「……お父さん、何か言つておくことある？」などと聞かれて、たとえ「……何々」と応えたとしても、それは、もう意識や精神の混濁している状態からの言葉になり、どこまで本人の意思かは厳密には判別しがたくなる。それゆえ、本来であれば、頭や精神などがまだ健全に働いているうちに、例えば、弁護士など同席の上の「遺言書」などを（動画と共に）残して置けば、より確かな本人の意思表示になるのかも知れない。たとえそうしたとしても、むろん、骨肉の「相続争い」というものは、起きる時には起きてしまうものであり、それだけ「財産」（或いは「お金」）へのわれわれ人間の執着というものは、まさに「凄まじいもの」があるということである。

そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思い違えて却つて喜んだ。（これは、昏睡状態という、いわば専門的《医学的》知識などから冷静に見ているむしろ冷たい目であり、《つまり知識のある人が知識のない人を見て軽蔑するようなものであるが》、一方、母親は、たとえ専門的《医学的》知識などはないとしても、苦しまずにやすやすと眠っている夫の姿を見て、素直に喜んでいるのであり、そういう温かな眼差しであり、「……まあああして楽に寝られれば、傍にいるもの（自分をも含めて）助かります（気が楽になります）」と言っているのである。

#### 十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐つていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかつた。

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあつた。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかつた。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであつた。

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切つた氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上つた額の外でそれを柔らかに抑えていた。その時兄が廊下伝いに這入つて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取つ

た私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだ。(本文)

\*

\*

さて、父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐っていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。(精神が混濁を始める。)

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあった。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであった。(舌の動きが悪くなり呂律が回らなくなり、意味も不明瞭になって来た。)

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切った氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上った額の外でそれを柔らかに抑えていた。(これは、子供の頃、熱が出た時などには、よく枕に氷の入った水枕と額の上に氷を入れた氷嚢などを載せると、その冷たさが非常に心地よかつたという経験を持つ人も非常に多いのではないかと思う。)

その時兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

さて、この尋常ではない「分厚い郵便物」こそは、いわば「先生の遺書」であり、第三部(下)の『先生と遺書』の、まさに「全文の原稿」になっているのである。)

## 十七、父親は危険な状態へと陥る(前)

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が廁へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。

そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てた。(本文)

\*

\*

さて、その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が厠へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。

父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯した。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。(これは、病人の最期を看取るために、親戚などがみな枕元に集まっている状態なのか知れない)。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人(たち)は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てたとある。(この「特別の時間を偷んで」というのは、いわば看護の合間合間の「空いた時間を偷んで《利用して》」、「私」という人は、自分の室へ来て、その誰もいない自分の室で、まさにその「分厚い郵便物」を読んだという事になるのだろう。)

#### 十七、手紙の冒頭部分を読むと(後)

私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿様のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかった勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として

教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とあった。

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とある。

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。(本文)

\*

\*

さて、私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた「原稿様」のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。……

私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。(それは、第三部の『先生と遺書』へと連なる内容になるものである。)

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。(ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が(妻を)勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと」であり、その「間」に、「……この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。)

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とは、一体、どういうことなのだろうか?

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。(それは何かいやな予感が突然襲って来たのである)。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声がか聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟したが、(実は兄に代って、浣腸のため油紙を父の尻の下に宛てがう手助けで呼ばれたのであった。)

十八、この手紙があなたの手に落ちる頃には(前)

病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであった。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも呼んでくれるようにわざわざ断つていた。

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛くした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰つて行った。私の眼は几帳面に枠の中に篋められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあつた。

私ははつと思つた。今までわざわざと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行つた。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自然たそうに畳んだ。(本文)

\*

\*

さて、病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであつた。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。(つまり「浣腸の為の準備をする手助けとして呼ばれた」のであつた。)

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも

呼んでくれるようにわざわざ断っていた。(つまり「その瞬間がいつ来るのかは誰にもまた本人ですら分からない」ということである。)

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛ぐりした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰って行った。私の眼は几帳面に枠の中に篋められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあった。(これは、実に「衝撃的な言葉」であり、というのも、先生には、これという「健康上の問題」もなく、また、自殺を決行しなければならぬほどの「精神上の問題」も全く感じられなかったからである。)

私ははつと思つた。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行った。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであった。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取って、全く無用であった。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自烈たそうに畳んだ。(例えば、東日本大震災の大津波の後、自分の「家族や親戚或いは知人や親友その他」などの「安否」を一刻も早く知ろうとしても、なかなかその「安否の確認」が想うように出来ず、もうイライラ自烈たく感じているような心理に近いのも知れない。)

#### 十八、慌てて三等列車に乗り込む(後)

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺は存外静かであった。頼りなきように疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招きして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合ってるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯した。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外朦朧としていなかった。

私はまた病室を退ぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立って帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ駆け込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つだろうか、そのところを判然聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎留守であった。私には凝として彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵を停車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片を宛てがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅へ届けるように車夫に頼んだ。そうして思い切った勢で東京行き汽車に飛び乗

ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(第一部・完)

\*

\*

さて、私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺まくらべは存外ぞんがい静かであった。頼りなきように疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招てまねぎして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合っているようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯うなずいた。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外ぞんがい朦朧もろうとしていなかった。(それゆえ、何日かは保つかも知れないと思い、次のような行動に出たのかも知れない。)

私はまた病室を退しりぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。(まだ間に合うので)、私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つだろうか、そのところ(あと何日保つか)を判然はつきり聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎あいにく留守であった。私には凝じつとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。(それは「汽車の発車時間があるからであり」、心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵くろまを停車場ステーションへ急がせた。)

私は停車場の壁へ紙片かみざれを宛あてがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅うちへ届けるように車夫しやふに頼んだ。(突然、黙つていなくなれば、後々大きな問題にもなり兼ねないからである)。そうして思い切った勢いきおいで東京行きの汽車に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(これは、結局、先生の安否あひが気になって気になって、どうにも自分を止めようがなかったということである。)(第二部「両親と私」完)

\*

\*

中 両親と私（概略）

さて、今度の「両親と私」という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになってい

まず、その冒頭は、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった」。父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよっとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「卒業が出来てまあ結構だ」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」（本当の「意味合い」）は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういいう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せっかく丹精した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

そこで、私は、父や母に「卒業証書」を大事そうに見せると、父は、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置き、一方、私は、母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。（しかし、この病気は、むしろ、そういうものではなかったのである）。しかも、両親は、私のために赤い飯を炊いて客を呼ぶという相談までしているのである。母親も、「……仰山仰山とお言いたが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言い、父親も、「……呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と言う。仕方なく、私は父と相談の上、招待の「日取り」を決めるのであった。

ところが、その「日取り」のまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であり、それは新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡り、結局、「……まあ、（祝いは）ご遠慮申した方がよからう」ということになるのである。やがて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元気は、急速に衰えて行くのであった。（ちなみに、この「天子様がお隠れになる」という言葉は、太宰治の『思ひ出』という作品の冒頭にも出て来るものであり、それは、叔母が「……天子様がお隠れになったと言いなさい」と、幼い太宰治に言う場面である）。それはともかく、——母親は、父親を安心させるためにも、「……

：お前の先生先生という方にでも（就職先を）お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に手紙を書くが、いつまで経っても返事は来ない。それは、一体、なぜかと問えば、まず、なぜここに明治天皇の「崩御」という話題が登場するのかと言えば、それは、まさに先生の「自殺」の一つの大きな「切っ掛け」となるものであり、そのための「伏線」になっているとともに、先生は、この時、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、「私」という人は、九月になると、また東京へ出ようとしたが、父はまた私を引き留めたとある。「……お前が東京へ行く宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言い、私は出来るだけ父を慰めたとある。これは、（死を間近にしている）父親のこの「心細さ」や「淋しさ」というものには、恐らく、計り知れない程のものがあるに違いない。つまり、誰もがやがては（人生の最期には）いやでも味わうことになる「思いや感情」になるのだろう。——ところが、私がいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方であったが）、父は（風呂場で）突然引つ繰り返ったのである。そこで、東京行きは、もう少し様子を見てからということになり、しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで兄に父の現状を知らせる長い手紙を出し、また、妹には母が同じような内容の手紙を書いて出すことになる。また、母と相談して、父の枕元へは、町の病院から看護婦を一人頼む事にし、しかも、病人がいるので、自然と家への見舞の出入りも多くなつたとある。

さて、父の病状は、面白くない方へ移っていくばかりで、ついに私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打ち、兄からはすぐ行くという返事が来、一方、妹の方は、流産を恐れて、妹の夫が来ることになるのである。もちろん、こちら辺の内容は、それほど重要なものはそれほどはなく、いわば世間一般で「よく交わされる会話」の内容になっているかと思うが、それゆえ、何よりも大事な場面は、むしろその次の「場面」からなのである。それは、次のようなものである。——まず、「兄」と「妹の夫」がやって来て、父の病状を見ると、「兄」は、新聞紙を読んでいる父親を見て、「……よつほど悪いかと思つて来たたら、大変好いようじゃないか」と言い、一方、「妹の夫」も、「……さつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもなく。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

\*

\*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年（一九一二年）の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経つた「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」（先生と遺書）の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたので。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。そして、『大変だ大変だ』と言つて、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む

時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたい」が来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたい」が来られるかという「電報」を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろしい)、話ししましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたい」が来られるかという「内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会つて、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会つて、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来るからである。

\*

\*

やがて、「……父の病気は最後の二撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するのうに見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入った。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。(中略)、そして、私と兄は、一緒に蚊帳の中に寝て、妹の夫だけは、客扱いを受けて、独り離れた座敷に入つて休んだ」とある。——一人は、それほど仲の好い兄弟ではなかったとある。小さいうちはよく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入つて

からの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。私は長く兄に会わなかったのも、兄はいつでも私には近くなかった。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。「…お前これからどうする」と兄は聞いた。一方、私は、「…：一体家の財産はどうなってるんだらう」と聞いた。すると、兄は、「…：おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産って言ったところで金としては高の知れたものだらう」となるが、これらの一連の内容を見ると、先生が心配したような「財産」をめぐる「骨肉の争い」は、この「家族」の場合には、起こりそうもないという感じを受けるが、それとも、先生が言うように、「…：いざという間際で、最後の最後で、悪人になる人が出て来るのだからか」、それらのことについては、「作者」（夏目漱石）は、何も書いてはいないのである。

さて、父親の病状は、変な黄色いものも嘔いたり、時々嚙語を言ったり、そのうち舌が段々縫れて来て、何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあったとある。そして、父の水枕を取り更て、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せている、その時、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

そして、父親のいる病室から自分の室へ戻ってから、私は早速郵便物の中を開けて見ると、中から出たものは、いわば「原稿」のようなものであるが、その分量があまりに多過ぎて、一気に読み通す訳には行かず、また、同時に病室の事が気にかかっていたので、落ちついて読む気にもなれず、私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んでみた。その冒頭の文章は、「…：あなたから過去を問いたされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従って、それを利用してできる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。(ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が(妻を)勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと)であり、その「間」に、「…：この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。)

さて、一度、父親の浣腸の手助けに病室に呼ばれ、また、自分の室へ戻っては、長い手紙を拾い読みする余裕すらなく、ただ最初から最後までその頁を順に開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一句が私の眼に入り、それは、「…：この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というものであり、この瞬間、今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したような感じ

になり、ただ「先生の安否だけが気になった」とある、その結果、私は夢中で医者の家へ馳  
け込み、父はあと何日保つのか聞こうとしたが、医者は生憎留守であり、私はすぐ俵を  
停車場へ急がせた。その停車場で紙切れに母や兄あての簡単な手紙を書き、それを急いで宅  
へ届けるように車夫に頼んだ。そして、思い切った勢いで東京行きたもの汽車に飛び乗ってし  
まった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂から先生の手紙を出して、漸く始め  
からしまいまで眼を通したのであった。(中・完)

\*

\*

夏目漱石の世界  
こころ（先生と遺書）

はじめに

さて、今回の夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『先生と遺書』（下）という第三部の「内容」であるが、それは、まず、冒頭は、先生からの「長い手紙」であり、それは、「……（以前）あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼ったが、その時は、他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。その義務からとは別として私の過去を書いておきたいのです。私の過去は私だけの経験であり、私だけの所有と言っても差支ないものであり、それを人に与えないで死ぬのは、私にも惜しいという多少そんな心持があるのです。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思うのです。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ますと、その「生い立ち」から語り始めるのである。

\*

\*

先ず、先生という人の「生い立ち」であるが、先生が両親を亡くしたのは、まだ二十歳にならない時分（恐らく中学三年の頃）であり、二人は同じ病氣（それは腸チフス）で死んだのでした。しかも、殆んど同時と言っていくくらいであり、それが傍にいて看護した母に伝染したのでした。先生は二人の間に出来たたった一人の男の子であり、家には相当の財産（旧家）であったので、むしろ鷹揚に育てられました。

さて、両親の死後、先生という人は、東京へ出て高等学校に入ります。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしましたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産」は、出来るだけ金に換えたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にすることが出来たのです。そこで、騒々しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、たまたま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家の話を聞いて、そこに下宿することになるのである。

つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとそのお嬢さんとも親しくなれるとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたのです。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかったため、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになる。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配し

ていたことだろうと思うが、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」になるのである。

さて、学業の方は、二人とも大学二年を終えて、大学三年（九月新学期）になる前の「夏休み」にどこかへ行くこうかとKとあれこれ相談し議論するも決まらず、奥さんが仲に入り、結局、二人で「房州への旅」へ出ることになるが、やがて、二人は真黒になって東京へと帰って来る。宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚くが、それは、ただ色が黒くなっただけではなく、むやみと歩いたので大変瘡（やせ）ってしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったと言って賞（ほめ）てくれるが、一方、お嬢さんは母親の矛盾がおかしいと言ってまた笑い出すのでした。ところで、お嬢さんの態度が前とは少し違って、私の方をすべて先にして、Kを後廻し（わじまわ）しにするように見えたのです。——しかし、そのようなことも数ヶ月経つと、やがてお嬢さんの態度がだんだん平気になって来て、Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室（へや）の縁側へ来て彼の名を呼んだり、そこへ入って、ゆっくりしていました。むろん、郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるので、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有（せんゆう）したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えて、先生は親友の「K」に対する嫉妬（しよ）心をより深めていくのである。

やがて、年が開けて正月になり、ある日、内々（うちうち）だけで歌留多（かるた）をすることがあったが、それから二、三日経った頃、奥さんとお嬢さんは朝から親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃で、二人は室（へや）で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖（ふすま）を開けて、Kの方から私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐（すわ）り、奥さんとお嬢さんはどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するが、やがて、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、先生は、「あつ、しまった！」という想いに強く襲（おそ）われるのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち明けようと思いつつも、なかなか言い出せざるところを、Kに先越（さきこ）されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さんのことが好きだということ、なかなか言い出せざるところです。

そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま暫（しばら）くは続くが、その後、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」は、ことばかりに一気に「反撃」に出るのである。それはお嬢さんを絶対に失いたくない、という一心からだったと思うが、この時の「対応（策略）」と、もう一つは、とにかく、Kよりも先に奥さんに「……お嬢さんを下さい」と「結婚の申し入れ」をすることで、奥さんの承諾を得ようとする、この二つの「反撃」によって、親友である「K」を攻撃し、その結果として、先生は、お嬢さんを得、一方、「K」という人は、「自殺」をしてしまう。そのために、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲（おそ）われ、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かせく）」）というものに長く悩まされ苦しむことになるのである。

やがて、奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭（いや）がり、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上今おる家へ引越（ひっこ）すことになる。移って二カ月ほどして

私は無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚したのです。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども私の幸福には「黒い影」が随きまどつていました。

しかも、一年経ってもそのKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安であり、私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めたり、また、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もありましたが、結局はうまくいかなかったのです。そのうち、妻の母が病気になり、医者に見せると到底癒らないという診断であり、私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしました。これは病人自身のためでもあり、愛する妻のためでもあり、もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。そして、幾分でも善い事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分支配されていたのです。

すると、夏の暑い盛りに明治天皇が崩御され、それから約一カ月半ほど後、御大葬の夜、私はいつも通り書齋に坐って、相図の号砲を明治が永久に去った報知のごとく聞き、また、それが乃木大将の永久に去った報知(殉死)にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしました。——私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。「…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という内容になっていくのである。

ところで、この第三部の「先生と遺書」というのは、それぞれ「本文」＋「\*\*」＋「解説」という構成になっていて、「…：最初から最後まで、一字一句、丁寧に読み辿りながら深く考察したもの」であり、それゆえ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

下、 先生と遺書

- 一、 冒頭の文章（長い手紙）
- 二、 私の過去のすべてを……
- 三、 先生の生い立ち
- 四、 父親と叔父（その実の弟）との関係  
最初の夏休みの帰省
- 五、 二度目の夏休みの帰省
- 六、 三度目の夏休みの帰省
- 七、 家の財産のこと
- 八、 叔父に財産を誤魔化される
- 九、 \* \*
- 十、 新たな下宿先を見つける
- 十一、 八畳の部屋の様子
- 十二、 先生の心の状態
- 十三、 奥さんとお嬢さんと先生との関係
- 十四、 奥さんの思い
- 十五、 奥さんの態度と先生の心模様
- 十六、 茶の間がお嬢さんの室で男の声があると
- 十七、 三人で着物を買に出る
- 十八、 奥さんとお嬢さんの気持ち  
\* \*
- 十九、 Kという親友の登場
- 二十、 Kの三年間の夏休みの過ごし方
- 二十一、 Kの養子縁組の破綻
- 二十二、 先生の下宿先に同居するまでの経緯
- 二十三、 Kが四畳の室に移り住む
- 二十四、 Kの性格と特徴
- 二十五、 Kの心が段々打ち解けて来る
- 二十六、 Kとお嬢さんだけの状況
- 二十七、 二度目のKとお嬢さんだけの状況  
\* \*
- 二十八、 房州への夏休みの旅
- 二十九、 Kと自分とを比較してみると

- 三十、日蓮の誕生寺と鯉たんじょうでら こい
- 三一、人間らしさについての議論
- 三二、旅行後のお嬢さんの態度
- 三三、糠ぬかる道でKとお嬢さんに遭あう
- 三四、先生のKに対する嫉妬心
- \*
- 三五、正月に歌留多かるた取りをする
- 三六、Kのお嬢さんへの恋心の告白
- 三七、Kの告白後の先生の心の状態
- 三八、二人は寡黙かもくで夕飯ゆうめしを食べて、床に就つく
- 三九、Kに告白の真意を聞く
- \*
- \*
- 四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る
- 四十、上野公園で先生にどう思うかと尋たずねる
- 四一、先生のKに対する最初の反撃
- 四二、先生の最初の反撃に対するKの反応
- 四三、上野うえのから帰った晩、二人は……
- 四四、覚悟という言葉と奥さんへの談判
- 四五、お嬢さんを下さいと奥さんに言う
- 四六、外を歩き回まわって、宅うちに帰る
- 四七、奥さんはKに二人の結婚話をする
- 四八、二、三日後、Kの自殺
- 四九、奥さんにKの自殺を告げる
- 五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処
- \*
- \*
- 五一、Kはなぜ自殺したかと問われる
- 五二、Kの亡霊から逃のがれるために読書を……
- 五三、Kの亡霊から逃のがれるために飲酒を……
- 五四、やがて奥さんの病氣と死
- 五五、うつ脳の牢獄らうごくに閉じ込められて
- 五六、乃木大将のぎの殉死じゆんじを契機けいに自殺じくを決心する

※ 参考文献

第三部 (先生と遺書)

三三三

## 下 先生と遺書

### 序

さて、いよいよ「先生と遺書」という第三部の「内容」になるが、それは、まさに「先生」(自分)という第一者から見た(つまり「内から見た」)時の「先生」(自分自身)という存在の「内的世界」の描写であり、それは、いわば「内的事実」であり、例えば、「先生」(自分)という人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」の描写である。そして、その「内的世界」を敢えて「三つ」に分けてみると、一つは、「表面的部分」であり、それは、その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、一つは、「中間的部分」であり、それは、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、そして、もう一つは、「深層的部分」であり、それは、その人(先生)の「頭の中」(或いは「心の中」)に蓄えられている、今日まで生きてきたその「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などの膨大な量の蓄積(蓄え)であるが、その中から様々な「経験や想い出その他」などを自ら語る(描写)するというものである。そして、『こころ』という作品の主人公である「先生」の場合には、次のような「内容」になつていくのである。

### 一、冒頭の文章(長い手紙)

「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮していると言つた方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢えてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩らつていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のように。私は卑怯でした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶したのです。遺憾ながら、その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかつたと言つても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。私は状態へあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言つて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無難な

言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛けて、今東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったと見えて、また後から長い手紙を寄こしてくれました。あなたの東京出来ない事情がよく解りました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。そのお父さんの生死を忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。その癖あなたが東京にいる頃には、難症だからよく注意しなくってはいけなないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。或は私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我を認めています。あなたに許して貰わなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打つたのは、それがためです。(本文)

\*

\*

では、いよいよ第三部の「先生と遺書」であるが、その「冒頭の文章」は、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思ったのです。しかし、自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。(中略)、実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩っていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、「それとも……」という言葉を中心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。その時の私には、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとってまるで無意味であり、どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。宅に相應の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といって藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。

その後、私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたのです。ところが、今、東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。後からの手紙で、東京出来ない事情がよく解りました。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。

——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思  
いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書  
かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの  
手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばな  
いという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです」とある。

\*

\*

先ず、ここまでの文章で大事なことは、次のようなことである。それは、「私」という  
人が「先生」に条件の好い（就職先の依頼の）手紙を出した時、先生は、まさに「……こ  
の自分をどうすれば好いのかと思ひ煩うていたところであり、このまま人間の中に取り  
残されたミイラのように存在して行こうか、それともいっそ『自殺』しようかと深く悩み  
苦しんでいたところだった」のである。そのような時に、まさに明治天皇の「崩御」の報  
道を新聞で読み、それから約一ヶ月半後、「御大葬の夜」の時、（夜八時ごろ）、今度は「乃木  
大将の殉死」を号外で知り、思わず妻に殉死だ殉死だと言ったことや、また、新聞で乃木  
大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生の「心の中」に或る「決  
定的な想ひ」が生じて来たということである。それは、この時、先生は、はっきりと「私」  
という人に「自分の過去をすべて語ること」を決心したということである。

そこで、先生は、「私」に電報を打つが、それは、「……あの時私は一寸あなたに会  
たかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたの  
です」とある。まず、ここまでは、最初、先生は、「……相手（私）に直接会つて、希望  
通り私の過去の話をしようと考えていた」のである。それゆえ、この時は、まだ「自殺」  
までは考えてはいなかつた。ところが、「……今、東京へは出られないと断つて来たので、  
私は失望して永らくあの電報を眺めていた」が、二日後、今度は、「来ないでもよるしい」  
という電報を打つて来ることになる。それは、一体、どういう理由からかと問えば、それ  
は、この「二日間」のうちに、先生の「考え方」が大きく変化したからである。それは、  
「……相手（私）に直接会つて、私の過去の話が出来ないならば、むしろ遺書という手紙  
の形で自分の思いを語ることができないのではないか」という、そういう「想ひ」がふと  
浮かんで来たのである。それは、一体、なぜなのか？ その最も根源的な「理由」の一つ  
には、やはり先生には長年の「自殺願望」があり、その「自殺願望」を「遺書」という形  
で、まさに遂行でき得るからであるが、それに加えて、相手（私）に直接会つて話をする  
よりも、むしろ「遺書」という形の方が、まさに自分の「考えや想ひ」などをすべて（一  
つ残らず）正直に語ることができ得るとともに、いつまでも「遺書」（手紙）として「私」  
という人の手元に残ることにもなるからである。

二、私の過去のすべてを……

さて、「……私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、  
自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、  
あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を  
擱いても、何にもなりません。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。  
あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れませ

ん。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、殆んど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれを出来るだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、御覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言っても差支ないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といる日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違つたところがあるかも知れません。しかしどう間違つても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思ふのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解つていてでしょう。私はあなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足りなそうな顔をちよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼つた。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(本文)

\*

\*

さて、先生は、二度目の電報を打つてから「この手紙」を書き出したとある。「……平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でもあり、何度か筆を擱こうとしましたが、——結局、私は書きたいのです。あなたへの義務は別として、私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言つてもよいでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるが、私に

も多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから」とある。

まず、先生という人は、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」は誰もいなかった。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語ってもよいと思えて来たということである。そこで、最初は、彼に直接話そうとして電報を打ったが、父親が重篤で来れないというので、そこで、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）ではふと「遺書」という形で語ることもでき得るのではないかという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを讀んだ若者も、きっと自分の「想い」をしつかり受け留めてくれるだろう。「……私は何千万という日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから……」とある。つまり、先生という人は、一体、誰のためにこのような「遺書」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分（先生）が実際の人生の中で経験した「心の闇」（「罪と罰」）とを、敢えてここに書き遺しておきたかったのである。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。——私は（若い）あなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなそうな顔をちよよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。その時、初めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。（これは先生の実際の人生の中で経験して得た「生きた教訓」を得たいと言ったから）。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であった。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」とある。

これは、もう「作者」（夏目漱石）の『「ころろ」という作品の、まさに「核部分」そのものである、——つまり、自分の「過去」の経験から、このような「思想」（或いは「作品」）が生み出されたということであり、「……私は暗い人世の影を遠慮なくあなた（読

者)の頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じと見詰め  
て、その中から貴方の参考になるものをお攫つかみなさい」と言っているのである。  
\* \* \*

三、先生の生い立ち

### 三、先生の生い立ち

「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。何時か妻があなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、殆んど同時と言っていていくらいに、前後して死んだのです。実を言うと、父の病気は恐るべき腸窒扶斯でした。それが傍にいて看護をした母に伝染したのです。」

私は二人の間に出来たたった一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうにと思います。

私は二人の後に茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいた事が出来ませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覚っていたか、又は傍のものの言うごとく、実際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分かりません。母はただ叔父に万事を頼んでいました。そこに居合せた私を指さすようにして、「……この子をどうぞ何分」と言いました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出る筈になっていましたので、母はそれも序でに言うつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後を引き取って、「……よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得る体質の女なんでしょうか、叔父は「確かりしたものだ」と言つて、私に向つて母の事を褒めていました。しかしこれが果して母の遺言であつたのかどうか、今考えると分らないのです。母は無論父の罹つた病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだ幾らでもあるだろうと思われれるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向記憶となつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風に物を解きほいで見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却つて役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだろうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向つて、積極的に大きな力を添えているのは慥です。だから覚えていて下さい。

話が本筋をはずれると、分り悪くなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、或は多少落ち付いていやしくないかと思つていられるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響きももう途絶えました。雨戸の外にはいつの間にか憐れな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思ひ出させるような調子で微かに鳴いています。何も知らない妻は次の室で無邪気にすやすや寝入っています。私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。

私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思います。(本文)

\*

\*

まず最初は、主人公である「先生」という人の「生い立ち」であるが、それは、次のようなものである。それを要約すると、「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の二十歳にならない時分でした。二人は同じ病気で死んだのです。しかも殆んど同時と言っているくらいであり、父の病気は、腸チフスでした。それが傍にいて看護した母に伝染したのです。私は二人の間に出来たたった一人の男の子でした。家には相当の財産があったので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たらうにと思えます」とある。

これは、つまり、あの時、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていくれたならば、当然のことながら、叔父(父親の実の弟)に家の相当の財産の多くを騙し取られることもなく、それゆえ、(人を深く疑ったり恨むようなことも知らずに)、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たらうに思うのです。ところが、実際は、両親をほぼ当時に失い、私は二人のあとに茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。とにかくたった一人残された私は、母の言いつけ通り、伯父を頼るよりほかに途はなかつたのです。しかし、その伯父によって、家の財産の多くを騙し取られてしまい、それ以来、他人の徳義心を疑うようになったのです。簡単に言えば、人間が信じられなくなったということなのです。

それには、「……こういう風に物を解きほどこいて見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却って役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥です。だから覚えていて下さい」とあるが、それは、つまり、もともと先生にはあれこれ物事を疑ったりあれやこれやと考えをめぐらしたりする性分があり、それに、伯父による家の財産の多くを騙し取られるという様なことなどが加わり、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。そして、今、先生は、深夜、何も知らない妻は、次の室で無邪気にすやすやや寝入っているその中で、私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思いますとあり、それは、一度、(心の底からの)「決心」(覚悟)が出来れば、あとはむしろ落ち着いた気分になれるということなのかも知れない。

#### 四、父親と叔父(その実の弟)との関係

「……とにかくたった一人取り残された私は、母の言い付け通り、この叔父を頼るより外

に途はなかったのです。叔父はまた一切を引き受けて凡ての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしてる間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせざるに済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。(無論物価も違いました)。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらる方だったのでしよう。というのは、私は月々極ら回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしよう。というのは、私は月々極つた送金の外に、書籍費、(私はその時分から書物を買う事が好きでした)、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましよう、政党にも縁故があったように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格から言う父とはまるで違つた方へ向いて発達した様にも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画骨董と言つた風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたけれども、二里ばかり隔つた市、——その市には叔父が住んでいたのです、——その市から時々道具屋が懸物だの、香炉だのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父は一口に言う、まあマン・オフ・ミーンズ(資産家)とでも評したら好いのでしょうか。比較的上品な嗜好をもつた田舎紳士だったので。だから気性から言う、闊達な叔父とは余程の懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父は寧ろ私の心得になるつもりで、それを言つたらしく思われます。「……お前もよく覚えていたが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になつていたので。 (本文)

\* \* \*

さて、「……私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会される所でした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせず済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもっていたのです。（当然先生もその質朴をもっていたのだらう）。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。（無論物価も違いましようが）。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらぬ憐れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしょう。というのは、私は月々極った送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係から、政党にも縁故があったように記憶しています。父の「実の弟」ですが、そういう点で、性格から言うと父とはまるで違った方向へと発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だの、また、詩集などを読む事も好きでした。書画骨董といった風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたが、二里ばかり隔たった市には、叔父が住んでいたのです。父は、比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったので、だから気性から言うと、闊達な叔父とはよほどの懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。「……お前もよく覚えているが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょうか。

つまり、両親の死後、私（先生）は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、その三年の間に、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのところの「本文」は、次の章からであるが、当時の入学（新学期）は、九月であり、卒業（学期末）は、七月であり、それから夏休みに入るのである。

\* \* \*

五、最初の夏休みの帰省

## 五、最初の夏休みの帰省

「……私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、それでもするより外に仕方がなかったのです。」

叔父はその頃市にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合から言えば、今までの居宅に寝起きする方が、二里も隔った私の家に移るより遙かに便利だと言っていました。これは私の父母が亡くなった後、どう邸を始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩れた言葉であります。私の家は古い歴史をもっているのです、少しはその界限で人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎では由緒のある家を、相続人があるのに壊したり売ったりするのは大事件です。今の私ならその位の事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、甚だ処置に苦しんだのです。

叔父は仕方なしに私の空家へ這入る事を承諾してくれました。しかし市の方にある住居もそのままにしておいて、両方の間を往ったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困ると言いました。私に固より異議のありよう筈がありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好い位に考えていたのです。

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていました。学校へ出る子供などは平生恐らく市の方にいたのでしょうか、これも休暇のために田舎へ遊び半分と言った格で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、却って賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりやになりました。叔父はもと私の部屋になっていた一間を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少くないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父は御前の宅だからと言って、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を叔父の家族と共に過ごして、又東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしる薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然断りました。三度目には此方からとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単純でした。早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろと言うだけなのです。家は休暇になって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続

する、それには嫁が必要だから貰う、両方とも理屈としては一通り聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解ります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったのでしょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るように、遙か先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。(本文)

\*

\*

さて、私は、最初の夏休み、初めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、叔父夫婦が住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束であり、叔父は、その頃、市にある色々な会社に関係していて、業務の都合から言えば、今までの居宅の方が、私の家に移るより遥かに便利だと言って笑いましたが、私の家は古い歴史をもち、由緒ある家でもあり、田舎では勝手に壊したり売ったりするのは大事件で、そこで、叔父は、仕方なしに私の空家へはいることを承諾し、それは、両方の間を(自由に)行き来できる便宜を与えてほしいという条件のもと、私はどんな条件でも東京へ出られれば好いくらいに考えていたのです。(これは叔父を信じ切っていたので、仕方のない判断になるのだろうが、もしここに何らかの教訓があるとすれば、それは、たとえ誰であれ、「……人間を百%信じ切って、すべてを相手に任せ、きるようなことは極めて危険である」ということである。)

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ましたとある。——例えば、今日でも北は北海道から南は沖縄まで実に様々な地方から東京の大学へと入学した大学生たちは、夏休みになれば、もちろん、そのまま東京に残る人たちも多いだろうが、また、自分の実家へと帰省する人たちも実に数多くいるかと思うが、それは、すでに「明治の時代」から盛んに行われていたということであり、それを可能にしたのは、まさに「鉄道」(汽車)の全国的な普及であり、第二部の終わりのところでも、「私」という人は、停車場まで人力車を急がせ、それから「三等列車」に乗って東京へと向かったとあるのです。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっけていて、みんな私の顔を見て喜びました。私は父母の時よりも、かえって賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりました。私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を、叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つ、私の心に薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私は、初めは驚いただけでしたが、二度目ははつきり断り、三度目はその理由を反問したほどである。彼らの主意は単簡で、早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。田舎の事情を知っている私には、よく解り、私も絶対にそれを嫌ってはいなかったが、承諾を与えないまま、その家を去りました。

## 六、二度目の夏休みの帰省

「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別な境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼をして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのです。後から考えると、私自身が既にその組だったので、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われない前から、覺つていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつていたのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衍しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。当人に望みのない私にはどつちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭な顔をしました。従妹は泣きました。私に添われなから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私

はまた東京へ出ました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼ねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたでしょう。後から考えると、私自身が既にその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。(これは漱石自身の学生の頃の書生の雰囲気などを思い出しながら書いているのかも知れない。)

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われぬ前から、覺っていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。

さて、叔父は、その「結婚相手」として、叔父の「娘」すなわち私の従妹に当る女性を言つて来たが、その時に、先生がもし自分には密かに「心に決めた女性」がいて、その女性と結婚する約束になつていると言つたらどうだったのだろうか？ というのも、叔父が結婚を勧める理由は、「……彼らの主意は単簡(簡單)で、早く嫁を貰つてこの家へ帰つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです」とあるからです。それに対して、叔父が「……いや、自分の娘とせ、ひとと結婚してほしい」と強く迫るとすれば、それは、一体、なぜなのか？ 例えば、叔父の「娘」が先生のことを死ぬほど好きだと言うのだろうか？ もちろん、そうではない。(このことは、やがて後で出てくるが、「……結局、叔父は、市の方に妾をもつようになるが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました」とある。また、その外にも色々叔父についての噂はあつて、一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つとしてあり、つまり、先生の家の「財産」をそのようなところにすでに使い込んでいたのである。)

私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつているのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家

へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衿しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。『……香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われたいのです』とある。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。(例えば、恋人や新婚の頃と、何年も経った夫婦とでは当然違って来るようなものである)。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。(これは先生にまだ分別のないうちに早く決めてしまいたいのだが)、当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は「厭な顔」をしました。(それは自分の思い通りにならないからであり)、従妹は泣きました。私に添われぬから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かったからです。(拒絶されるのは、自分に女としての魅力がないからかとうような思いである)。私が従妹を愛していない如く、従妹も私を愛していない事は、(親しい気持ちと愛する気持ちとは別であることは)、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

## 七、三度目の夏休みの帰省

「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私は何時でも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかったからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の句も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝として居るのは、私に取って何よりも温かい好い心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭なもの断る、断ってさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違ってきます。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へ這入る積もりだと言って、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれただけではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたのです。今でも潜んでいるでしょう。

私はたつた一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌を翻すようになりまし。尤もこれは私に取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言え、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものになりました。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。(本文)

\*

\*

さて、「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経つた夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかつたからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気が色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝としてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好い心持だったのです。(これは今でも夏のお盆休みなどには帰省、《民族の大移動》などが行なわれている)。——単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思つていました。厭なもの、断つてさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰つたのです。(だが実際は大きな問題が待つていたのである。)

ところが帰つて見ると叔父の態度が違つています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにはいません。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の

高等商業へ這入る積もりだと言つて、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗つて、急に世の中が判然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたので。今でも潜んでいよう。——私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてもいるような気分、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。（これは死んだ両親があゝの世から自分を見守つていてくれるというような、いわば純朴かつ伝統的な「考え方」である。）

私の世界は掌を翻すように変りました。尤もこれは私に取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言えば、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりましたとある。

これらは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、この「時期」（中・高時代）というのは、まさに「第二性徴」とともに、自我がはつきりと目覚めて、異性への関心も一気に高まるだけではなく、それに加えて、自我の発達とともに、どういうことでも自分で考え、そして、自分で判断したがるような傾向が強くなり、それゆえ、今までは親や先生あるいは大人たちの言うことや考え方などに対して、それほどその真偽を深く厳密に問うことも少なく、比較的素直に受け入れることが多かったのに対して、次第に親や先生あるいは大人たちの考え方などのなかにある「矛盾や不合理」その他などに対して、はつきりと「不平や不満」などを感じるようになり、時には非常に強く「反発や反抗」などをするようになるという、いわゆる「第二反抗期」に入ることもなるわけである。そして、このことは同時に、今までのような親や大人への「強い依存」から次第に離れ始め、それに代わつて、まさに「友達との関係」などがより親密なものになつて行くという時期でもあるということである。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんですよ。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になつたということである。

\*

\*

八、家の財産のこと

## 八、家の財産のこと

「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称することく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往來して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉を口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだらうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実しか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾をもっているという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。

私はどうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしています。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかったのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もっと大事なものを控えているのです。私のペンには早くからそこへ辿りつきたがっているのを、やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていてでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だったかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷やかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きています。冷かかっています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来るからです。(本文)

\*

\*

さて、「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称するごとく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往来して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉を口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しい様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。（この「忙しい忙しい」と言つて真面に会おうとしない、或いは真面に話し合おうとしないのは、相手に何か「やましいこと」（つまり後ろめたいことや良心がとがめるようなこと）がある場合が殆んどではないかと思う。）

私は叔父が市の方に妾をもつているという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語つて聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。（つまり妾を持てるようなお金や一時失敗しかかつていた事業を立て直すようなお金などは、一体、どこから出ているのかという疑惑である。）

私はどうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかつたのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは今早くからそこへ辿りつきたがつているのを、やつとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていられるでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だつたかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は

冷かな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きています。信じています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来るからです。

\*

\*

つまり、第一部で、先生という人は、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と語るのであつた。それに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、「……意味と言つて、深い意味はありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くので、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言つた風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と言うのであつた。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつたとある。

そこで、敢えて、「……思想界の奥へ突き進んでみる」と、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「理智的部分」(それは知性や理性その他など)によつて強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、それがまさに「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです」ということである。一方、何らかの問題を起こすようなその時には、その人の「理智的部分」(それは知性や理性その他など)による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝つてしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということである。それでは、「……いざという間際」ということであるが、それは、多くの場合、いわば「精神的に追い詰められているような時」が多く、例えば、どうしてもお金が欲しいという時には、(悪いとは知りつつも)、目の前のお金について手を出してしまうということである。ふだんならばそんなことはしないのである。

それは、何も「お金」に限ったことではなく、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、社会的地位欲、出世欲、名誉欲、名声欲、その他、何であれ、どうしてもそれを得たいという余りにも強い欲求に襲われているような時には、嘘も裏切りもまた様々な策略も不正も、その他、もういかなる手段を尽くしてもそれを何としてでも手に入れたいとする傾向があるということである。

## 九、叔父に財産を胡魔化される

「……一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出て三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とも言えましょうか。私はその時の己れを顧みて、何故もっと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、

正直過ぎた自分が口惜しくって堪りません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなた知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛してはいないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思えます。胡魔化されるのはどつちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに関係のないあなたに言わたら、さぞ馬鹿げた意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着き過ぎて長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言って忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したので、叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らってくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で畠地などを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらつた金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言うと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……」口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的

に言えば本當の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とでも言えましようか。私はその時の己れを顧みて、何故もつと人が悪く生れて来なかつたかと思つと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。しかしまたどうかして、もう一度あゝ生れたままの姿に立ち歸つて生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思ひます。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に驅られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛してはいないだけで、嫌つてはいなかつたのですが、後から考へてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思ひます。胡魔化されるのはどつちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに關係のないあなたに言わせたら、さぞ馬鹿氣な意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。（これは極めて大事なことであり、本来、信頼出来る「第三者」（例えば弁護士その他）などを立てて、問題の解決を図るのがベストである）。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視してました。私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ひないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかると一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙つてそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公沙汰にするか、二つの方法しかなかつたのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着ままでに長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中の中からですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考へました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言つて忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らつてくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で「畠地」などを売ろうとしたつて容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自由すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらつた金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言つと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。（これは凄いことで利子だけで生活が

出来ていたということであり、この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。

## 一、三度目の帰省部分の要約

まず、私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷（実は新潟県）がそれほど懐かしかったからです。生れた所は空気が色が違います、土地の匂いも格別です、父や母の記憶も濃やかに漂っています。——単純な私は、従妹との結婚問題について、さほど重大とは考えておらず、厭なものとは断る、断ってしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたので、（私はなんの心配をせず）、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいましたが、妙なものは、叔父ばかりではなく、叔母も妙であり、従妹も妙であり、そして、東京の高等商業へはいるつもり、男の子まで妙なのです。

\*

\*

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私が叔父の態度に心づいたのも、それは、何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今まではまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そして、このままほっておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。また、このままでは、死んだ父母に対しても済まないという気を起したのです。私は叔父が市の方に妾をもち、また、一時事業で失敗しかかっていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たという噂などを聞いたのも、私の疑惑を強くしたものの一つでした。（つまり「家の財産を女遊びや事業などに使い込んでいた」ということである）。私はどうとう叔父と談判を開きました。一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化していったのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。すべてを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。訴訟も考えましたが、時間がかかるので、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形に変えることにしたのです。（ちなみに、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「財産」をだまし取られたことになるのだろう）。此所までの推移は、次のようなものである。

## 二、高等学校時代のまとめ

まず、両親の死後、私は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していったのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産（畠地）」などは、市における中学の旧友がすべて「金」に換え

てくれたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にする  
ことが出来たのです。そこで、騒々<sup>そうぞう</sup>しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、た  
またま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女<sup>げじよ</sup>が住む家の話を聞いて、そこに下宿  
することになるという展開である。

\*

\*

十、新たな下宿先を見つける

## 十、新たな下宿先を見つける

「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言った訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいました。その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思いました。それで直ぐ草原を横切って、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだにいい町になり切れないで、がたぴししているあの辺の家並は、その時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜いたり、横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言つて、少時首をかしげていましたが、「……かし家はちよいと……」と全く思い当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞くのです。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえって家を持つ面倒がなくて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言つて。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人に会つて来意を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということをごどこかに握つたのでしよう、いつでも引越して来て差支えないという挨拶を即坐に与えてくれました。未亡人は

正しい人でした、また判然した人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのだろうと疑いもしました。(本文)

\*

\*

さて、「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言つた訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。(警戒心の表れであり)、ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がまるで違つてしまいました。ですが、その頃は左手が砲兵工廠の土堀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立つて、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西側の趣が違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切れないで、がたびししているあの辺の家並は、その時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言つて、少時首をかしげていました。が、「……かし家はちよいと……」と全く思い当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞かれました。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえつて家を持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。(人の運命を変える最初のきっかけというものは、多くの場合、ほんのちよつとしたことから始まるものである。)

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被つていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言つて。けれどもその頃の大学生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。(この頃は、まだ自分に自信を持つていて、まさに快活かつ積極的に行動をしてい

たのである。)

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の「身元やら学校やら専門」やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握ったのでしよう、いつでも引つ越して来て差支えないという挨拶を即座に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然とした人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服しましたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのかと「疑い」もしました。(これは娘の「婿選び」でもあつたのかも知れない。)

さて、奥さんという人は、先生(当時は大学生)と初めて会つた時から、この人ならばという直感がすぐに働いて、先生(当時は大学生)を即座に下宿させたということである。それは、最初から、奥さんの「お目」にかなつた、まさに「好ましい人物」に見えたということであり、それは、また、お嬢さんの「目」にも、恐らく、同じような印象で見えていたことになるのだろう。つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとそのお嬢さんとも親しくなれるとともに、そこのお嬢さんのことが好きになつていくという展開になるのです。

## 十一、八畳の部屋の様子

「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差しました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたのですが、それでも多少は残つていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かつてもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言つた琴と活花を見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走に活けられたのだという事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしよう。移つた私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が

予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからああなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頹杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入つた手を弾かないところを見ると、上手なのじやなかうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾つてくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変つた例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。(それは、一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たという、ちゃんとした軍人未亡人の一戸建の家)」「二室」であり、それゆゑ、移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に低い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁(側)に明るい日がよく差しました。(下宿は、「二室」借りる間借りであり、例えば、三畳、四畳、六畳、八畳などがあり、アパートやマンションなどに住むのとは全く違うのである。)私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたの

ですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言った琴と活花を見たので、急に勇気がなくなってしまうました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走（客への供応・もてなしの意）で活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしょう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなただの頭を掠めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。（この最初の「出会い」の時から、先生という人は、まさにお嬢さんに心惹かれてしまつたのかも知れない。それが次の本文になるかと思う。）

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりましたとある。

\*

\*

例えば、よく『一目惚れ』というものを経験することがあるかと思う。それは、一体、どういふものかと言えば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであつたりとめぐり逢つた相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ！」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。それは、なぜかと言えば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな！」とか、「あつ、カッコいいなあ！」というように思いに襲われて一杯になつてゐるために、しばらく「動き」を奪われてしまうものなのである。しかも、一方だけがそういう「一目惚れ」に深く陥るのではなく、二人が同時にそのような「一目惚れ」に深く陥つた時には、その瞬間、「時計が止まつた」ような感じ、相手の姿だけが「鮮明に見え」て、それ以外のまわりのものは、ほとんど薄れてしまうものなのである。しかも、お互いがそういう状態で、「相手を見つめながら、立ち止まつてゐる」状態になるということである。もちろん、それは、一瞬のことかも知れないが、その時、一種の「心から心へのテレパシー」のようなものが働いている感じにもなるものである。それは、お互いが「同じような心の波長」を出し合つていて、それが「深く響き合つてゐる」ような感じになる場合も時にはあるのだろう。先生の場合にも、そのような「一目惚れ」のような感じがあつたのかも知れない。

\*

\*

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、

その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入った手を弾かないところを見ると、上手なのじゃなからうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかったのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変わった例がありませんでした。(この「活方も花瓶」も変わらないのは、奥さんもお嬢さんも「活花」にはこれという特別の思い入れの「興味や関心」はなかったのかも知れない。もし何か特別の思い入れの「興味や関心」があれば、その「活方や花瓶」なども換えたりしたかも知れない。その目的は、八畳の室を活花で飾って、先生に少しでも和んでもらえればそれで好いということである)。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぼつんぼつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。(それでは、一体、誰が、「叱る」のか？ それは奥さんであり、その理由は、先生という人の「勉強の邪魔」などにならないようにという配慮からになるのだろう)。——私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けたのでした。

## 十二、先生の心の状態

「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になっていました。他は頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくまりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言った如くに鋭く尖ってしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつていくように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょう。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわされていく事が出来ませんでした。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻してました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐っていました。時々彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さえあつたのです。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ

両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかつたのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかつたのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事がありません。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくって、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だからという考えが、それで前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしょうか。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だつたかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆んど関係のないと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。（本文）

\*

\*

さて、「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になつていました。他は頼りにならないものだ」といふ觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまつたように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言つた如くに鋭く尖つてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょうとある。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわす事が出来ませんでした。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻してゐました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐つてゐました。時々は彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたやうなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事

さえあったのです。

これは、一体、何かと問えば、それは、信じ切っていた叔父に裏切られて、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「家の財産」の多くを騙し取られてしまったことから、先生という人は、「……他は頼りにならないものだ」という觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです」とある。つまり、それが「トラウマ」となって、まさに「人間不信」へと深く陥ってしまったということである。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるというより外に仕方がないので。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したのも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。そのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人（公務員）か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくて、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だから（裕福な人が好んで素人屋などに下宿するはずがない）という考えが、それ以前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしよう。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客（例えば平の公務員）と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆ど関係のないのと同様でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体（人間性）にまで押し広げて、同じ言葉を応用しようとするのです。

### 十三、奥さんとお嬢さんと先生との関係

「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほぎよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありません。また私の方で菓子を買つて来て、二人をこっちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていますから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし實際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行って、こっちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、なにと同じ事で、親子二人が往つたり来りして、どっち付かずと占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはかりは思えません。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解つていました。よく解るように振舞つて見せる痕迹さえ明らかでした。(本文)

\*

\*

さて、「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ち

やんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。(これは「外的事実」と「内的事実」との違いであり、他人から見れば、落ち着いているように見えても、本人の「心の中」では大変なことになっているようなことはよくあることである。)

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありません。また私の方で菓子を買つて来て、一人をこちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんほもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといつしよに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。(これはお互いに急速に親しさを増して行つたということであり、このまま先生とお嬢さんとが結婚をして、三人で「新しい生活」を始めていたら、恐らく、誰もが羨むような「幸せな夫婦(家族)」になつていたかも知れないのである。)

しかし、実際は、そうはならなかつたのである。私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありませんし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。(これは想いがより募っている「心の状態」にあるからである。)

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、なにと同じ事で、親子二人が往つたり来りして、どっち付かず占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事ありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。(これは自分の心とは違う様なことを言動し兼ねないということなの

か？）、しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかったあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解っていました。よく解るように振舞って見せる痕迹さえ明らかでした。（これはもうお嬢さんの方も先生のごが好きになつて、いるということである。）

\*

\*

十四、奥さんの想い

#### 十四、奥さんの想い

「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしかったのかも知れません。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなものだったのです。」

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えます。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようですから、始めてこんな場合に会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付けてもらいたかったのです。頭の働きから言えば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられません。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな事をするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからああなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どつちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として

二人を接近させたがっていただけだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。(本文)

\*

\*

さて、「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持になるのです。私は女らしくなかったのかも知れませんが。(それは自分から積極的に行動に出ないこと)。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなもの(純朴)だったのです。

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようですから、始めてこんな場合に会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付てもらいたかったです。頭の働きから言えば、それが明らかで矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられません。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな事をするかその意味が私には呑み込めなかつたのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからあなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。(この奥さんの態度は、実に当然のことであり、二人が親しくなるのはよいが、肉体関係を持つ様なことには警戒したのである。)

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかつたのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。(昔は、若い女性は処女で結婚するのが普通であり、だからこそ、母親が警戒するのも当然であり、また当時の書生気質として、その頃の私たちは大抵そんなもの《純朴》だったのである。)

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行ったのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内

面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。

#### 一、奥さんの想い

さて、奥さんの「想い」であるが、軍人の未亡人である奥さんという人は、当然のことながら、これからの「人生」をどうしたらよいかを考えていたかと思うが、その場合、軍人の未亡人であるので、奥さん自身が「再婚」するということは、当時としては、なかなか考えにくかっただろう。だとすれば、自分の「娘」(お嬢さん)が、一体、どのような男性と「結婚」するのが、まさに「最大の関心事」であったことは、容易に想像できることである。——例えば、その「相手の男性」が「長男」であれば、当然のことながら、自分の「娘」(お嬢さん)を「嫁」に出さなければならぬ。それでは、自分(奥さん)は、いわば「独り暮らし」(独りぼっち)になってしまふ。出来ることならば、「婿」を迎えて、まさに「三人で暮らせるような生活」というものを望んでいただろう。もちろん、「相手の男性」の「……家柄、家族構成、年齢、人柄、学歴、職種、才能、社会的地位、収入、その他」、それらを含めて「候補者選び」を行なうことになるだろうが、しかし、何よりも大事なことは、相手の男性がどういう性格の「男性」であり、また、自分の「娘」(お嬢さん)が「心の底から相手を好きになれるかどうか」であり、さらに大事なことは、若し、「三人で生活した場合、果たしてうまくやっていけるかどうか」ということである。そのような奥さんの「条件」にぴったりと合っていたのが、まさに「先生」(当時は大学生)という人であったということである。

#### 十五、奥さんの態度と先生の心模様

「……私は奥さんの態度を色々総合して見て、私がこの家で充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べる女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだろうと思いました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるところとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それ

でいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私は嬉しかつたのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したと言わないばかりの顔をし出しました。それから私は私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心がまた起つて来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういふ拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなかるうかという疑問に会つて始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやつてゐるのだらうと思つと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なではありません。絶体絶命のような行き詰まつた心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私は奥さんの態度を色々綜合して見て、私がこの家で充分信用されてゐる事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覚に富んでゐるのだらうと思ひました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなかるうかと思ひました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓ひながら、絶対にお嬢さんを信じていたのです

から（それが恋心であり、心から好きになると、誰が何と言おうと相手を手を信じたくなるのである）。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件（叔父の件）については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえずで一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。——奥さんは、「……何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわんばかりの顔をしました。それからは私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいでした」とある。

これらは、いったい何を意味するのかと問えば、それは、軍人の未亡人の奥さんにしてみれば、いわゆる「先生」（當時は大学生）を自分の「娘」（お嬢さん）の「花婿」として迎えて、まさに「三人で暮らす」には最適な「家庭状況」だったということである。——逆に、例えば、両親が健在で、先生が「長男」（一人息子）であれば、当然のことながら、自分の「娘」（お嬢さん）は、どうしても「花嫁」として嫁がせなければならぬことになる。そうなれば、軍人の未亡人の奥さんという人は、まさに「独り暮らし」（つまり独りぼっち）になってしまうのである。

ところが、そのうちに私の猜疑心（疑う心）がまた起つて来ました。私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういふ拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家（お金目当て）として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。——奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をすのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と「特殊の關係」を付けるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家（お金目当て）ではなからうかという疑問に会つて初めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思つくと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも眞実であつたのです。

十六、茶の間かお嬢さんの室へやで男の声がすると……

「……私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽ふけってでもいるかのように、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却かえって仕合として喜びました。それでも時々は気が済まなかったのでしょうか、発作的に焦燥はしやぎ廻まわって彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんでしたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼きがねをするほどの男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却かえって食客いせうろうの位地にいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出した序ついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所そこにどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮こうふんを与えるのです。私は坐すわっていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯ただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案しあんして見るのです。坐すわっていてそんな事の知れよう筈はずがありません。そうかと言って、起たって行って障子しょうじを開けて見る訳には猶なほ行きません。私の神経は震ふるえるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮ついきゆうする勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切うらみきりしている物欲ぶつよくしそうな顔付かおつきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑ちやうしやうの意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐すわに解釈の余地を見出し得ないほど落付おちつきを失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなかるうかと、何遍なんべんも心のうちで繰り返すのです。私は自由な身体からだでした。たとい学校を中途で已やめようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或あるはこの何者と結婚しようが、誰だれとも相談する必要のない位地に立たっていません。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰もらい受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎たびごとに私は躊躇ちゆうちよして、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までは方角の違った場所に立たって、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば

出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私は相変わらず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。(それは外のことに気を取られてゐるからである)。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽つてもゐるかのよう、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却つて仕合として喜びました。それでも時々気が済まなかつたのでしよう、発作的に焦燥ぎ廻つて彼らを驚かした事もあります。(これはお嬢さんのことばかりを考えていたということである。)

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありましたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮(気遣い)からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼ねをするほどな男は一人もなかつたのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事です。(つまり、お嬢さんが友達と小さな声でしゃべるのは、何も自的にそうしているのではなく、母親から先生の「勉強の邪魔」にならないようにと言われているのであり、だからこそ、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事になるのです。)

しかしこれはただ思い出した序でに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所にどうでもよくない事が一つあつたのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮を与えるのです。私は坐つていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯の知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。坐つていてそんな事の知れよう筈がありません。そうかと言つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切つてゐる物欲しそうな顔付とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑い、ました。それが嘲笑の意味でなくつて、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付を失つてしまふのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなからうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。(これがまさに恋に深く陥つてゐる時の「嫉妬心」というものであり、誰もが経験するこ

となるが、例えば、恋する女が外の男と親しげに話をしている姿などを見ると、自分でも自分がコントロール出来ないほどの凄まじいまでの嫉妬心に襲われてしまうものであり、それは女性の場合でも全く同じことになるのである。

私は自由な身体でした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或はこの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎に私は躊躇して、口へはどうとう出さずにしまつたのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです。(この「……他の手に乗るのは何よりも業腹《厭》であつた。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです、この一つの「トラウマ」が、先生の正常の判断を先生の人生を狂わせることになるのです。)

#### 十七、三人で着物を買ひに出る

「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。私は實際田舎で織つた木綿ものしかもつていなかったのです。その頃の学生は絹の入つた着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出所に暮しているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしがつて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思つたのでしよう、評判の胴着をぐるぐる丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立つて笑いながら友達の所作を眺めていました。私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでした。その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えろという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだといふ変な考えをもつていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言うのです。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしょに歩き廻る習慣をもつていなかったもの

です。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切  
って出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗ったものだか  
らなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものは  
きつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行って買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思  
ったより暇がかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするの  
です。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ豎に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てく  
れると言います。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにか  
く一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛って帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何  
かご馳走すると言って、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁  
も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さん  
の知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠  
っていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調  
戯われました。何時妻を迎えたのかと言ってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君  
は非常に美人だと言って賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男  
に何処かで見られたものと見えます。(本文)

\*

\*

さて、「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。  
私は実際田舎で織った木綿ものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹の入った  
着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出に暮し  
ているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。す  
ると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしくて色々弁解しましたが、折角の  
胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄ってたかって、わざ  
と着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思っ  
たのでしよう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝  
の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立って笑いな  
がら友達の所作を眺めていましたが、私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませ  
んでしたとある。

まず、明治時代、大学生《書生》の姿は、例えば、三四郎の袴姿などが一般的だつた  
かと思うが、そこに「羽二重の胴着」となれば、それは、いわば「高級なもの」になり、  
それゆえ、みんながそれを見て笑い出し、また、大勢が寄ってたかって、面白がって、わ  
ざと着せたりしたとある。一方、女性の場合、袴姿は、明治四年頃から女学塾長や教授  
などが用い、十一年には女学校の「女学生」たちが「紫の袴」をつけ、三十三年頃から  
は「行灯袴」という中仕切りのないスカートのような袴（女袴）が誕生して、それが  
やがて制服となり、華族女学校などでは「海老茶色」を用いたとある。そして、女学校に  
通っていたこの作品のお嬢さんなども、まさに髪にリボンを付けた「典型的な袴姿」（女  
学生スタイル）をしていたのである。ちなみに、近世（主に江戸時代の）の武士たちは、

「馬乗り袴」(中が二股に分かれている袴)をつけて、それは馬に乗りやすいようになつていたそうであるが、今日の「男袴」では、「馬乗り袴」と「行灯袴」の両方があり、例えば、茶道、弓道、剣道、書道、生け花、冠婚葬祭、芸能、その他、それぞれの用途に応じて、使い分けているということである。

その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えるという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいつしよに來いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言います。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻る習慣をもつていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切つて出掛けました。(奥さんは、いったい何を考へているのだろうか？ それは先生とお嬢さんとの關係を「より強く結びつけ」ようとしているのである。)

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行つて買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思つたより暇がかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をします。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ堅に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てくれると言います。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。(例えば、お嬢さんが自分の気に入つたものをただ買うのではなく、先生見立ての、先生が好む、これがお嬢さんに一番似合うというものを選んで買うことにより、お嬢さんは、先生お気に入り反物を手に入れ、それをやがて着物として着ることになり、お嬢さんにとっては一生の宝物《想い出》になるのである。)

こんな事で時間が掛つて帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何かご馳走すると言つて、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。(これは、通りががりの店ではなく、奥さんの行きつけの店であり、しかも、奥さんのお気に入り、の店でもあるのだらう。)

我々は夜に入つて家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠つていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つばらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎えたのかと言つてわざとらしく聞かれます。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

まず、今と違つた、空気のの中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻る習慣をもっていなかつたものです。そういう中で、お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちました。往來の人がじろじろ見て行くのです。(これは余程の美人であり)、そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでしたとある。それは、この「美人」の相手がこの「男性」なのかという感じで見ているのである。そして、月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つばらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎えたのかと言つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

さて、此所までは、まさに「理想的な展開」であり、それゆえ、このまま二人が結婚していたら、恐らく、この上もない「幸せな夫婦」になれたかも知れない。しかし、それは、「小説」にはならないのです。「小説」になるためには、何らかの「問題」が生じなければならぬ、それがこれからの内容になつていくのである。

#### 十八、奥さんとお嬢さんの気持ち

「……私は宅へ帰つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと言つて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考へてゐる通りを直截に打ち明けてしまえば好かつたかも知れません。しかし私にはもう狐疑という薩張しない塊がこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留まりました。そうして話の角度を故意に少し外らしました。

私は肝心の自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いてゐるらしく見えました。極めようと思へばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外に子供がないのも、容易に手離したがる原因になつていました。嫁にやるか、贅を取るか、それにさえ迷つてゐるのではなからうかと思はれるところもありました。

話してゐるうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸したと同様の結果に陥つてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事が出来ませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へ帰ろうとしました。

さつきまで傍にいて、あんまりだわとか何とか言つて笑つたお嬢さんは、何時の間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前

にして坐すわっていました。その戸棚しやくの一尺ばかり開あいている隙間すきまから、お嬢さんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間すきまの端はじに、一昨日おととい買った反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんのものと同じ戸棚とだなの隅すみに重ねてあったのです。

私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解わからないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然はつきりした時、私はなるべく緩ゆつくならな方が言いだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うと言いました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となった結果は、私の運命に非常な変化を来きたしています。もしその男が私の生活の行路こうろを横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅うちへ引張ひくつて来たのです。無論奥さんの許諾きょだくも必要です。私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止よせと言いました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止よせという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善いと思うところを強しいて断行してしまいました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は宅うちへ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと言つて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風ふうにして、女から気を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考かんえている通りを直截ちやくせつに打ち明けてしまえば好かつたかも知れません。(むろんその通りであるが)、しかし私にはもう狐疑こぎ(疑ぎつてためらう)という薩張さつぱりしない塊かたまりがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留とまりました。そうして話の角度を故意に少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色ようしきに大分重おきを置いていらっしゃるらしく見えました。極きめようと思えばいつでも極められるんだからというような事さえ口外くちがいしました。それからお嬢さんより外ほかに子供がないのも、容易に手離てりしたがない源因げんいんになつていました。嫁よめにやるか、簪むすを取るか、それにさえ迷まよっているのではなからうかと思われるところもありました。(これは先生が気付かないだけで、奥さんは「三人で暮くらす」ことをすでに考かんえていたのである。)

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いしたと同様の結果に陥おつてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事が出来ませんでした。私は好いい加減なところで話を切り上げて、自分の室むろへ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とか言つて笑つたお嬢さんは、何時いつの間にか

向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐つていました。その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。(お嬢さんは、先生と結婚することを「心の中」ではすでに強く望んでいたのです。それを知っている奥さんは、次のような問いかけを敢えて先生にするのです。)

それは、私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、「私にどう思うか」と聞くのです。(これはむしろお嬢さんのことをどう思うかと聞いているのであるが)、その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然した時、私はなるべく緩くいな方が言いだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うと言いました。(しかし、この場面は、(先生と)娘の結婚は早い方がよいか遅い方がよいかと訊いているのであり、しかも、奥さんがぜひとも聞きたかつたのは、先生の「本心」であり、娘のことをどう思っているのか、もし好きならば、結婚してもよいと思つているのかどうか、そこがぜひとも知りたかつたのであるが、それを直接(露骨に)聞くことはさすがに避けたということである。)

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなつていゝる所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来しています。もしその男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅へ引張つて来たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止せと言いました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。(ここで最も大事な言葉は、「止せ」という奥さんの言葉であり、もし「その通りに止して」いたら、何の問題も起こらずに済んだのである。しかし、それではむしろ「小説」にはならない。それゆえ、「小説」になるためには、どうしても何らかの「問題」が生じる必要があり、それがこれからの作品(内容)の新たな展開部分になるのである。

\*

\*

十九、Kという親友の登場

## 十九、Kという親友の登場

「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者の方へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が良かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るものではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の方へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言つていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格をもつていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこととする意気組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がない

にしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷(新潟)の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありませんが、次男でした。それである医者(大変本願寺派)の勢力の強い所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は割が好かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になったとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分かりません。とにかくKは医者(うち)の家へ養子に行ったのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。(この時は高校時代で)、その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言っていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこうとする意気組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の

事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。

\*

\*

さて、先生とKという人は、高校時代は、同じ下宿屋の六畳に一緒に暮らしていたらしく、その後、その下宿を離れて、先生（当時は大学生）という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとお嬢さんとも親しくなれたとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたわけである。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として、医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかつたので、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになるのである。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配していたことだろうと思うが、（それが「止せ」という言葉であるが）、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」（内容）になっていくのである。

## 二十、Kの三年間（高校）の夏休みの過ごし方

「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかつたのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当たり前だろうとも言いました。

その上彼は機会があったら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰っても専門の事は何にも言わなかったものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰って何をするのだというのです。彼はまた踏み留まって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入ってまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(本文)

\*

\*

さて、「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたつて構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平気でした」とある。(先ず、高校であるので、恐らく、普通科になるかと思う。ここで最も大事なことは、普通科であれば、養父母に知られる心配はない。ただ、Kという人は、この高校の時から、養父母が希望する「大学の医学部」へは行かないと決めていて、自分の好きな道(学業)へと歩き出したのである。)

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つつと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしよう。

詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。(本来、数珠はお経を読んだ回数数を数える道具であるが、Kという人が一体何を数えていたかは誰にも解りようがない。むしろ手に数珠を持つてることが何か安心や手慰めになつていたのかも知れない。)

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかったのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当り前だろうとも言いました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大なる興味をもっているようでした。(これは、Kという人は、宗教や哲学などへの向上心がより強かつたことになるのだろう。)

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にも言わなかつたものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかつたのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです。校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかつたと言つたのです。(これは、今日でも、世間は一般に学生の生活や学校の規則の詳細などについては、驚くほど無知であることが多いのだろう。)

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をやるのだというのです。彼はまた踏み留まつて勉強するつもりらしかつたのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入つてまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に、変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養父先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのださうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入つて、までも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(これは、大学の入学の時に、医学部かそうでないかはすぐ分かつてしまふものであり、だからこそ、その前に、養父母へ手紙を出しているのである。そして、最悪の場合、養子縁組が破綻した場合でも、「自力」で(何か仕事をして)学費を稼いで、でも、大学へは行く覚悟でいたということである。)

## 二十一、Kの養子縁組の破綻

「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kは

またそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど拵底でもなかったのです。私はKがそれで充分やっけて行くだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱いでいる訳に行きません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達達の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいどうか出来なければ男でないような事を言いました。私は私の責任を完うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとつて、この仕事がどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいました。したが、解決のますます困難になつて行く事だけは承知していました。人が仲に入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だと言って、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないと言いましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。

最後にKはどうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉で言えば、まあ勘当なのでしょう。或はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父は言うまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士に似たところがありませんかと思われれます。(本文)

\*

\*

さて、「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こっちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしななければならぬのは、月々に必要な学資でし「とある。(差し当り必要なものは、月々に必要な学資と生活費になるのである。)

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底(全く無い)でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱(こまぬ)いでいる訳に行きません。私はその場で物質的の補助(お金の援助)をすぐ申し出しました。するとKは二も三もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達(とも)の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいか出来なければ男でないような事を言っていました。私は私の責任を完(ま)了(り)するために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。(つまり、Kという人は、高校さえ卒業出来れば、あとの大学は自力で何とかなると考えていたのである。だからこそ、彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいか出来なければ男でないような事を言っているのである。)

そして、Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとつて、この仕事(しごと)がどのくらい辛(くる)かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩(ゆる)めずに、新しい荷(に)を負(お)って猛進(もうしん)したのである。私は彼の健康を気遣(きづか)いました。しかし剛氣(ごうき)な彼は笑(わら)うだけで、少しも私の注意(ちゅうい)に取り合(あ)いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々(だんだん)こん絡(から)がつて来(こ)ました。時間に余裕(よゆう)のなくなった彼は、前(まえ)のように私(わたし)と話す機会(きかい)を奪(さら)われたので、私(わたし)はついにその顛末(てんまつ)を詳しく聞(き)かず(ず)にしまいました。したが、解決(かいげつ)のますます困難(くわんなん)になつて行く事(こと)だけは承知(ていし)して行(い)きました。人が仲(な)に入(い)って調停(ていへい)を試(こ)した事(こと)も知(し)っていました。その人は手紙(てがみ)でK(カ)に帰国(きこく)を促(うなが)したのですが、K(カ)は到底(たいてい)駄目(だめ)だと言(い)って、応(こた)へません(し)ました。この剛情(ごうじやう)なところが、——K(カ)は学年(がくねん)中(ちゆう)で帰(か)れない(の)だから仕方(しかた)がないと言(い)いました(け)れども、向(む)うから見(み)れば剛情(ごうじやう)でし(よ)う。そこ(そこ)が事(こと)態(たい)をますます陰悪(いんあく)にした(よ)うにも見(み)えま(し)た。彼(かれ)は養家(やうか)の感情(かんじやう)を害(がい)すると共に、実家(じつか)の怒(いか)りも買(か)う(よ)うになりました。私(わたし)が心配(しんぱい)して双方(ふたう)を融和(じゆうわ)する(た)めに手紙(てがみ)を書(か)いた時(とき)は、もう何(なに)の効果(きくた)もありません(し)ました。私(わたし)の手紙(てがみ)は一言(ひとこと)の返事(へんじ)さえ受(う)けず(ず)に葬(ほうむ)られてしま(っ)ったのです。私(わたし)も腹(はら)が立ちま(し)た。今(いま)までも行掛(ゆきが)り上(か)り、K(カ)に同情(どうじやう)して(い)た私(わたし)は、それ(それ)以後(い)は理(り)否(ひ)を度(ど)外(がい)に置(お)いてもK(カ)の味方(みかた)をす(る)気(き)にな(り)ま(し)た。(これは、先生(せんせい)の勝手(がた)な思(おも)い入(い)れであり、この勝手(がた)な思(おも)い入(い)れが、K(カ)という人(ひと)を何(なに)が何(なに)でも自(み)分の下宿先(げしゆくせん)へ(と)引(ひ)き入(い)れてしま(い)、その結果(けつこ)、いわば三角(さんかく)関係(かんけい)が生(な)じて、深(こ)く悩(なや)み苦し(む)ことにもなるのである。)

最後にK(カ)はとうとう復籍(ふくせき)に決(き)まりました。養家(やうか)から出(で)して(も)らった学資(がくし)は、実家(じつか)で弁償(べんじやう)する事(こと)にな(っ)たのです。その代(た)り実家(じつか)の方(かた)でも構(かま)わ(な)ないから、これ(これ)からは勝手(がた)にし(ろ)とい(う)

のです。昔の言葉で言えば、まあ勘当かんとうなのでしょう。或はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りへだたが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父は言うまでもなく僧侶そうりよでした。けれども義理堅い点において、むしろ武士さむらいに似たところがありはしないかと疑われます。

さて、ここで最も大事な言葉は、「……Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りへだたが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです」とあり、Kという人の実の母親は、すでに死んでいて、二番目の母親（継母けいぼ）との仲は、（恐らく）あまりよくなかったからこそ、養子やしんに出されたとも言えるのである。というのも、Kという人の実家（お寺）では、生活には全く困っていなかったからである。むしろ「継母けいぼ」との確執（不仲ふなか）から、Kという人は、養子やしんに出されたとも言えるのである、実の父親は、実の息子（K）より「継母けいぼ」の方を選んだということで、Kという人は、自分は実の父親に捨てられたという意識を持っていたかも知れないのである。だからこそ、自力じりきで生きるという意識が非常に強くなったのかも知れない。この問題は、あとで改めて考えてみたいと思う。

## 二十二、先生の下宿先に同居するまでの経緯

「……Kの事件が一段落ついた後あとで、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復讐ふくしやうさせた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰もらいたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついでいだ兄あによりも、他家へ縁ゆかりづいたこの姉を好すっていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟きょうだいですけれども、この姉とKとの間には大分年齒としの差があつたのです。それでKの小供こどもの時分には、継母けいぼよりもこの姉の方が、却かえつて本當の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何とも言いませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはその度に心配しんぱするに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現あらわしました。これは固もとより私の一存いちぞんでした。Kの行先ゆくさきを心配するこの姉に安心を与えようという好意は無む論含もまれていましたが、私を軽蔑けいべつしたとより外ほかに取りようのない彼の実家や養家ようかに対する意地もあつたのです。

Kの復讐ふくしやうしたのは一年生の時でした。それから二年生の中頃なかごろになるまで、約一年半の間、彼は独力おので己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神

の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅の問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立つているような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして自分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際言い出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言うのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだったとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。(本文)

\*

\*

さて、「……Kの事件が一段落ついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。(つまり、Kという人が養子に出された医師の家というのは、実は、Kという人の姉が嫁いだ相手(その夫)の親戚先でもあつたということである。)

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう。(この「……継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう」という、この言葉こそは、まさに「継母」との「確執」(不仲)を裏付ける言葉にもなるのである。)

私はKに手紙を見せました。Kは何とも言いませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはその度に心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつた

のです。(つまり、Kの姉は、Kへの金銭的援助をしたくても出来ない生活状況にあった。それでは、なぜここに敢えてKの姉が出て来るのかと問えば、それは、素朴な疑問として、先生が好んでKの面倒などを見なくても、外に誰か兄弟か親戚の人の中でKの金銭的面倒を見られる人もいたのではないかという、その様な疑問を払拭するためのものである。) 私はKと同じような返事を彼の義兄宛で出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固より私の一存でした。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽蔑したとより外に取りようのない彼の実家や養家に対する意地もあつたのです。(この章で書かれている一連のことが、結局、先生がどうしてもKの面倒を見るしかなかったという大きな理由付けになつているのである。)

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出来ない蒼蠅の問題も手伝つていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立っているような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして当分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞かまいと、かねて予期していたのですが、実際言い出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言ふのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだつたとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかつたのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと發議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

さて、ここで気になる文章は、「……Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えていた」とある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。――まず、高校三年間は、二人は、同じ下宿屋の六畳で一緒に生活をしていた。ところが、大学に入ると、先生という人は、未亡人の奥さんとお嬢さんそれに一人の下女のいる下宿屋へと移ることに

なり、やがてお嬢さんのことが好きになっていく。この期間、（先生一人の下宿は）、大学一年から大学二年半までの間であり、一方、Kは、先生と離れ、独力で己れを<sup>おの</sup>支えていたとある。ところが、例の「養子縁組み破綻」と「実家との不和（勘当）」同然の状態となり、その結果として、先生とKという人は、大学二年の中頃（恐らく一、二月頃）から一緒に住み始めるようになり、その年の「夏休み」（二年生の終わり）は、二人で房州の方へ旅をし、帰って来ると、いよいよ九月から「新学期」（大学三年生）が始まり、二人とも学業に励むことになる。翌年の正月には、歌留多遊びなどをしたりするが、すでにKという人もお嬢さんのことが好きになつていて、先生とお嬢さんそれにKとの「三角関係」もより深まって行くという展開であるが、ただ、お嬢さんは、Kが自分に好意を寄せているという事は、全く全然知らないという展開になるのである。

\*

\*

二十三、Kが四疊の室むろに移り住む

二十三、Kが四畳の室に移り住む

「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もともと最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言つて、自分でそつちのほうを択んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言つたのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言つと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実を言つと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろふと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くとますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであつたか、面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変わらずむつちりした様子をしてゐるにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言つただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までの所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷から喬木に移つた趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から來てゐるのですが、一つは彼の主張からも出てゐるのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のよゝうに考へてゐました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば靈の光輝が増すよゝうに感ずる場合さえあつたのかも知れませんが。

私はなるべく彼に逆らわない方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったので、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言って、自分でそつちのほうを扱んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったので、下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言うのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言うと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので、私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。(この苦笑は、奥さんにしてみれば、なぜ「……私の気持ち分からないのか?」という苦笑なのである。)

つまり、奥さんの「想い」は、ただ一つ、先生という人が大学を無事に卒業して何らかの職業に就いた頃合いを見て、先生とお嬢さんとがめでたく結婚をして、この家で三人で暮らすことを夢見てゐるのである。そこに何でわけの分からない他人などを入れて問題を起す必要があるのか? 奥さんが強く反対するのはあたり前のことであり、そこ(つまりなぜそこまで反対するのか?)に気付かない先生の方が余程おかしいのである。

実を言うと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くこととますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたいか面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。(例えば、「善かれ」と思つて行なつたことが、逆に、「悲惨な結果」になるのを、一般に「悲劇」と呼ぶのである。先生の場合も、「善かれ」と思つて行なつたことが、結果として、自分(或いはK)への「悲劇」となつてしまうのである。)

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変

らずむつちりした様子をしているにもかかわらず（です）。

私がKに向って新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言っただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移った彼は、幽谷から喬木に移った趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のように考えていました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややとすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。

私はなるべく彼に逆らわない方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。（これは、奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れれば、自然と「心の中」の氷も溶けて、やがて「人間らしい心」を取り戻すだろうと考えたということであり、これは、これでもっともなことであるが、ただ、その結果、この時、先生には全く想像すら出来なかつたことが、やがてKという人の「心の中」に生じて来てしまうのである。それを誰よりも「恐れていた」のが、まさに「奥さん」だったのである。）

#### 二十四、Kの性格と特徴

「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際して来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずつと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理を弁えていると信じていました。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体的なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしょうが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておくと医者は言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思ひます。次第に刺戟を増すに従つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじ

り弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思つていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひ其所を明らかにしてやりたかつたのです。しかし言えばきつと反抗されるに極つていました。また昔の人の例などを、引合に持つて来るに違ひないと思ひました。そうなれば私だつて、その人達とKと違つている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知つた私はついに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹つていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違ひないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、自分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。(それは奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れば、やがてKも「人間らしい心」を取り戻すだろうということである)。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際つて来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入つてから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらひはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずっと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理(物事の道理)を弁えていると信じていました。(つまりKは頭が良いが世間のことはまだよく知らないのです)。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしようが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に陰悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食つ

ていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておけと医者は言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思えます。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思つていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切つていたらしいのです。(つまり、肉体であれ精神であれ、その他、何であれ、それを鍛えるのに、無茶な「鍛え方」をすれば、かえつて心身を壊すことにもなり兼ねない。だからこそ、理に叶つた「鍛え方」をしなければならぬのです。)

私はKを説く時に、ぜひ其所を明らかにしてやりたかつたのです。しかし言えばきつと反抗されるに極つていました。また昔の人の例などを、引合に持つて来るに違ひないと思ひました。そうなれば私だつて、その人達とKと違つている点を明白に述べなければならなくなりません。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつゝ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知つた私はいかに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹つていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたとところで、彼は必ず激するに違ひないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。

例えば、先生という人は、親戚との關係をすべて絶つてゐる。一方、Kという人も養家や実家との關係をすべて絶つてゐる。そういう意味では、二人ともこれという頼る所の全く無い、まさに「孤独の身」であつたのである。だからこそ、「……一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした」となるのである。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

## 二十五、Kの心が段々打ち解けて来る

「……私は蔭へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだからと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取りつき把の無い人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞く

と、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕つておかなければ済まなくなります。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないと言われるのも無理はないと思ひました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に應じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に耐へていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空氣に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新しくしようと思ひました。

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言いました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われまふ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言ひました。彼は尤もだと答へました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜び（心からの喜び）を感じずにはいられたかったです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。（本文）

\* \* \*

さて、「……私は陰へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだろうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか私には思われなかつたのです。

奥さんは「取りつき把のない」（取り付く島もない）人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと

尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕うておかなければ済まなくなりませう。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは「取りつき把がない」（取り付く島もない）と言われるのも無理はないと思ひました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合つた所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に應じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に働いていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遥かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新らしくしようと思ひました。（もちろん、先生のこの「努力」は、決して間違ひではなかつたが、ただ、その結果として、まさかKという人の「心の中」にお嬢さんへの想ひが生じて来るとは、恐らく、先生も全く夢にも想像すらできなかつたに違ひない。）

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しづつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言ひました。Kははじめ女からも、私同様の「知識と学問」を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ「軽蔑の念」を生じたものと思われませう。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言ひました。彼は尤もだと答へました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになつたのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで「書物」で城壁を築いてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見てゐるのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的（Kが「人間らしい心」を取り戻す）ことをやり出したのですから、自分の成功に伴う喜悅（心からの喜び）を感じずにはゐられなかつたのです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も「満足の様子」でした。（此所までは、先生の「思惑」《思い通り》に物事が進み、まさに「喜悅」《心からの喜び》を感じてゐる状態であるが、勿論、やがて先生の「思惑」《思い通り》に物事が進まない事態が起き

て来るのである。)

## 二十六、Kとお嬢さんだけの状況

「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたが、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしています。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰ったのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずっと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのです。どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介になつていて私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已みました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごころでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐っていました。Kは例の通り今帰つたかと言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残つているのは、Kとお嬢さんだけだったので。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかったのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つています。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になつていたのです。Kが新しく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造つた足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどこの宅でも使っているようですが、

その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆んどなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かれました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。(本文)

\*

\*

さて、「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけです、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしています。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰つたのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。(この家の「見取り図」は、次にはつきりと明記されている。)

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずつと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのですから、どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介になつている私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已まりました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごこんでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐つていました。Kは例の通り「今帰つたか」と言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいとその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのでした。私はお嬢さんに、奥さんとはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。(ふと一抹の疑問と不安が生じたのである。)

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのでした。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんとお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかつたのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つています。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。(例えば、夏目漱石という人は、有名な「神経衰弱」持ちでしたので、或いは「女性の笑い声」が気に障ることもあつたのかも知れない)。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、

食事のたびに下女が膳（一人用の四角いお膳）を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になっていたので。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造った足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどの宅でも使っているようですが、（例えば、太宰治も幼少の頃、食事の時は、全員が「一人用の四角いお膳」で食べていたという記述がある）。これは、その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆どなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。（ちなみに、チャボ台は、一般に方形か円形をしていて、折り畳み式も多く、一八八七年《明治二〇年》頃から使用されるようになり、一九二〇年代後半《つまり大正末から昭和初期》に全国的な普及を見たのである。）

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。

このお嬢さんの「笑い」は、先生は「二人の関係」を何か「気にしている」（或いは「疑っている」と思つて、それを笑つているのであるが、むろん、お嬢さんにはそんな気は全くないのであり、だからこそ、笑えるのである。）

## 二十七、二度目のKとお嬢さんだけの状況

「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしょに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言うと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛けてみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼っている頃でしたから、普通の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んで

くれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つているお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言つたのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だと言つたのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうと言つたのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て居るのが、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違いなものです。果しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういっしよに房州へ行く事になりました。(本文)

\*

\*

さて、「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいつしよに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時なぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けてるのが付いただけでした。(お嬢さんは、先生が「二人の関係」を何か「気にしている」《或いは「疑つている」》ような様子を見て、むしろ面白がる《可笑しがる》一面もあつたのかも知れない。)

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言つと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛てみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払つていように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼つていゝ頃でしたから、普通

の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうかだとかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ませました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたので。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでない、という昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つてのお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたので。この「……私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたので」とあるが、

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったので。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言つたのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だと言つたのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうと言つたのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。(これは当然、Kとお嬢さんとが親しくなるのを、何よりも怖れているのである)。果しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしょに房州へ行く事になりました。

\*

\*

二十八、房州ぼうしゅうへの夏休みの旅

「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳こぶしのような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐すわって、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐すわって、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙もくっている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽ふけっているのか、景色に見惚みとれているのか、もしくは好きな想像を描えがいているのか、全く解わからなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答こたえるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐すわっているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐すわっているのではないかしらと忽然疑ごっせんい出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭いやになります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴どなります。纏まとまった詩だの歌だのを面白そうに吟ぎんずるような手緩てぬるい事は出来ないのです。ただ野蛮人の如ごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えりくび頭うしろを後うしろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言いってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向うしろむきのまま、ちようど好いいい、やってくれと答こたえました。私はすぐ首筋を抑おさえた手を放はなしました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏かびんになって来ていたのです。私は自分より落ち付おちついているKを見て、羨うらやましがりました。また憎にくらしがりました。彼はどうしても私に取り合あう気色を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映うつりました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかつたのです。私の疑うたがいはもう一歩前へ出て、その性質を明らかにめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明こうみやうを再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私は却かえって世話のし甲斐ががあつたのを嬉うれしく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振すがりに全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍にぶい人なのです。私には最初か

らKなら大丈夫という安心があったので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。(本文)

\*

\*

さて、「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳のような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。(一般に、海水浴に適した場所は、波が静かで遠浅の砂浜がきれいな所かと思う。)

私はすぐ厭になりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐って、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。(夏目漱石という人は、実際、房州(千葉県南部)の方へ旅行に行った経験があり、その時に見たり聞いたり経験したりしたことなどを思い出しながら、この場面を書いているのかも知れない。)

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽っているのか、景色に見惚れているのか、もしくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしてないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじつとして坐っているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事は出来ないのです。ただ野蛮人の如くにわめくのです。

例えば、ムンクに有名な「叫び」という絵画があるが、それは、思い出したくもないこと(例えばおぞましい過去の経験や記憶)などが突然思い出されて来た時、また、考えたくもないことを突然考え始めた時、(例えば、自分はこの病気で若しかしたら死ぬかも知れないという、そのようなぞつとするような思いに襲われた時)、人間は、突然、「わあー」と野蛮人の如くにわめいて、それを意識から消し去ろうとするのである。

ある時、私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言ってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向のまま、ちようど好い、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。(この「……ちようど好い、やってくれ」という言葉は、Kという人の「心の最も奥深い処」には、もしかしたら「自殺願望」のようなものが眠っていたのかも知れない。むろん、これだけでは何とも断定は出来ない。……)

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方

は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかったのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明らかにめがかりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私の利害に何の衝突の起る訳はないのです。(それなら親友のままであらう)。私は却つて世話のし甲斐があつたのを嬉しく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとするれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。(それでは、なぜ「：私は決して彼を許す事が出来なくなるのか？」、それは今までの「親友」からお嬢さんめぐるつての「恋敵」《敵同士》となつてしまふからである。そして、先生としては、(心から愛する)お嬢さんをKに奪われることだけは、何が何でも断固として阻止しなければならぬからである)。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。

さて、先生は、奥さんやお嬢さんになるべくKと話をするように頼みました。そして、その奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れて、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」を取り戻してやろうと試みたわけである。その結果、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」が少しずつ戻ってきて、それ自体は、むしろ世話のし甲斐があつたと嬉しく思う位なものであるが、ただ、先生が夢にも想像すらできなかつたことは、まさかKという人の「心の中」に何と「お嬢さんへの恋心」が生じてしまつたかも知れないという疑念であり、その「疑念や嫉妬心」などで先生は深く悩み苦しむことになるのである。

二十九、Kと自分とを比較対照して見ると

「……私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まつた訳でもなかつたのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃の私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口に上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまふだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切つていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢

さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍齒がゆい不快に悩まされたか知れませんが。私はKの頭のどこか一カ所を突き破って、そこから柔らかない空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなた方から見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかったのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却って安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らるうと思われませんでした。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと感じていました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰ってもいいと言ったのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れません。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里に騙されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入つて行こうと言つて、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まつた訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。(明治という時代の空気がその人の性格や事情などにもよるのでしよう。)

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口の上にはありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切つていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然

調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍歯がゆい不快に悩まされたか知れませんが。(若しもこの先生という人にどこか問題があるとすれば、それは、この「躊躇」かも知れない。どうしても必要な時には、思い切つて、一步を踏み出す勇氣が必要になるかと思うが、この時の先生にはそれが不十分だったのかも知れない)。私はKの頭(堅い頭)のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかない空気(柔らかない考え方など)を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたの方から見て、笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったので。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかつたのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却つて安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らうと思われしました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門(Kの専攻は宗教学か哲学か?)こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。(つまり、自分とKとを比較対照してみたら、Kの方が異性には好かれそうなので、もしかしたらお嬢さんも「Kの方を選ぶ」のではないかと心配しているのである。)

さて、この一連の「先生とKとの様々な比較対照」は、まさにKという「人物像」を知る上では極めて、「貴重な記述」ではあるが、ただ、これは先生から見た「Kという人物像」に過ぎず、実際の「Kという人物」が一体どういう人物であつたかはまた別の問題になるのである。——例えば、太宰治という人は、自分の「人間恐怖」(人間が怖いという)ことを隠す為に、有名な「道化」を演じたとあり、また、自分の「心の弱さ」を隠すために、有名な「無頼派」を装つたともある。つまり、人間を外から見た「事実」(外的事実)と、その人自身の心の中の「事実」(内的事実)とは、もちろん、一致する場合もあるだろうし、また、全然違うという場合もあり得るといふことである。つまり、他人の「心の中」というのは、誰にとつても分かりようのないまさに「ブラックボックス」なのである。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰つてもいいと言つたのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京(お嬢さんがいる処)へ帰したくなかつたのかも知れませんが。(それはKとお嬢さんがより接近することを怖れているからである)。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里(すぐ其所が実は一里ある)に騙されながら、

うんうん歩きました。私にはそうして歩いていく意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入つて行こうと言つて、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(これは、結局、これというはつきりとした「目的や目的地」などを決めずに、二人でふらつと旅に出ってしまった結果、ということである。)

### 三十、日蓮の誕生寺と鯉

「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂つて来るものです。尤も病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯る風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事が出来たのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商のよなものでした。いくら話をしていいつもと違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。

我々はこの調子でどうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経つていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいふ言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言い出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会うのは止そうと言いました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言つたのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違いないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であつたと坊さんが言つた時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えて居ます。Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知れたかつたのでしよう。坊さんがその点

でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々出ししました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌の晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思つていなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂つて来るものです。尤も病氣とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になつたのです」。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事が出来たのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商のようなものでした。いくら話をしていとも違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。——それは、普段の日常的な生活の中の「思考(思索)活動」と、旅や旅行先で実際に様々な事物を「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ経験」しながらの「思考(思索)活動」では、その話す「内容」も気持ちも自然と違つたものになるのである。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経つていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいふ言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とも名を付けたものでしよう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言ひ出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会うのは止そうと言ひました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言ひます。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違ひないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、

坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であったと坊さんが言った時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々出ししました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になってしまいいには全く黙ってしまつたのです。(これは、Kにしてみれば、自分がまじめに話をしているのに、先生はそれを真面に聞こうともしない、そのことに腹を立てているのかも知れない。)

たしかその翌る晩の事だと思えますが、二人は宿へ着いて飯を食って、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思っていないので、精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。

さて、これは先生とKとの関係は、今までのような「親友関係」から、むしろお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)になりかかっているのであり、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳には行かず、私は私で弁解を始めたのである。

### 三十一、人間らしさについての議論

「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠していると言うのです。成る程後から考えれば、Kの言う通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。」

私がこう言った時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、却つて気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言つて悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌る日からまた普通の行商の態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振

りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば良かったと思ひ出したのです。実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれが出来なかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が祟つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていたうちに大変瘠せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なると、久しぶりに聞いたせいでしょう。(本文)

\*

\*

さて、「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました」。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が「自分の弱点のすべてを隠している」と言うのです。(それは、なぜかと問えば、それは、目の前の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうのが、まさに「人間らしい」ということになるからである)。成る程後から考えれば、Kの言う通りでした。しかし「人間らしくない」意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが「彼のどこをつかまえて人間らしくない」というのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。「……君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ」とある。これは、実に見事な言葉であり、まさに「的のど真ん中」を射貫いているのである。

つまり、Kという人は、目の前の様々な「欲望や感情」などには振りまわされないようなことを言つたり振る舞つたりしているが、しかし、人間としての様々な「弱さ」は当然持ち合わせているのであり、その「弱さ」を修養で克服して、まさに「精神的に強い人間」になろうとしているのである。というのも、彼自身、「……Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言つたのです。それには(精神を鍛えるには)なるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するので

す」とあり、彼が目指したものは、恐らく、（誰にも依存しない）「独立独歩の道」（或いは「精神の自立」）のようなことではないかと思う。）

私がこう言った時、彼はただ「自分の修養が足りない」から、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、却って気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言って悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。（英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない）。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。（つまりKもそのような道を歩んでいるということである。）

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌の日からまた普通の行商の態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かったと思ひ出したのです。これは実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。（それは「自分はお嬢さんのことが好きだとKに打ち明けること」であるが）、私にそれが出来なかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が祟つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。（ここは先生ならではの「微妙な心理」であり、氣取つているのでも、虚栄心からでもなく、ただ思い切つて自分はお嬢さんが好きだと真つ正面からKにぶつかつていくだけの勇氣が欠けていた）。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。（つまり旅先の「思考」《思索》活動から普段の「思考」《思索》活動へと戻つたということである）。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていこううちに大変瘠せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時の（お嬢さんの笑い）だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

\*

\*

三十二、旅行後のお嬢さんの態度

### 三十二、旅行後のお嬢さんの態度

「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったので、その世話をしてくれる奥さんとはとにかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかつたらうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛ててくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する愷歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰ったのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寢坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといいと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関が上がって仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰つたのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入ってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと云って私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だつたのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかつたのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の關係上、当然と見なければならぬのです。ところが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を

出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張って来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。(本文)

\*

\*

さて、「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんはとにかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかったのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛てくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する慳歌を奏しました」とある。

これはもちろん、二人が旅に出ている間、奥さんが「お嬢さん」にそうするように注意を促したのであり、その理由は、お嬢さんがKという人に必要以上に優しく過ぎてKに変な誤解を与えないためと、もう一つは、奥さんもお嬢さんも結婚する相手は「先生」と決めているからである。これは最初から一貫して少しも変わることはないのに、先生だけがあてもないこうでもない余りに余計なことを考え過ぎてしまつて、自ら問題を複雑にして勝手に深く悩み苦しむことになるのである。」

やがて夏も過ぎて九月の中頃から(大学三年の新学期で)我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰つてもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰つたのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。(ここまでは奥さんの言いつけを守っていたのである。)

たしか十月の中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻つて来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといまいと思つていたKの声がひよいいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関に上がつて仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰つたのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入つてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと云つて私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立つて縁側伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいつしよに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出してもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張つて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。

\*

\*

さて、「……ぜひお嬢さんを専有したい」という強烈な一念に動かされている私」とあるが、これは、第一部の「恋（恋愛）」のところ、先生の「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている場面があつたが、今、まさに親友（K）とお嬢さんが親しく話をしてる場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの凄まじいまでの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」（恋愛）であり、今、まさに「Kとお嬢さんとの関係」が一体どうなっているのか？ 気になって気になつてどうにもしようがない「精神的状態」であり、それは、次のような「出来事」で、さらに「ピーク」へと達するのである。

### 三十三、糠る道でKとお嬢さんに遭う

「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上つて宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったのでから、私はどうした訳かと思ひました。奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅

も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずでした。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこままで言ったがりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。(本文)

\*

\*

さて、「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上って宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。(先生は、ふと差別を受けたような感じがしたのかも知れないが、しかし、事情を聞けば、Kは帰ってまた出たということ、Kの室の火鉢に火が燃えていても不思議はないのである。)

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったので、私はどうした訳かと思いました。

(疑念が生じたが)、奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心

のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺（三十〜六十センチ）しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこまてと言ったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。（ここまでは偶然Kに出合ったということは何の問題もない。問題なのは、次である）。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。（この時、先生の「頭の中」にあつたものは、なぜ二人は一緒にいるのだろ、うかという疑念である。）

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。

### 三十四、先生のKに対する嫉妬心

「……私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりません。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくになりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行つたか中てみるとしまいに言うのです。その頃の私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよっと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、

始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対してお嬢さんの技巧と見做してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を搔かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時に最も迂遠な愛の実家だったのです。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会つたから連れ立って帰つて来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりません。(先生としては少しほつとしたが)、しかし食事の時、またお嬢さんに向つて、同じ問いを掛けたくありません。(それはお嬢さんの証言も得て、安心しなかったたのである)。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中てみるとしまいに言うのです。(この時のお嬢さんの心理は、一人の仲を気にしている(疑っている)先生を見て笑い、一方、自分がそれほど信じられないのかと腹を立ててもいるのである)。その頃の

私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だけではないです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよつと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところもあると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです」とある。

例えば、お嬢さんを専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）が強ければ強いほど、それだけ殆んど取るに足りない些細なことにも、もの凄い「嫉妬心」に襲われてしまうものであるが、結婚をすれば、彼女は「すでに手に入れている」（つまり専有は当たり前前の状態）になっているので、それゆえ、彼女を何が何でも専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）も自然と弱まって行き、そして、その「独占欲」が弱まれば、その分「嫉妬心」も弱まって行くのである。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったためではありません。Kの来ないうちには、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、二度と他人には騙されぬぞという決心が、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。（先生はもつと自分に自信を持ってよかつたのである）。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのと少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。（そうであるならば、なぜお嬢さんに自分のことが好きかどうかを直接確かめなかつたのだろうか？）

世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰って嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったので。同時に最も迂遠な愛の実際家だったので。つまり、先生という人は、いわゆる「相思相愛」であることを強く望んだのである。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長く一緒にいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。(これは一体どういう意味なのか? 例えば、先生という人は、お嬢さんに直接「愛の告白」はしていない。奥さんに直接(お嬢さんへの)「愛の告白と結婚の申し込み」をしている。そして、先生という人は、お嬢さんの気持ちも確かめた方がいいと進言すると、奥さんは「……大丈夫です」と言う。つまり、お嬢さんも先生との結婚は納得済みであったということである。

しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。——例えば、先生がお嬢さんに直接「愛の告白と結婚の申し込み」をしたとしても、(日本の習慣として、そういう事は許されていないとあるのは)、お嬢さんは自分の判断だけでは答えることは出来ず、結局、母親に相談してみなければ答えられないと言ふことになるからである。また、昔は、多くの場合、親が結婚相手を決めていたのであり、それゆえ、たとえ二人が好き合っている、親が認めなければ、結婚は出来ないのである。また、若い女性の場合、自分の方から「愛の告白や結婚の申し込み」をするのではなく、相手からの「愛の告白や結婚の申し込み」を待つということでもあったのだろう。

\*

\*

三十五、正月に歌留多取りをする

三十五、正月に歌留多取りをする

「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、どうしても手足の動かせない場合があります。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。」

その内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多をやるから誰か友達を連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多などを取る柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎そんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ちやつておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々の小人数だけ取ろうという歌留多ですからさぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐手をしている人と同様でした。私はKに一体百人一首の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと言へました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑するでも取つたのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人が殆んど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。

それから二、三日経つた後の事でしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くと言つて宅を出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、ただ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顛を支えたなり考えていました。隣の室にいるKも一向音を立てませんでした。双方ともいるのだから分らないくらい静かでした。尤もこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかつたのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切りの襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だつたかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を一種の邪魔ものの如く意識してしながら、明らかにそうと答える訳にいかなくなつたのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両肱を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだらうと言うのです。私は大方叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎたのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないとお嬢するより外に仕方がありませんでした。(本文)

\*

\*

さて、「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼まなこだけ覚めて周囲しゅういのものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありましよう。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。(この停滞状態を一気に吹き飛ばす或る出来事が起きるのである。)

その内年うちねんが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるとをやるから誰か友達だれを連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達ともだちなどは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往來わらいで会った時挨拶あいさつをするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多かるとなどを取る柄がらではなかったのです。(つまりKの友達「親友」は先生せんせいだけなのである)。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持こころになれないので、好い加減なまへんじな生返事なまへんじをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩ばんになつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないので、内々うちうちの小人こじん数かずだけで取ろうという歌留多かるとですからさぶる静かなものでした。その上うへこういふ遊技ゆうぎをやり付けないKは、まるで懐手ふところをしている人と同様どうようでした。私はKに一体ひやくにん百一首ひゃくしゆの歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。(だとすれば、文学への興味はそれ程ではなかったのかも知れない。日蓮の時とは全く違ふ)。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑けいべつするとても取つたのでしよう。それから眼まなこに立つようにKの加勢かぜいをもしました。しまいに二人が殆んど組くみになつて私に当るといふ有様ありさまになつて来ました。私は相手次第けんかでは喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。(この場面は、いかにも正月という雰囲気を出すためのものかも知れない。)

\*

\*

それから二、三日経つた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ行くと言つて宅うちを出しました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居くしうき同様あとに残つていました。私は書物しよぶつを読むのも散歩さんぽに出るのも厭いやだつたので、ただ漠然もくぜんと火鉢ひばちの縁えりに肱ひじを載せて凝じつと頤もを支えたなり考えていました。隣の室むろにいるKも一向いっかう音を立てませんでした。双方ふたうともいるのだから分らないくらい静かでした。尤もつともこういう事は、二人の間柄まがらひとして別に珍めづしくも何ともなかつたのですから、私は別段べつたうそれを気にも留めませんでした。(まず、この場面の設定ていじやうは、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃ころだつたので、二人は室むろで静かにしていた。つまり、ここに「二人だけの設定」が出来上がるのである。)

十時頃じゅうじころになつて、Kは不意ふいに仕切りしきりの襖ふすまを開けて私と顔かほを見合みあわせました。彼は敷居しきいの上うへに立つたまま、私に何を考かんがへていると聞ききました。私はもとより何も考かんがへていなかつた

のです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回って、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を、一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。私はすぐ両腕を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。(Kは、十時頃、不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えていると聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。つまり、二人は火鉢の前に坐った状態になる。)

すると、Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうかと言うのです。私は大方叔母さんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎなのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうかと質問するのです。私はなぜだか知らないかと挨拶するより外に仕方がありませんでした。(先生はもちろん、なぜKは今日に限って、そんなことを聞きたがるのだろうか、不思議に思ったに違いない。)

### 三十六、Kのお嬢さんへの恋心の告白

「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はどうもなぜ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ疝付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見てください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は恐ろしさの塊りと言いましようか、または苦しみの塊りと言いましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでしたが。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策ったと思えました。先を越されたなと思えました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がな

かったのでしよう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょうか。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいいない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。(本文)

\*

\*

さて、「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。

私はどうとうなせ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来「無口な男」でした。平生から「……何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました」。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた「何か出て来るな」とすぐ瘡付いたのですが、それはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から「……彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けた時の私を想像して見て下さい」とある。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は「恐ろしさの塊り」と言いましようか、または「苦しみの塊り」と言いましようか、何しろ「一つの塊り」でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ「失策だった」と思いました。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたではありません。ただ「……何事も言えなかつたのです。また言う気にもならなかつたのです」とある。

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらつて、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいっ帰るのだから分りませんでした。(此所までの一連の場面を簡単に要約してみると、次のようになるかと思う。)

\*

\*

さて、年が開けて正月になり、ある日、内々だけで歌留多をすることがあつたが、それから二、三日経つた頃、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃だったので、二人は室で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えているのかと聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつている火鉢の前に坐り、奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するので、私はなぜ今日に限つてそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねると、彼は突然黙つたが、彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視した。彼は元来無口な男で、平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖があつたのです。彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ瘡付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかつたのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみして下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。その時の私は恐ろしさの塊りというか、苦しさの塊りというか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなって、呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなつたのです。幸いな事に、私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しましたが、すぐ「失策つた」と思いました。先を越されたなと思ひました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起らず、恐らく起るだけの余裕がなかつ

たのでしよう。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行き、私は苦しくって堪りませんでした。おそらくその苦しさは、私の顔の上にはつきりと表れていたはずであり、いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に集中しているので、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょうか。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で、重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを受け、私の心は半分その自白を聞きながら、半分どうしよう、どうしようという念に絶えず掻き乱されていたので、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響き、そのため私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に自白をしたものか、それとも打ち明けずにいる方が得策か、私はそんな利害などを考えて黙っていたのではなく、ただ何事も言えなかったのです。(それだけ「驚きの衝撃」が余りに大き過ぎたという事である)。午食の時、Kと私は向い合せに席を占め、下女が給仕をしてくれたが、二人は食事中ほとんど口を利きませんでした。

そして、この時から、二人は子供の頃からの親しい「親友関係」から、はつきりとお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)に決定的になつてしまつたのである。

### 三十七、Kの告白後の先生の心の状態

「……二人は各自の室に引き取つたぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべき筈だと思ひました。しかしそれにはもう時機が後れてしまつたという気も起りました。なぜ先刻Kの言葉を遮つて、こつちから逆襲しなかつたのか、そこが非常な手落りのように見えて来ました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたらうにとも考えました。

Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖を開けて向うから突進して来てくれれば好いと思ひました。私に言わせれば、先刻はまるで不意撃に会つたも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下心を持つていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまで経つても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思つと、それが気になつて堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合つている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったので、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。一旦言いそびれた私は、また向うから働き掛けら

れる時機を待つより外に仕方がなかったのです。

しまいに私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑に注いで一杯呑みました。それから玄關へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往來の真中に見出したのです。私には無論どこへ行くという的もありません。ただ凝としていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻ったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落す気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えませんでした。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐っている彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底出来ないのだという声はどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人氣のないように静かでした。(本文)

\*

さて、その後、二人はそれぞれの室に戻った後、私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。また、なぜ先刻Kの言葉を遮って、こつちから逆襲しなかったのか、せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話していたら、まだ好かったろうにとも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でしたし、私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨(後悔)に揺られてぐらぐらしました。(中略)

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。(ふと、このような時に無意識のうちに生じて来る予感、というものは、意外と当たることが多く、結局、先生という人は、Kという親友に永久に崇られることになるのである。)

\*

\*

一、先生の想い

## 一、先生の想い

さて、この『こころ』という作品のなかで、最も大事な部分というのは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、親友である「K」が、親友である「先生」に、ある日、突然、「お嬢さんへの切ない恋心」を打ち明けるといふ部分である。ここがまさに「分岐点」であり、これによって、まさに事態が「大きく動く」ことになるからである。つまり、その当時はまだ大学生であった「先生」という人は、軍人の未亡人である奥さんとお嬢さんそれに一人の下女が住んでいる所に「下宿」することになるのである。そして、そのことが、結果として、まさに一つの「運命的な出逢い」ともなるわけだが、それは、その奥さんとお嬢さんと一緒に生活を親しくなっていくに連れて、やがてその「お嬢さんのことが好きになっていく」ということである。もちろん、それ自体は、むしろ「自然な流れ」であり、何も不思議なことでも何でもない。それゆえ、むしろ最大の「問題」なのは、そのことをいつまでも「言いつまみず」に、「状態が、ずっと長く続いた」ということである。その理由として、Kの来ないうちは、他的手（奥さんの手）に乗るのが厭だという我慢が私を抑え付けて、一歩も動けないようにしていたとある。——この時、勇気を奮って、奥さんに向かって、「……お嬢さんが好きです。お嬢さんを愛しています。お嬢さんを私にください」とはつきりと言っていたならば、恐らく、「先生」という人の「人生」は、今とは全く違った「人生」が開けていたかも知れない。それは、お嬢さんとの「関係」においても、また、社会との「関係」においても、そして、人間との「関係」においても、すべてにおいて積極的になれたかも知れないのです。なぜなら、奥さんもお嬢さんも、その「言葉」（愛の告白と結婚の申し込み）をずっと待っていたからである。

## 二、中心テーマは

つまり、「先生」（当時は大学生）という人が、そのまま素直にお嬢さんに「愛を告白」していたならば、それで何らの「事件」も起こることもなかったのである。しかし、それでは、所謂「小説」にはならない。「小説」となるためには、むしろ「事件（問題）が起こる」必要がどうしてもあったということである。そこで、その「下宿」先に「先生」の親友である「K」という人物を同居させて、いわゆる「先生とお嬢さんとK」とのいわば「三角関係」というものを生じさせることになる。それでは、なぜ、そのようなことをするのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、作者（夏目漱石）自身、いわゆる「三角関係」という「問題」（もちろん、その「三角関係」にも実に様々な「組み合わせ」があるだろうが）、その中でも、一人の女性をめぐる二人の「親友同士」との「三角関係」というものを、何が何でも書いておきたかった。それは、文字通り、まさに自分の「遺言」として書いておきたかった。それは、なぜなのか？ 作者（夏目漱石）自身、そのような「経験」があったからなのか？ それとも、同じような「心的状態」（つまり倫理的に、「罪を背負う」という「心の葛藤」）を宿していたからなのか？ それは、何とも言えないが、ただ、作者（夏目漱石）自身、正確には「先生」という人は、まさに「恋は罪悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのか？ それは、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つくことになる。人を傷つけずにはおかないものだからである。

誰もが「罪の意識」（或いは「良心の呵責」というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋（恋愛）は罪悪である」とともに、人間の「罪」（悪業）というものを誰もが嫌が上でも「思い知る」ことになるのである。

それをもっと広げれば、例えば、友達関係、同居関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことである。つまり、「男女」（或いは「同性」）同士が、本気で相手と深く「関わる」（或いは「愛する」）ことになれば、必ず、お互いの「利己的自我（エゴ）」と利己的自我（エゴ）」とが本気でぶつかり合うことになる。そして、お互いの関係が「うまくいっている」時には、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るかも知れないが、一方、お互いの関係が「うまくいかなかった」時には、逆に、「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。つまり、本気で相手と深く「関わる」ということは、まさにそういうことであり、しかも、それが「男女の関係」であれば、それだけより「どろどろとした生々しいもの」になっていくということである。

それは、『こころ』という作品の中でも、例えば、Kとお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまう。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——それは、いったい何を意味しているのかと問えば、それは、相手の「愛情」が「他の対象」へと向かうことを「恐れている」のである。それでは、なぜ、それを「恐れる」のだろうか？ それは、相手の「愛情」が自分に向かっているからこそ、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るのであり、逆に、相手の「愛情」が自分以外の「他の対象」へと向かってしまうということは、今まで得ていたその様々な「喜びの感情」を味わうことが出来なくなってしまうとともに、今度は、逆に、実に様々な「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。

### 三、Kの告白の理由

それでは、親友である「K」は、なぜ、親友である「先生」にお嬢さんへの切ない恋心を敢えて「告白」（打ち明けた）のだろうか？ ここが「最大」の問題である。というのも、わざわざ「告白」などしなくてもよかったからである。それを敢えて「告白」することによって、一体、何を考えていたのだろうか？ 可能性としては、もちろん、実に様々なことが考えられるかと思うが、まず、Kという人は、いわゆる「理想」（それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」（それは「お嬢さんへの切ない恋心」）との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、しかし、ふつうに考えれば、「K」という人が、「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、そして、もう一つは、親友である「先生」との関係もあるからである。

それは、先生という人も（恐らく）「お嬢さんのことが好きなんだろう」ぐらいのことは、Kという人もうすうすは感じていたであろう。もしそうだとすれば、いったいどうし

たらよいのかと「深く悩む」ことにもなるだろう。——つまり、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」を諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に辛いことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。このような場合、一体、どうしたらよいのかと問えば、ふつうであれば、それは、結局、「男同士」で何らかの形で決着をつけるのか、それとも、相手の「女性」に決めてもらうのか、あるいは、誰か「第三者」を介して、まさに「問題の解決」を図るのか、何とも難しい問題であるが、もしそれが出来なければ、いわゆる「三角関係」というものは、延々と続いていくことになる。つまり、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

ところで、ここで「考え方」を少し変えてみると、それは、「K」という人間は、やがて「自殺」することになるが、それは、余程のことであり、それゆえ、一つの「賭け」（或いは「勝負」）だったのかも知れない。それは、親友である「先生」の反応がぜひとも知りたかったということである。——つまり、「K」は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていただろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るといふことには、やはり「ためらい」が生じたのかも知れない。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったということである。それは、一人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どういう「反応」を示すのか？　つまり、お嬢さんのことが好きになった、という告白を聞いた時に、親友である「先生」（当時は大学生）がどのような「反応」を示すかによって、いわゆる「先生」の「心の中」がぜひとも知りたかった。それによつて、自分もどうしたらよいかが見えて来るからである。そして、もし、その告白を聞いて、「……いいじゃないか、それなら、お嬢さんと付き合ったらいいよ」というような、いわば「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということであり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。——ところが、親友である「先生」の反応は、そういうものではなかった。それは、ショックが余りにも大き過ぎて、その時、「何も言えなかった」という反応である。

#### 四、先生の反応

さて、先生は、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、「あつ、失策だった！」という想いで一杯になっていたのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち開けようと思いがながらも、なかなか言い出せずにいたところを、Kに先越されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さ

んのが好きなんだということを、なかなか言い出せずにいたわけである。そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続くことになるが、やがて、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにこことばかりに、一気に「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを絶対に失いたくないという一心からだっただけで、この時の「対応（策略）」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

\*

\*

三十八、二人は寡黙<sup>かもく</sup>で夕飯<sup>ゆうめし</sup>を食べて床に就<sup>つ</sup>く

三十八、二人は寡黙で夕飯を食べて床に就く

「……私が家へ這入ると間もなく俵（人力車）の音が聞こえました。今のよう護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言（寡黙）でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったので。すると今度はお嬢さんがKと同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい臉を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしたか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうかと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐って、大方風邪を引いたのだろうかから身体を暖めるがいいと言って、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思いい出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは二十分だと答えました。やがて洋燈をふっと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかった

のですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(本文)

\*

\*

さて、「……私が家へ這入ると間もなく俵(人力車)の音が聞こえました。今のように護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりましたとある。(人力車の車輪は、一九〇七年《明治四十年》代になり、ようやく木製の車輪は、「ゴム輪」へと代わったそうです。)

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。(二人とも食事が楽しめる気分ではなかったのです)。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言(寡黙)でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい瞼を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらもまた何かむずかしい事を考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。(お嬢さんにそう言われたことで敏感に反応しているのかも知れない。)

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言つたのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖めるがいいと言って、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。(この蕎麦湯は、江戸時代から飲まれていて、蕎麦を茹で続けると「茹で湯」に蕎麦の「香りや栄養」も蕎麦湯に移ってしまう。そこでその栄養のある「蕎麦湯」を飲むと、「胃腸に良い」とか「元気になる」とか信じられていたのです。)

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時

二十分だと答えました。やがて洋燈をふっと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。(一九一二年《大正元年》東京市内に電灯がほぼ完全普及する。)

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。「……そう、だなあ」と低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(Kが曖昧な返事ばかりを繰り返すので、先生という人はイライラするばかりなのかも知れない。)

### 三十九、Kに告白の真意を聞く

「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。」

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたろ始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいつしよに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往來でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られてるか、または奥さんやお嬢さんに

も通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思ったのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却って彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往來だからわざわざ立ち留まって底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(本文)

\*

\*

さて、「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなれば、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。(少し積極的に出て見ようという決心である。)

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変った点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにとっとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたる始まりました。(正月明けの後半の学期)、私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外

部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」と明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知つていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却つて彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかつたのです。(つまり、Kの「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」というこの言葉を、先生という人は、そのまま「信じた」と言うことである。)

私はまた彼に向つて、彼の恋を「……どう取り扱うつもりか？」と尋ねました。それが「……単なる自白に過ぎないのか？」、またはその自白について、「……實際的の効果を、も収める気なのか？」と問うたのです。(先生が知りたいのは、まさにそこである)。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思つた通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まつて底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(ここまでの内容は、まさに「書いてある通り」であるが、大事なのは、次の「図書館」の場面からである。)

\*

\*

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る(前半部)

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る（前半部）

「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってあげればと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があって、談判でもしに来られたように思われて仕方がないので。私ははやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。（前半の本文）

\*

\*

さて、「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあり、私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

ところで、学問には、「人文科学」と「社会科学」それに「自然科学」とがあるかと思いが、まず、「人文科学」では、「人間とは何か、また、人間の所産（人間が生み出したもの）を研究の対象とする学問である。例えば、哲学、文学、歴史学、考古学、心理学、宗教学、言語学、その他などがあるかと思う。また、「社会科学」では、社会における「人間の営み」の研究を行なう分野であり、例えば、政治学、経済学、法学、社会学、教育学、国際研究、コミュニケーション、その他などがあるかと思う。そして、「自然科学」では、自然に属する諸々の対象を取り扱い、その法則性を明らかにする学問であり、例えば、物理学、天文学、地球科学、生物学、化学、工学（科学技術）、その他などがあるかと思う。さて、先生の「専攻の学科」であるが、先生はもちろん、「社会科学」や「自然科学」

などの分野ではない。だとすれば、「人文科学」であるが、その「人文科学」の中の何かということになるが、それは恐らく、「文学か哲学」のようなものかと思う。一方、Kという人の「専攻の学科」であるが、それは、日蓮のことをはじめ、Kの言う昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。(英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない)。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すとあるので、恐らく、「宗教学」(或いは「哲学」)のようなものになるかと思う。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってればしてもいいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方ないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

#### 四十、上野公園で先生にどう思うかと尋ねる(後半部)

二人は別に行く所もなかったのですが、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うと言ふのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥つた彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思ひました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上つてはいなかつたのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違ふと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言ひました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言ひました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思へば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言つただけでした。實際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかつたならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切つた顔の上に慈雨の如く注いでやつたか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れて來た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違つていました。(後半の本文)

\*

\*

さて、二人は別に行く所もなかったもので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っぱり出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向ってちつとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と「どう思う？」と言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。「一言で言うと、「……彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです」。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんなに進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。」

私がKに向って、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言いました。そうして「……迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうたので、私に公平な批評を求めより外に仕方がない」と言いました。私は隙かさず「迷う」という意味を聞き糺しました。「……彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだ」と説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして「……退こうと思えば退けるのか」と彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ「苦しい」と言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。

例えば、Kという人は、なぜ「進む方向」へと向かわないのか？ お嬢さんにはこれという婚約者はいないのだから、誰に遠慮することなく思いきって「愛の告白」をしたらよいのである。それなのに、Kという人は一体何をためらっているのだろうか？ なぜ一歩を踏み出すことに躊躇しているのだろうか？ それには、次の「二つの理由」があり、一つは、いわゆる「理想の問題」（それは「道を一心に精進すること」そのためには色恋は邪魔になる）のであり、そして、もう一つは、やはり「先生の問題」があるのである。

つまり、Kという人は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということぐらいは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていたであろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るということには、やはり「ためらい」が生じたのではないかと思う。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったというのである。それは、二人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どのような「反応」を示すのか？ その先生という人の「心の中」がどうしても知りたかった。それによって、自分もどうしたらよいかはつきりと見えて来るからである。そして、若しもそれが「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということにもなり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。一方、先生という人は、もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、（例えば、それならつき合ったらいいじゃないかと）、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもって生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の

私は違っていました。(先生という人は、ここで一気に「反撃」に出るのである。)

#### 四十一、先生のKに対する最初の反撃

「……私はちやうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽の羞恥だのを感じず余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り返して来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかったのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つてそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上はどう影響するかを見詰めていました。「……馬鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。

Kはびたりとそこへ立ち留ったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。

しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。(本文)

\*

\*

さて、「……私はちようど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適當なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした」。

Kが「理想」(道への精進)と「現実」(恋への想い)の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だの感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言で「……Kの前に横たわる恋の行手を塞ごうとした」のです。(先生の目的は、Kの恋の行手を塞ぐことだけであつた。)

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかつたのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、撰欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかつたのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違ひなかつたのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つて(恋の横道へと逸れるのを)「今まで通り、積み重ねて行かせようとした」のです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。(人間はお互いの「利害や感情」がぶつかり合うから揉事になるのであり、お互いの「利害や感情」がぶつかり合わなければ、今まで通りの「関係」でいられるのです)。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

そして、「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にとどう影響するかを見詰めていました。「……馬

鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。(これは迷っているのも馬鹿であるが、他人に相談したことも馬鹿であるということかも知れない。つまり、先生の「反撃」は予想外であり、いつもの「先生とは全く違う」という感じを抱いたに違いない。それは、お嬢さんをめぐってのまさに「恋敵」《敵同士》になつてしまつたからである。)

Kはびたりとそこへ立ち留つたまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗(居直つて自分に襲いかかつて来る)の如く感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしなかつたのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。

#### 四十二、先生の最初の反撃に対するKの反応

「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言つた方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思つていたので。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はつと我に立ち帰つたかも知れません。もしKがその人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。」

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

「……もうその話は止めよう」と彼が言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「……止めてくれて、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。

私がこう言つた時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事もない」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて着味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ噛じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰って食卓に向った時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。(本文)

\* \* \*

さて、「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言った方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窺めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。(これは、何が何でもお嬢さんを奪われたくない、また、何があつてもお嬢さんだけは失いたくないという、そのような「想い」が余りに強過ぎて、先生ですから、本来の「健全な精神」を失つてしまつているのである。)

例えば、異性を「本気で好きになる」(或いは本気で「愛するようになる」と、まさに「……誰もが相手の異性を是非とも専有(独占)したいという強烈な一念に襲われるもの」)であり、それゆえ、相手の異性がほかの誰かとかにもかにも親しうに話をしてる場面などに出つくわすと、その人の「心の中」では、もう抑え難いほどのもう気が狂わんばかりの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうものである。——それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)であり、——例えば、先生は、「……恋(恋愛)は、罪悪である」と言っているが、それは、どれほど真面目な人であっても、(先生もそうであるが)、一度、本気で「恋」(恋愛)に深く陥つてしまうと、ふだんの「知性や理性」などに支配されていた「冷静な判断」などはとても出来にくくなり、まさに「正気」を失つて、ふだんではとても考えられないようなことを「言つたりやつたりするようになる」のである。そういう意味では、「恋」(恋愛)というのは、一面では、ふだんの冷静な「知性や理性」などの働きを鈍らせる一種の「狂気」にも近いものになり易いのである。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

Kは、「……もうその話は止めよう」と言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。「……止めてくれって、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。(これは、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。)

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったので。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事も無い」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。この「覚悟」という言葉が、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にいつまでも重苦しく残ることになるのである。

\*

\*

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて蒼味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ嚙じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になつて、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにと言つて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

## 一、先生の最初の反撃(反撃一)

さて、先生という人は、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続

くことになるが、しかし、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにことばかりに一気に、「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを「絶対に失いたくないという一心からだ」と思うが、この時の「対応(策略)」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

それでは、それは、いったいどのような対応だったかと言え、それは、次のようなものである。つまり、「……私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見えたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒すことが出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私はまず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と言い放ちました。私はその一言でKの前に横たわる恋の行方を塞ごうとしたのです。というのも、Kは、真宗寺に生まれ、昔から精進という言葉が好きでした。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条であり、それゆえ、摂慾や禁欲はむしろ、たとえ慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。だからこそ、この言葉がKには痛いだろうと思っただけです。……」

一方、「K」は、それに対して、「……もうその話は止めよう」と彼が辛そうに言い出した時、私は、彼に向って残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉管へ食いくように。「……止めてくれって、僕が言い出したことじゃない。もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。それに対して、「K」は、「覚悟？」と聞き、やがて、「……覚悟、——覚悟ならないこともない」とつけ加えた、という展開になるのである。

\*

\*

四十三、  
上野うえのから帰った晩、二人は……

四十三、上野から帰った晩、二人は……

「……その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があったからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向って猛進しないと行って、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、私に取って比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもっていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きてるかと思つて、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になっていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押して見ました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言ったではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそ

ここに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言つてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないと云つて、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

さて、Kという人が一直線に愛の「目的物」に向つて猛進しないからと言つて、決してその「愛」の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。それは一体なぜなのかと問えば、それは、「……彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言つてもいい位なのです」。それでは、その「尊とい過去」とは一体何かと問えば、それは、次のような事である。つまり、Kという人は、昔から常に「精進」という言葉を使つて来たのです。彼の「行為・動作」は悉くこの「精進」の一語で形容されるものであり、道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。それから節慾や禁欲はむろん、たとい慾を離れた「恋」そのものでも道の妨害になるのです。それゆえ、Kがもし「理想」(道への精進)の方を選べば、まさに「現実」(恋への想い)は断ち切らなければならぬ、一方、若しも「現実」(恋への想い)の方を選べば、まさに「理想」(道への精進)を断念せざるを得ない。だからこそ、「……苦しい」と言つているのであり、そのような二律背反の「究極の選択」を迫られているのであり、それゆえ、Kという人は、「……自分でももう自分をどうしてよいか分なくなつてしまひ」、そこで「……先生に公平な批評を求めるより外に仕方がなかった」となるのである。(もちろん、その場合、Kという人が若しも「現実」(恋への想い)の方を選べば、今度は「先生との問題」が必ず生じることになるのです。)

\*

\*

上野から帰つた晩は、私に取つて比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追い懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもつていたのです。(これは、Kが「恋」の方を選んで、まさか「道」の方を捨てるようなことは出来まいと見ているのである。)

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚まししました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして

彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでに聞いて見ただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言ひます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡が出来るとか却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。(これは、今までは「Kの切ない恋の告白」により、先生という人は、このままではKにお嬢さんを取られてしまうかも知れないと思ひ、どうしようどうしようという「氣持ち」でいたが、先生の「Kへの反撃」によつて、いわば「形勢」が逆転して、今度はKの方が追い詰められた感じになつて居るのです。)その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つていた私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押して見ました。(あの時、Kは何か言ひたかつたのか、それとも何か聞きたかつたのかはよく分からない)。しかし、Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

#### 四十四、覚悟という言葉と奥さんへの談判

「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちやんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だつたのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がかつこの驚きをもつて、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかつたかも知れませんが、悲しい事に私は片眼でした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのが

すなわち彼の覚悟だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもお嬢さんいなくなつて、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗つていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手を持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言つて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らぬような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言ひはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおつしやつたんですか」と却つて向うで聞くのです。(本文)

\*

\*

さて、「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼(吟味)しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段(何かを執行する事)を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で「覚悟」の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がおもひこの「驚き」をもつて、もう一返彼の口にした「覚悟」の内容を公平に見廻したならば、まだよかつたかも知れません。悲しい事に私は片眼

(片方しか見ていなかった)のです。私はただKが「お嬢さんに対して進んで行く」という意味にその言葉を解釈しました。それは、果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち「彼の覚悟」だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

Kがもしそうであれば、私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいました。

例えば、われわれ人間は、それが何であれ、最初の一步を踏み出すまでは、とかくあてもないこうでもないといろいろと考へ過ぎてしまいためらいがちになるが、しかし、最初の一步を踏み出してしまえば、あとはもうその勢いで前に進むしかないのです、自然とより「活発な動き」になつて行き、あとはなるようになって行くことが多いだろう。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもなく、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈托していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。(これも最初の一步が言い出せないでいるのです。)私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言いはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思ひも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおっしゃったんですか」と却つて向うで聞くのです。

#### 四十五、お嬢さんを下さいと言う

「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気になかった私は、「いいえ」と言つてしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何

も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「……下さい、ぜひ下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずつと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようには判然としたところのある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大変心持よく話の出来る人でした。「……宜ごさんす、差し上げましょう」と言いました。「……差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付けてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言いました。

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な気持ちになりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き返もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たなら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つたのかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲つてしまいました。(本文)

\*

\*

さて、「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は」、「いえ」と言ってしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言い直しました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「……下さい、ぜひ下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じやありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答えたなら笑い出しました。そうして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然としたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話の出来る人でした。「……直ぐさ、差し上げましょう」と言いました。「……差し上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付けてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと言いました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言いました。（これはもう奥さんはその言葉をずっと待っていたという事であり、それは、お嬢さんも全く同じことになるのである。）

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な気持ちになりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はどうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つた

のかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒なほりました、癒なほりました」と答えて、ずんずん水道橋すいどうばしの方へ曲まってしまいました。

## 二、先生のもう一つの反撃（反撃二）

さて、先生のもう一つの「反撃」は、とにかく、Kより先に「お嬢さんを下さい」と奥さんに願ねがい出ることでした。それは、Kもお嬢さんも二人とも留守の時を狙ねらってと考かんえていたが、なかなか二人が留守という状態にならず、一週間が過ぎた後あと、先生は、「仮病」を使って学校を休み、そして、Kもお嬢さんもいなくなり、十時頃まで寝ていたが、病気ではないので、起き出して、いつものように顔を洗あらって、茶の間で朝食とも昼食ともつかない食事をした後、奥さんに話を持ち出すことになる。もちろん、最初は、なかなか言い出せずにいたが、やがて、私は突然、「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さいと言いました」とある。この言葉を先生は、もつと早く、Kが同居する前に言っておくべきだったのである。そうすれば、Kの「自殺」も先生の「人生」も全く違ったものになっていたに違ちがいない。その時、奥さんは、「……上げてもいいが、あんまり急ではありませんか」と聞くのです。「……私が急に貰もらいたいです」とすぐ答こたえたら笑い出しました。そして、「……よく考かんえたのですか」と念を押すのです。「……私は言い出したのは突然でも、考かんえたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました」とある。この「部分」を丁寧ていねいに読むだけでも、遂ついにその日が来たかと、奥さんの「心の中」が透とけて見えて来るような対応の「仕方」になっているかと思う。

そして、「……奥さんは、宜よろござんす、差上げましよう」と言いました。「……差上げるなんて威張いばった口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰もらって下さい。ご存じの通り父親ちちのない憐あはれな子こですと後あとでは向むかうが頼たのみました」とある。さらに、「……話は簡単でかつ明瞭めいりょうに片づいてしまいました。最初はじめからしまいまでに恐おそらく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかつたのです。親類しんるいに相談する必要もない。後あとから断ことわれればそれで沢山たくさんだと言いいました。本人の意嚮いこうさえたしかめるに及およばないと明言めいげんしました。（中略）、親類はともかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしい」と私が注意した時、奥さんは、「……大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があるの子をやるはずがありませんからと言いいました」とある。——これは、もう奥さんは、先生が「いつその言葉を出す」か、ずっと待まちっていたということであり、それは、お嬢さんも全く「同じ気持ち」であつたということである。それゆえ、先生がもつと早く「結婚の申し入れ」を行いなつていたならば、この三人は、どれほど「幸せな家庭」（或いは「幸せな家族」）になつていたかも知れないのである。

それは、第一部でも、先生自身、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻さい以外の女は殆ほとんど女として私に訴うえないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思おもつてくれています。そういう意味から言いって、私たちは最も幸福しあわせに生なれた人間の一对いっついであるべきはずだ」と語かたっているのである。

\*

\*

四十六、外を歩き回まわって宅うちに帰る

四十六、外を歩き回って宅に帰る

「……私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺のした書物などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えていました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往來の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上って、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄關から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうと言つて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたその位の事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほつと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。

けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私は猿楽町さるがくちょうから神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限かいげんを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中まんなかで我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしてている時分まじりだろうなどと考えました。また或ある時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。(つまり先生の「頭の中」はその事だけで一杯いっぱいになつていたのであり、それゆえ、外ほかのことを「考かんえる余地」はなかったのである。)

私はとうとう万世橋まんせいばしを渡わたって、明神みょうじんの坂を上あって、本郷台ほんごうだいへ来て、それからまた菊坂を下くだりて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨またがって、いびつな円を描えがいたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆ほとんどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向いっそう分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得うるくらい、一方に緊張きんじやうしていたと見ればそれまでですが、私の良心れんしんがまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅うちの格子こうしを開けて、玄関げんかんから坐敷ざしきへ通る時、すなわち例のごとく彼の室むろを抜けようとした瞬間しゅんかんでした。彼はいつもの通り机つくえに向って書見かみをしていました。彼はいつもの通り書物から眼まなこを放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰いまかへつたのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いいのか、医者へでも行いつたのか」と聞ききました。私はその刹那せつなに、彼の前に手を突ついて、詫あやまりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動しょうどうは決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたった二人曠野こうやの真中まんなかにでも立たつていたならば、私はきつと良心れんしんの命令めいれいに従したがって、その場で彼に謝罪しやざいしたろうと思おもいます。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留とどめられてしまつたのです。そうして悲しい事に永久とこに復活ふくたつしなかつたのです。

夕飯ゆふめしの時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈しんんでいただけで、少しも疑うい深い眼まなこを私わたしに向けません。何にも知らない奥さんはいつも嬉うれしそうでした。私だけがすべてを知しっていたのです。私は鉛えんのような飯いを食たべました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓しょくたくに並びませんでした。奥さんが催促さそすると、次の室むろで只今ただいまと答こたえるだけでした。それをKは不思議ふしぎそうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋たずねました。奥さんは大方おおおかた「極きまり」が悪いのだろうと言いって、ちよつと私の顔かほを見ました。Kはなお不思議ふしぎそうに、なんで極きまりが悪いのかと追窮ついきゆうしに掛かりました。奥さんは微笑わいごうしながらまた私の顔かほを見ます。(この極きまりの悪あくさは、女性にょせいには特有とくゆうのものかも知れない。勿論もちろん、心こころから嬉うれしいのだけれども、何か氣恥きぢずかしい、というような感じであり、それは、例えば、妊娠ごんんを夫おつとや家族かぞへなどに告つげるような時もそうかも知れない。)

私は食卓しょくたくに着きいた初めから、奥さんの顔付かおつきで、事の成行なりゆきをほぼ推察すいさつしていました。しかしKに説明せつめいを与えるために、私のいる前で、それを悉ことごとく話はなされては堪たまらないと考えました。奥さんはまたその位くらいの事を平氣へいきでする女おんななのですから、私はひやひやしたのです。

幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。(そのように突き動かすのは、まさに先生の「良心」であるが)、私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭になったのです。(このようなところも、あとあと後悔することにもなるのだろう。)

#### 四十七、奥さんはKに二人の結婚話をする

「……私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしななければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに氣のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったので。しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑つた事をぜひと周囲の人に知られなければならない窮境に陥つたのです。私はあくまで滑つた事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかつたのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙つて知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがと言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。(本文)

\*

\*

さて、「……私はそのまま一、二日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素は抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもつていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は自分で自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えたのでした。

つまり、先生の「知性や理性」(或いは「良心」)では、自分とお嬢さんとの関係(経緯)をKには話さなければいけないと思いつながら、一方、先生の「利己的自我」(つまり「エゴ」)の方では、それを話せば、自分の「立場や面目或いは信用」などを失ってしまう、それは絶対に避けなければならない。それゆえ、結局、わが身可愛さ(保身)からKには何も話さないことになつてしまつたのである。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。いわば道を外してしまつた、もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついてゐるものは、今のところただ天と私の心だけだったので。つまり、他人はいくらでも騙せても自分を騙すことはでき得ないのである。しかし立ち直つて、もう一步前へ踏み出そうとするには、

今滑った事をぜひと周囲の人に知らなければならぬ窮境に陥ったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。(この記憶があるいは先生をより苦しめたかも知れない。)

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないが言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言っただけです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。

### 三、結婚話聞いた時のKの反応

さて、私が奥さんに話をした日から二、三日が過ぎ、その間はKに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていました。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置にいました。しかし倫理的に弱点をもっている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えると、なぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。奥さんは、「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」。私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんの言うところを総合すると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚はいつですか」と聞いたそうです。それ

から「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐<sup>すわ</sup>っていた私は、その話を聞いて胸<sup>むね</sup>が塞<sup>ふさ</sup>がるような苦<sup>く</sup>しさを覚え  
ました。

さて、この場面は、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時の、Kという人の反応であるが、まず、「……道理で妾<sup>めかけ</sup>が話したら変な顔をしていましたよ」とある。奥さんは、当然、先生は、親友であるKにその話はしているはずだと思っていたので、そうではなかったことに少なからず驚<sup>おどろ</sup>いているのである。それが次の言葉であり、「……あなたもよくないじゃありませんか。平生<sup>へいせい</sup>あんなに親しくしている間柄なのに、黙<sup>もく</sup>って知らん顔をしているのは」となるのである。この時、奥さんは、二人の間に「何かあったのかな？」ぐら  
いは思<sup>おも</sup>ったとしても、まさかKという人が「お嬢さんに切<sup>き</sup>ない恋心」を抱<sup>いだ</sup>いていたなどは、全く想像すらでき得<sup>え</sup>なかつたではない。だからこそ、Kという人に「……あなたも喜んで下さい」と言うのであるが、この言葉は、奥さんという人の「思いや考え」は、「先生とお嬢さんとの結婚」を望<sup>のぞ</sup>んでいたという確<sup>たしか</sup>かな証拠であり、それゆえ、たとえKが「お嬢さんとの結婚」を望<sup>のぞ</sup>んだとしても、そういうことは永遠<sup>えいゑん</sup>にあり得<sup>え</sup>ない話であることを、この時にはつきりと思い知<sup>し</sup>らされたのである。（なぜなら、母親が結婚相手を決めるからである）。それが次の「Kの表情」であり、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑<sup>えいごう</sup>を洩<sup>も</sup>らしながら、「……おめでどうございます」（これは奥さんの願<sup>ねが</sup>いが叶<sup>かな</sup>ったことに対しておめでどうございます）と言<sup>い</sup>ったまま席<sup>せき</sup>を立つたことになるが、それと同時に、この「……彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑<sup>えいごう</sup>を洩<sup>も</sup>らしながら」というのは、もう一方では、Kという人は、「理想」と「現実」との間で深く悩<sup>なや</sup>み苦しんでいたが、そういう自分自身が馬鹿<sup>ばか</sup>みたい  
に思<sup>おも</sup>えて来たという事でもある。その後、「……結婚はいつですか」と聞<sup>き</sup>いている。これは、（恐<sup>おそ</sup>らく）自然と出て来た言葉かと思うが、「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言<sup>い</sup>ったのは、Kの「複雑な思い」（それは二人の結婚を表<sup>あらわ</sup>すきは祝<sup>いわ</sup>いたいと心の底からは祝<sup>いわ</sup>えない複雑な気持ち）の表れかも知れない。  
ところで、奥さんの言うところを総合<sup>そうごう</sup>すると、Kはこの最後の打撃<sup>うちげ</sup>を、最も落ち付いた驚<sup>おどろ</sup>きをもって迎<sup>むか</sup>えたらしく、Kはお嬢さんと私との間に結<sup>むす</sup>ばれた新しい関係<sup>けんけい</sup>について、最初は「……そうですか」とただ一口<sup>ひとくち</sup>言<sup>い</sup>っただけだったとある。このKという人の「反応」は、一体、何を意味<sup>いみ</sup>するのかと問<sup>と</sup>えば、恐<sup>おそ</sup>らく、自分の知らないところで、「……そういうことになっていったのか」という反応<sup>はんおう</sup>かと思うが、「変な顔」をしていたのは、なぜどうしてそういうことになったのかその「経緯<sup>けいゐ</sup>」がよく分からないので、いわば「変な顔」になつていたが、奥さんの「……あなたも喜んで下さい」という言葉<sup>ことば</sup>を聞<sup>き</sup>いて、その「謎」（奥さんも望<sup>のぞ</sup>んでいた事）がはつきりとしたので、Kという人は、「……はじめて奥さんの顔を見て微笑<sup>えいごう</sup>を洩<sup>も</sup>らしながら」となるのである。それでは、Kという人は、親友の先生を「恨<sup>うら</sup>んだのだろうか？」という大問<sup>だいもん</sup>題<sup>だいだい</sup>が残<sup>のこ</sup>るが、恐<sup>おそ</sup>らく、先生を「恨<sup>うら</sup>む」というよりも、むしろ「理想」と「現実」との間で深く悩<sup>なや</sup>み苦しんでいたという、そういう自分自身の「愚<sup>おろ</sup>かしさ」を恨<sup>うら</sup>んだかも知れない。つまり、本来、子供の頃<sup>ころ</sup>からの「理想」（道への精進）を一心<sup>いっしん</sup>に邁<sup>まい</sup>進<sup>しん</sup>すべきだったのに、ふと目の前の「色恋」に深く迷<sup>まよ</sup>ってしまった自分自身の「意志薄弱<sup>いしはくじやく</sup>さ」（薄志弱行）に失望<sup>しつぱつ</sup>したかも知れないのである。

\*

\*

四十八、Kの自殺

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったもので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。」

「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突つ伏しているのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切り取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かつたと思ひました。(固より世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するとうただけなのです。それから今まで私に世話になつた礼が、極あつさりとした文句でその後に加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれと

いう句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした。

私は顫える手で、手紙を巻き取めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆なの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖に迸っている血潮を始めて見たのです。(本文)

\*

\*

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日、余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったもので、私は全くそれに気が付かずになっていたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまつたのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの「黒い姿」はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突ッ伏しているのです。(この状態では、Kの「顔の様子」を見ることは出来ない。)

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おい、どうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の告白」を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らししました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

これは、自分のこれからの「人生」は、いわゆる「明るい光」に照らされた希望に満ちた人生などではなくて、むしろ逆に、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」が、その一瞬、私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らし出して、自分の「全生涯」は、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」に照らされた暗い「人生」を生きることになるという想いに襲われたのである。それは、例えば、自分の不注意から交通事故

などで何人もの人を死傷させたような時、その瞬間、「……あつ、これで自分の人生は終わってしまった」という想いに襲われるのと、基本的には全く同じ心理なのである。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ「机の上に置いてある手紙」に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かった」と思いました。(固より世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。世間から「責められる証拠」が残らなかつたからである。)

手紙の「内容」は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は「……薄志弱行で到底先行の望みがないから、自殺する」というだけなのです。それから今まで私に世話になつた札が、極あつさりとした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句(文句)もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私の「もつとも痛切に感じた」のは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える「……もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という意味の文句でした。(これが「Kの自殺」の謎を解く「最大の手がかり」となるものである。)

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆な眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に

#### 四十九、奥さんにKの自殺を告げる

「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座敷の中をぐるぐる廻らなければならぬなかつたのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有

様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言って注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不着の羽織を引つ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顛で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かったのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言いました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそう言ってしまったのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとって幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじやありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攫んでいました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかったのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変わらない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能(五感)を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された「運命の恐ろしさ」を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座

敷の中をぐるぐる廻らなければならなくなつたのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。——私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんとはかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。そして、私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不斷着の羽織を引っ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顔で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは着い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙つていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉、口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。「これは、先生の「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などからつき動かされて生じて来た行為（言動）になるかと思う」。奥さんがそんな深い意味に「私の言葉」を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじやありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攪んでいました。

例えば、万が一にもKと先生との間に何かがあつたとしても、奥さんとしては、結局、先生の方を信じるしかないのです、それゆえ、Kの「自殺の原因」をあれこれ問うよりも、むしろ「不慮の出来事」として受け止めたかつたのかも知れない。

#### 五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処

「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこは

そのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行きましました。また警察へも行きましました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分にとられる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつたかと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふ。私はずれで私はずれです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はずれで私はずれを度外に置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠つていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入つていたので、それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪いて月々私の懺悔を新たにされたのです。今まで構い付けなかつたKを、私が万事世話をした来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。(本文)

\*

\*

さて、「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みました。奥さんは私の

後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行ききました。また警察へも行ききました。しかしみんな奥さんに命令されて行ったのです。(まだ若い大学生であった先生という人は、何をどうして良いか何も分からずに、ただ八畳の室を意味なく歩き廻っていただけでしたが)、奥さんはそうした手続の済むまで、誰も「Kの部屋」へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまったのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸ったものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。「先生は、この現場を直接見てしまった。その為、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にその情景が鮮明に焼き付いてしまった。いくら取り除こうとしても取り除けなかつたに違いない。」

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。(これも奥さんの指示であり、まだ若い先生には実家に電報を打つという発想自体生じなかつたに違いない。)

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香を立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいதாக知れませんが。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。(やっと人間らしい感情が戻つて来たのである。)

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつた心の中で思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふ。私はずれでも怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠っていたのです。(先生はなぜかこの意識が非常に強くて、お嬢さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けるのである。)

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の

生きている限り、Kの墓の前にひざまず跪ひざまずいて月々私の懺悔ざんげを新たにされたかったです。今まで構かまい付けなかったKを、私が万事世話をした来たという義理ぎりもあつたのでしよう、Kの父も兄も私の言う事を聞いてくれました。（この箇所か所は、なぜなぜ雑司ぞうしヶ谷がやに「Kの墓」があるのかという、その理由りゆう説明せつめいになっているかと思う。）

\*

\*

一、Kの死の場面の要約

## 一、Kの死の場面の要約

さて、奥さんがKに話をしてからもう二日余りになり、その間、Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずでした。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきものであり、彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。そして、「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。

私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然します。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、Kと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間の間に、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に脇を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つて居るのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つて居るのです。そうしてK自身は向うむきに突伏して居るのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行き、そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の自白」を聞かされた時のそれとほぼ同じであり、私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという（後悔の）「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らしました。そうして私はがたがたと顫え出したのです。

それから、私はすぐ机の上に置いてある「手紙」に眼を着けて、私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かつた」と思いました。

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆の眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に迸つている血潮を始めて見たのでした。

\*

\*

私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏しになつて居る彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能（五感）を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなったこの友達によつて暗示された「運

命の恐ろしさ」(Kの死を一生背負つて生きねばならない運命)を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰り、そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。その間に自分の室の洋燈を点て、それから時計を折々見ました。私の起きた時間は、正確に分らないのですが、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではないかと思ひ悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不始着の羽織を引掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へ這入るや否や、奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げ、奥さんは何だと聞きました。私は頸で隣の室を指すようにして、

「……驚いちゃいけません」と言い、奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫言まる事出来ないうちは、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられ、硬く筋肉を攫んでいました。

\*

\*

私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中はほとんど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手持つたまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし入ろうとはしません。そこはそのままにして置いて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得ていました。私は医者、の所へも行き、また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた「私の心」に、一滴の潤いを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。私はお嬢さんに昨夜の物凄い有様を見せずに済んで、よかつた心の内でした。

## 二、その結末

さて、先生は、とにかくも、この二つの「反撃」を以って、親友である「K」を攻撃し、その結果として、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲われ、その「罪の意識」(或いは「良心の呵責」というものに長く悩まされ続けることになるのである。——それは、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」を裏切るような「行動」(言動)をしてしまったのである。それによって、親友を「死」へと追いやったという「意識」(つまりは「罪の意識」)に悩まされ続けているのである。——すなわち、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」。なぜなら、自分自身、いざという間に、急に「悪人」になってしまったからである。その結果、親友を「死」へと追いやるような結果になってしまった事を悩み苦しむことにもなるのである。

\*

\*

それは、第三部の「本文」では、次のようになっていいる。つまり、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている」。そして、「……叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、しかし、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまった、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです」とある。——つまり、ここで最も大事なことは、叔父に裏切られた時には、他人というものは、つくづく「当てや頼み」にならないものだと思底からそう感じ、相手を心から「恨み、憎んだり」もしたが、しかし、世間(や他人)はたとえどうであろうとも、この己(自分自身)は、立派な人間(そんな悪いことなど絶対にしない人間)という「信念」(確信)がどこかにあったのである。

ところが、先生とお嬢さんとKとの「三角関係」のなかで、先生は、前述のような「二つの反撃」を以って、親友である「K」を意識的に攻撃してしまった。それは、何が何でもお嬢さんを失いたくないために、(ふだんの自分ならそんなことは絶対にしないだろうと信じていた自分)が、いざという間に、急に「悪人」(つまり「他を騙したり、貶めるような人間)に変わってしまったのである。この「衝撃」、つまり、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、つくづく他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」

を裏切るような「行動」（言動）を意識的にしてしまっただけのこと。この「衝撃」、そして、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。——それは、Kが「自殺」をした後、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまつたのは、誰でもない、この「自分自身」であるという「意識」に強く襲われ、そして、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」というものに、先生という人は、ずっと長く何年も悩まされ続けることになるのである。

### 三、お嬢さんの気持ち

それでは、お嬢さんの「気持ち」は、いったいどういうものだったのか？ この問題を、もう一度、確かめておきたいと思うが、まず、「K」と「先生」、そのどちらにより強い「想い」を寄せていたのだろうか？ それは、どちらというよりも、お嬢さんの「気持ち」というのは、一貫して、「先生」だけにしか向いていないのである。それゆえ、「先生」という人も、あれこれ「策を弄する必要」などまったくなかったのである。——つまり、お嬢さんが「心の底から愛していた」のは、「K」ではなく、まさに「先生」その人だけだったのである。それゆえ、たとえ「K」がお嬢さんに「愛を告白」したとしても、恐らく、お嬢さんは、その「告白」（申し入れ）をきっぱりと断つたに違いない。そのことを「K」は、うすうす感じていたのだろう。だからこそ、「自殺」ができていたのである。「自殺」というのは、まさに「ここで自分の人生を終わらせる」ということであり、若しもお嬢さんに「愛を告白」して、それを受け入れてもらえる何らかの「自信」（或いは「可能性」）があると思っていたならば、敢えて「自殺」（ここで自分の人生を終わらせる）理由などどこにもないのである。いくらでも「打つ手」はあるからである。

例えば、お嬢さんの前で、仮に「……お嬢さんを心から愛しています。ぼくと結婚してください」と二人が同時に、まさに「求婚」（プロポーズ）をしたとしても、お嬢さんは、間違いないで、「先生」を選ぶだろうということを、はつきりと感じていたのである。だからこそ、「自殺」ができて得るのである。それは、「……明日（将来）に渡って希望が持たない」からこそ、まさに「自殺」が出来るのである。——つまり、「K」という人物は、いわば修行僧のような若者であり、頭も良く、努力家で、まじめで、正直で、忍耐強くもあるが、一方では、無口で、孤独で、非社交的で、友だちもなく、精神的には「神経衰弱」気味でもあり、しかも、親からは勘当されているという、いわば「八方ふさがり」の状態であり、そのようななかで、お嬢さんへの「恋心」は、誰よりも自分が一番驚いたに違いない。自分でも自分の「心」を持って余していたかと思うが、それゆえ、親友である「先生」に「胸の内」を打ち明けているのである。そして、「K」としては、出来るなら、ここを突破口として、「八方ふさがり」の状態を何とか打開し、新しい「人生」を切り開きたかったのかも知れない。しかし、その「望み」は、完全に絶たれて、遺書の言葉では、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」となるのである。

### 四、Kの遺書

さて、Kの机の上に置いてあった「遺書」の内容は、やはり「重要」なものであり、それゆえ、その一つ一つを丁寧に見ていきたいと思うが。まず、全体の内容は、次のようなものである。「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後につけ加えてありました。奥さんに迷惑をかけて済まんからよろしく詫びをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。ただ、お嬢さんの名前だけはどこにも見えません。Kがわざと回避したのだと気づきました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした」とある。

まず、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」とある。これは、まさに自分の「薄志弱行」(それは「意志が弱くて実行出来ないでいる」という「意味合い」になるかと思うが、Kの場合、本文では、次のようになっていて、つまり、図書館にいた先生を呼び出しては、二人で散歩することになるが、そこで「……彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たのです。というのも、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱くでき上ってはいなかったし、こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸も勇氣もある男なのです。私がKに向って、この際何んで私の批判が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言いました。私は隙かさず迷う、という意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました」とある。それでは、なぜ、Kはその「一歩」(お嬢さんへの愛の告白)をためらっているのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、Kという人は、所謂「理想」(それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」(それは「お嬢さんへの切ない恋心」との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、Kは、「それをどう思うか、また、どうしたらよいか」と、親友である「先生」に聞いているのであり、それを一言で言えば、まさに「……Kは現在の自分について、先生の批評を求めている」ということである。それでは、なぜ「先生」にわざわざ批評を求めたのか？ それは、「先生」の「心の中」もせひとも知りたかったからでもあるのだろう。そして、ふつうに考えれば、「K」という人が「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、もちろん、これが「大部分」を占めるかと思うが、それに加えて、「先生」との関係もあるのである。それは、親友である「先生」も「お嬢さんのことが好きであるだろう」ことは、うすうすは感じていたであろう。だからこそ、先生の「心の中」もせひとも知りたかったのである。その結果、(反撃する)先生という人の「心の中」をはっきりと知ったのである。

例えば、若しも「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」のことは諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に「辛い」ことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。そのように、われわれ人間の「心の中」というのは、たった一つだけの「想い」だけではなく、実際は、実に様々な「想い」が複雑に同時に存在しているのである。

そして、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

\*

\*

さて、もう一つの理由は、まさに「養子先でも実家でもさらに唯一の親友とも結局は人間関係で破綻をし」、この世に「頼れる」（或いは「心の支え」となる人間もいなくなり、まさに「八方ふさがり」状態で、これから何をどうやって生きていけばよいかも分からず、ただ深く悩み苦しみ揺れ動いている自分の「心の弱さ」ゆえ、自殺するということでもある。そして、世話になった先生へのお礼、また、奥さんに迷惑をかけることになってしまったお詫び、国元への連絡、その他、あとのことは、すべて「先生」に任せるとある。これは、一体、どういうことなのか？ 「K」は、お寺の子として生まれている。そして、中学の頃、医師の家に養子としてもらわれていく。この時に、すでに親への「不信・不満」があったかも知れない。そして、養子先の「親」への「不信・不満」もあつたかも知れない。だからこそ、大学は、「医学部」へ入れと言われていたにも関わらず、それに従わず、そのために、養子縁組は破綻し、また、実家の親からは勘当されてしまう。Kの「孤独」は、その「生い立ち」から生じている。Kの「実の母親」は、すでに死んでいて、父親と継母に育てられるなかで、まさに「継母」との確執、養子に出される衝撃（それは「父親は実の子である自分よりも女の方を選んだという衝撃）、その他から、恐らく、「親」（或いは「人間」）が信じられない、というような意識が自然と生じて来て、だからこそ、誰にも依存しない、まさに「独立独歩の道」を心がけていたということである。それが、まさに「お嬢さんへの恋心」でもろくも崩れてしまったということである。

それは、本文でも、「……Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔たりが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです」とある。そして、その「八方ふさがり」状態であった「K」にとつて、子供の頃からの「親友」である「先生」という存在は、何者にも換え難い存在であり、この世で唯一信じられる「人間」（或いは「友達」）であるという思いがあつたかも知れない。

そして、先生と「K」とは「同じ家」に同居することになるが、「K」は、その奥さんやお嬢さんともほんの少しずつ打ち溶けていくようになる。それは、「K」に人間らしくなってもらうために、先生がわざわざ奥さんやお嬢さんにお願ひしたことであつた。そして、ここまでは、すべてが順調に行っていたのである。ところが、先生の「大誤算」は、まさかKが「お嬢さんに恋心」を抱くなどということとは、「K」の日頃の「言動」からす

れば、どうしても想像でき得なかつたに違いない。だからこそ、「K」の「告白」を聞いた時に、先生は、「……ああ失策<sup>しま</sup>つた、先越<sup>さき</sup>された」という想いに襲われるのである。そして、この時点から、先生のKに対する「態度」は、大きく変わってしまうのであり、それは、まさに子供の頃からの「親友」から絶対に負けることの出来ない「恋敵」(敵同士)へと大きく変化してしまつたのである。——ところが、「K」の方は、それとは気づかずに、今まで通りの「親友」として「先生」を見ていたのである。だからこそ、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであつた。この時の「K」は、まるで「隙<sup>すき</sup>だらけ」だつたと言つてゐる。その「隙」に襲いかかつたのである。そして、もう「一撃」は、「K」より先に、奥さんに「……お嬢さんをください」と願ひ出ることであつたが、それは、奥さんも、お嬢さんも、その「言葉」をずっと待つていたということでもあるのだろう。

## 五、自殺の動機

さて、先生の、この二つの「反撃」が、「K」に一体どのような「衝撃」を与えたのかは、厳密にはよく分らない。ただ、「K」は、奥さんから二人の結婚話を聞いてから二日後に、「自殺」をしている。それでは、「K」は、なぜ「自殺」を凶つたのか？ それも、まさに「最大の謎」であるが、その「謎を解くヒント」は、意外と次の言葉の中に隠されている。——それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨<sup>すみ</sup>の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えしたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまつたということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になつてしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなつてしまつた、いわば完全なる「孤独」に深く陥つてしまつたからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとつて、まさに最後の「一押し」となつて、ついに「自殺」を遂行してしまつたのである。そして、先生は、そのことによつて気づくことになるが、それは、つまり、自分が最後の「一押し」をしてしまつたという想いである。だからこそ、先生は、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に何年も襲われ続けているのである。

一方、「K」という人は、先生を「恨んで」はいないのである。若しも心の底から恨んでいたら、死後のすべてを先生に託すわけがない。例えば、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時も、これは、これで「なるべくしてなつた結果」なのだ、かえつて「諦め」がついたかも知れない。——つまり、先生とお嬢さんが結びつくのが自然であり、一方、自分とお嬢さんが結びつくことなどは、ほとんどあり得ない話だということは、その

時にはつきりと知ったに違いない。(それは奥さんが「……あなたも喜んで下さい」と言った時である)。ただ、「K」という人は、自分の「心の中」に生じて来た「お嬢さんへの切ない恋心」というものをどうしたものか、自分でもどうにも持て余すようになり、そこで、親友である「先生」にどうしたものかと打ち明けているのである。ところが、一方の「先生」は、Kの「告白」を、むしろ恋の「宣戦布告」のように思い込んでしまい、まさに「戦闘体制」に入ってしまったのである。そして、いわゆる二つの「反撃」によって、先生は、お嬢さんを得て、一方の「K」は、やがて「自殺」を遂行することになるのです。そして、先生は、「……恋は罪悪である」と言っている。それは、異性を「本気で愛する」ようになれば、必ず、「……誰かが傷つくことになる。誰かを傷つけずにはおかないもの」だからである。だからこそ、「……恋(恋愛)は、罪悪なのである」。

#### 六、先生「夫婦」

ところで、先生「夫婦」には「子供」がいなかった。それは、例えば、仮に、奥さんが、「……なぜ、私を抱いてくれないのですか？」と訊ねた時に、先生は、無条件で「妻」を抱くことが出来なかった。それは、一体、なぜなのか？ それは、「妻」を抱こうとする、死んだKの「亡霊」が目の前にちらつくからである。それゆえ、「妻」を抱きたくとも抱くことができないのである。それを先生は、「天罰」だと呼んでいるのである。

それは、「第一部」の本文では、次のようになっていいる。つまり、先生の宅は夫婦と下女だけであった。行くたびに大抵はひっそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。(これは、奥さんの本音であり、この言葉に対して、先生の反応を見ているのである)。私は「そうですな」と答えた。「……一人貰ってやるうか」と先生が言った。「……貰ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。(これは、先生の子供こそ欲しいのであり、他人の子供が欲しい訳ではないのである)。「……子供はいつまで経つてもできっこないよ」と先生は言った。奥さんは黙っていた。「……なぜです」と私が代わりに聞いた時先生は「……天罰だからさ」と言って高く笑ったとある。

また、お嬢さんは、母親から時々氣拙いことを言われることもあったらしいとも書いてある。それは、結局、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのですか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことを言われていたのである。奥さんは、歯痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどこが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度か頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところはつきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦

らめさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを  
得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまった。そのような経緯を知ったならば、お嬢さん  
は、間違いなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そう  
なれば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)  
に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何が何でも避けたかったのである。それは、  
奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持って行く」という選択をしたとい  
うことである。どちらがよかったのか？ それは、分からない。しかし、若しもこの「先  
生」という人に、何らかの「問題」(欠点)があるとすれば、それは、「……言うべき時  
に言うべきことをはつきりと言うことをためらったこと、そして、言うべきではなかった  
ことを敢えて言ってしまった」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、  
「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に悩まされ続けているのである。

\*

\*

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて教えてくれました。忙しいので、殆んど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言ひ出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思ひ立ったのかと聞きました。妻は二人揃つてお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言うのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗つてやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになつた顛末を述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かつたと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではない

のですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨を思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。(本文)

\*

\*

まず、前の章の最後のところで、「……国元からKの父と兄が出て来た時、Kの遺骨をどこへ埋めるかについては、彼の生前、雑司ヶ谷近辺をよく一緒に散歩した時、Kはそこが大変気に入り、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあったと告げて、その約束通りにKを雑司ヶ谷に葬ったとともに、私の生きている限り、Kの墓の前に跪ずいて月々私の懺悔を新たにしていたかった」とある。(先生は、それ以来、命日、必ず月に一回の「墓参り」をずっと欠かさず続けているのである。)

さて、「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだらうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早く「お前が殺した」と白状してしまえという声を聞いたのです。

例えば、病気で亡くなった場合には、殆どの場合、その原因(病名)ははっきりとしているので、敢えて「なぜ、どうして？」と問う人も少ないかと思うが、一方、自殺で亡くなった場合には、必ず、誰でも「なぜ、どうして？」と問わずにはいられないものがあるのである、それは、その「自殺」の「動機」(原因)がはっきりとしない場合が非常に多いからであり、たとえKのように「遺書」を残したとしても、本当にそれだけなのか、ほかに何か理由があるのではないかとあれこれ疑いが次から次と生じて来るものである。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると言つて教えてくれました。忙しいので、殆ど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。(前の所を厭がるのは、ごく自然で無理からぬ感情かと思う。)

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだ

のですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えませんでした。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言いました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃ってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言うのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。（先生は、新しい家へ移って二カ月ほど無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、今度はめでたにお嬢さんと結婚することになり、奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども、私の幸福には不吉な「黒い影」がずつと随きまどつていたのです。）

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末を述べてKに喜んでもらおうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ「自分が悪かった」と繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後、決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

それは、先生とお嬢さんとの仲睦まじい姿は、墓の中に眠っているKの気持ちをかえって苦しめることにもなるだろう。先生が毎月欠かさず墓参りに行くのは、ただただ（すまないという）「懺悔」の気持ちだけであり、それ以外の理由は何もないのである。

五十二、Kの亡霊から逃れるために読書を……

「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言え言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思ったのです。ところがいいよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手敵しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかという詰問を受けました。笑って済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の痛も高じて来ます。しまいには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言

も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしぎとという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を抑え付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己れを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それを敢えてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一票の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経つてもKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐つていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全くそこにはなかったのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうあるうともこの己は立派な人間だという信念がどこにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。(本文)

\*

\*

さて、「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言えと言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、これによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。ところがいよいよよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手厳しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。

「……私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。(これが妻を抱けない理由であり、先生はこの事をまさに天罰と呼んでいるのである)。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかとかいう詰問を受けました」とある。そして、笑つて済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の癩も高

じて来ます。終いには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外の「ある力」が不意に来て私を抑え付けるのです。(それは、先生の「良心」であるが、あるが、まを妻に語れば、今度は「妻」が先生と同じような「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむことにもなるからである。)

私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。——その時分の私は妻に対して己を飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。それを敢えてしない私に「利害の打算」があるはずはありません。私はただ妻の記憶に「暗黒な一点」を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに「零の印気」でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

つまり、先生という人は、奥さんをまさに「純白なもの」(つまり「100%純白な存在」として見ているのである。しかし、それが誰であれ、いわゆる「100%純白な存在」というのは、あり得ないのであり、それゆえ、もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。——だとすれば、この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れないのである。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦めさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを、得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまう。そのような経緯を知ったならば、お嬢さんは、間違ひなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そうなれば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何があっても避けたかつたのである。それは、奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持つて行く」という選択をしたという事である。どちらがよかつたのか？ それは、分からない。しかし、もし、この「先生」という人に何らかの「問題」(欠点)があるとすれば、それは、「……言うべき時に言うべきことをはつきりと言うことをためらつたこと、そして、言うべきではなかつたことを敢えて言つてしまつた」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に悩まされ続けているのである。

\*

\*

一年経つてもKを忘れる事の出来なかつた私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために「書物」に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもって勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理

に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても「書物」のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいいは坐っていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。（これは妻から見た「外的事実」である）。私も幾分かスポイルされた気味がありましよう。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして「動けなくなつた」のです。

例えば、第一部で先生は、「……私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がない」という謎めいた言葉があつたが、その「資格がない男」という言葉の真意は、まさに次のようなことである。——つまり、叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ないが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。つまり、社会に出て積極的に世間に働きかけるような仕事が出来なくなつてしまつたのです。なぜなら、自分は「……親友を裏切り自殺へと追いやったような人間だから」である。（これがまさに内から見た先生自身の「内的事実」になるのである。）

五十三、Kの亡霊から逃れるために飲酒を……

「……書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲む質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽つてゐる愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまします。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。

妻の母は時々気拙い事を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいのです。責めると言つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆ん

どなかつたくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なく言ってくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めると忠告しました。ある時は泣いて「…あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「…Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫言りました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していかないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中になつた一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つて見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたつた一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。(本文)

\*

\*

さて、「…書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽っている愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。(今度は酒で過去を忘れようとしたが出来なかつた。)

妻の母は、時々「氣拙い事」を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分(妻)は自分(妻)で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいので

す。責めると言っても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆んどなかったくらいですから。妻は「たびたびどが気に入らないのか、遠慮なく言ってくれ」と私に頼みました。

まず、妻の母からは、時々「氣拙い事」を妻に言うようでした。むろん、その内容には色々なことがあったかと思うが、その中でも、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのでか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことも言われていたに違いない。奥さんは、齒痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度も頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところが、つきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それから（妻は）私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「……あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「……Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。（身も心も深く寄り添えるのが夫婦の幸せである。）

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いしました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段（告白）があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。（これは、いわば心からの「孤独感」であるが、それも妻との「心のコミュニケーション」を避けているからである。）

同時に私はKの「死因」を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ「恋の一字」で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく「失恋」のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた（心からの「孤独感」の結果、急に所決したのではなかるうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚（予感）が、折々風のように私の胸を横過

り始めたからです。(Kの自殺の要因は、次のようなものになるかと思う。)

それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の実家にいた頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまったということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になってしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなってしまうた、いわば完全なる「孤独」に深く陥ってしまったからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとって、まさに最後の、「一押し」となって、ついにKは「自殺」を遂行してしまったのである。

\*

\*

五十四、奥さんの病氣と死

#### 五十四、奥さんの病氣と死

「……その内妻さいさいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とちうていなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありませんし、また愛する妻のためでもありませんが、もつと大きな意味から言うのと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくつて堪たまらなかったのだけれども、何もする事が出来ないのでやむをえず、懐ふしうで手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたった二人ぎりになりました。妻は私に向つて、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨うらみしました。

母の亡くなつた後あと、私は出来るだけ妻を親切に取り扱つてやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたらとところで、この物足りなさは増すとも減る氣遣きづかいはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言ひました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧あいまいな返事しておきました。妻は自分の過去を振り返つて眺ながめているようでしたが、やがて微かな溜息ためいきを洩もりました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影ひろめが閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲つて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心はその物凄ものすごい閃ひらめきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるものの如ごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭かぶがどうかしたのではなかるうかと疑うたぐつて見ました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらはう氣にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓まいづつへ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります。こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭むちうたれるよりも、自分で自分を鞭むちうつべきだという考くわえが起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行くことと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。(本文)

\*

\*

さて、「……その内妻の母が病気になりました。医者に見せると到底癒らないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありません、また愛する妻のためでもありません、もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくって堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないでやむをえず、懐手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも「善い事」をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分、支配されていたのです。(これは、自分の過去の「罪深さ」などを自覚(悔い)て、その「罪滅し」として、人間や社会のために少しでも「善い事」をしたいという心理になるのである。)

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人(あなた)しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないので。妻は泣きました。私が不断からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨みましたとある。

これは、普通の夫婦であれば当然(心身共)もつと「親密な関係」が持てたはずであるが、先生の場合、妻との間に或る「一定の距離」を保たなければならぬ理由があり、その理由を妻に説明してやる事も出来ない状況なので、妻のことを「不幸な女だ」(それは「夫と親密な関係」が持っていないから)と言っているのである。一方、妻は、なぜと聞くのは、奥さんにしてみれば、夫からお前は「不幸な女」だと言われる程のことではなく、毎日何不自由なくそれなりに楽しく暮らせてはいるからである。

母の亡くなつた後、私は出来るだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人を離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たに似たところで、この物足りなさは増すとも減る気遣いはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

さて、この「……女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われます」とあるが、もしそうであるならば、——例えば、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」

関係になれたかも知れない。そうなれば、先生という人は、やがて「Kへの亡霊」からも少しづつ解放されて、何とか妻を抱くこともでき得るようになったかも知れないのです。しかし、先生という人は、何よりも奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたという選択をしたのである。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言いました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事をおきました。妻は自分の過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑って見ました。けれども私は医者にも誰にも診てもらおう気にはなりませんでした。

この「恐ろしい影」とは、恐らく、「死の影」であり、初めはそれが偶然外から襲って来て、私は驚きました。私はぞつとしました。しかし、しばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに耐えようになりませんでした。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。つまり、その「死の影」には、最初は驚き、ぞつとしたものであるが、やがてそれは自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われて来ては、終には「自殺願望」へと変貌してしまうのである。その「心の推移」を表現したものが、まさに「次の文章」になるかと思う。

つまり、「……私はただ人間の罪、というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思った事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つべきだという気になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。（このような段階を経て、やがて「自殺願望」が生じて来るのであるが、しかし、今はまだ「……死んだ気で生きて行こうと決心する」のである。）

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒（永遠に解けない謎）のように見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。

## 五十五、うつ脳の牢獄に閉じ込められて

「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思いつくや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言うて聞かせます。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるうとすると、ま

た締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので、妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括つ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にそう言いました。妻は笑つて取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよかろうと調戲しました。(本文)

\*

\*

さて、「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうし

てその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言っただけです。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるかとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。(それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「知性や理性」(特に「良心」)であり、その先生の「良心」こそは、まさに「先生を許さない」のである。)

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい、戦争があったものと思っただけです。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとつて一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かさなければともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいつしよに連れて行く勇氣は無論ないので、妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。(これは、妻を道連れにした「無理心中」は避けたということである。)

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなさそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといつしよに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも「黒い影」(死の影)が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いて来た(生き長らえた)ようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。「……九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたではありません。全く会う気でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです」とある。

つまり、先生という人は、その時点までは、「自殺」のことはまだ考えてはいなかつたのである。——ところが、夏の暑い盛りに明治天皇が「崩御」されて、その約一ヶ月半後の「御大葬」の夜に乃木大将の「殉死」を号外で知ることになるが、その「殉死」という言葉によって、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にあった「自殺願望」というものがふと呼び覚まされることになってしまったのである。(それが次以降の文章である。)

すると夏の暑い盛りめいじてんのうに明治天皇が崩御ほうぎよになりました。その時私は明治の精神せいしんが天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響えいぎょうを受けた私どもが、その後あとに生き残あきらっているのは必竟ひつきやう時勢遅れだという感じが烈げつしく私の胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にそう言いました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死じゆんしでもしたらよかろうと調戲てうぎしました。(この「殉死」という言葉が、先生の「人生」を一気に激変させる大きな要因の一つになつて行くのである。)

#### 五十六、乃木大将の殉死を契機に自殺を決心する

「……私は殉死という言葉を残ほとんど忘れていました。平生へいぜい使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談じやうだんを聞いて始めてそれを感じ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月(半)ほど経たちました。御大葬ごたいさうの夜私はいつもの通り書斎すわに坐つて、相図あいずの号砲ごうほうを聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪とられて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年月としつきを勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間あいだ死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人に取つて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那いつせつなが苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はどうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或あるいは箇人こじんのもつて生れた性格の相違と言つた方が確たかかも知れません。私の出来る限りこの不可思議な私というものを、あなたに解わからせるように、今までの叙述で己おのれを尽つくしたつもりです。

私は妻を残して行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷せんとくな驚怖きやうふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こつそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります。その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でしたのですが、書いてみると、却つてその方が自分を判然はんぜん描き出す事が出来たような心持がして嬉うれしいのです。私は酔興すいきやうに書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外ほかに誰も語り得るものはないのですから、そ

れを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思えます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来まじょうが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです。私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。(未完)

\*

\*

さて、「……私は殉死という言葉を残んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月(半)ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたのでした。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。(殉死は、主君や夫などの死を追つて臣下や妻などが死ぬことであるが、それは、自分の「衷心」(誠)を示す行為でもある。)

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間、死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人のもつて生れた性格の相違と言つた方が確かかも知れません。私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。(自殺の理由は、決して一つだけではなく、実際は、実に様

々なものが複合的に作用し合つて、最後の「一押し」で遂行してしまうものである。」

私は妻を残して行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こつそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

さて、この「……私は妻に血の色を見せないで死ぬつもり」とあるが、先生自身は、Kの自殺の時に飛び散つた血潮の凄まじさを見ているのであり、それが先生の「頭の中」（或いは「心の中」）に鮮明に焼き付くように残つてしまい、その生々しい記憶のために、先生自身なおさら深く悩み苦しむことにもなつたのかも知れない。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります。その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でしたのですが、書いてみると、却つてこの方が自分を判然描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来ましようが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰つて来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を「善悪」ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なので、すから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまつておいて下さい。

つまり、先生という人は、「……私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです」ということになるのです。(完)

\*

\*

一、先生の自殺

## 一、先生の自殺

それでは、「先生」という人は、なぜ、「自殺」をしたのだろうか？ それも、結局は、まさに「……明日（将来）に渡って希望が持てない」からである。それでは、その「希望」とは、一体、何なのかと敢えて問えば、それは、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものは、まさに「半永久的」に消えない。その「苦しみ」から開放される「希望」が全く持てないということである。だからこそ、まさに「自殺」（つまり「ここで自分の人生を終わらせる」ということ）になるのである。

例えば、乃木大将の場合にも、それは、「……西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きてしまった」とある。——つまり、何度も何度も自殺をしようと思いつながらも、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、たまたま明治天皇が崩御されたのを「切っ掛け」として、それから約一カ月半後、「御大葬」の夜、まさに「殉死」という形で「自殺」することができたということである。それは、「Kの場合」も全く同じことであり、何度も「自殺」しようと思いつながらも、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、先生との「一連の出来事」で、まさに自殺する「切っ掛け」が出来たということである。

そして、それは、先生の場合も同じことであり、その「切っ掛け」となったものは、一つは、まさに明治天皇「崩御」と乃木大将の「殉死」報道であるが、それ以上に大事なことは、先生の場合は、自分の「心の底」にあった「想い」を語つてもよいと思える「私」という存在が出来たということである。——つまり、先生も、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」が誰もいなかったということである。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を（遺書」という形で）語ることができ得るかも知れないという、そういう「機会」（つまり「自殺できる機会」）が得られたので、まさに「自殺」を遂行してしまつたのである。つまり、自殺しようと思つていても、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られなかつたが、「私」という若者が出来たことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語つてもよいと思つて来たということである。しかし、いつどこでどのような形で語るのか？ つまり、直接会つて語るのか、それとも、手紙のようなもので語るのか。そのようなことをあれこれ考えているうちに、（実際、一度は、彼に直接話そうとして電報を打つたが、父親が重篤で来られないということ）で、そこで、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）にふと「遺書」という形で語ることができ得るかも知れないという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを読んだ若者も、きつと自分の「遺志」をしつかり受け留めてくれるだろうし、また、念願の「自殺」を遂行することも出来得る。つまり、すべての「願い」が同時に叶うということがある。だからこそ、先生は、「自殺」を遂行してしまつたのである。——それでは、なぜそれほどまでに「死にたい」と思うのか？ それは、先生の場合、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものが、それだけ先生にとって「耐えがたいもの」であつたとともに、いわゆる「う

つ、脳のうの牢獄のうごく」からどうしても抜け出せないという苦しみ」ということである。逆に言えば、それほどまでに自分（先生）を苦しめたものだからこそ、まさにその「ううつ、脳のうの牢獄のうごく」とそこから生じる「罪の意識の」(或いは「良心のの呵責の」)というものを、何が何でも「遺書の」のなかに「書き残しておきたかった」ということでもあるのだろう。

例えば、若い頃、「中・高時代」、非行や家庭内暴力、その他などで狂人の如く荒れ狂ったとする。そのために、やがて、母親は「病気」になって早死はやじにをしてしまったとする。その場合、その子供は、母親を殺したのは、誰でもない、この俺おれだという、そういう「罪の意識の」(或いは「良心のの呵責の」)に一生深く悩まされ続けることになるだろう。

つまり、その子供は、一生涯、その「罪の意識の」(或いは「良心のの呵責の」)からは、絶対に逃れることができないのである。そういう「意識」と、基本的には全く同じ「心理」なのである。

## 二、先生の遺書

それは、本文では次のようになっていいる。つまり、「……私はただ人間の罪のというものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍みちのぼろの人から鞭むちたれたいとまで思ったこともありす。こうした階段をだんだん経過して行くうちに、人に鞭むちたれるよりも、自分で自分を鞭むちつべきだという気になります。自分で自分を鞭むちつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日こんにちまで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮らして来ました。私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。しかし私のもっている一点、私にとっては容易よういならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいのです。それと思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします」。

死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟しげきで躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けるように言つて聞かせます。すると私はその一言で直ぐすぐたりと萎しおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔ひとをするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っている癖にと言います。私はまたぐたりとなつてしまうのです。

\*

\*

それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「良心」であり、その先生の「良心」こそは、まさに「先生を許さない」のである。なぜなら、——お前は、親友である「K」を死へと追いやった「張本人」(つまりは「人殺し」)じゃないか！ その「人殺し」であるお前が、のこのこ世間に出ていって、一体、どんなもつともらしいことを言つたりやつたり出来るといふのだ。お前には、そんな「資格」などないことは、誰よりもお前がいちばんよく知っているはずじゃないか、と、まさに先生

の「良心」は、その度ごとに先生を責め立てるのである。……

\* 波乱も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい、戦争があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢獄の中にじっとしていることがどうしても出来なくなつた時、またその牢獄をどうしても突き破ることが出来なくなつた時、畢竟私に一つて一番楽な努力で遂行できるものは自殺よりほかにないと私は感ずるようになったのです。(中略)、ただ、妻のことを思うと躊躇しました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです……」と。

\* これは、実に見事な「遺書」であり、人間の「罪の意識」(或いは「良心の呵責」という「心の葛藤」を実地的確に表現しているものである。しかも、今日言うところの、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)を實に見事に表現しているものである。つまり、作者(夏目漱石)自身、この「本文」を書き遺したいたがために、この『こころ』という作品を書いたと言ってもよいほどである。

なぜなら、夏目漱石には有名な「神経衰弱」というものがあるが、それを今日の医学用語で言えば、それは、まさに「うつ病」(或いは「躁うつ病」)に他ならないのです。

つまり、「……私を生んだ私の過去が、今のような自分を生み出している」とあるが、それは、若い頃、親友を裏切り、その結果、自殺へと追いやつたという過去の経験から、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむ結果となつたと共に、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)になっていることは、人間の経験の一部分として、私よりほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、貴方にとつても、ほかの人にとつても、徒勞ではなからうと思ふのです。

それは、本文では、次のようになってゐる。つまり、「……私は何千万といふ日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言つたから」とある。すなわち、「作者」(夏目漱石)という人は、一体、誰のためにこのような「作品」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分(先生)が実際の人生の中で経験した「心の闇」(「罪と罰」)とを、敢えてここに書き遺しておきたかつたということである。

あとは、『こころ』という作品を最初から最後まで丁寧に読んでもらえれば、今までのそれぞれの「内容説明」の一つ一つが、まさに「実感」として感じてもらえるのではないかと思う。——そして、個人的には、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のようなかつて自分が書いた「文章」が、自然と浮かんで来るのである……。

### 三、罪と罰

さて、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けられているとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないというものである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」（或いは「魂の中」）でも、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）によって厳密に吟味され続けている、内なる「審判」（つまりは「内的制裁」「罰」）を受けざるを得ないということである。それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

\*

\*

わが罪を

終に裁くは

内なる神か

「参考文献」

※底本「こころ」夏目漱石（「青空文庫」）